

山 岳



LXXXI



エーデルワイス・マークの

好日山荘®

全日本登山とスキー用品専門店協会加盟

- 東京銀座店 東京都中央区銀座3-5-7千104 ☎03(561)3600・スキーショップ☎03(561)0966
■大阪店 大阪市北区曾根崎1-2-8千530 ☎06(364)0933(代) ■梅田店 大阪市北区曾根崎2-7-2千530 ☎06(315)7985(代)
■セルシー店 豊中市千里中央<セルシー1階>千565☎06(833)0123 ■大阪三越店 大阪・北区三越新館2F ☎06(203)1331(代)
■福岡店 福岡市博多区須崎町1-1☎092(281)3440・(291)6211

山 岳

一九八六年

山 岳 一 九 八 六 年 目 次

——日本山岳会百年史の資料ノートとして——

年次晩餐会あれこれ……………	織内信彦……………	七
有志閑談会事始め……………	望月達夫……………	六
K2、エベレスト、そしてマナスル——無酸素による三つの八〇〇〇m峰登攀・一九八五年の記録……………	山田昇……………	四
チヨー・オユー 一九八五……………	三谷統一郎……………	三
各拉丹 <small>グラクレンジ</small> 東雪山初登頂と長江正源流調査……………	松本 <small>マツモト</small> 智 <small>チ</small> 清 <small>キヨ</small> 司 <small>シ</small> ……………	六
ブータン・ヒマラヤ ナムシラ峰の初登頂……………	吉永英明……………	四
日本山岳会中国登山隊 一九八五——祁連山脈、崑崙、黄河源流……………	宮下秀樹……………	四
河野齡蔵の乾板写真に見る日本山岳写真史の夜明け……………	杉本誠……………	四
スイス・ガイド手帳に見る日本人の記録……………	岡沢祐吉……………	五

放談会 マナスル登頂こぼれ話…………… 壹

高所登山におけるアルパイン・スタイルの問題について——シンポジウム記録…………… 叁

*

図書紹介 島田 巽『山稜の読書家』(串田孫一、近藤信行)、田淵行男『黄色いテント』(三宅 修)、久保田展弘『山岳霊場巡礼』、青木 保『御岳巡礼』(伊佐九三四郎)、ボナッテイ、千種 堅訳『わが冒険』(田村俊介)、田中正光『山と詩人』(近藤信行)、山崎安治『新稿・日本登山史』(雁部貞夫)…………… 柒

会報「山」図書紹介一覧……… 六

*

追 悼 吉田久兵衛氏(望月達夫)、金光正次氏(相川 修)、交野武一氏(中島信一)、高橋 照氏(海野治良、高橋定昌)、今井嘉道氏(坂倉登喜子)、平沢亀一郎氏(早坂禮吉)、金坂一郎氏(千谷壮之助、初見一雄、近藤信行、松田雄一)、木原 均氏(川喜田二郎)…………… 一〇

*

支部だより…………… 一三

会務報告(一九八五年六月〜一九八六年五月)…………… 一五

*

英文梗概…………… 卷末(21)

雪崩遭難に関わるトピックス…………… 新田隆 三…………… 卷末(53)

八〇〇〇m無酸素登山者のその後の諸検査の結果について……………川久保 芳彦……………卷末(45)

△編集後記V……………卷末

口 絵

河野齡蔵の乾板写真に見る日本山岳写真史の夜明け……………一六〇～一七〇

スイス・ガイド手帳に見る日本人の記録……………一六〇～一七〇

有志閑談会事始め……………一六〇～一七〇

第一回年次晩餐会……………一六〇～一七〇

海外遠征記録写真……………四八〇～四九〇

追 悼……………一三六～一三九

表紙・本文カット 牧 潤一



年次晩餐会あれこれ

——日本山岳会百年史の資料ノートとして——

織 内 信 彦

日本山岳会 の年間を通じて、もっとも重要な行事は何かと聞かれれば、今日では、臨時に行われる特別大きな催しは別として、やはりそれは年次晩餐会だということになるのだと思う。

役員や担当委員諸君が、神経をつかい、先輩や後輩、長老といわれる古い会員との関係や、年一回の会合を楽しみに遠路馳せ参じる地方在住の会員への気配りなど、提供される料理の質はもとより、開宴後の進行と雰囲気などについても、出席した会員に最大公約的満足感を与えなければならぬ。九十歳を越える高齢者から、二十歳そこそこの年少の会員までを満足させるということは、並みだいていのではない。かくいう私も、ある時期、そういう世話役をやらされたことがあったが、終了してみると、どこからとなく不満の声が伝わってくることもあれば、「きみ、今度のはよかったねえ」などと激励してくれるものもあって、まあ何となし、年次晩餐会も終ったなあといった実感を味わうのであった。

創立後八十年も経てば、おのずからそこには伝統というようものが形成されてくるものだ。日本山岳会には日本山岳会らしい伝統があると思う。伝統とは何かというような開き直りは別として、創立以来の精神的脈絡、クラブと

しての独特の気風というくらいに考えてみれば、日本山岳会には歴史の浅い他の山岳会にはない重厚さがある。それが言ってみれば伝統であろう。伝統というからには、やはり重厚感とか、きびしさとかいったものでなければいけない。伝統的に軽薄だとか、いいかげんだとかいうのはどうも伝統にはふさわしくない。年次晩餐会は日本山岳会の家風がいろいろの面で映し出されてくる場でもあるから、それなりの重厚さとか、格調は保持していきたいものだと思う。

ここ十数年は十二月の第一土曜の夜に日本山岳会の晩餐会が開かれている。第一土曜というのは覚え易いし、早くから予定表に記入しておけば、他の雑用などは全部断わることができる。昭和四十五年度からそうなったから、十二月の第一土曜の晩餐会という慣行はもはや定着したものとみてよいだろう。しかし、昭和六十年だけは創立八十年に当たっていたため、八十周年記念祝賀式典の関係上、八月二十四日に目白の椿山荘で、秩父宮勢津子妃殿下をお迎えして盛大に行われた。英国や米国をはじめとする在京の外国公館員も多数出席し、来賓を含めると四二〇人が着席したのは、文字通り盛宴と言つてよかつた。私事で恐縮だが、この日私は、田口二郎、谷口現吉、浜野正男、望月達夫、平沢亀一郎、渡辺兵力氏らと共に名誉会員に推挙される光栄に浴した。私にとっては、椿山荘における晩餐会は会の八十周年と共に記憶に残る日となったのであつた。年次晩餐会と名誉会員の関係についてはあとで少し述べてみたいと思う。

(山) 三一二号 (昭和四十六年六月) に書いている望月達夫氏の「年次晩餐会覚え書」によれば、昭和二十五年十一月二十四日、神田のYMCAにおける、名誉会員招待晩餐会が、年次晩餐会の始まり

というか、きっかけとみてよいのではないかと、と読める説明をされている。そして、その翌年、つまり、昭和二十六年十一月三十日に催された晩餐会は、会報一五九号に、年次晩餐会と明記の上報告されているので、この辺がことのおこりではあるまいかという意味も付言されている。年次晩餐会と会報誌上で名乗ったのはそれ以前には見当らない。従つてこれがはじめてだと思われるし、その会報はたまたま私が編集者であつたので、おぼろ気ながら記憶が残っているが、誌上余談的な記事は編集者のつとめとして、適当に小文を綴りレイアウトの都合で生じた余白埋めをするこ

とになっている。三一二号の年次晩餐会なる記事も余白の埋め草と言っては適當でないが、まあその程度の扱いをした報告記事で、編集後記の前ところに僅か十四行ばかりをあてたものであった。今日の会報ならば巻頭頁から二、三頁くらいを写真入りで飾るところであらう。

その日の案内状にちゃんと「年次晩餐会」として出したのかどうか、その辺は記録も見当らないしはつきりしない。報告記事を書くに当って、私の思いつきで年次晩餐会と書いたのか、あるいは、前の年の名誉会員招待晩餐会に関連して、望月氏も言及しているように、藤島敏男氏が、もうそろそろ英国山岳会のアニユアル・ディナーのような慣行をもつてもよいのではないかという所見を述べられていることにヒントを得て、年次晩餐会という報告記事を書いたのだったのかもしれない。どっちとも断定できないが、いずれにしても、会報一五九号の「年次晩餐会」なる記事が、今日に続く日本山岳会最大の年中行事のネーミングのきっかけになったのだとすれば、私としてもいささか我が意を得たりの感なしとしないわけである。

*

ところで 晩餐会のような催しが、日本山岳会でいつごろから始まったものかという点、これがまた実に古い歴史をもっているのだ。少々煩瑣に亘ることを許してもらって、初期の「山岳」から、それらしいものを、

言ってみれば年次晩餐会の祖型ともいふべき集会の例を二、三引用してみたいと思う。

会食を伴わない集りとしては、創立から三年め、明治四十一年五月十七日「山岳会第一大会」として開催されているのが最初である。折からの強風を伴う豪雨のなかにもかかわらず、八十五名が参集した。百余点の陳列資料があり、こんにちの年中行事の一つになっている「この一本展」の祖型というか、いやそれよりもはるかに大規模なものであったらしいことが想像される。爾来この大会は愈々盛大になっていくが、晩餐会とは性質が違うからこれ以上触れないことにして、さてはじめて有志晩餐会なる名のもとに会員がテーブルを囲んだのは、明治四十二年一月十六日であった。実質的には創立後三年を経た年である。前述の大会は講演や資料展観が主であるため、それでは会員親睦

の場にならないという会員からの声もあり、酒食を供する晩餐会にしたといわれる。しかし、山岳会としての公的なものではなく、有志の集りであったが、面白いことは、希望者は予め会へ往復ハガキで申込んでおけば、次回から出席勧誘の通知を出すとあって、決して一部の会員だけの集りや、派閥的なものではないという意味の苦心の配慮のあつたことがわかることだ。当日の出席者は、「山岳」第四年一号の会務報告からひろつてみると、今村己之助、川島祿郎、高野鷹蔵、河田 黙、辻本満丸、辻村伊助、中村清太郎、村上元次郎、梅沢親光、柳田国男、山口金太郎、小島鳥水、三枝威之介、城 数馬、角倉邦彦、杉浦 普。会場は麴町区富士見町の富士見軒、午後五時に開会、六時に開宴となり、山岳談に花を咲かせて散会したのは夜十時であつたと記されているのを見ると、山岳会の集りは、昔から会場泣かせの長ッ尻であつたらしいことがうかがえる。鳥水さんをはじめ、三十二、三歳の年がらみの山好きがアール・コールの勢いにのり談論風発、いわゆる青年客気にはやる熱気にみちみちたであろうことは想像に難くない。会場になつた富士見軒は、たぶん三十八年の秋、山岳会設立の打合せをやつた飯田橋の富士見楼のことだろうと思われる。

明治四十二年という年は、このようにはじめての晩餐会が催された年であるばかりでなく、会にとつて歴史的に脱落すわけにはいかないことがらのあつた年であつた。その一つは、六月一日から日本山岳会と名称変更をしたことと、もう一つは会員章を制定したことである。従来は、日本でただ一つの山岳会だつたから「山岳会」で通用していたが、将来類似の会が出てくることを予想して「日本」を付けたのか、後発の会に先に「日本」を使われてしまつては後手になるので、早手廻しに改名をしたのかよくわからないが、役員および特別会員の議を経て改正を決定したとあるだけで、その理由は明らかにされていない。ただ、新しい会名の意味は日本の山岳会ということであつて、日本の山岳のみ研究する会という意味ではないとわざわざ補足されているだけだ。

有志晩餐会は第二回が淡路町の多加羅亭で、第三回はまた富士見軒でと矢継ぎ早やに開かれている。しかも同年内である。その意味ではいわゆるアニヌアル・ディナーの形式をとつたものではない。これに反して、はじめに触れた山岳会大会のほうは年一回の割で開かれている。

「山岳」第四年第三号をひもとくと、巻末に一頁を割いて第四回有志晩餐会の予告の出されているのが眼につく。即ち、

「第四回日本山岳会有志晩餐会は!!」

山岳研究者。登山家。山岳愛好者。山岳画家。山岳写真家。高山植物学者。氣象学者。天文学者。山岳医家。山岳文学者の会合なり。明春一月を下して山岳会新年会を加味して第四回を開かるべし、広く会員諸君の来卓を望む。出席御希望の諸君は本会事務所に申込るべし。会期場所等確定次第通知すべし」

このように
なれば、名称はたとえ有志晩餐会であっても、も早や一部有志の集りにとどまることなく、完全にオ

ーブンにされ、公式化されるところまで発展したものとみてよいのではないか。こんにち盛んな年次晩餐会の祖型というか、ルーツらしいものを求めるとすれば、この辺まで溯りたいような気がする。さてその第四回はどこで開かれたかという点、明治四十三年一月十六日、代々木の志賀四松庵なる場所で開催されている。会場の四松庵は、私の推測に誤りがなければ、会員志賀重昂氏の別邸かなにかではないかと思われるふしがあるのだが、不思議なことは、会終了後、夜半の十二時、志賀夫人が電車も人力車もなく、赤坂の自宅まで徒歩で帰ったと記録されていることだ。明治末期の代々木、新宿はガス灯があったかどうか、そのような夜道を赤坂までどうして歩いて帰らなければならなかったのか。そうしてみると私の推測もどうやらあてにならないし、あくまで推測の域を出ないことになる。

当夜は降雪後の泥濘徑を没するほどの悪路で、新宿駅から徒歩で、ある者は人力車をつかって集ったとある。「雪と山」というメインテーマを基調とした晩餐会は、例により種々の陳列品があり、料理のメニューには「天下一品山岳料理」とあって、シヴエド・リーヴル（天城山の兔）のフランス料理、羊肉会三鮮は北京料理、そして日本料理には十和田湖の鯉のあらい、山芋のすのもの、稲荷山の松茸の吸物等趣向を凝らしている。ただこの季節に、いくら通人の集りだったとはいえ、松茸が手に入ったとは常識では考えられないから、これはなにかの間違いであろう。

第五回は明治四十三年九月十七日、四谷見附の三河屋牛肉店であまり気取らない集りをやったかと思うが、第六回明治四十四年一月二十一日は、日比谷公園前の平野家という料亭が会場になった。平野家は京都の人がやっているみせで、そのため、比叡山の温容を眺める思いがすると優雅な雰囲気を楽しみ「昨日降り積った雪の名残が屋根から崩雪落ちる響きは、一層山岳談に興味を添えて、時の更けるを知らず全く解散したのが十時過ぎであった」と書き残している。

次にもう一つ優雅な晩餐会がもたれたのは、玉川の対岸二子村の亀屋で開かれたそれである。明治四十四年九月二十四日であった。「山岳」第六年三号には、第八回有志晩餐会について次のような報告がある。

「初秋の川風に日に焼けた顔を吹かせて二子の渡しに舟を待った時、秋の香の何がなく身に沁むと覚えたが、空も長閑に澄んで眼のさめるやうな雲のいくつかが軽く浮ぶ水上に、武甲、雲取、大岳、三頭と、秩父の連嶺を明らかに数え得たとき狭い小さな都会の中から放たれたと言ふ心持を充分に味ふ事が出来た」

二子村は国道二四六号線を世田谷区の瀬田から多摩川にかかる長い橋を渡った地点、いまは有名な岡本かの子の文学碑がある辺りで三業地としても栄えた。昔は大山街道の宿場だったところである。

古い記事

からの抜き書のようなことはここいらでやめるとして、はじめのほうにも書いておいたように、昭和二十五年から同四十五年までの開催日程については望月氏の「覚え書」を見ていただきたい。そして、四十六年から五十九年までは、先述のように、毎年十二月の第一土曜日に行われており、年々盛会を続け、会場もそれに応じて、平河町のマツヤサロン、ホテル・ニュージャパン、次の京王プラザでは昭和四十七年と一年おいて昭和四十九年から五十六年まで八年間続いた。私の座右の日記によると、この八年か九年のあいだに、晩餐会費は三千五百円から五千円、六千円と年々上昇し、八年めには八千五百円になり、更に次に移った五十七年、五十八年の会場ホテル・ニューオータニでは九千五百円になったあとが記録されている。その間の物価の上昇のテンポを物語っているようだ。

このような経過をふり返ってみると、毎年一回開かれた山岳大会は、より機能的な小集会や各種の委員会の会合へと分解しながら発展を続け、また晩餐会は晩餐会で、会員数の著しい増加と共に、この種の企てに対する会員の関心の深さから、年一回の定時的なものへと移行する必要性が起り、年次晩餐会として、より大規模な仕組みを伴って定着したのではないかと私考する。どっちも、時代の変遷、会員のニーズに即応したものであった。

日本山岳会も実会員数四千人を擁するようになったこんにち、その様態は益々多様性をもつ会員の要望に答えざるを得ない傾向を辿ることになる。年次晩餐会のありようもその一つであることは間違いない。しかし、そうした流れのなかにも、やっぱり日本山岳会だといわれる伝統は残しておきたいと願うのは私ひとりではないと思う。

*

運営上の重要なスケジュールとして永年会員と名誉会員を紹介するセレモニーがある。

年次晩餐会

昭和四十年は日本山岳会が創立六十周年を迎えた年であった。八十周年の時と同じ目白の椿山荘で、十月十四日盛大な式典と祝賀の会がもたれた。秩父宮妃殿下の御臨席があり、参会者二七二名。席上名誉会員に推薦がきまっていた日高信六郎、藤島敏男、神谷 恭、藤木九三の四氏を発表紹介された。名誉会員の推薦は昭和二十五年以来実に十五年ぶりのことであった。それと共に、本年から新たに、在籍五十年の会員を永年会員として表彰することを制度化することが、先きだって開かれた九月二日の理事・評議員会で決定していたので、該当者として武田久吉氏ほか二六氏が表彰を受けている。

翌日の記念講演で会長の松方三郎氏は「日本山岳会はあと四十年すると創立百年になると。その年に、われわれのここにいる連中が何人位生きていることでしょう。大いに興味があることです。英国山岳会が創立五十年のお祭りをしたのが一九〇七年でありますが、それからまた五十年経って一九五七年に百年の記念晩餐会をしたのであります。ところが、その五十年の晩餐会と、百年の晩餐会の両方に出たという、もの凄い人が五人もいたのです。わが会も、どうかその百年の時に今日おられる諸君が多数集まられることを、私は祈っております」と話しているが、永年会員五

十年在籍の値打ちというか、いぶし銀のような重みを大変うまく言われているように私には思えるのである。「五十年在籍は容易ではない。それを達成した会員には特別の配慮をしたらどうか」と松方さんが提案され、永年会員には銀ワクをとりつけた会員章を贈呈することになったと、銀ワクバッヂの由来を、当時の理事でその辺の事情に詳しい松田雄一氏からこの稿を書くにあたって確認することができた。案外忘れられかけていることの一つだと思われるので書きとめておきたい。

なおこの日は功労者表彰も行われ記念品が贈呈された。対象になったのは、歴代正副会長、名誉会員、十五年以上支部長として尽力した会員等二十三人であった。いい試みであったと思うが、そのあと今日までこの種のが行われていないのは残念であると共に、今後は、その年間に素晴らしい登山をやった人、団体等を対象にして日本山岳会賞のようなものを出すことを考えてみたら如何なものであろう。

ところで、名誉会員に対しては特別の措置がとられることなく、それから七年を経過して昭和四十七年の年次晩餐会を迎えた。名誉会員にも何か特別の会員章を贈ってはどうか、という発議が誰からともなく起り、もっぱら副会長をやっていた成瀬岩雄氏を中心に検討が進められた結果、六月の理事・評議員会で正式に決まり、九月の理事・評議員会で、永年会員章の銀ブチに対して、名誉会員章は金のフチどりとする事が決定されたのである。名誉会員を推挙する制度ははやく創立当時の本会規則第九条により定められ、第一号は明治四十三年のウォルター・ウエストン氏、第二号が四十四年の志賀重昂氏、こんにちまで六十六人が推挙されているが、そのうち既に三十九人が物故者となった。戦後の昭和二十八年に秩父宮雅仁親王殿下が名誉会員になられていることは特筆すべきことである。

昭和四十七年の年次晩餐会を機会に、ようやく名誉会員章を贈呈する運びになったということを成瀬岩雄氏が会報三三一号に書いているのを読んで、山岳会とは付かず離れず、長いつき合いをしていたつもり私などでさえ、おやそうだったのかと思うほど、ことの起りは茫茫としてしまうことが多い。永年会員章があるのだから、名誉会員章はとうの昔からあったものだと思いきや、実際は以上の通りなのである。な

お晩餐会の席上で新たに名誉会員に推薦された会員を紹介するしきたりは、昭和四十年十月の理事・評議員会で協議された「名誉会員推薦等に関する内規」に「名誉会員の推薦は評議員会の推薦によって会長これを行い、原則として年次晩餐会の席上において発表するものとする」と制定されたことによるのである。

(註) 明治の末期から大正初期にかけて既に次のような山岳会が設立されている。即ち、飛騨山岳会(明治四十二年)、名古屋愛山会(明治四十二年)、山梨山岳会(大正二年)、一高山岳会(大正二年)、三高山岳会(大正二年)。

(昭和六十一年六月十一日)



有志閑談会事始め

——日本山岳会百年史の資料ノートとして——

望 月 達 夫

こんにち「有志閑談会」の名のもとに、毎年六月、本会員有志によって行われる懇談会の、そもその始まりとその後経過を綴るのが本稿の目的である。もともとこの集りは、本会員有志によるもので、会の公式行事とは言いがたい面もあるが、毎回集る顔ぶれと、そこで語られた話の内容とを振り返ってみるとき、会の伝統なるものは、案外このような自由な雰囲気の場合のときに受け継がれてゆくものと思うので、編者の依頼にこたえて筆を執った。

第一回の集り

は「有志閑談会」という名称ではなく「清水谷偕香園時代を偲ぶ会」というもので、左記にその案内状の全文を掲げておくが、昭和二十八年（一九五三年）六月十四日、駒込の六義園心泉亭でひらかれた。世話人は神谷 恭、岩永信雄、成瀬岩雄、交野武一の四氏である。

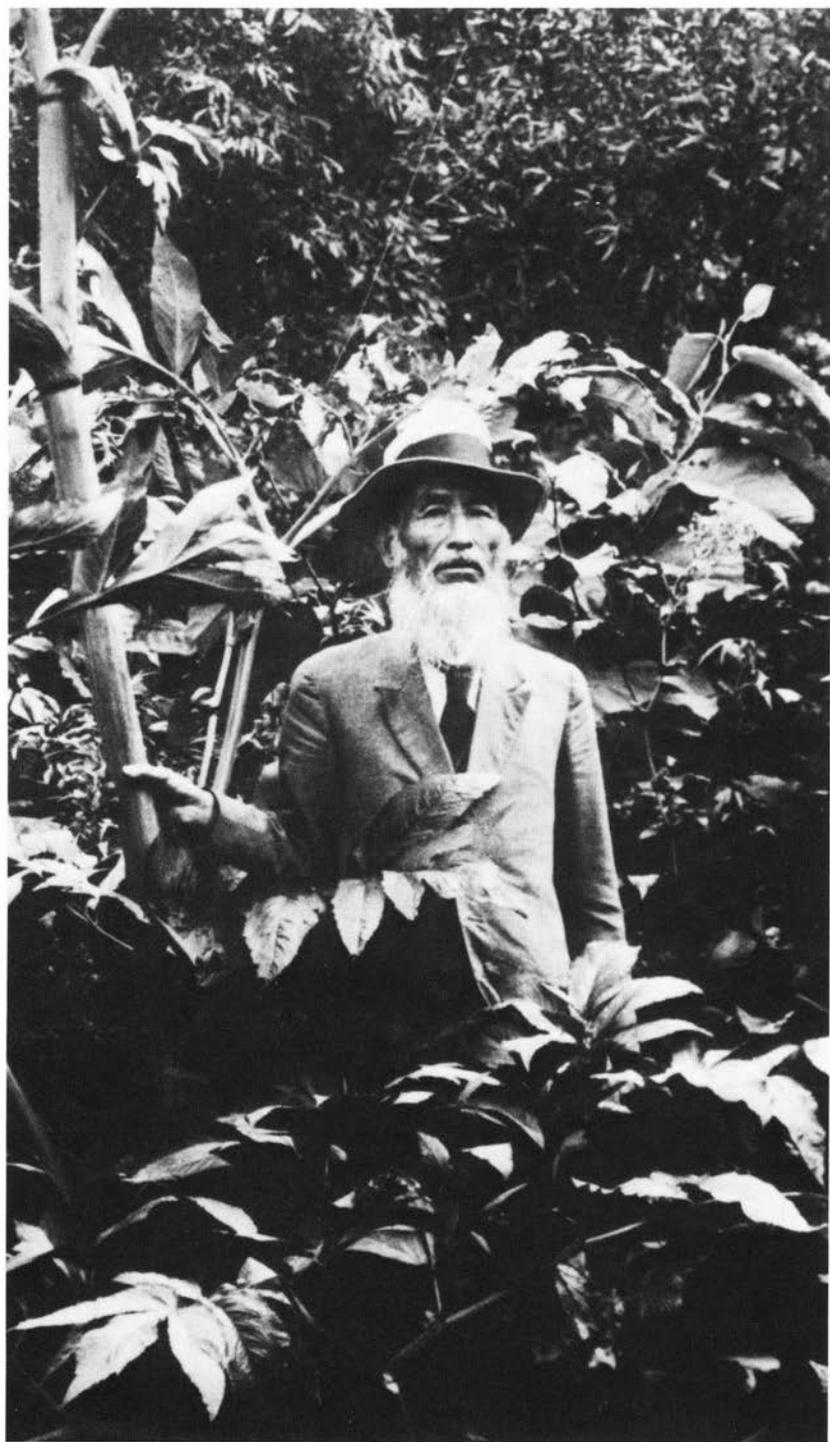
清水谷偕香園時代を偲ぶ会

いよく、新緑の候も酣となって参りました。と申上げただけでもあの秩父の溪谷の音が静かに耳の底に鳴る様な気持になられ、或は又、その昔、入梅の頃、この秩父を思い起さす様な、霧雨に霞む若葉に包まれた

河野齡藏の乾板写真に見る
日本山岳写真史の夜明け

(本文54ページ参照)

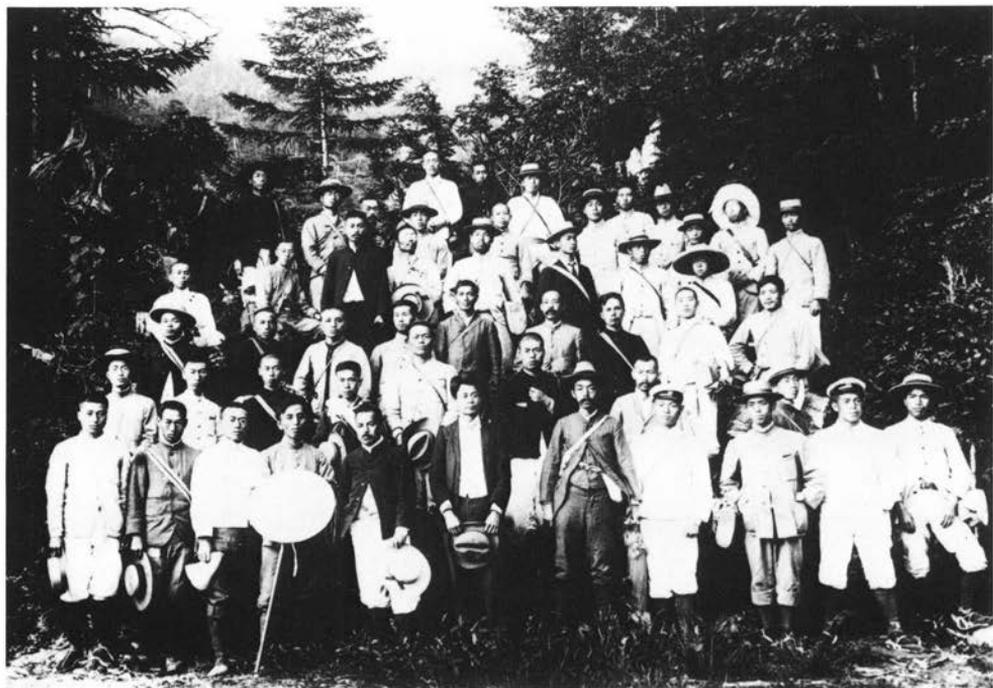
①河野齡藏(昭和七年、利尻・礼文の山旅にて。六十八歳)





②『信濃博物学雑誌』創刊号(左)と第7号に掲載された「赤石山嶺に於ける高山植物」の口絵写真(右)

③明治40年(1907)7月29日撮影「八ヶ嶽高山植物採集会員一同」の記念写真。
前列中央で帽子を手にするのが牧野富太郎、その左の白ズボンが矢沢米三郎。





④白馬尻岩小屋前の記念写真。左端・河野齡藏、その右・矢沢米三郎。明治40年代か。
⑤白馬大雪溪





⑥燕岳から槍ヶ岳を望む



⑦白馬岳お花畑を登る女学生。大正5年(1916)の長野高女生の集団登山か。



⑧大正9年(1920)の縦走の記念写真。左から矢沢米三郎、岩波茂雄、酒井由郎。剣岳頂上にて。



⑨ 檜ヶ岳。踏跡も小屋もない

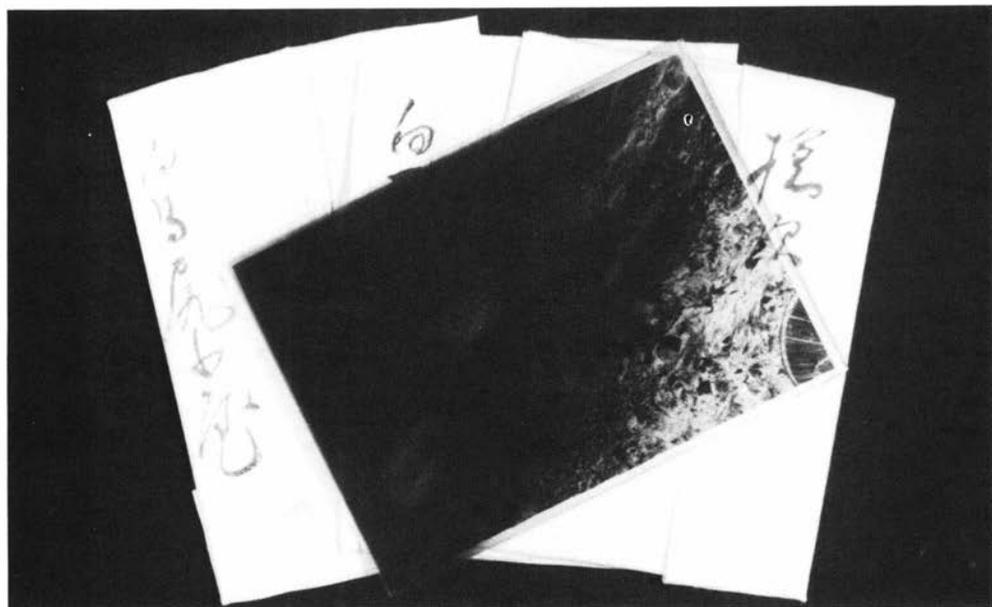
⑩ 上高地牧場





⑪戸 隠

⑫乾板と和紙の包み紙。このような丁寧な例は極めて珍しい。



スイス・ガイド手帳に
見る日本人の記録

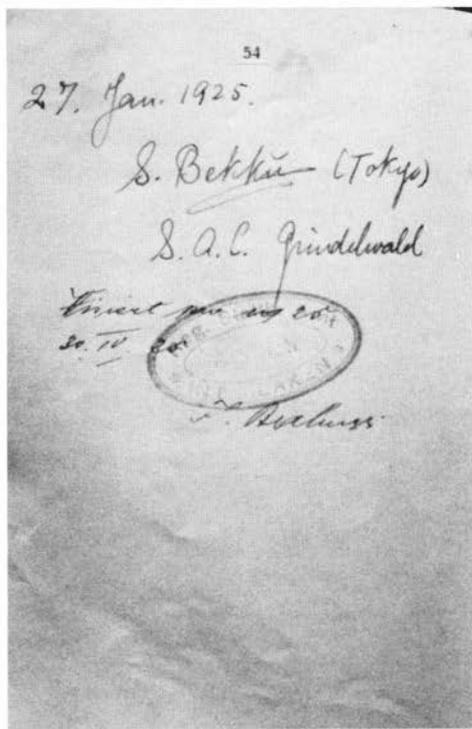
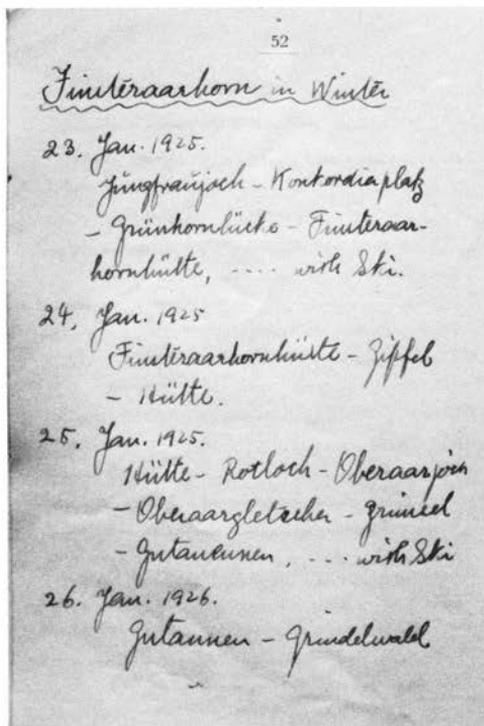
(本文59ページ参照)



冬のフィンステルアールホルンにて(左が別宮氏)

From the "Bergführerbuch in der Schweiz"

シュルネッカーの手帳にあった別宮貞俊氏の記録(52Pと54P)



I am very glad to write these few lines concerning my climbings in Zermatt; I have performed the following ascents with Mr. Chs. Schlunegger from 26th Aug. to 8th Sep. 1926.

1. Breithorn
2. Matterhorn (descending to Italian-Ridge)
3. Weisshorn

Among these climbings, the Matterhorn was most interesting, because we could

Celebrate the Emperor's Birthday of Japan at the top with prince party. Specially descending to Italian-Ridge was memorable also; in the other side, the ascent of Weisshorn was one of the memorable climbing for me.

7th Sep. 1926

神
戸
野
山
会
社

K. Fujita

SAC
JAC

シュルネッカーの手帳にあった藤木九三氏の記録(61~62P)

ハンス・ベルネットの手帳にあった麻生武治氏の記録(76~77P)

Grindelwald
den 7. Sept. 1927.

In Bergsteigen darf man eigentlich besser immer zu Dritt geht. Aber nur mit einem so wie Berni, Hans hervorragender u. ausgezeichneten Felskletterer. Gleich zeitig Eisgänger kann man ruhig zu zweit sein. So sicher ist er u. Fachkannne. Die Besteig. um drei Gipfel Matterhorn, Mittelhorn, Rosenhorn u. die Traversierung des Gr. Schred. Horns wurden von ihm spielend geführt. Die Technik u. Fach. Kenntnisse von ihm sind amtlich überzeugt. Davon brauchen wir gar nicht mehr reden u. loben.

Aber sportmännliche u. gentlemanlike Charakter hat mir er im Bergführer Kreise von ganzen Grindelwald. Es ist kein Wunder das er Haupt. man u. Patrouillenführer in Schweizerischer Militär ist. Wenn einer od. eine ganz zuverlässigen Bergführer haben will sollte nur Berni, Hans u. Frage zu kommen.

Ado, Kube
S.H.C.

151

September the 2nd - the day we cannot forget between us. We succeeded in traversing Point D'Hercus & Matterhorn in one day. Schumbull hat at 5.25 A.M.; - Point D'Hercus 6.45; Point Carrel. 10.00; Col de Lyon 2.30. The Matterhorn 6.00. The Bellander 8.15. Gottfreid's work on this day was super-lunatic & I have no other words to say.

J. A. M. C. C.U.M.C.

155

to Weisshorn - set up by the usual way & I got mountain sickness for first time in my life & I got absolutely Caput. It is no fault of him. - only too much eating. the Trifthorn & Zinal rotation

I think we crossed this ridge at mad speed of 6 hours 30 minutes. The reason was that we were chased by a toy lady with a brother inexperienced guide. & Point Blanch up by the Fast Ridge & down by the usual way.

156

at Apronix. x the traverse of Gigion, x the traverse of Grand Doyat Retif Dotu x Mont mandit on its Italian face by a new route following a small ridge between the central & the right-convex. 17 hours work & Gottfreid worked magnificently the whole day. x Mont Blanc up from Fete Rousse & Doufor by G. M. I have too much to say about his merits but as there is limit in pages so that is that. M. Kigami

ゴットフリード・ペーレン
の手帳にあった各務良幸氏
の記録(154~156P)



図一 昭和28年(1953)6月14日、六義園で行われた“清水谷偕香園時代を偲ぶ会”
(第1回有志閑談会)

(後列左から)松方三郎、吉田久兵衛、村井米子、田部重治、日高信六郎、島田 巽、島山悌成、
武田久吉、高野鷹蔵、岩永信雄、網蔵志朗、古沢 肇、藤井運平、野口末延、初見一雄、原 全教。
(前列左から)望月達夫、金坂一郎、冠松次郎、神谷 恭、別宮貞後、沼井鉄太郎、成瀬岩雄、渡
辺公平。

図二 昭和35年(1960)6月18日、六義園で行われた第3回有志閑談会

(後列左から)中田清兵衛、村尾金二、古沢 肇、今井喜美子、名須川浩、村井米子、今井雄二、
田部重治、瀬名貞利、岩永信雄、山崎安治、松本善二、鶴岡元之助、岡埜徳之助、佐藤隆太郎、高
木菊三郎、山崎金次郎、織内信彦、関根吉郎、近藤茂吉。
(前列左から)青木 昇、神谷 恭、藤島敏男、冠松次郎、島山悌成、松本熊次郎、牧野 衛。





図-3 六義園 心泉亭の外観。昭和35年(1960)6月18日

図-4 昭和36年(1961)6月24日の第4回有志閑談会。立って話しているのが松方三郎。関根、金坂、藤島、加藤(泰)、日高、松本(熊)の顔が見える。





図-5 昭和38年(1963)6月15日、六義園で行われた第6回有志閑談会
 (後列左から)加藤泰安、冠松次郎、田部重治、瀬名貞利、高木菊三郎、山崎安治、藤島敏男、鳥山梯成、深田久弥、今井雄二、原田幹市、田口三郎助、古沢 肇、牧野 衛。
 (前列左から)交野武一、日高信六郎、野口末延、松本熊次郎、足立源一郎、神谷 恭、松方三郎、佐藤隆太郎。

図-6 第7回有志閑談会の寄せがき。





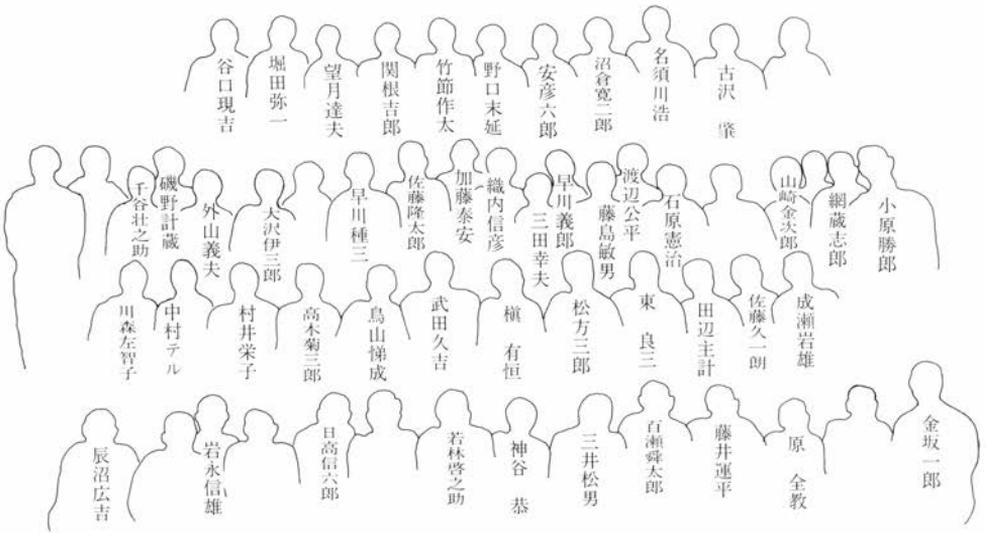
図-7 昭和42年(1967)6月24日の第10回有志閑談会で語る田部重治。岩永、今井(喜)、坂倉、川森、松方、織内、松田、中村謙らの顔が見える。

図-8 昭和43年(1968)6月15日の第11回有志閑談会。田部重治、松方三郎、日高信六郎らの顔も。





昭和26年(1951)11月30日、神田YMCAで行われた年次晩餐会
 (織内信彦 所蔵／本文7ページ参照)



清水谷偕香園時代の小集会を思出さるる会員諸賢も必ずあるのではないかと存じます。

五拾年の歴史の中でも最も意義ある清水谷偕香園時代の回顧の会を開こうじやないかと言う話が最近、急速に持上り名誉会員の長老を御招きし、併せて木暮さんのありし日を偲び会員各位の親睦を計り度く、茲に御案内申上げる次第であります。

本来ならば勿論、偕香園でこの会を開き度い所であります。先般、神谷、岩永両氏が逸早く、相前後して同園を訪ねられたのですが、誠に残念ながら同園は戦災のため焼失した由、不得止、同園を偲び得る様な六義園に於てこの会を催す事になりましたが、当日は往時の思出に低徊去る能わざりし神谷、岩永両氏の見聞談も併せて伺い度いと存じます。

発 起 人

一、日時 六月拾四日（日曜日）午後四時—八時

一、場所 六義園 本郷上富士前都電停下車（元）岩崎邸

一、会費 二五〇円位、簡單なる食事用意あり

一、講演 題未定

右食事準備の都合もありますので六月拾弐日迄に必着の様、御出席の有無日本山岳会宛に御一報下さい。

右世話人 （四人の氏名は略）

会合の目的

は改めて説明するまでもなく、右の案内状を一読すれば判るが、清水谷偕香園時代とは何か、それだ
けは説明する要があるろう。と言つても私の如く、いまではかなり古くなつた会員でも、もうその時代
は経験していない。それは昭和初期までの小集会場であつて、いまの千代田区紀尾井町二丁目、ホテル・ニューオー
タニ付近である。昭和二十八年当時はその頃をなつかしがる会員が、まだ多かつたのだと思われる。大島亮吉氏が軍

服姿で小集會に現われた話をきいたことがあるが、それがやはり借香園ではなかつたかと想像するのである。

昭和二十八年と言えば敗戦後八年、本會がお茶の水に事務所と図書室を再建してから四年目で、世間もようやく落ちつきを取り戻しつつあった。そして土曜の午後にはよくお茶の水の新ルームに集つて、山談閑談に時を過す會員が少なくなく、いわゆる「土曜會」なるものが、いつしか誕生していた。その會合の間から、前記の借香園時代を偲ぶ會の構想が生れ出たものであろう。世話人を買つて出た前記四氏が最も熱心な推進者であつたと思われるが、案内文は明らかに成瀬氏の起草と推定される。四人とも既に故人となつたため、當時の話をきけぬのが遺憾であるが、叙上でほぼ間違はないように思う。

当日の出席者は「図1(口絵写真ページ/以下同)」に示される二十四氏と、ほかに近藤茂吉、中村清太郎、田辺主計、交野武一、沼倉寛二郎の五氏で計二十九名と記録に残っている。右の五名は記念撮影の時刻後に到着したものである。會は四時〜八時とあつて、四時ごろ参集した會員が園内を散策し、そのとき写真なども撮り五時半ごろから心泉亭内に坐つて、用意された弁当を開きながら語り合つたもので、夕食時までには到着したものも何人かあつたのである。こうした形式は、その後もほぼ同じように受け継がれた、ごく自然なやり方であつた。

また、どういふ人に案内状を出したか、という点が聊か関心のもたれるところだが、すべては世話人に一任されたもので、出席者の顔ぶれから判断する以外にない。ただ會場の収容力が三十名ときまつていたので、その数を超えることができず、後年に到つてこのため世話人は大いに苦労することとなつた。

この記録は會報一六八号(一九五三年七月号)に成瀬氏によつて書かれてゐる。「在京の名譽會員は全部ご出席という……豪華版……戦後の混乱時代に直面して、その存在をさえ危まれたこの伝統ある日本山岳會を、今日ヒマラヤに迄遠征隊を送り出せる様に確立してくれた若い會員の會に對する愛着と努力の結実で、実は今日、名譽會員全部の御出席を願つて創期時代の話に一夕を楽しんでいただける様になつた事は、日本山岳會ならではの味わえぬ空氣ではないだろうか。……」とある。

翌昭和二十九年（一九五四年）六月七日（日）には名誉会員を囲む会がひらかれ、武田、高野、近藤、鳥山、冠、頼、辻村氏らの七名譽会員をお招きして、京大アンナプルナ隊のスライドをお見せした記事が、会報一七四号（一九五四年七月号）に成瀬氏によって書かれているが、おそろくそういうこともあって、先の懇談会はこの年には行われなかったようだ。

しかし、それは忘れられたのではなく、むしろ年を逐って求める声も大きくなったようだ。第二回の懇談会がひらかれたのは六年後の昭和三十四年（一九五九年）六月十九日、同じく六義園心泉亭に於てであって、昭和三十一年（一九五六年）にはマナスルの初登頂があり、本会ではその諸行事に忙しく、それもこの集りの遅れた原因の一つであろう。当日の世話人（記録には当番とあり）には神谷、岩永、成瀬三氏の第一回と同一人があたり、出席者は二十九名で記事は岩永氏によって会報二〇五号（一九五九年九月号）に書かれており、出席者の氏名はそれによって明らかであるからここには略する。但し、この時も有志懇談会とあり、また第二回というような記載もない。

第三回は会報二一〇号（一九六〇年八月号）に第三回と明記され、心泉亭晩餐会とあって翌昭和三十五年（一九六〇年）六月十八日（土）にひらかれたことが判る。第二回以降は毎年六月に開かれるようになった。世話人は今回も神谷、岩永の二氏で、出席者は「図2」の写真がよく示しているが、この他に芳野赴夫氏が、また遅れて参じたのは吉田竹志、山下一夫、入沢文明、坂倉登喜子、網蔵志朗氏らで計三十三名であった。なおこの時から次回の世話人として藤島敏男、関根吉郎、太田敬の三氏がきめられ、この慣例は以後ずっと続いた。

第四回は昭和三十六年六月二十四日（土）にひらかれ、会報二一六号（一九六一年八月号）収載の藤島氏の記述によつて、有志閑談会の文字が初めて使われているので、この名称はこの年から定着したと見るべきであろう。また、これを言い出したのもおそらく藤島氏であろう。出席者名は会報に見えている三十三名である。会報の記事には「とかく山登りをする種族は顔を合せて、愚にもつかぬおしゃべりを楽しむ習性をもっているようである。それが狭い範圍の仲間だとひとりよがりのお山の大将ばかりになって始末がわるい。／幸いにもJACのように齡八十の大先輩か

ら二十代三十代の会員まで抱擁しているところで、有志相計って閑談を交えれば、お山の大将など出来っこない。それだけにたのしさもまた格別である。／戦前はこういった会合の通知も『会報』に載ったものだが、戦後は一々往復ハガキ。会場の収容人数約三十名とあっては、世話人のみつくろいで有志を集めることになる。世話人が変れば見繕いもおのずから変わるであろう。次回の世話人（交野、織内、加藤泰）どんな面々をかきあつめるか。／（追記）この集りにはJAC会員の誰でも参会歓迎である。ただ世話人だけでは万遍なく気をくばりきれないから、こんな集りに出てみようかという会員は、次回世話人へ遠慮なく申出られることを望む」とあるが、前回あたりから三十名を多少超えてきた人数が、藤島氏のこの記述でさらに拍車がかかったように考えられる。

しかし、第五回の記録を見ると（会報二二二二号一九六二年八月号）、出席人員は二十六名とおさえられ、世話人（交野、織内氏）の苦勞があったことが想像される。昭和三十七年（一九六二年）六月十七日、六義園でひらかれており、例によって田部さんの秩父の話から始まり、最近スイスから帰ったばかりの足立さんのグリンデルワルトのスケッチ旅行談、松方さんの欧米を駆け廻ってきた話などが、O（織内）氏によって記録され、次回世話人は野口末延、瀬名貞利、古沢肇の三氏ときまった。

第六回有志閑談会は従前同様六義園で昭和三十八年（一九六三年）六月十五日（土）にひらかれた。記録は会報二二七号（一九六三年六月号）の通りだが、この時にも牧野衛氏撮影にかかわる写真（図5）が残っている。ここに写っているのは二十二名だが、後刻参じたのは村井米、関根、佐藤久、織内、望月、青木、網蔵、太田、小野利、金坂、坂倉、桜井、島田、中村謙、中村清、山下の十六氏で計三十八名の出席者となり、定員をかなり超過した。「例によってこの会ならではのお話は、まず冠さんからはじめられ、遠い昭和の東京の思い出、つづいて中村さん田部さんと、それぞれ山岳会五十年の歴史をいまにひき戻して、おどろくほど鮮明に、またある部分はガラス板に描かれた幻灯の絵をのぞくような楽しい話をされた。この日熱海から上京出席された鳥山さんは日常の悠々たる心境を淡々と……古い山岳測量の話をされた高木さん、こんど東京に戻って来られた望月さん、そして終りを藤島さんと松方さん

にお願いしてしめくり……。定員三十名の席のために、毎回世話人は喜んで心配したりしなければならぬ。」と会報の記録は語っている。次回の世話人は青木一昇、島田巽の二氏と、望月達夫。

有志閑談会では 会合の都度、署名簿か色紙に出席者が署名したものが、いまそれらが何処に残されているのか詳かにしない。だが昭和三十九年（一九六四年）六月二十五日（木）にひらかれた第七回のは、

幸い牧野衛氏撮影のフィルムがのこっているので、「図6」に掲げておく。このときの記録は世話人の一人青木氏の筆になるもので、会報二二六号（一九六四年十二月号）に載っている。出席者は署名にみられる三十九名のほか、なお桜井信雄、織内信彦、麻生武治の三氏が加わり四十二名となったが、定員を超えること十余名に及んでいる。次回の世話人は山下一夫、小野利次、今井喜美子の三氏となった。

前回膨張した出席人員も、昭和四十年（一九六五年）六月十九日の第八回には「この日は、あいにく新潟支部主催の佐渡旅行と重なったため、毎年のレギュラーメンバーの中で欠席があった」とあり、出席人数も二十八名に収縮した。「島田 巽氏からはJAC創立六十周年を機会に、何かよい記念事業を起したいとの提案があり、今井雄二、喜美子夫妻の共著『心に山ありて』が皆から祝福された」と世話人の一人山下一夫氏が記録している（会報二四三号一九六五年九月号）。

第九回は昭和四十一年（一九六六）六月十八日（土）にひらかれたが、世話人は今井雄二、牧野衛、松本熊次郎の三氏、会報二五三号（一九六六年七月号）に記録があり、また牧野氏所蔵の署名簿の写真も残っているが、出席者は三十四名、この会合で特記すべきは、日高、神谷両氏の提案から一同が、ルーム問題で、交通至便の場所に立派なルームを、との要望が強く出されたこと、世話人の一人牧野氏の記録に残っていることであろう。当時はまだ外苑コーポに本会の事務所があり、向井ビルに移る前であった。

昭和四十二年（一九六七年）六月二十四日（土）の第十回については会報『山』二六七号（一九六七年九月号）に古沢肇氏によって記録され、写真二葉も掲載されているが、出席者は三十八名、世話人は佐藤久一朗、坂倉登喜

子、松田雄一の三氏であった。「図7」は当日、語られている田部重治氏と、それに聞きいる出席者の面々を写したもののだが、閑談会の雰囲気をよく伝えている。

第十一回は成瀬、渡辺公平、川森左智子の三氏が世話人となつて、昭和四十三年（一九六八）六月十五日（土）ひらかれたが、出席者は四十四名にふくれあがり、戸外でなく会場内で撮影された「図8」によつて出席者の全貌がよく判る。記録は渡辺公平氏の筆になり会報「山」二七八号（一九六八年八月号）に写真二葉と共に載っている。

第十二回以降は次に表によつて簡単に記述しておきたい。

(回)	(日)	(時)	(場所)	(会費)	(世話人)	(出席人員)	(参照記録)
十二	昭和四四・六・一四(土) 午後四―八時		六義園 心泉亭	一二〇〇円	今井喜美子 山下一夫 古沢肇	三六	会報「山」 二九一号
十三	昭和四五・六・二〇(土) 午後四・三〇―八時		"	一五〇〇円	藤井運平 小原晴子 山崎安治	三六	会報「山」 三〇二号
十四	昭和四六・六・一二(土) 午後四・三〇―八時		"	一五〇〇円	中屋健一 斎藤剛三 伊倉剛三	四七	会報「山」 三一三号
十五	昭和四七・六・一〇(土) 午後四・三〇―八時		"	一六〇〇円	諸岡一夫 名児耶達正 板倉勝正	四三?	会報「山」 三二五号
十六	昭和四八・六・二三(土) 午後四・三〇―八時		"	一七〇〇円	近藤信行 坂下紀子 須田紀子	四八	会報「山」 三三八号
十七	昭和四九・六・一五(土) 午後四・三〇―七・三〇		"	二二〇〇円	松丸秀夫 濱野吉生 宮下秀樹	三六	?

六義園心泉亭での「有志閑談会」は第十七回をもって終り、第十八回からは後楽園涵徳亭と場所が変更された。昭

和五十年六月十四日（土）午後四時半～七時半、世話人は小原晴子、神崎忠男、三枝礼子の三氏で出席者は三十三名であった。

六義園心泉亭から後楽園涵徳亭へ変更せざるをえなかった理由について「永年親しんでおりました六義園は、本年より人員、時間ともに規定が厳しく、使用不可能となり残念ながら会場変更となりました」と世話人の一人、小原氏が書いているが（会報「山」三六二号）、残されている書類などをよくしらべると、一旦心泉亭に申込みをして取消しをするなど、当時の世話人の苦勞が一通りでなかったことが判る。

後楽園涵徳亭での集りは、翌昭和五十一年六月二十六日の第十九回（世話人、金坂一郎氏）で終り、第二十回（昭和五十二年六月十八日）からは大隈会館完芝荘に変更となった。これ以後有志閑談会は完芝荘で続けられている。

昭和五十三年六月十七日（土）午後二時～四時、大隈会館完芝荘でひらかれた第二十一回閑談会について会報「山」三九九号（一九七八年九月号）に、暫らく記事が載らなかったこの集りにつき成瀬氏がかかり長文の報告をかき、そこには二十年以上を経過した回顧的な感慨も吐露されているが、完芝荘に変更となった年代などに同氏の思い違いがあるようだ。また、この時代以降「山」に載っている記録も少なくなり、しらべるのに骨が折れる。

私は六義園時代の閑談会には、かなりよく出席したほうだが、出席人員が四十七名にふくれ上った十四回だったか、これではもう閑談会ではなく騒談会だという感想を率直にのべる人も出てくるし、会の雰囲気初期のころとかなり違ってしまったことと、私自身の仕事が多忙となって東京、大阪間を往復することが多くなったため、次第に足が遠のき、涵徳亭へは一回、完芝荘へもたぶん一回ぐらいしか出席していない。

従って涵徳亭以降の閑談会のことを述べるのは、まったく適任者と思わず、また本稿も六義園時代の閑談会だけで筆をおくべきものと思う。

稿を終るに際し、貴重な写真を数多く提供された牧野衛氏に厚くお礼を申したい。三十数枚の写真を送付されたが、掲載したのは紙数の関係からそのなかの数点にすぎなかった。

（一九八六年七月記）

K2、エベレスト、そしてマナスル

——無酸素による三つの八〇〇〇メートル峰登攀・一九八五年の記録——

山 田 昇

アンナプルナ南壁の冬期登攀に失敗し、沈んだ気持で帰国した一九八五年二月、先に申請していたマナスル冬期登山の許可を受取った。

この年の夏に私も参加することになっていた日本ヒマラヤ協会のK2登山隊は隊荷の発送もすでに済ませ、あとは出発のみと準備が進んでいた。前年七月よりこの年の二月まで遠征で日本を離れていた私は、何の準備も手伝わずに心苦しく思っていた。その分を実登山で頑張ろうと心に決めていた。そんな時に八木原園明氏より『植村直己物語』の撮影で秋にエベレストに行かないかという話を持ち込まれた。この登山は仕事での山登りということで、このような登山は二度とないと考えすぐに参加の気持をつたえた。そして冬のマナスルは、秋にエベレストに行くことにより、時間的にも肉体的にもむずかしいと思われ、この時点で中止を考ええた。

五月十八日、K2へ向け出発、その途中カトマンズに立ちより観

光省に出頭し、冬のマナスルの件の話をした。登山局長のP・M・シュレスター氏は「ネパール政府としては、まだ正式のキャンセルの報告を受けてない。もし行くのであれば登山料さえ支払えばまったく問題はない」という言葉に、K2から帰ったら返事をするのもう少し待って欲しいと申し入れをしK2へ向った。この時にまたマナスルへの夢も出て来ていた。しかし当面は、K2一本に全力をそそがなければならない。

K2 登頂

K2の計画は、隊長飛田和夫以下十五名の隊員で東南稜（アブルツチ稜）からの登頂というもの。計画はオーソドックスなもので、隊長が三年ほど前から考え、それにメンバーが集まるかたちで進められてきた。いまだらK2のノーマルルートに極地法で、といわれるかも知れないが、八六一一メートルの世界第二位の高峰で高さの魅力が

ある。東南稜も初登頂のイタリア隊、そして2登の日本隊と、メスナーの国際隊の3隊のみとルート自体も困難性の高いルートである。そしてなるべく多くの登頂者をつくることとし、調子の良い強力パーティーは無酸素でという目標も考えた。

五月二十七日、イスラマバードに隊荷と全隊員がそろそろ。隊荷の再梱包を済ませ、二十九日スカルドへ向う。メンバーはバス、隊荷はトラックで早朝に出発する。バスの中は非常に暑い。窓を開けると熱風が入り閉切つての走行となる。寒さに関しては山屋は我慢強いほうだが暑さにはまいる。夜中を徹して走ると明け方にはインダス川に出る。二十六時間の走行でスカルド。P・T・D・CのK2モーターに着く。ここは十年前に始めてのヒマラヤ、始めての海外でラトック山群の一周に来た時にも泊ったところ。スカルドの街もだいぶ変わっていて、十年の歳月を感じる。

六月一日、早朝スカルドからダッソーへ向う。ポーターも集まって来ていて、二四三名を雇用する。翌二日、小雨の降る中をキャラバン出発。雨の少ないといわれるパキスタンで雨に会うというのはどういふことだろうか。ただ、涼しいので歩きやすい。四日、最奥の村アスコールに着く。七五年にラトック山群の一周で来たときにポーターと大ゲンカしたところだ。そんなことが思い出される。ここでポーター支給の食糧やら、ヤギなどを購入すると、ポーターは減るところか、三〇名ほど増えてしまう。六日、木々の茂る、パイク。ここで一日休養とポーターへの食糧支給。肉の支給でポーターがさわぎだす一幕もあったが何とかおさまる。一人一人のポーターはそれほどでもないが、集団でさわぎだすとやはり恐い。いまはラ

マダンの最中で気が荒くなっていることもあるだろう。

八日、いよいよバルトロ氷河に入る。ガッシュャーブルムIとIIを目指す、イタリアのR・カザールロット隊も我々と前後してのキャラバンとなる。九日、ウリビアフオ、トランゴタワ、キャシードラルと、バルトロ氷河入口の岩峰群を対岸に見る緑の草地ウルドカスに着く。ここから先登山が終るまで緑の大地とは縁がなくなる。

十一日、雪の降る中をコンコルディアに着く。夕方には雪も止み、雲の中から圧倒的な高さでK2が姿を見せる。十二日、先にK2に挑んでいるスイス隊のとなり仮BCをつくる。ここは通常のBCであるが我々は二五名のポーターを残して、南東稜の取付きまでBCを上げる。

六月二十二日、登山活動を開始する。今回の登山で私は無酸素で登頂を試みる。いままで八〇〇〇が峰はエベレストを含め五回登頂に成功していたし、そんな経験から出来る自信を持てた。ルート工やキャンプ設置、荷上げも順調に進み七月六日、C3を七四〇〇に設置。その後A C七八四〇〇に必要物資を荷上げし、アタックの態勢が整う。全員がBCに下り休養。ここまで一カ月もかからずに、順調に登山が進んできた。自分自身の調子も最高。

七月十六日、吉田、村上の両名とともに第一次アタック隊としてBCを後にする。この日一気C2まで入る。翌十七日、雪が降りだし出発も遅れてしまう。計画ではACまで行くつもりだったがC3泊りとする。第二次アタック隊の六名はC2に入る。十八日、昨夜からの風は強くなっている。雪もまじり視界が悪い。アタックは翌十九日行うつもりだ。高所滞在時間を少なくするため、夕方AC

に入り仮眠するつもりで出発。

十四時、七八四〇峰にAC建設、降り積った雪をかいて、テント一張りを張るのにだいぶ時間をくう。翌日のアタックを思いシユラフに入る。零時前に起き準備をするが吹雪はおさまるところか強くなってきた。いままでで一番悪い日に当たってしまった感じもする。アタック中止を決め夜明けとともにBCへ下降する。三日間の休養で次のアタックを決める。七月二十二日から二十六日の日程とする。休養日は快晴で天候の周期が我々と逆に働いているような気持にもなる。

七月二十二日、第一次、第二次のアタックメンバー総勢九名がC2へ入る。二十三日、第一次の三名は直接ACに向う。第二次の六名はC3泊りとなる。背後にそびえていたブロード・ピークも登るほどに高さを失ってくる。AC(C4)は七八四〇峰、ブロード・ピークとはもう少しで肩を並べる高さだ。午後三時に着き、雪にうもれたテントを掘り出すのに苦労する。

夕食を済ませ早々とシユラフにもぐり込む。ぐっすりと眠ることができたと思っているとまだ二時間しかたっていない。後はまったく眠れず、うつらうつらとし、起床時間の零時を待つ。吉田、村上の兩名は酸素の力でぐっすりと眠っている。眠れない私は時間のたつのが遅く感じられ、腹立たしい気持で彼らを見ていた。やはりこの高度で酸素なしの睡眠はつらい。

零時前に二人を起こす。外を見ると風はあるが星空が広がっている。よし今日こそはという気持になる。朝食のラーメンを四杯も食べてしまう。無酸素で登頂する私は準備といっても、テルモスのお

茶と行動食を持つだけで出発できる。

二時三十分、二人より一足先に出発する。風は強いが雪は縮まって歩きやすい。二人のランプも後を追って来る。「ビン」の首」と呼ばれる上部へ続くルンゼに向う。その手前には三角雪田が広がり、このクレバスで三人が一緒になりお茶を飲む。この頃より夜も明けてくる。二人はここまで酸素節約のために吸わずに登ってきた。ここにストック、ランプそして空のテルモスをデポして「ビンの首」へ向う。少しづつ傾斜も増してくるが、アイゼンが良くきき調子良く登れる。ルンゼの一番せまかったところでは、セラックが頭上に不気味にのしかかり圧迫感を受ける。ここには六人のロープがたれ下っているが、支点の確認が出来ず、手を出すのがためらわれた。これを越えると「ビンの首」の難所を越えたことになる。セラックの左の大雪壁へとトラバースしてこれを登る。このあたりよりランセルが始まり、胸までのランセルで遅々として進まない。

ひとのランセルをあてにして無酸素で登頂するという気持はなく、交替してランセルするが長くは続かない。酸素を吸う二人に少しづつ遅れだす。のどの乾きがきびしい。八四〇〇峰で小休止、BCと交信する。この頃より風に雪がまじり視界も悪くなる。ところどころラストしたところも現れるがやはりランセルは激しい。十一時頃より数分先も見えないすさまじい風雪になる。このままでは登頂できたにしても無事帰ることもおぼつかない。いままでのヒマラヤ登山ではツキにめぐまれた感のあった私も、こんどは見放されたか……。一時も早く下山しようとして決断する。数分先に先行していた吉田に声をかける。しかし風雪に声をかき消され返事も返ってこ

ない。三十分ほど待ったにもかかわらず姿を見せない。彼は登りつづけているようだ、彼を残して下る訳にはいかない。私達も少しづつ登り始める。二時間ほども続いたか。いままでの風雪がうそのよう消え、まわりが見えはじめる。そのうえ青空さえも見えてくる。吉田は頂上直下で声を送っている。頂上はすぐそこだった。まだツキに見放されてはいなかった。

午後二時二十分、こうして幸運にもK2の頂に立った私は四大峰登頂の名譽も授かった。しかしK2の女神もこの日を最後にほえむことはしなかった。その後二回頂上に挑んだ第二次隊や、ポーランド隊も頂上に立つことは出来なかった。BCでポーランド隊のW・クルティカと話す機会にめぐまれ、ヒマラヤ登山のあり方などにふれ話した。彼は数年来、暖めてきたトランゴタワの計画を、ぜひ一緒に誘い、私もこれに興味を覚え一九八六年に実行する計画が生まれた。イスラマバードまでの帰路同行し、細部までの打合せを済ませた私は、灼熱のイスラマバードを後にし、一年後の再会を約してネパールへ向った。

エベレストへ

八月二十五日、三カ月ぶりにカトマンズの土をふむ。さっそく親光省の登山局に赴き、トレッキング・パーミッシヨンを取得の手配や、K2の話のあと、マナスルの件を打診してみる。P・M・シユレスター氏は「まだ他の登山隊の申請はきていない。もしあなたが行かれるのなら問題は一つありません。それにいまの時点で申請がないので、今冬は貴隊のみでしょう」という返事だった。それな

らばエベレストが終って帰るまで保留してほしいむねをお願いする。さてエベレストの計画は、偉大な冒険家植村直己氏の冒険の足跡を映画化するというもので、その撮影のサポートと、エベレストの実景を撮るために、実際にエベレストにも登ろうというものである。

撮影隊、登山隊の本隊はすでにカトマンズを発ちキャラバンを開始している。しかし今日のキャラバンは、困難が予想された。それはポーテコシ上流の水河湖の決壊による洪水でキャラバンルートになるドゥドコシの橋が十数箇所にわたり流されてしまったと聞いたからである。雨のエベレスト街道は、もとより快適とはいえないものを、橋が流されてなくなってしまうという。それに本隊は、監督をはじめ、俳優やスタッフで四十名を越す大所帯である。

私はK2からいっしょの村上と二人で、エベレスト街道は一九八三年に二人とも経験している。カトマンズでは一週間ほどの休養をしてからの出発となった。いまはエベレスト街道もジリリまで車が入り、数年前のラムサンゴからのキャラバンにくらべ、四日ほどの日程の短縮が出来る。九月三日、ポーター七名で、出だしから雨のキャラバンとなった。本隊には、ナムチエ・バザールの先で追いつけると思われた。キャラバン五日目のカリコラ手前の吊橋が流されており、大洪水の脅威を知らされる。ここではワイヤーケープルが渡され、一人ずつゴンドラに乗って渡る方法で、人間一人、荷物一個ごとに渡り賃を支払われる。ナムチエ・バザールまでを八日間歩き、四日ほどの日程短縮ができた。しかしルクラとナムチエ・バザールの間でも橋が流され、森林の中を遠まわりさせられ

た。

ロブチエで本隊と合流でき、久しぶりの再会をする。BCはすでに登山中のインド陸軍隊より、一〇〇ほど離れたところと決められる。全員のテントが張られキッチンや食堂が作られると一大テント村になった。テントの配置は一九七〇年の日本山岳会のBCと同じにする。

我々の許可はインド隊の登山終了後とされ、彼等の行動に注目していた。サウス・コルまでは撮影で許可されていたが、この時点では登頂の許可はもらっていなかった。インド隊は軍の高所訓練等もあり人数も多く、莫大な予算をとっての登山で、南西壁、南東稜と二つのルートのをばしていた。インド隊の早い登山、そして早い終了が我々の登山の鍵を握っている。

十月三日、二週間の滞在で撮影隊は予定シーンを全て撮り終りBCを離れていった。次は我々が登頂して頂上のシーンが撮れば最高のものになる。登山隊メンバーはカメラマン二名を含む十一名で、これからが本番になる。

十月七日、インド隊の七名がアタックに向う。南峰に達したが、時間も遅く登頂を断念し下降中に一名が転落死亡するという事故にあった。インド隊はその後、最終のアタックを行うが、冬も近づいてきた強風にはばまれ敗退する。我々はそのすぐ後、三十日に最初に最後のアタックを行うことにする。

十月二十九日、サウス・コルにメンバー九名シエルバ二名の総勢十一名のテントが張られる。前に荷上げしておいた食糧カートンが風で吹き飛ばされ、なくなっている。K2の最終キャンプ同様、始

めの二時間ほどの睡眠で後は眠れず、十一時二十分に起床、シエルバのツァンパの朝食で出発の準備をする。酸素器具の故障が出る。ここまできて一名はあきらめなければならぬ。みな調子は良い。無言の時が流れる。村上がポツリと「俺、前に一度登っているから」と辞退を申し出る。さらに一台が故障し、カメラマン助手の斉藤があきらめる。南東稜に直接登る雪壁を、ヘッドランプの明りで登りつめる。秋も終りの十月三十日もなると風も冷たい。羽毛ミトンをしていても指の感覚がなくなってしまう。ピッケルに手を打ちつけ感覚をもどす。

東の空が明るくなる頃に南東稜に出る。南峰の基部になるところだ。ここに七名がつきつぎに登ってくる。九名の出発が、カメラを背負っていたシエルバの酸素も故障し、無酸素で四回目の登頂をねらうサードも不調をうったえ下降してしまつたという。これで頂上の撮影は不可能になつてしまつた。無用となつたフィルムやヘッドランプをデポして頂上へ向う。八木原隊長の調子が一番良いようだ。やはりヒマラヤ登山の経験が一番多く、ここ一番に賭ける精神力が大きな力になっているのだろう。名塚隊員と二人で先発してしまふ。すぐに私も後を追う。南峰の手前で若干のラッセルが現れる。二人はまよっているようだ。私が追付き、南稜側にまわり込み、南峰へ出る。ヒラリーステップは雪でうまり、雪壁になつている。酸素を吸つた名塚が取り付く。六のロープを固定する。隊長、私と登りそのまま頂上を目指す。

八八〇を越えようとさすがに無酸素はこたえる。隊長に追付けない。頂上まで一時間弱のところまで二十五分も差をつけられてしま

う。名塚もそろい写真を撮る。雪が多く中国隊の建てたボールの頭も見えない。後のメンバーを待つてはられない。すぐに下降に移る。ヒラリーステップの上で三名とすれちがい、最後の木本とは南峰のすぐ上ですれちがう。皆調子は良い、時間はまだ早いし、全員登ってこられるだろう。一声かけて我々は一目散に下降する。高所に長時間いては、危険だ。サウス・コルには午後二時頃になる。これで無事帰れた。斉藤、村上がむかえてくれる。

サウス・コルより斉藤を加え四名でC3へ下る。後は村上に頼むことにする。C3の近くまで下ってきた頃には、クタクタで固定ロープ一本分を休まずに下りるのも辛い。しょっ中しゃがみ込んで休んでしまう。C2まで下るのは無理だ。C3泊りとする。サウス・コルのC4に後のメンバーの様子を聞く。二名が下りているのは見えるが、二名が見えないという。阿久津カメラマンと木本が遅れているようだ。阿久津と、彼に付きそった木本の二人がピヴァークとなってしまう。村上が酸素を持って登って行くという。無理をしないように念をおして彼に行ってもらう。彼は夜を徹して登って行き、夜中に彼等のところへ着き、夜明けを待ち二人をつれてもどってきた。本当に頭が下る。

十月三十一日、我々はC2へ下る。C2では宮崎副隊長がむかえてくれる。八木原隊長の登頂がやはりうれしいらしく、本人は登れなかったが、そんな気持は少しもみせず、我々の登頂をよろこんでくれた。宮崎副隊長は、一九八三年の冬のエベレストでもルート工事中に落石を受け登頂をあきらめている。それだけに今回はという気持は強かったと思う。

マナスルへ

C2への下降中にマナスルのことが考えられ、その気持を打ちあけると、隊長も副隊長も少し考えた後に「エベレスト無酸素登頂した直後に、また冬のマナスルを考えられる、その気力があるならば、精神的にも、肉体的にも大丈夫だろう。マナスルは登ってみると励ましてくれた。実際自分でも気力は充実していた。またこの二人は過去数回のヒマラヤ登山を共にし、私のことを一番良く知っている。その二人からのゴーサインは、私に自信を与えた。」

マナスルには三年前の冬に挑み、登山の開始の初日にクレパスに落ちて右足首骨折で動けず、最後にはアタックメンバーが滑落、死亡するという事故で悲しい結果で終っている。

エベレスト隊の残った食糧を集めてマナスルのためのものとする。パートナーについてはこの時点では決めてなかった。エベレストの帰りのキャラバンに私と斉藤、それに村上の三名はアイランド・ピークに撮影に行くことになり、その時に斉藤を誘った。彼はエベレストではサウス・コルまで行きながら酸素器具の故障で登頂をあきらめていた。カメラマン助手としての行動で、登山に全てをかけられず、不完全燃焼の気持でいたらしい。全力をかけられる冬の八〇〇〇峰登山に、強く引かれたようだ。これでメンバーは決まった。二人で基本計画を練った。

アルパイン・スタイルにこだわる。

まずベースキャンプを出発して帰るまでの間、一切他の力を借りず、二人で登り、帰る。そして固定キャンプは設置しない。固定ロ

ープもつかわれない、残さない。順化のための行動もいっさいしない。もちろん酸素は使わない。

カトマンズへ帰ったのは十一月十五日になってしまふ。すぐに観光省へ出向き、登山料を支払う。食糧、装備の準備をする。といつても一日ですんでしまふ。しかし個人装備がトレッカーでゴツタがえすルクラに足止めされていてヤキモキする。十一月二十五日にシエルパ三名でキャラバンを出発させる。メンバーとリエゾン・オフィサーの三名はヘリコプターでサマに飛ぶことにする。

今回のようにBCにメンバーがまったく残らない登山になると、信頼できるシエルパを選ぶ必要がある。私は過去ネパールでの登山で毎回いっしょだったシエルパをサーダーとし、エベレストで良く働いた若い二名のシエルパをコックとメールランナーとして雇った。アルパインスタイルでの登山で、彼等に登攀技術を求めるつもりはなく、信頼でき、荷物の輸送等のマネージメントもできることを考えた。隊荷は五個、ヒマラヤの八〇〇〇¹峰で五名のポーターというのも最小のものだろう。

十二月二日、カトマンズを離れると、すぐに展望が開け、行く手にマナスル三山、そしてガネッシュヒマール、アンナプルナと望める。トリスリバザールの上を飛び、キャラバン・ルートのブリガンダキに入る。一時間足らずの飛行でサマに着く。村はずれのゴンパの炊事部屋を借り、シエルパの到着を待つ。マナスルの上空は風もなく快晴、最高の条件だが、荷物が着かない。十二月四日、荷物が着く。二日間、白湯とパンのみだったので、やっと食事らしい食事にありつく。

翌五日、四日分の食糧、燃料を持ちBCへ向う。サーダーとコックがいっしょで、リエゾン・オフィサーとメールランナーはサマに残す。一九八二年の時と同じ四八〇〇¹のマナスル氷河の端に、テント一張だけのBCができる。

六日、早朝安全登山折願の儀式を済ませ、三〜四日間の予定で出発する。

ここから、二人だけの登山の始まりだ。テント、食糧、燃料、すべての装備を背負うと一人二〇¹を越す。予想以上の積雪に、胸までのラッセルが続きナイケルまでとどかず、この日五三二〇¹に泊る。予定の行動がくるい、やや不安がよぎる。翌朝、まだ天候はもっている。しかし気温の高いのが気になる。ナイケル付近はウインドクラストして歩きやすいが、その先のセラック状の段を越すのに深いラッセルに苦労する。昼すぎより雲が広がり、いやな空模様になったが六一〇〇¹まで進んだ。

この夜、前夜同様二人ともよく眠れない。精神的な重圧を感じる。八日になると予感が的中し、空一面に雲が広がり、ノースコルより上部には強風が吹き荒れた。

出発をひかえ、数時間待機する。十一時頃には晴れ間も見えだしたので遅いが発発することにする。ありがたいことにラッセルはなくなり、クラストした雪壁になる。午後五時まで登高するが、テント地がみつからず、少し予定より低い、雪壁をカットしてテラスをつくり、腰かけるだけのスペースにテントを張った。六八五〇¹地点だった。上部のセラック帯からは、風が吹くたびに氷塊がたえず落下し、不安な一夜になる。腰かけただけの最悪のビヴァークに

なった。

九日、強風だったが、午前三時三十分、頂上アタックに出る。不安定な眠りで体の節々が痛い。八、三〇のロープ一本、テルモス一本が主な装備だ。行動食はポケットだ。高度をかせぐにつれ、風は強さを増し、寒さも厳しくなってきた。七二〇〇以上のプラトリーへぬける雪壁の入口で、指先の感覚がなくなり、鼻の頭は凍傷で黒ずんでしまう。これ以上の登高は無理と思われる。この地点からの撤退を決める。ビヴァーク地に戻り、テントを撤収してBCへ向う。またしても、敗北感に打ちのめされ惨めな気持ちになる。

冬の風が吹き出した中での登頂は、まず無理と考えられる。このままでは登頂は望めない。しかしこれまでに冬の八〇〇〇の峰に三度挑んだ経験では、一日ないし二日は風の弱まる日があった。十二月中旬だ。統計的なものではないし、あてにするのも危険だが、希望的に考え、もう一度トライすることに決める。期間は最長で四日間とし、それでダメならあきらめることにした。

ベースキャンプに戻ると当初の決定どおりシエルバはテントを撤収して帰るばかりになって待っていた。彼等にもう一度だけアタックすることを告げる。

十二月十一日、一日の休養だけでふたたび氷河に向う。この日六一〇〇に達した。先日は二日の行程だったところだ。十二日、雪に見まわれる。

アルパイン・スタイルでの登山では雪は大敵である。なぜなら帰路のルート確保が困難になること、ラッセルで体力の消耗が激しくなるからである。この日やむなく停滞とし、一日中せまいテントの

なかで明日の晴天を祈る。

翌十三日、風は強まったが雪はやんだ。七一〇〇まで登り、この日はクレバスの割れ目の中にテントを設営した。風は強いがテントに影響はない。夜中に外を見ると雲は東方に去り、マナスルは星空の下だ。すぐに朝食の準備にかかる。これが最後の食糧だ。午前三時三〇分、ヘッドランプの光をたよりに登り始める。風は弱まり昨日ほどではない、寒気だけが変わらず厳しい。

闇の登高は、多くの錯覚をもたらす。自分たちの他にもう一人誰か、第三者がいつしよに登っているという妙な感じがする。

これは過去、何人もの人達の報告にあったが、アルパイン・スタイルで登っているとこんなことが多くあるそうだ。歌を聞いたり、あげくのはてには話もした、という話も聞いた。それを自分自身体験してみると、自分がトップで登っているのはわかりきっているのに、どうしても前に人がいるように思えた。斉藤に聞くと、彼もまた、私と彼との間にもう一人だけか登っている感じがしたといっていた。

上部プラトリーに抜け出るところで夜明けになった。ここが日本山岳会初登頂の最終キャンプ地点だ。このプラトリーからは、アンナプルナやダウラギリが間近に望まれる。

広いプラトリーの横断は判断をくるわす。ルートは途中から頂上稜線に向うのだが少し行き過ぎてしまう。少し手前で左の雪壁に入らなければいけなかった。秋のエベレストで高度順化ができた体は好調で、七五〇〇を越えるプラトリーでもルートを見失うほどのスピードで歩行できた。平地並みであろう。

雪壁を登り始める頃より風も少しづつ強くなってきた、指先の感覚がなくなってきた。ピッケルを持ちかえ、手袋の中でしきりに動かすと、かすかに暖みがあるが、すぐにもとにもどってしまふ。こんな繰り返しを続けながら、ひたすら登る。

東峰から頂上に続く稜線に出て初めてロープを結ぶ。稜線の右側は南壁、左側が東壁へと切れ落ちていくナイフエッジだ。風が強烈になつてくる。アンザイレンのロープが弓なりに空に舞う。

小ピークを越え、五つ目のピークに達した。これより先にピークはなく、稜線は、P 29へ続き、鞍部へ向かって一気に切れ落ちていく。ここが頂上だった。午前十一時四十分。そしてこの頂が、夏のK 2、秋のエベレストからつながる私自身今年三座目の八〇〇〇メートルになった。

吹きすさぶ烈風にすぐに下降を始める。ふと足元に目をやると、濃紺の見なれた缶が目についた。ピースの缶であった。日本隊の登頂記念に違いなからうと、何の気なしにポケットに入れた。

後にこれを開けて見ると、これが三十年前の、一九五六年、日本山岳会初登頂のものと同かった。今日までに、七十名の登頂者のあったマナスルだが、三十年ぶりに登った冬期初登攀の我々が見つけたとは、何か因縁めいたものを感じる。

このピース缶は、いま日本山岳会に保管されている。

(編注、ピース缶については、本号口絵及び会報「山」四九〇号参照)



チヨール・オユー 一九八五

一九八四年秋、今遠征の隊長である金沢がネパールのロブジェ・ウエストに遠征した折、チヨール・オユー許可の可能性を見出し、仮申請をした時に今回の計画は始まる。その時点では、過去二回日本隊が挑戦していたが、日本人にとっては未踏の八〇〇〇峰であった。ヒマラヤに十四座ある八〇〇〇峰は、一九五六年のマナスル初登頂に始まり、一九七〇年にはエベレストの登頂、その後残っていた巨峰たちも、次々に日本人によって足跡が印されていた。そして一九八三年、富山岳連のパーティによってナンガ・バルバットが登られ、残るはチヨール・オユーのみとなっていた。帰国した金沢より許可がとれそうとのこと、二名でこの計画は進んでいった。まず派遣母体の問題。これは、カトマンズ・クラブという同人をつくり、これをあてた。香川県高松市に日本事務局を置き、岳連に加盟し、会則などを決め、十名ほどの会として一九八四年十一月発足した。並行して、メンバーも四名に決まっていた。正式の許可

三 谷 統 一 郎

申請を行ない、許可を待った。そして一九八五年春になって正式の許可がきた。これでやっと現実味を帯びた計画となり、準備にも熱が入るようになってきた。だが、ブレ・モンズンには山学同志会の強力なパーティがチヨール・オユーに挑む予定であり、我々に日本人最後の八〇〇〇峰が回ってくるとは思ってもみなかった。結果的には、山学同志会のパーティは事故のためチヨール・オユーは断念。そして、我々に日本人初登頂の可能性が巡ってきた。秋に我々が登ったとしても、チヨール・オユーとしては通算十三登目（カトマンズ在住のE・ホーリー女史によると十二登目）であり、いままらの感もある。が、まだ日本人が登っていないという点が、魅力であった。マナスルの初登頂から三十年。日本人の八〇〇〇峰の終止符を我々が打つ。

チヨール・オユー登頂への歴史は、一九五一年のシプトン卿の英国隊に始まる。同隊はエベレストの偵察の後ゴジュンバ氷河に入り、

のちナンパ・ラに立っている。一九五二年には、エベレストの訓練のため、ヒラリーとジョージ・ロウがナンパ・ラを越えたが、北面のアイスフォールに手間がかかりすぎると見て、六八五〇^{メートル}で引返している。そして一九五四年、オーストリアのヘルベルト・ティッヒー率いる登山隊によって初登頂された。これは、八〇〇〇^{メートル}峰初登頂の中で唯一のポスト・モンスーンの登頂であり、また無酸素で行なわれたものである。隊員も三名、そしてパサン・ダワ率いる十一名のシエルパと、当時としては少人数で、登山期間も三週間あまりと、短期間で行なわれている。

我々はいえ、お金もなく暇もない。そんな中で、出来るだけシンプルに、安全に、チョー・オユーに登る。これが隊員間での合意であった。ルートも、我々の許可は南西面であったが、南西面より取り付いて頂上にいたるには長過ぎることと、頂上直下の岩壁部に問題があった。そこで、ティッヒーの登ったナンパ・ラ經由、西北西稜が我々のパーティの実力では可能であったが、それには越境という問題があった。しかし、過去（一九八五年秋までに）九隊がネパール側よりナンパ・ラ經由で登っており、現場に行けば何とかなるだろうという気持ちで、ルートはナンパ・ラ經由の初登ルートに決まった。

隊の編成は、隊員四名、総予算四〇〇万円。一人一〇〇万円の個人負担。酸素は使用しない。別送はしない。シエルパは出来る限り少なくする。期間は八月下旬より十一月上旬の約七十日ぐらい。キヤラバン往路十五日、ベースキャンプ以上約三十日、復路五日、十三日ぐらいという予定であった。実際に雇用したスタッフは、サー

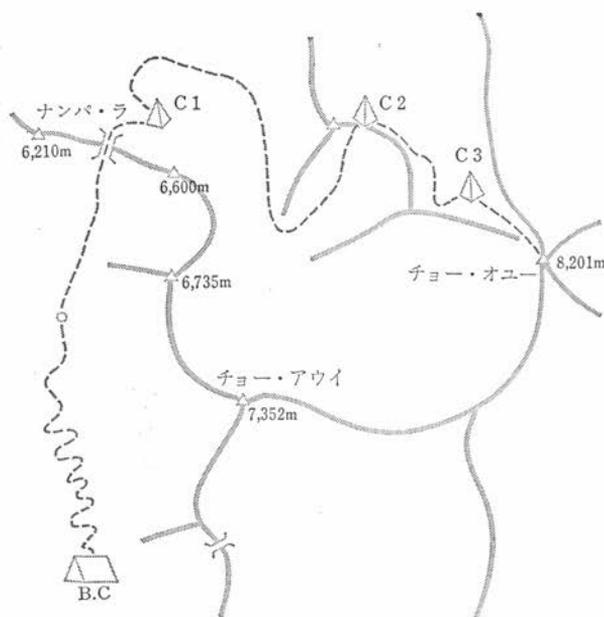
ダー、コック、キッチンボーイ、メールランナー各一名。ベースキャンプワーカー二名の以上六名であった。そしてナンパ・ラ越えのために、三名のターメのポーターを臨時雇用了。

アプローチ

九月六日、ジリより四十一名のポーターでキヤラバンを開始する。賃金の交渉は政府の規則通りとはいかず、四五^{パーセント}で妥結。隊員四名の運動不足解消とシニイプアップが始まる。しかし、毎日、宿泊地を出て、一時間もしないうちにバツティ（茶屋）に入り、ミルクティを数杯飲み、途中買いいし、夜はロッジでまた食べる。こんな健康的な生活は、日本ではもうできない。

九月十四日、九日間のキヤラバンでナムチェ・パザールに到着。五年前からでも、町はどんどん変わっている。ロッジが増え、物も多くなった感じがする。夜は、数時間だが発電器でおこした電気が使用できる。一日ナムチェ・パザールで休養、ここでポーターチェンジの手配をする。ここナムチェ・パザール（三四四〇^{メートル}）より五日間のキヤラバンで、ベースキャンプ予定地のジョサンパ（五二〇〇^{メートル}）である。ポテ・コシ沿いの道を行く。上流の氷河湖の決壊でターメから下流の道もかなり荒れている。我々もナムチェ・パザールより上は、ヤク、ゾッキョを使用する予定だったが、道が悪いため、ターメより上で使用することとなった。毎日平均三〇〇^{メートル}ずつ高度を上げて行く。隊員は各自の体調に合わせて、キャンプサイト周辺の斜面を使い、高度順化をして行く。

ベースキャンプ到着。九月二十日、ナンパ氷河のサイドモレーンの平坦地にベースキャンプを建設した。我々はもつと上流までヤク



による荷上げをしたかったが、ナンバ・ラまではルートが悪いことと、シーズンが早過ぎることもあって出来なかった。これからは我が力だけで何とかしなければならぬ。

登攀開始。一日を隊荷の整理とベースキャンプ開きを使い、九月二十二日、頂上へ向けての行動を開始する。ナンバ氷河上、デポ・キャンプを作り、ターメのポーター三名によって、ナンバ・ラを越

え、三日間で五六五〇呎のキャブラク氷河上に荷上げをした。ここはティッヒールがベースキャンプを置いたのと同じところと思われた。我々はここを第一キャンプとして、本格的な登山を開始。九月二十五日、隊員四名は第一キャンプに入った。モレーンの上にテントを張る。チョー・オユーはまだ遠い山のような。頂上直下は、多量の降雪があった時には雪崩の巣となりそうだ。

二十六日、西北西稜に取り付くべく、一度氷河に沿って下り、氷河を横断して上部へ。かなり長い氷河のサイドモレーンを歩き、尾根の取付きへ。ガラガラの急な斜面を登り、六〇〇〇呎を越えてやと雪の斜面を登り、途中、赤旗を設置してケルンを積んでくる。

翌日、六四四六呎まで到着すべく、第一キャンプを出発する。五時間ほどで、第二キャンプ予定地の六四四六呎の雪のピークの肩、六四〇〇呎とし荷物をデポする。ここからは雪の尾根が六八〇〇呎付近まできれいに続いている。しかし、そこから先は、尾根は斜面に消え、顕著な尾根はなくなってしまう。

二十八日には、金沢とシエルバ二名で第二キャンプへ荷上げをする。十一時間ほどで往復してくる。これで第二キャンプより上への荷物がほとんど上がった。二十九日に第二キャンプに、三谷、中西、北村の三名が入る。テントを建て、午後上部の雪稜にロープ一本を固定する。

九月三十日、約六八五〇呎よりの急な雪壁にロープを三本固定する。雪の下には氷の層があり、アイスビルディングを避け、左斜上してプラトリーに抜けた。そして、七〇〇〇呎付近まで到達し、第二キャンプへ引き返す。夜、第一キャンプの金沢と交信。当初の予定

では、第三キャンプ（七二〇〇呎）を建設し、そこより一度頂上へ向けて少し登り、第一キャンプに下降。休養の後アタックのつもりであった。が、天候も安定しているし、三名の体調も良好なので、一度頂上をトライしてみようということになった。体調が悪く、あまりに時間がかかるようなら、アタックを中止し、順化行動とする旨、打ち合わせた。

十月一日は、第二キャンプでの休養にあてられた。午後少し降雪があったが、たいした量ではなかった。九月二十六日より好天が続いている。

十月二日、四日分の食料、テントを持って、第二キャンプを出発。西面の尾根の形状が消え、プラトニーを形成している。また上部は、西面の二つのカールが合わさり、側稜状になっている。その尾根上のアイスビルディングの下に、第三キャンプ（七二〇〇呎）を建設する。雪崩には、安全だろう。

アタック

十月三日、ベースキャンプより登り始めて十二日目。前夜は熟睡できなかった。一前に起き出し、出発の準備をする。二時五〇分、ヘッドランプを着け出発。一〇〇〇呎の標高を稼ぎ、降りてこなければならぬ。風もなく、天気も良い。西面のカールをひたすら直下、交代でトップに行く。途中雪面がウインドクラストしていて、体力を消耗する。途中、側稜を越え、斜上気味に登る。七五〇〇呎付近のロックバンドの切れ目を登り、右斜上気味に頂上を目指す。ロックバンドを過ぎた頃より、ベースは落ちてくる。ラッセルに体力を消耗、ラッセルを交代する間隔が短くなってくる。傾斜の

急になった斜面を南西方面に回り込むようにひたすら登る。

十時すぎ、ザックを降ろし休憩。行動食を食べ、第一キャンプの金沢と交信。我々の現在位置は八〇〇〇呎付近で、ルートも正しいと確認する。頂上まで二〇〇呎、だが刻々と時間は過ぎて行く。急な雪の斜面を登って行くと、左前方に雪のドームが……。そこを指して登って行く。

しかし、この雪のドームより、海原のように広い雪原の方が高いようだ。地図上でも、頂上の雪原の南端が最高点のようだ。南東へ向けてクラストした雪面を踏み抜き歩き続けると、突然エベレスト、ローツェが見えた。十三時五十分、もうそこより先には高いところはない。しばらくして、中西、北村も到着。頂上でクープの山々のパノラマを楽しみ、エベレストをバックに国旗を出して記念撮影をする。

五十分ほど頂上で過ごし下降。だが歩き出して、すぐビバークを覚悟する。あまりにもベースが遅過ぎる。八〇〇〇呎まで下り、ツェルトを被り、一夜を明かす。天気は何とかもっている。十月四日、七時過ぎ行動を開始する。三人でアンザイレンして下りる。ロックバンドの降り口を見つけるのに苦労するが、あとは単調な雪の斜面の下りである。しかしビバークの影響か、体力消耗のためか、遅々として下降はかどらず、十六時三十分、やっと第三キャンプに戻る。前日から三十八時間四十分にあぶ、長いアタックを終えた。

撤収

十月五日、第三キャンプを撤収し、第二キャンプ、第一キャンプ

と毎日撤収して、十月七日夕刻、全員ベースキャンプに戻って、一応登山を終えた。それから、サイクロンのための降雪により、ヤクもポーターも上がってこず、七日目にやっとベースキャンプにヤクが来て、ルクラへ向けて下降を開始。ルクラでも悪天のためフライト待ちの状態で、十月二十五日、やっと隊員、隊荷ともカトマンズに集結し、登山を終えた。

成 果

日本人にとつて最後の、未踏の八〇〇〇呎峰に登れたこと。ベースキャンプから十二日間で登頂できたこと。しかし、我々には少し早過ぎた感じである。その結果アタックの帰路ビバークとなり、隊員二名は足に凍傷を負った。反面、十月六日から二十日にかけての三つのサイクロンの来襲の前に、登山を終えることができたのは幸運だった。我々には、十月下旬まで待つ時間がなかったのだから、今回もう少しゆっくり登っていれば、ビバークはなかったであろうが、登頂のチャンスは巡ってこなかったと思われる。

今回のチヨール・オユール登山は、技術的にはやさしかったが、四人の隊員で二カ月の休暇を使い、四〇〇万円弱の費用で終えたことは上出来であった。我々は、ルート上に二〇〇呎のロープを残してきた。各パーティが、酸素ボンベ、フィックスロープ等の使用の有無にかかわらず、各自の責任において回収すれば、どんなスタイルで登ってもいいように思う。これから八〇〇〇呎峰登山がポピュラーになるにつけ、ルート上の残置物がふえてくる。できるだけ、初登頂時に近い状態を残したいものである。以前のパーティのフィックスロープ等を使う登山は、あまりにも創造性に欠けるような気がす

る。

△記録概要▽

隊の名称 カトマンズクラブ チヨール・オユール登山隊一九八五
活動期間 一九八五年八月～十月

目 的 チヨール・オユール(八二〇一呎)の登頂

隊の編成 隊長Ⅱ金沢 健(39)、登攀隊長Ⅱ三谷統一郎(29)、隊員

Ⅱ中西紀夫(27)、北村 貢(27)

行動概要

九月五日キャラバン開始、九月二十日ベース・キャンプ(五二〇〇呎)設営。二十五日第一キャンプ(五六五〇呎)設営。二十九日第二キャンプ(六四〇〇呎)設営。

十月二日第三キャンプ(七二〇〇呎)設営。三日チヨール・オユール(八二〇一呎)登頂。七日ベース・キャンプに下る。十四日ベース・キャンプ撤収。十六日ルクラ到着。

記録発表

カトマンズクラブ通信No.六、No.七。

各拉丹東雪山初登頂と長江正源流踏査

計画

青蔵高原登山研究会は、ユーラシア大陸の内陸部につよいあこがれとロマンを求める者の集まりであり、高所登攀そのものを目的とする者もいるが、それよりもむしろ未知を求めて探り歩くことに情熱をもっている者が多い。会員には、ヒマラヤ、南極などの海外遠征経験者も多く、次の目標を中国奥地に定めて研究会を組織したものである。

私たちのグループは、他の地域の海外遠征を重ねてきたとはいえ、心は常に中央アジア志向であった。天山、崑崙、四川、ヒマラヤなどの山がいくつか開放されるにしたいが、私たちも行動をおこしたのである。

- (1) 目標をしぼるにあたって次のことを考慮した。
- (2) 未登峰であること。
- (3) 未踏査域であること。

松 本 征 夫
倉 智 清 司

- (3) できるだけ広いキャラバンが可能で、あらゆるものが広く見られること。

これらのことから主目標を青蔵（チベット）高原中央部——いかなれば最奥部の未登峰各拉丹東雪山におき、あわせて姜根迪如雪山、尕恰迪如崗雪山を含めることよって、長江正源流の踏査を考えた。さらに、青蔵高原中央部に位置することから、ツアイダム盆地——拉薩間のキャラバンという欲ばった計画である。

この唐古拉山脈は、ボンパロ（一八八九〜九〇年）のチベット縦断によれば、「フランスで最も美しい名の一つをつけてデュブレク山脈と呼ぶことにする。我々のテントの近くに聳える氷のピークは少なくとも八〇〇呎はある」とされていた。また、チベット高原を縦断して拉薩入りを志した過去の探検家も、しばしば那曲か納木錯あたりで拉薩入りを拒まれ転進せざるを得なかった。青蔵高原を縦断した日本人は、わずかに寺本婉雅（一九〇五年）、西川一三



(一九四五年)、木村肥佐生(一九四四、四五年)の三氏があり、ツアイダムから拉薩入りを果たしている。また沱沱河の那欽曲が長江の正源流であるとされたのも、つい最近の一九七六年の中国探検隊によってである。このような地域だけに、唐古拉山脈の主峰群や付近の山岳についての登山は、かつて一度も試みられていない。そのため、文献も写真も少なく、それだけに私たちの目標になったわけである。

早速この計画に沿って、一九八二年以降毎年のように中国登山協会宛の申請書を提出し続け、同時に一九八二、八三年、会員が訪中し、許可取得の交渉をもった。一方、松本は一九八三、八四年四川省・雲南省の横断山脈西南部を中国科学院地質研究所と共同考察を行ったが、その往復の途上、北京で登山許可についてお願いしたのはもちろんである。

一九八四年、松本が訪中した際に、史占春、許競両副首席より、口頭で許可内諾を聞き、正式に十二月末、公文書による許可をいただいた。

許可取得以後、主催団体については、種々の状況から青藏高原登山研究会、京都大学探検部合同で実施することにした。

アプローチ

七月十九日大阪空港を出発し北京に入り、蘭州経由で、二十二日西寧で先発隊と合流する。二十五日中国側二十一名(連絡官二、通訳二、中国科学院地質研究所三、コック三、運転手十一)と日本側二十名全員は、サファリ十台と青海省登山協会のトラック一台に分乗し、西寧を出発しキャラバンが始まる。日月峠を越して、青海湖

の南岸から茶卡チャカを通って都蘭に泊まる。二十六日ツァイダム盆地に入り格爾木ゴールムに着く。二十八日から二泊三日の日程で、崑崙山口付近で高所順応を行なう。高度順化の日程は、もう少し日をとる予定であったが、沱沱河沿トトカでのチベット民族の祭に招待された関係もあって早目に切り上げた。また当初は、カカサイジモンカ峰カカサイジモンカ（六一三八メートル）付近での高所トレーニングの内諾を得ていたのであるが、JAC学生登山隊との関係で、これは断念した。この間四五二〇メートルにベースをおき、各自五〇〇メートル前後までの登降をすませ、三十日格爾木にもどる。

八月一日格爾木を発ち、崑崙山口、不凍泉、五道梁と青蔵高原を走り沱沱河沿トトカ（唐古拉ともいい高度四五三三メートル）に着く。その間、野生動物のチベットガゼル、チルーなどに会う。ここでは、次の偵察、祭の見学、これまでのトラックと青海省地質大隊のウインチ付き六輪駆動トラックとの交代などで、三日間滞在する。ここから新たに案内人として地質大隊の楊氏が加わる。

五日ここを出発し、雁石坪ヤンシツツを経由し、一〇〇道班から青蔵公路を離れ、西側の山道に入る。途中サファリが二台湿地にはまりこんで動けなくなり、ウインチで引き上げる。一つの峠を越して姜梗曲ヤンケンクワクの河畔に出ると、各拉丹東ガクランの意の「高く尖った山」の容姿が初めて見えてくる。姜梗河の渡渉で、二台の車がつかって立往生するが、かろうじて引き上げ、近くでキャンプする。翌六日、数カ所の小川を渡渉し、尕日曲河畔ガジクニョ（五二八〇メートル）にBCを建設する。BC付近は、ブルーパービー、エーデルヴァイスなどの高山植物のお花畑で、ナキウサギもたくさん見かける。

日本にいるとき、中国氷川、長江（江流編）、人民中国などからの図上作戦で、尕日曲上流の氷河ルートを考えていた。二日間の偵察の結果、予定ルートどおりとし、C1の位置も定まった。さらにC1からのルートとして、一見やさしく見えるがアプローチの長くなる北西稜と、その逆の厳しい東稜について激論の末、隊長決定として北西稜をとることにする。

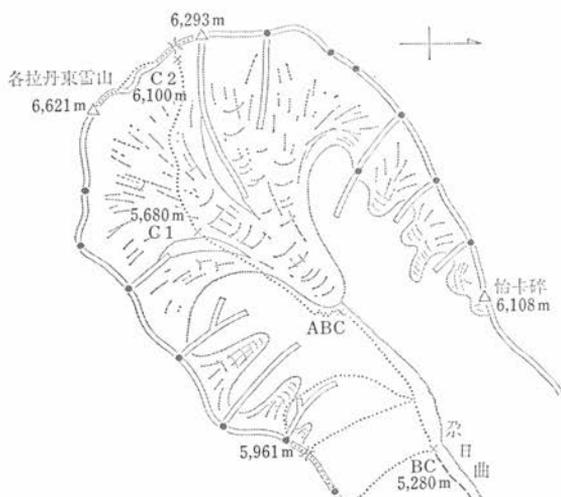
登山開始

八月九日、BCより約五キロ上流の氷河（各拉丹東氷河と仮称する）末端部にABCを仮設し、登山活動に必要な装備・食糧をデポする。十一日、氷河の右岸サイドモレインを忠実にたどり、途中から氷河に入って、東稜直下の氷河右岸よりのモレイン混じりのところにC1（五六八〇メートル）を建設する。十二日、倉智ら三名は、氷河上流部のクレバスの多い氷原部分を、東から西にトラバースぎみにルートをのぼし、C2点を定める。この位置は各拉丹東雪山と、その北西稜にある無名峰（六二九三メートル）との間のコル直下で六一〇〇メートルである。十三日C2を建設する。十四日はC2から上部のルート工作は悪天候のため中止するが、この日を含めてそれまでの荷上げとともに、夕刻おそくにはC2十名、C1七名（報道を含む）、他はすべてBCに配置される。

アタック

八月十五日、川下、倉智、下田、小林の四名は、ガスが薄くなった九時半、C2からアタックに向かう。コルに出たあとの北西稜は、クラストした雪面にアイゼンのツァッケがよくきく。北西稜は頂上に向かって、左手はおそろしく雪庇が張り出し、その直下はス

各拉丹東雪山～各拉丹東水河概念図(松本,1985)…登路



各拉丹東雪山～各拉丹東水河概念図(松本,1985)…登路

トンと切れ落ちて各拉丹東水河となっており、右手は別の氷河に急斜面で落ちこんでいる。雪底を避け、ルートは右手斜面にとるが、高度感がいちじるしい。

高度六一七〇mよりフィックス・ロープを張る。一本一〇〇mに調整したロープを順調に延ばしていく。途中ニカ所のコブ(岩稜)を越し、三つ目のコブ(北西稜の核心部で平均傾斜四五度)を乗り越した地点がフィックス終了点で、高さ六五二〇mである。この間フィックス延距離五八〇m、高度差三七〇mであった。

実は第三のコブに向かったのフィックス工作中から、天気は下り坂となり、このコブを乗り越し、頂上に続く雪田へ到達した時には完全に吹雪になってしまった。第三コブ付近とC1の間だけは見通しができ、C1から一瞬アタック隊員の姿が見えたが、あとは視界は完全に閉ざされてしまう。一方、C2の高尾ら六名は、アタック隊を見守るべく、ユルから反対の六二九三mに初登頂するとともに、情報を他のキャンプに伝すが、これも天候悪化によって視界は閉ざされてしまう。

アタック隊は、視界がきかなくなったが、高さから「頂上近し」の確信のもとに、二時間ほどガスの晴れるのを待つ。しかし完全なホワイトアウトのため、翌日の好天を期待し、定時交信をもとに、第三のコブのすぐ近くの急斜面に雪洞を掘りビヅァークする。

十六日、ふたたび雪田まで登り待機するが、天候は回復せず前日と同様ホワイトアウトのままである。十二時、C1からの撤退命令により下山を始める。前夜からの降雪で、フィックスを掘りおこしつつ慎重に下降する。C2からは高尾ら二名がサポートに向かい、第二コブ直下で合流し、十七時半にC2にもどる。

十七日は絶好の登攀日和であったが、休養日となる。十八日、朝から降雪があり九時に沈澱を定める。前日C2入りした黒木と報道二名は六二九三m峰に第二登する。

十九日、前日の悪天候はおさまり、C1、C2からも望まれる頂上はモルゲンルートに染まっている。アタック隊高尾、川下、倉智、下田、小林、広瀬六名は、七時二十分C2を出発する。連日の降雪でフィックスは一〇〇m埋まっており、これを掘りおこし

ながらの登高となる。第三のコブの雪壁では、手間と時間を考え、再度フィックスを張り直す。十三時三十分頂上に向かう雪田に到着する。一次アタックの時にくらべると、まったく嘘のように眼前に頂上が迫っている。

ここから約一〇〇呎の高度差で、雪田が頂上に向かって続いている。六名は一步一步頂上に近づく。はやる気持とは逆にかんりの時間を要し、ついに十五時六分、各拉丹東雪山六六二一呎に初登頂する。

頂上の北側は、一気に各拉丹東氷河に切れ落ち、またがらなければならぬほど狭くて危ない頂上である。記念撮影、8ミリビデオ、パノラマ写真などを撮影する。頂上から、C2、C1も望まれ、長江正源流とされるカナバサミ南氷河から、さらに姜根迪如から不恰迪如の未登峰雪山群が望まれる。

頂上をあとにして、十九時四十分、全員無事にC2にもどる。

キャンプ撤収

初登頂に成功した翌二十日、総力をあげてキャンプの撤収にかかると。ABCにすべての荷を撤収するとともに、BCに二十一時過ぎ全員集結する。二十一日、ABCの荷をすべてBCに撤収する。

長江正源流踏査

各拉丹東雪山登頂後、すぐに次の目標である長江正源流に出発する予定であったが、悪天候のため四日間停滞し、ようやく八月二十六日BCをあとにする。コースは、北方に雀莫山を見ながら、各拉丹東山群の北側をまわりこんで沱沱河に向かうわけである。この年は例年にくらべて天候がとくに悪く、また、高原の冬はかけ足でやっ

てくる。そのため、高層湿原帯はもちろん、三稜石があつて一見乾燥した砂礫地帯でも、ものすごく水分を含んでおり、しばしば車が泥沼に入りこんで立往生する。もぐりこむ車は、延にして一日十回以上にもなり、走行距離もはかどらず、平均一日二〇キロほどである。それでも四日目に沱沱河に越す一ヶ月前の沢の畔を、源流踏査のための第二BCとする。悪天候と悪路のため、すっかり日程がつかまってしまい、次の目標の登山は中止し、源流踏査のみの予定に変える。

かくして三十日、サファリ三台とトラックで第二BCを発ち、午後沱沱河畔につく。さすがに長江は源流でも大きく、大きな川幅のなかで幾条にもなつて流れている。河川敷も広い草原で、その意味の地名としてここを那欽曲と呼んでいる。途中で二台のサファリは第二BCに戻り、踏査隊（日本側十八名、中国側五名、運転手二名）は源流に向かう。ところどころにチベット族の遊牧の包が見られ、家畜のヤクや羊が群れている。野生ロバはごく稀に、チルーにはしばしば出会う。

翌三十一日、民族班は包を訪ね、源流班は午後おそく、正源流のカナバサミ南氷河の末端にたどりつく。高度五四六〇呎の源流付近でも遊牧の包があり、ヤクと羊が群れている。九月一日は、源流付近と、カナバサミ北氷河、同南氷河とともに踏査する。夕刻、遊牧民が私たちのテントに遊びにくる。このあたりでも、ラマ教の信仰があつく、ラマ肖像や数珠を胸に下げている。

二日源流をあとにして民族班とおちあい、途中一泊して奔錯湖につく。この奔錯は、地質的な構造線による泉があつて、一年中凍

らないため魚が多いという。その魚は期待していたサケ科ではなく、鯉科裂腹魚の一種で、大きいものは四十センチを越していた。野生のネギも多く、大変美味である。付近の観察をすませて、六日雪降るなかを第二BCに帰りつく。

帰路

九月七日、八日と二班に分かれてキャンプを引き上げ、思ったより早く八日、九日に雁石坪につく。ここで日共同地質調査と、荷整理のため数日滞在する。十三日、雁石坪を発ち、唐古拉山口を越え、那曲で二泊する。十五日、羊八井の地熱発電所を見学したあと、午後四時、無事拉薩に到着し、青蔵高原の縦断もここで終わる。

△記録概要▽

隊の名称 唐古拉山脈学術登山隊一九八五

主催団体 青蔵高原登山研究会・京都大学探検部合同

活動期間 一九八五年七月～九月

目的 (イ) 唐古拉山脈各拉丹東雪山(六六二一メートル)、姜根迪如雪山(六五四八メートル)、ガグテディン山(六五一一三メートル)三

山の初登頂

(ロ) 長江(楊子江) 正源流地域の踏査(地質学的共同研究、動植物観察、遊牧民との交友)

隊の編成

隊長 松本徒夫(56)、副隊長 西田民雄(42)、同 松原正毅(43)、隊員 倉智清司(35)、高尾 薫(38)、川下 肇(32)、坂本 勉(28)、黒木一男(37)、下田泰義(34)、田淵卓弥(27)、松本佳久(26)、小林正寛(23)、廣瀬 顕

行動概要

(22)、陶山昭子(43)、報道隊員 宮前周司(32)、鈴木幸夫(30)、藤巻 弘(47)、浦上 敏(36)、松原英夫(27)、正連絡官 刈 広達、副連絡官 李 軍

七月十五日と十九日に日本出発。七月二十五日西寧発。

七月二十八～三十日崑崙山口付近にて高所順応トレーニング。八月一日格爾木発。八月六日ベース・キャンプ

(五二八〇メートル) 設営。八月十一日C1(五六八〇メートル) 設営。八月十三日C2(六一〇〇メートル) 設営。八月十五日四名北西稜ルート工作六五一〇メートルで雪洞ビバーク。他の六

名六二九三メートル峰に初登頂。八月十九日高尾、川下、倉

智、下田、小林、広瀬が各拉丹東雪山に初登頂。八月二

十六～九月六日長江正源流踏査。九月十五日拉薩着

報告書 唐古拉山脈学術登山隊編 仮題「唐古拉山脈各拉丹東雪山報告書」一九八六年発行予定

青蔵高原登山研究会会報「青蔵」第三号「各拉丹東雪山登山・長江源流踏査特集号」一九八六年発行予定。

註 最近の地図では、各拉丹東、杂日曲となっているが、以前の地図では、各拉丹冬、杂尔曲としてある。例えば「青蔵高原地図三百万分の一、一九七九、地図出版社」では各拉丹冬としてある。原地の発音に対して漢字を当てるので、しばしばこのようなことがある。ここでは中日唐古拉山科学考察ルート図による地名を使用した。

註

最近の地図では、各拉丹東、杂日曲となっているが、以前の地図では、各拉丹冬、杂尔曲としてある。例えば「青蔵高原地図三百万分の一、一九七九、地図出版社」では各拉丹冬としてある。原地の発音に対して漢字を当てるので、しばしばこのようなことがある。ここでは中日唐古拉山科学考察ルート図による地名を使用した。

ブータン・ヒマラヤナムシラ峰の初登頂

吉 永 英 明

計画の始まり

千葉大学ヒマラヤ委員会が派遣したヒマラヤ遠征隊は、一九六三年の東ネパール、ヌンブール峰以来、今回のブータン・ヒマラヤ、ナムシラ峰で六回目を数えるが、ネパールの登山禁止期間中の一期アフガニスタンに遠征した以外、一貫して東部、湿潤ヒマラヤにその焦点を絞り、登山と学術調査の両方を行ってきた。これは長く委員長の席にあった沼田真名譽教授の指導によるもので、生物の分布、生態が日本と関係の深い点に着目し、長期的、継続的に遠征隊を派遣し、筋の通った学術的成果を期待したものである。したがって東ネパールに遠征した当初から、将来はシッキム、ブータン、アッサムと東へ広がってゆくことが予定され、また必然でもあった。一九八三年、ブータン・ヒマラヤの登山が解禁になり、その情報が入らずに届き始めていた頃、ブータン観光公社の責任者が来日しているというニュースを聞き、早速接触をもったのが今回のブータ

ン遠征の始まりであった。続いて一九八四年には四名がブータンを訪問し、登山と学術調査に対するブータン側の方針等をうかがってきた。

ナムシラ峰は、一九八四年八月、東京都北部勤労者山岳連盟隊が初登頂したとして報道された山であるが、その写真を見た時、私達が考えていたナムシラ峰とは異なる山であることがわかった。もともと、インド製の地図、吉沢一郎氏、諏訪多栄蔵氏作成の地図では、ブータン中北部、ガンケル・ブンズム峰（ブータン最高峰、七五四一メートル）の南西方の位置に「ナムシラ」と記載してあり、また、スイスの地質学者ガンサーの報告書にも無名峰としてその美しい山容が写されていたが、正確な位置は不明であった。幸い、東京都北部山岳連盟隊の報告書とランドサットの写真から大体の位置が判明してきたため、ガンサーの写真を添付して登山許可を申請した。

往路キャラバン

一九八五年九月二日、カルカッタでの通関業務を行うため先発隊二名が出発、続いて十一日、本隊が出発し、カルカッタで合流した。ダムダム空港のストで一日延ばされた後、十三日、ドゥルック航空のドルニエ機二機で隊荷とともに、パロ空港を経由して首都ティンブーに入った。

観光公社担当官との日程調整等を行い、九月十六日、マイクロバスでティンブーを出発、途中、トンサに一泊し、翌十七日、キャラバン出発地のジャツカル（二六三〇^{ft}）に着いた。トンサ、ジャツカルとも快適なゲスト・ハウスが準備されていた。

九月十九日、三十一頭の馬でキャラバン開始、歩き始めて二時間もするとぬかるみとなってきた。馬方と私達のガイドの大半は長靴を使っていたが、スニーカー着用組はまったくの役立たず、連日の雨も加わり、難渋の道りであった。キャラバン三日目、ジュレ・ラ（四六八〇^{ft}）、コクタン・ラ（四三五〇^{ft}）を越え、デュル・ツァチュー着。

ツァチューとは温泉のことで、近郷近在からの大勢の湯治客が滞在していた。二〇〇〇^{ft}の台のキャラバン出発地から一気に五〇〇〇^{ft}に近くまで駆け上る行程の長いキャラバンに少々疲れていた私達にはちょうどよい所であった。ところが、交代用のヤクの到着が遅れ、ここで四日間の滞在を余儀なくされた。制度的には観光公社からの事前の連絡で周辺の村からヤクが徴発されてくることになっているのだが、無線による連絡がうまくいかず、相当遠隔の村からくるため、なかなかうまくいかないようである。

九月二十五日、三十一頭のヤクでようやく出発、ネフ・ラ（四五

六〇^{ft}）を越えてガンケル・ブンズム南面より流れ出るマンデ・チューに出、二十九日ジェジュエウオーマ（四九一〇^{ft}）着。

当初、ナムシラ峰の南面から登頂する計画であったため、ランドサットの写真で確認していた南面に出る谷を見つるべく天候の安定している早朝を選んで偵察を続けてきたが、地形が複雑で、ナムシラ峰はおろか雪山さえ見えない状況が続いていた。ゴフ・ラ（五三〇〇^{ft}）真近のジェジュエウオーマで一日滞在し、マンデ・チュー右岸とゴフ・ラ方面の偵察を行ったところ、ゴフ・ラからの偵察の結果、初めてナムシラ峰を眼前にすることができ、東側を捲いて北面より南面に出られそうであるとの見通しがついたため、ゴフ・ラ經由で北面に転進することにし、十月一日、ゴフ・ラを越えてナムシラ北面のツォリム湖畔五一八〇^{ft}にベース・キャンプを建設した。ツォリム（細長い湖の意）対岸にヒマラヤひだにおおわれたナムシラ峰北面を望むテント・サイトは眺望満点であった。

登山活動

ナムシラ峰は、東峰と西峰からなる双耳峰で、西峰がやや高い。まず、北面より東峰の裾を捲いて南面に出、東峰を登頂した後西峰をねらうことにして十月三日より登山活動を開始した。

十月四日、東峰北東面のナムシラ北水河上五四三〇^{ft}にC1建設、十月七日に東峰を捲き、東峰南面基部のナムシラ南水河上五六三〇^{ft}にC2を建設した。ツォリム対岸から北水河取りきまではガラガラ岩稜上のルートで怪我が懸念されたが、水河上はクレバスがところどころあったものの傾斜もゆるく、困難さはなかった。

十月八日、C2より三名が東峰に第一次登頂、高度計は五八一五

窟を指していた（その後、十月九日五名が第二次登頂、十月十一日一名が第三次登頂を行い、ガイドを含め全員が登頂した。また、その間、C2南方のホワイト・ピーク五五六八〇窟に三名が登頂した）。

十月十日、ゆるやかに広がる南氷河をいったん下り、西峰直下の五四八〇窟にC3を建設。西峰の南面は、ヒマラヤひだにおおわれた北面と異なり、もろい急峻な岩稜からなり、積木のようにもろい岩が積み重なっている。初めは中央部の急峻なルンゼをつめ、頂稜をたどればと考えていたが、いざ頂稜に出てみると雪庇とシルンドに行手をばまれ敗退。十月十二日、ルンゼ中段より頂上に直接つき上げている岩稜にルートを選び、十二時三十五分、二名の隊員が登頂、高度計は六〇〇〇窟丁度を指していた。フィックス・ロープは三〇〇窟を要した。

周辺の踏査

ナムシラ峰の登頂が予定より早く終了したため、十月十四日から三日間、四パーティに分れ周辺の踏査に出発。

第一パーティ（二名）

ナムシラ峰南面の踏査（C3よりナムシラ南氷河を下降し、マンデ・チューに至る谷の地形、マンデ・チューとの合流点を確認、放牧している形跡はなかった）

第二パーティ（二名）

ゴフ・チュー源頭部の踏査（ゴフ・チュー左岸の五〇〇〇窟クラスのG1とG5峰の登頂を狙ったが、取付き点が発見できず敗退）

第三パーティ（二名）

マンデ・チュー源頭部の踏査（マンデ・チュー右岸のM2峰五六四〇窟に登頂）

第四パーティ（二名）

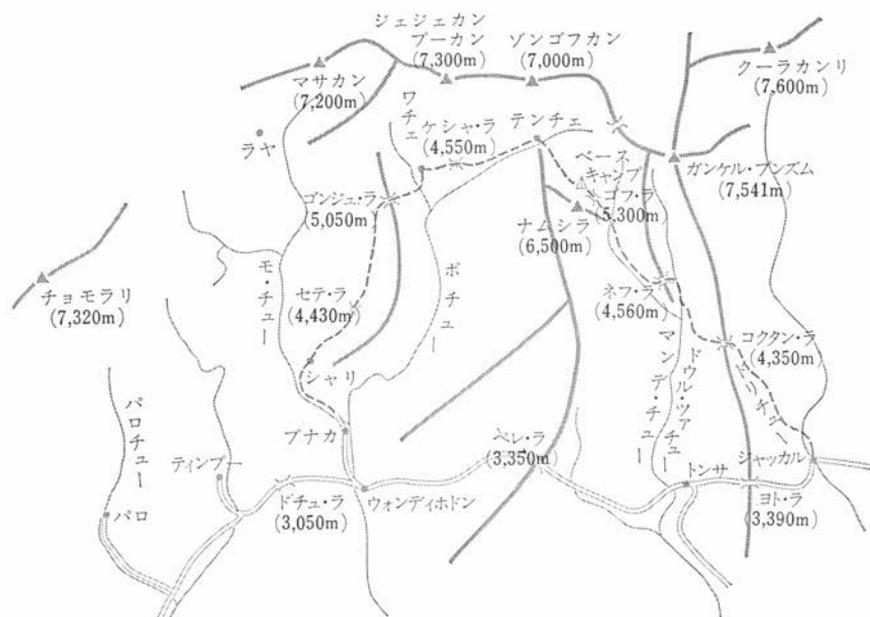
ベース・キャンプ北方の踏査（ツォリムカン五七二〇窟、グラス・ピーク五七〇〇窟に登頂、ツォリムカンの頂上には一九八四年八月の東京都北部勤労者山岳連盟隊の旗が残されていた）

十月十六日、踏査を終え全員がベース・キャンプに帰着。幸いにして好天に恵まれ順調に計画を消化してきたが、十六日から三日間、サイクロンの影響で大雪になってしまった。そのため、下から上ってくる予定の撤収用のヤク、ポーターが来られなくなり、雪が落着く二十一日まで何もしないままベース・キャンプ滞在を余儀なくされた。降雪後のナムシラ峰は美しく光っていたが、寒気が異常に厳しくなり、ラッセルと荷の整理に明け暮れる日々は苛立つ毎日であった。

帰路キャラバン

十月二十二日、東ポ・チュー沿いの村、テンチュ、タンザからヤク二頭、ポーター十七名が上ってきたが、数が足らず、荷を残して撤収、腰までもぐる雪の中、ゴフ・チュー沿いにテンチュに下る。当初、帰路はブータン・ヒマラヤ沿いのルナナ地方を横断しつつ、ラヤを経由してパロに至るルートを予定していたが、ルナナ住人が非協力的で、連日の村長との交渉にもかかわらず十分なヤク、ポーターが集まらなかった。ガイドが頭をかかえて奔走しても、一日進んでは二日休みという状況が続き、さらに、食料も大雪のため補給がなく、また、厳しい自然環境下の自給自足経済のもとの調達も

ブータン・ナムシラ峰



ナムシラ峰周辺概念図



できず不足したままであった。ベース・キャンプからワチエ部落まで、予定では三日行程のところ九日間も要する有様であった。人口が少なく、貨幣経済が十分に機能していない社会経済構造に帰因するものであろう。

仕方なく、ガイドも知らないというルナナ地方からプナカに直接出られるゴンジュ・ラ（五〇五〇呎）越えのルートを選び、十月三十一日ワチエを出発。峠手前で三日間のヤク道作りに専念したものの、結局、大雪のためヤクは峠を越えられず退却、荷の一部を峠付近に残したままモ・チュー沿いの村、シャーリ（二二〇〇呎）に出、プナカを経由して十一月五日、ティンプーに戻った。ゴンジュ・ラ越えのルート上には集落が全くないため、食料も調達できず、空腹をかかえての退却行であった。

おわりに

幸い好天に恵まれ、ナムシラ峰の初登頂と周辺五〇〇〇呎（六〇〇呎）クラスの未登峰三峰と既登峰一峰に登頂することができ、また、同時期に入城した学術調査隊五名もブータン・ヒマラヤ中央部のルナナ地方からインド・アッサムとの境界近くのマナス（一五〇〇呎）に至る約二ヵ月間の踏査を行い、植物生態、土壌、気象に関する貴重なデータを得、ほぼ当初の計画どおり終ることができた。

ブータン政府は、今後二年に一峰の割合でオープンしてゆく方針と聞かすが、輸送、食料面でのブータン側の不慣れもめだつた。しかし、こうした状況下でも、「未知」というブータン・ヒマラヤの魅力はいささかも減ぜられるものではない。

延々と続く照葉樹林帯、これだけ大規模な自然が残された地域

は世界広しといえどもブータンだけであろうといわれている。一九八三年の登山解禁によって夜明けを迎えたいま、この大自然をこのまま残しておきたいと思うのは、はたして私達だけだろうか。ブータン登山規則はその冒頭にいう、「Take Nothing But Pictures, Leave Nothing But Footprints」云々。

〈記録概要〉

隊の名称 一九八五年千葉大学ブータン学術調査登山隊

活動期間 一九八五年九月～十一月

目的 ナムシラ峰の初登頂と周辺の踏査等

隊の編成

総指揮 中馬敏隆(56)、隊長 吉永英明(43)、隊員 今

井幹雄(45)、村木秀男(31)、黒木春郎(28)、桜井文隆(26)、

木村昭彦(26)、小島 彰(24)、武田文男(50)、ガイド 川

カンドウ・ドルジ(24)

行動概要

九月十六日ティンプー発、十九日ジャッカルよりキャラ

パン開始、十月一日ナムシラ峰北面五一八〇呎にペー

ス・キャンプ建設、八日ナムシラ峰東峰五八一五呎に初

登頂、十二日西峰六〇〇〇呎に初登頂、十四日～十六日

周辺の踏査、二十二日撤収、十一月五日ゴンジュ・ラ越

えのルートでプナカ経由でティンプー帰着。

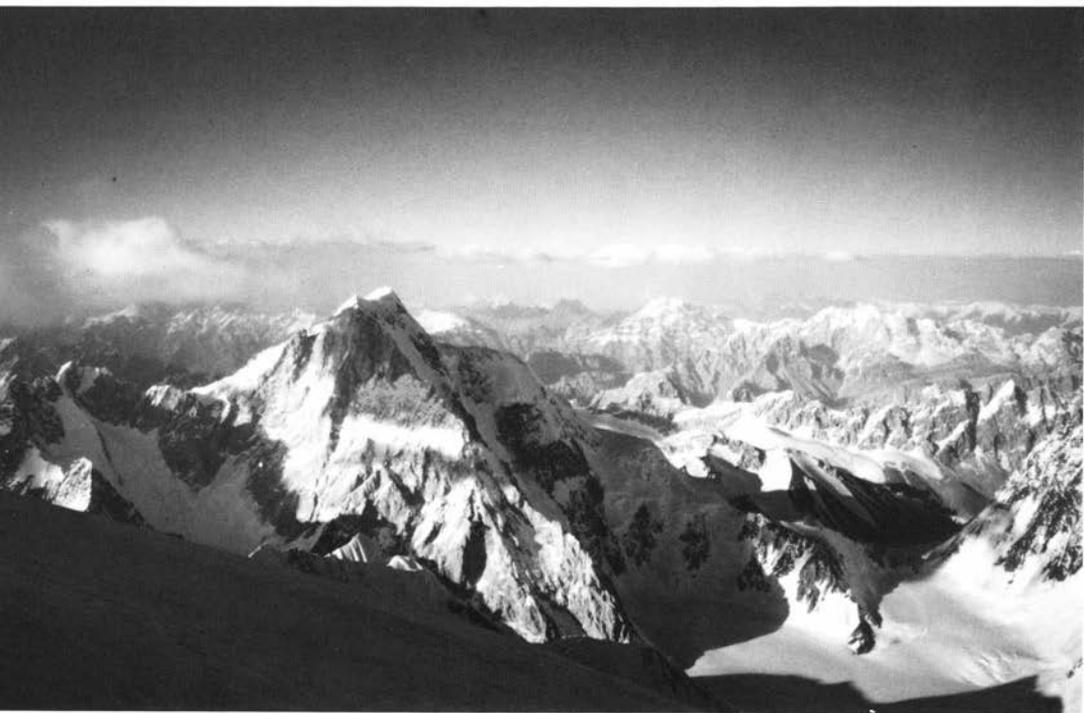
報告書

一九八六年に発行予定。

アサヒグラフ（一九八六年一月十七日号）、朝日新聞（一

九八五年十一月二十五日～十二月三日、十二月六日～十

一日）



K2 第4キャンプ(7800m)からのスキャン・カンリ峰
Skyang Kangri, from camp 4(7800m) of K2. Photo by YAMADA Hiroshi



エベレスト サウス・コルを行く

South col, Everest. Photo by YAMADA Hiroshi



マナスル 黒岩の上部を行く斎藤
On the slope of Manaslu. Photo by YAMADA Hiroshi



マナスル山頂で拾得されたピース罐
A "Peace" tobacco can found on the top of Manaslu in December 1985. It has been left in May 1956.



チョー・オユー C 1よりC 2への途中から見たチョー・オユーの全景
Cho Oyu, seen on the route from camp1 to camp2. Photo by MITANI Toichiro

チョー・オユー山頂よりのエベレスト (1985年10月3日)
Everest, seen from the summit of Cho Oyu. Photo by MITANI Toichiro





ブータン・ヒマラヤ グラス・ピーク中腹からのナムシラ(左：東峰 右：西峰)
Namshila (left: East Peak, right: West Peak), Bhutan Himalaya. Photo by YOSHINAGA Hideaki

ナムシラ東峰より同西峰(主峰)へつづく稜線。

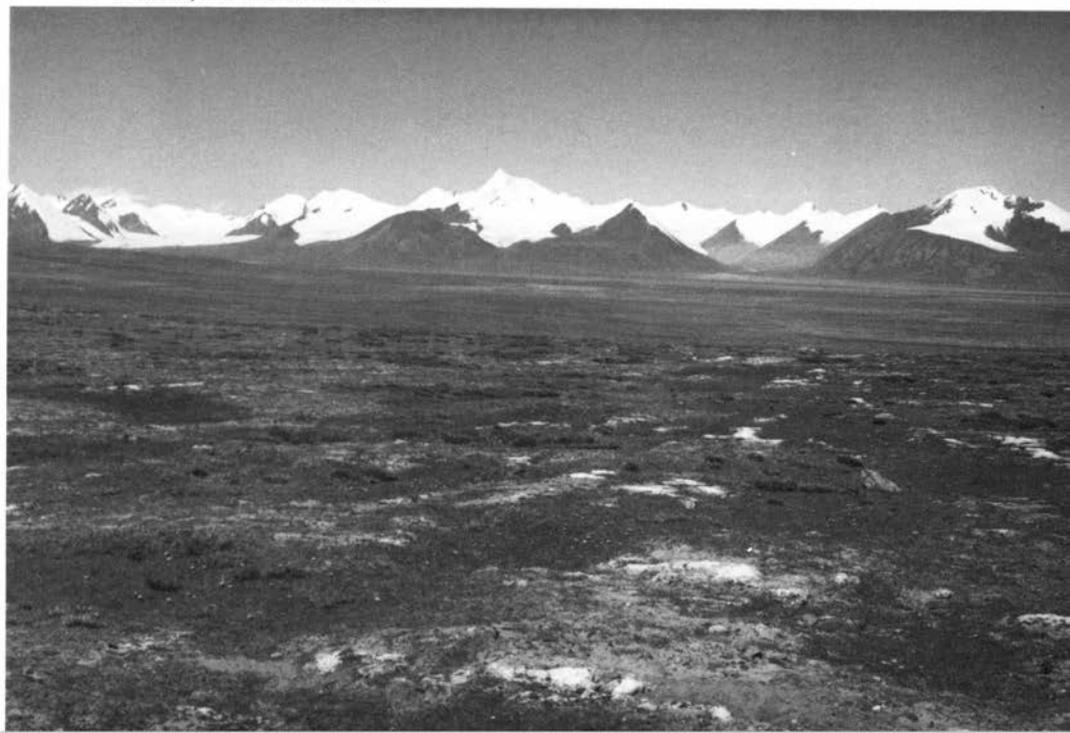
The ridge from East Peak to West Peak of Namshila. Photo by MURAKI Hideo





↓ 東方より各拉丹東雪山群を望む。中央の光ったピークが各拉丹東雪山。左端に見える氷河がチャングデルナン氷河。右側の大きい谷が登路となった尕日曲源流の各拉丹東氷河(1985.8.6 松本撮影)

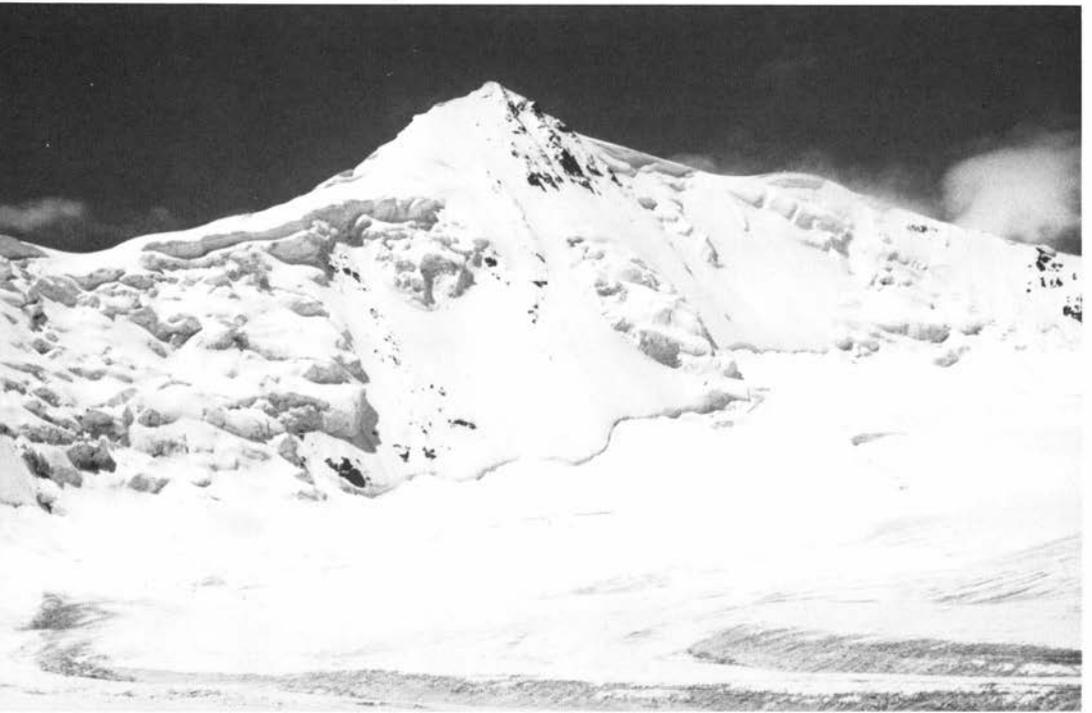
Mts. Geladaindong Xueshan, seen from east side. The sharp-pointed peak of central part is Mt. Geladaindong Xueshan, left side is Jianggenderunang Glacier, and large valley of right side is Geladaindong Glacier which was chosen as our climbing route.
Photo by MATSUMOTO Yukio





↑ 各拉丹東雪山群から西方に流れるカナバサミS氷河と姜根迪如雪山群。この氷河が中国探検隊(1976)によって長江正源流とされた(1985.8.31 松本撮影)
 South Kanabasami Glacier. According to the explored team of the People's Republic of China, 1976, it is the right source of Chang Jiang (Yangtze River).

↓ C 1 上部より各拉丹東雪山(6621m)を望む。左稜線が東稜、右稜線が北西稜で手前側に大きな雪庇が張り出している。(1985.8.15 松本撮影)
 Mt. Geladaindong Xueshan at an altitude of 6621m, view from near Camp 1.





北面よりの祁連山主峰 素珠鍾峰全景
Sulhuliangfeng, main peak of Qilianshan.

ベースキャンプ付近より見るカカサイジモンカ峰
Kakasaizimongkafeng from the base camp.



日本山岳会中国登山隊 一九八五

——祁連山脈、崑崙、黃河源流——

発端

カンチエンジュンガ縦走の登山準備中、八〇周年記念事業の登山部門担当を命じられた。

当初、カンチ計画一本で考えていたが、八〇周年の意義に鑑みてより広範囲な会員参加を求めることにした。そして八一年以来連続して入域しているボゴダ山群の登山を、五年目の総決算として試みるつもりでいた。ボゴダにはまだ魅力のある岩稜や氷壁が手付かずに残されており、登攀対象には事欠かなかったが未踏のめばしい峰はほとんどなくなり、さらに困ったことにリーダー陣にとつて未知なるものへの新鮮な魅力に欠ける憾みがあった。

そのため数年前から中国登山協会にアプローチしていた祁連山群への登山許可取得に全力をあげるようになった。いろいろな障碍もあったが幸い見通しを得て、八五年二月に佐々会長（当時）と磯野の三名で北京を訪問し、念願の祁連山のほか、崑崙のカカサイジモ

ンカ山と黃河源流域のトレッキング許可を得ることが出来た。

準備

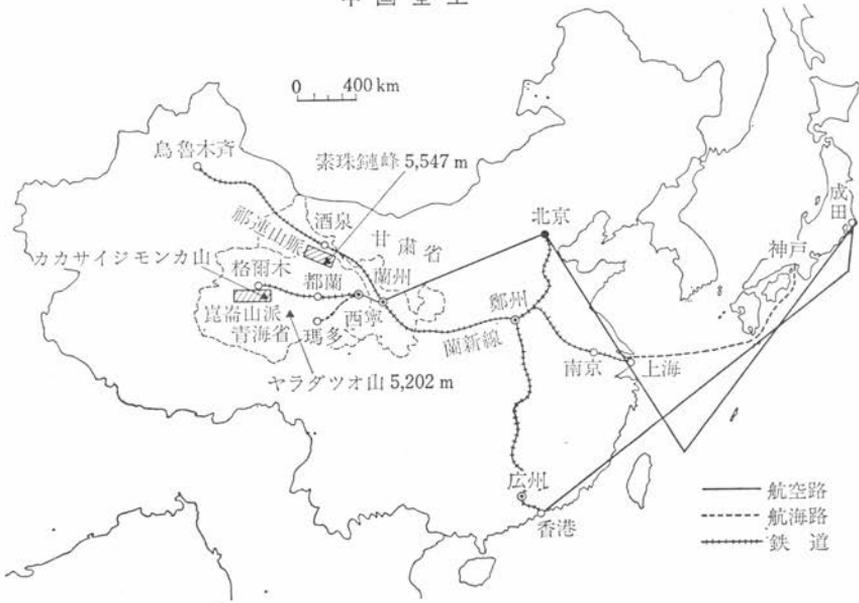
各隊は地理的にも遠く隔たっているので、各々特色を持つ独立の隊を編成し、鹿野勝彦が総隊長として全てを統括することにした。

祁連山は甘肅、青海両省のほぼ境界を東西に長大な山脈を連ね、最高峰素珠鏈峰五五四七mをはじめとして五〇〇〇mを越す高峰群は主に西部地区に集中している。河西回廊から常に南望され、祁連の名は古くから人々に親しまれていて割に登山記録は皆無で、中国隊が登頂したことがあるといわれたが詳細は不明である。入手し得る詳細な地図はなく、ランドサットの写真の解析が頼りとなった。

今回は甘肅省からの入山が指定された。南方に有名な団結峰六三〇mがあるが、完全に青海省側に在り偵察、試登の許可はもらえなかった。この山塊はボゴダ同様、氷河と岩の快適なクライミングが楽しめ、若人向けの恰好なブレイグラウンドになると思われた。

宮 下 秀 樹

中国全土



カカサイジモンカの主峰玉珠峰は標高六一〇〇〇を越すと思われるが、青海省の西部、崑崙山脈の東端にあり、チベットと結ぶ青蔵公路からのアプローチも短く、六〇〇〇を越す未踏峰としては狙い目であると思った。

ただ、地形的にみて技術的な困難は予想されないもので、帰途砂漠のツアイダム盆地經由敦煌に抜けることも考えられた。

当初は登山の興味は祁連のほうにあると思っていたが、標高が六〇〇〇を越えることと中国のさらに奥地に位置することで会員の人気が高く、大人数になったので一部リーダーを組替えて対処することにした。また小疇先生を中心に地学専門の学術隊が加わったのでより幅広い隊となった。

これに対し黄河源流隊はお盆休みを中心に二週間の行程を組んだため、予想を上廻る応募があり最終的には数名の方にお断りをするほどであった。なお、準備中にこの黄河源流を馬で行く隊が成立し、計四隊、総勢八十五名の大部隊となった。

三月中に方針を固め四月に隊員を公募したが、地方在住の会員も多く主として東京近郊の者が準備にたずさわった。殊に若い学生諸君の協力が嬉しかった。

隊員及び行動概要

祁連山隊。総隊長 鹿野勝彦(42)、隊長 磯野剛太(31)、副隊長 山下六郎(33)、隊員 森本志夫(28)、小池英雄(26)、馬場哲也(25)、熊崎和宏(23)、山内智晴(23)、鈴木雅博(21)、金井隆男(21)、目黒義和(20)、神長幹雄(36)、柳木昭信(35)。以上十三名。

七月二十五日蘭州着。二十八日発、二十九日酒泉着。三十日発。

バス、トラックを乗継ぎ十三頭のヤク輸送隊と共に三四六〇以上の大海子にBCを設営。八月三日、四二五〇以上のモレーン上にABC建設。ルート工作、荷上を終え七日、五二〇〇以上にAC建設。八日、第一次隊の磯野、馬場、目黒が頂上直下の硬い氷に少し苦労したが主峰の素珠峰に登頂。九日、二次隊の小池、熊崎、山内、鈴木、三次隊の鹿野、山下、森本が合流して主峰に登頂。

その後四隊に分かれて周辺の偵察行と山下以下が五二六〇以上の顕著な無名峰に登頂し、二十二日BCを撤収して、二十五日全員蘭州着。

カカサイジモンカ(玉珠峰) 隊

隊長 三夏夏雄(41)、登攀隊長 桐生恒治(34)、マネージャー 相馬 勉(25)、医師 関 章司(49)、隊員 長島正浩(42)、名越昭男(41)、小宮博昭(39)、浜名 純(37)、田中純夫(36)、浅川とみ子(36)、小林新二(29)、稲田清二(28)、ピーター・アダムス(26)、山本 修(23)、佐藤義一(23)、朝倉俊史(22)、岩永治郎(22)、徳井成宏(22)、大西 宏(22)、宮坂永史(20)。

学術隊員 小嶋 尚(50)、岡沢修一(36)、下川和夫(35)。

七月二十八日日本隊蘭州着。二十九日西寧。隊荷の輸送が遅れるというトラブルに遭い四日遅れの八月二日西寧発。バスと大型トラックで青海湖畔、砂漠地帯を経て都蘭着。三日、ふたたび砂漠を通過してゴルム着。四日、青藏公路の西大灘(四〇五〇以上)より公路を外れてカカサイジ北面の草地四二五〇以上にBCを設営。

五日、浜名隊と桐生隊とで19号と20号水河のルート偵察。後に登路は20号水河よりと決定。十日、五三五〇以上のC1建設。十一日、ヤセた雪稜を通り北峰五八〇〇以上までルート工作。十五日、北峰を

通り中央峰(五九〇〇以上)を越えた稜線のコル五八五〇以上に雪洞のC2建設。悪天のためいったんBCに下りて停滞し十九日、C1よりC2を経て第一次隊相馬、小林、大西、山本、朝倉、浅川が、二十日に関、田中、稲田、佐藤、宮坂、岩永の二次隊が主峰の玉珠峰に登頂した。頂上は幅一〇〇以上、長さ五〇〇以上ほどの大雪原で、遥かチベット側が望まれたが残念なことこの未踏のはずの最高点に三ヶほどの鉄製の三角形のやぐらと上に一ヶほどの木柱があつて大変落胆した。二十三日BC撤収ゴルムへ。二十五日蘭州着。

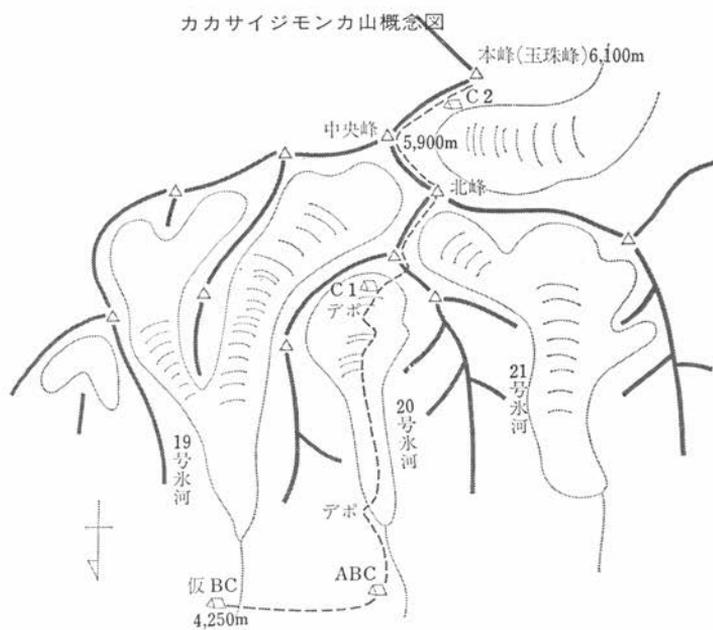
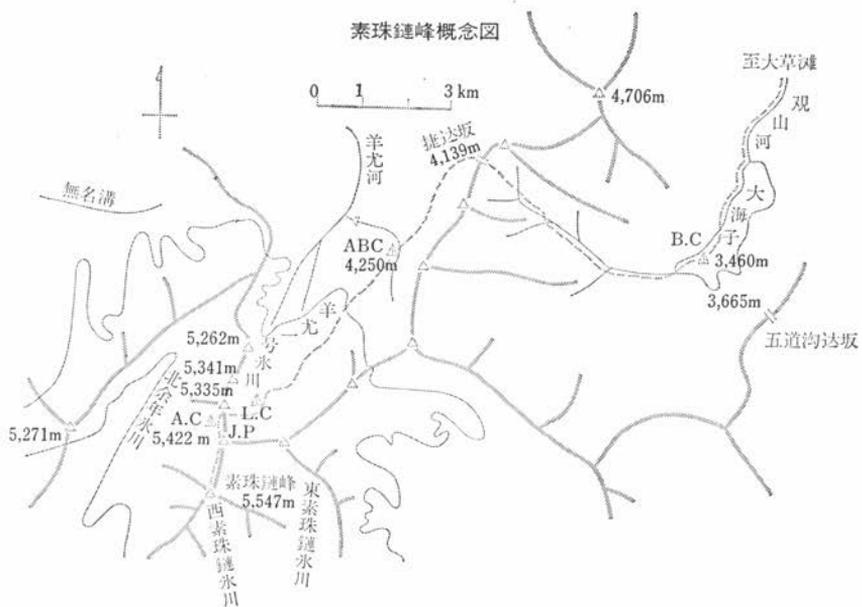
なお、学術隊の小嶋以下は19、20、21号水河間を移動しながら地形、気温、植生等の調査を実施した。

黄河源流騎馬旅行隊

隊長 増島達夫(33)、隊員 陰山 潔(29)、内田瑞乃(33)、景統(24)、片岡理智(24)、泉田道夫(27)。以上六名。

四〇年ぶりに復活した神戸—上海間をフェリーに乗り七月二十六日蘭州。二十八日西寧。

隊荷の遅れで八月二日、青海湖を経て共和。三日、河下峠(三九〇〇以上)を通り温泉、さらに美路峠(四五〇〇以上)を通過し瑪多。四日より借用する馬の手に人民政府との交渉に難儀する。八日、午後やつと隊員六名、中国側二名、青海省のチベット人の馬工三名の計十一名と四〇〇以上の荷物をもせた七頭の馬とで出発。九日、夕刻オーリン湖畔着。十一日ザーリン湖。十三日、星宿海をへて二五〇*を走破して麻多着。十五日、増島、陰山ほか二名で最源流とみられるヤラダツオ山(五二二〇以上)登頂。二十三日、全員で瑪多帰着。二十五日、西寧經由蘭州着。



黄河源流トレッキング隊

隊長 伊丹紹泰、副隊長 早坂敬二郎、隊員 秋山光男、鮎沢さつき、石田浩樹、岩本美津雄、石渡桂子、伊吹景子、梅野淑子、江村眞一、大野秀樹、大竹玲子、小原晴子、織田沢美知子、神戸恵子、菅野宏章、木下正明、小林 碧、權藤太郎、後藤 仁、佐々保雄、佐々起久衛、佐藤節子、佐多恵子、柴田初子、鹿野松男、島田義昭、須々田秀美、関山温子、関口 宏、田中博之、滝川悠紀夫、高野敦子、高柳清子、能 宏彰、広羽 清、広沢毅一、牧野美恵子、宮崎和夫、宮崎佳子、村山雅美、吉村健児、横溝修一。以上四十三名。

八月九日、東京―北京。十日、蘭州。十一日、西寧。十二日、青海湖畔。十三日、共和。十五日、標高四二八〇呎の瑪多で高所に馴化しない隊員が多く出たので西寧へすぐ下る隊とさらに上方オーリン湖周辺散策隊とに二分した。二十日、全員蘭州集結。二十三日帰国。

結語

八十五名に達する大部隊がともかくも無事に帰れたことでホッとした。今回のごとく年齢、性別、目的意識、体力、技術すべての条件を許容した隊には、予想されたことであつたが、リーダー陣の苦労は大変なものだつた。本당にご苦労様というほかはない。

比較的隊員の質のそろつた祁連山隊は、ルートファインディング、二峰の初登頂を含め一応成功であつたと考えられる。

カカサイジ隊については、より幅広い隊員参加のためややまとまりを欠いた憾みがあつた。未登峰といわれた山が既登であつたとは大変残念であり、また申訳なかつたと思つている。帰途、中国登山

協会に嚴重に申入れたが、あの広大な国土の中で、あまり詳細な地図も管理されていない現状下では無理からぬともいえるが、正確な登山記録が中国登山協会で充分把握されていないようなので今後充分留意する必要がある。

黄河源流の騎馬旅行は随分思い切つた計画だったが、馬の借入に関して各地の人民政府との交渉がルール化されないとなかなか面倒であろうが、将来何百*も馬で走破するなんて夢も持ちたい。

トレッキングに関しては、乗物ばかりのトラッキングだと悪口もいわれたが、ネパールのそれにくらべて走行距離を考えれば止むを得ないものである。ただ、短時間に四〇〇〇呎を越す高所旅行を含むことは大変危険も多く、今後充分気をつけたい。

今回の特徴の一つは中国へのアプローチを従来の質素、自由旅行をさらに拡大して、さらに奥地の蘭州集結、蘭州解散を実施したことであつた。当初中国側は大人数の自由旅行はとて不可能だと危ぶんでいたが、我々の熱意に負け、いろいろと協力を惜しまなかつた。そのため、各地の協会に大変な負担をかけてしまつたが、今後より正確な情報の収集によりこの試みは一層幅広く、かつ楽しいものになるであらう。

入国には香港―広州―鄭州―蘭州ルートが多かつたが、一部神戸―上海の海路もあつた。帰路はさらに細分され、ウルムチに行つたり遠く成都―ラサールカトマンズ経由で帰国した学生達もいて、案外やるなあと嬉しくなつてしまつた。

この記録は八五年十一月刊『日本山岳会中国登山隊一九八五』鹿野総隊長編の報告書より大部分借用した。

河野齡蔵の乾板写真に見る日本山岳写真史の夜明け

(口絵写真参照)

杉本 誠

これまで二十余年の間、私にとって河野齡蔵の名は、大変に気にかかる存在であった。いつも水面下すれすれにあって、浮上する気配をみせながら容易に全体像を現わさぬ大魚に似る。皆目、見当がつかないならあきらめもつくが、そうではない。

日本山岳会会員(会員番号九六)、同信濃支部の前身・信濃山岳研究会の発起人にして副会長、さらにその前、明治三十五年(一九〇二)には、すでに信濃博物学会を矢沢米三郎らと創設している。没年は昭和十四年、七十五歳。著書に『高山植物の研究』『高山研究』(ともに岩波書店)、『日本高山植物図説』『高山植物の培養』(ともに朋文堂)など。松本市出身。

こうした表立った経歴は見えてくるのだが、私が求めていたのは、山岳写真家としての河野齡蔵だったから、そこにピントを合わせるのに手間どった。だが、今はいえる。河野齡蔵は、日本の山岳写真の黎明期にあって、間違いなくトップに立つ人である——と。

昭和三十九年一年間、私は『岳人』誌に「日本山岳写真史ノート」を書いた。その時には明治三十七年八月に白馬岳で写真を撮った志村鳥嶺(うづら)を第一号にして筆を起したのだが、いささかの疑問があって「あるいは」の形で河野齡蔵の名を挙げておいた。そのころ、事の大小を問わず教えを乞いに伺っていた武田久吉氏からも「河野君の方が早いように思うが確証がないのでね」と聞き、妙な言い方だが、疑問の裏付けとなっていた。

それが、昨年四月に講談社から、今までの資料をまとめて『山の写真と写真家たち』として出版するに当たり、再調査にかかってス

ルスルと糸がほどけて来た。何よりも取材の手助けを松本在住の穂苅貞雄氏にお願いしたのがよかった。同氏が卒業した松本第二中学校に、河野齡蔵は教師として昭和六年まで勤めており、そのうえ穂苅氏の教わった博物の先生は、河野の後任であった。

そのような縁があつて、河野家が大切に保存されていた乾板から何枚かをプリントして本の中で発表するとともに、引きつづいて資料を何度か見せていただく幸運に恵まれたのである。

さらに運のよいことに、本年八月には、松本市で「世界の山岳写真——ガラス乾板による日伊合同三人展」の形で展覧会を開くことができた。他の二人は、イタリアのヴィットリオ・セツラと、同じ松本在住の山岳写真家、穂苅三寿雄である。いずれも重く不自由なガラス乾板を使い、組立暗箱カメラを山の上まで担ぎ上げた人たちだ。国は異なっても、その情熱に違いはない。

*

話を元に戻し、これから山岳写真家としての河野齡蔵について語ろうと思う。

武田氏のもらされた「確証がないのでね」の確証への手がかりは、実は思わぬところにあつた。『信濃博物学雑誌』である。これは前に記した信濃博物学会の会誌だが、その第7号（明治36年10月25日発行）の口絵に一葉の写真が掲載されている。「赤石山嶺に於ける高山植物」の説明がつき、下に小さく（36・8・22）の注がある。

「撮影者名が記していないから」では、言訳にもならないが、この写真を撮ったのが河野齡蔵ではないかと気づくのに、少々時間がかった。同誌雑報欄に「赤石探険旅行・河野齡蔵氏の主唱に係り、山嶺に露宿するもの二、随分興味あり且つ有益の旅行なりきと言ふ。」とある。この二つが結びついて「さては」となるのだが、もう一つなにかが欲しい。

さらに同誌を繰っていくと第18号（明治18年12月25日発行）の口絵「硫黄岳旧噴火孔」に明らかに R. KONO. PHOT. とあり、以後も同じサインのある写真が何枚かつづく。最も心が躍ったのが第26号（明治40年10月25日発行）である。R. KONO. PHOT. の「八ヶ嶽高山植物採集会員一同」という記念写真の原版が河野家から出て来たのだ。

「赤石山嶺に於ける高山植物」の写真は、原板が未発見のため百パーセントとは言い難いが、まず河野撮影としてもいいのではないか。以上のような経過があつて、明治三十六年八月二十二日に赤石岳頂上で高山植物を撮った（と推測される）河野齡蔵を、その時点で

日本の山岳写真家の第一号としたのである。

*

現在までに見つかっている河野の写真は、すべてキャビネ判のガラス乾板である。撮影年の明白な明治四十年七月二十九日付の「八ヶ嶽高山植物採集会員一同」から昭和八年六月―七月の「樺太の山旅」に至るまでフィルムによるものは一枚もない。

保存状態は非常によく、細心の注意をして引伸した結果、ほとんどが「昨日写しました」といつても見分けのつかないほどの仕上がりととなった。この二十年来、私は様々な形で乾板を扱い、汚損の甚だしいものは、中間にフィルムによるネガ起こしをして調子を出してから引伸すというような処理をする経験を持っているが、河野の場合には一切その必要はなかった。

原因の第一は、保存の方法による。主要な原板は一枚一枚が和紙で丁寧に包まれ、乾湿からくる乳剤面への悪影響を防いでいた。これは河野の性格によるところが大きいだらう。科学者であるとともに温厚謹厳、酒も煙草も嗜まず、常に摂生に注意する——といった生活の姿勢がもたらした結果のように思われる。

原板を包む和紙には「戸隠五十間長屋」というように達筆の説明書きがあるほか、何枚かには「岩石は淡墨色に塗り、少しく褐色を交へたる位にてよし」とか、「これを今一度ツツとうすく四ツ切に引伸ばして下さい」と書かれている。少し説明を付け加えると、この注記は着色用である。

キャビネ乾板とともに、ほぼ6×6判大の幻灯用原板があったが、この着色技術が何とも見事であった。ガラス板にデューブした陽画に人工彩色してあるのだが、拡大鏡で覗いても絵の具の厚みがわからない。その方面の専門家に見せたところ、「透明度の高い絵の具をごく薄く重ね塗りしている。大した技術だ」と舌を巻いていた。

河野について書かれた同世代の人たちの追悼文を読んでもみると、彼の画才について触れていない人はない。雲峰と号して実によく絵筆を執っている。その技術が写真の着色に生かされているのだが、下伊那高女校長、松本女子師範学校教頭、長野高女校長などの経歴からも分かるように、生涯を長野県下の女子教育に尽くした教育者らしく、着色写真や幻灯を教材として十分に活用している。同時にこれは山岳会等の講演にも使われた。

写されている山は白馬岳が最も多いうえに、内容も充実している。高山植物の宝庫であり二十回を越える登山を行っているから当然ともいえよう。その他では戸隠、八ヶ岳、槍、立山・剣、中ア、南アの一部など長野県下全域にわたっている。北海道、樺太は昭和に入ってから六十八、九歳の撮影だから、河野の山行とキャビネ乾板のカメラは密接不離の関係にあった。

これらの写真を並べてみて非常に興味をそそられるのは、写っている人物である。先に挙げた八ヶ岳の植物採集会の記念写真でいえば、四列に並んだ最前列中央の人物は、東京から招いた講師の植物学者、牧野富太郎であり、隣は信濃博物学会会長、後に信濃山岳研究会会長にもなる矢沢米三郎だ。

さらに白馬岳をめぐる女子の集団登山の一連の写真は、大正五年、もしくはそれ以後さほど時間が経っていないころの長野高等女学校生が被写体である。河野は、松本女子師範学校時代の明治四十五年の夏休みに、初めて女生徒の白馬登山を計画するが、明治天皇のご病氣によって中止している。大正五年、今度は長野高女で実行に移すわけだ。同学校長時代（大正五年四月―十一年三月）は、毎年のように女生徒の戸隠登山を行っていて、当時、認識どころか反対の声すらあった女性の登山を率先して指導した先覚者といえる。

河野の登山歴の中で最も大きい縦走は大正九年七月二十四日に大町を出発し、八月四日に笠ヶ岳から下山したものである。唐松―猿飛―剣―立山―薬師―黒部五郎―蓮華―双六―笠のコースだが、その途中で撮ったと推定される一枚の記念写真が残っている。三角点測量に使ったと思われる木柱の前にピッケルや鷹口を手にした三人が立つという構図だ（口絵写真⑧）。

このうち、左端は他の写真から推測して矢沢米三郎と見当をつけたが他の二人がわからない。この縦走の同行者が、矢沢のほか市河三喜、岩波茂雄、酒井由郎と記録にあるので、写真を本誌の編集担当、大森久雄さんに届けて調査をお願いしたところ、近藤信行氏らのお骨折りで中央の人物は岩波書店の創立者である岩波茂雄と判明した。右端の人は燕山荘の赤沼淳夫氏が一目で酒井由郎と指摘された。酒井は赤沼氏の父、千尋氏と親しく、新潟県の人。当時は旧制松本高等学校の学生ではなかったかという。

また、望月達夫氏によれば、酒井由郎は、郷土の岳人ということで新潟の人たちが苗場山に記念の碑を建て、故人の業績を偲ぶ追悼文集『三角岩』も発行されているという。もう一人、記録にある同行者の市河三喜（英語学者）が、なぜ写っていないのか理由は不明だが、いずれも錚々たる人物が揃っている。

明治・大正期の乾板写真を探し求めていつも壁に突き当たるのは、乾板そのもののありかの確認もさることながら、その後控える右のような事情である。乾板自体にはほとんど何も書かれていないから、説明をつけるためには、山の形を見定め、人物を推測し、撮影者の山行記録と照合しながら一つ一つ証拠を積み上げていくしかない。

その点、四十八枚のプリントを展覧会用にイタリアから送ってもらったヴィットリオ・セッラの場合は助かった。彼自身の山岳写真資料館が、セッラ家とイタリア山岳会との共同で運営されているとはいえ、一八八二年のマッターホルンから一九〇九年のK2までの写真が、撮影年、撮影場所、山名とも正確に記されたキャプションを添えて届いたからである。

ともあれ、日本の近代登山の黎明期に当たって、先頭を切って優れた山岳写真を写した河野齡蔵の業績が、このようにして少しずつ少しずつ明らかになっていくのは、何よりも私にとつてうれしいことだ。

(元『岳人』編集長)

スイス・ガイド手帳に見る日本人の記録

(口絵写真参照)

岡 沢 祐 吉

ここ何年か、グリンデルヴァルトに行く機会があると、その都度ザミ・ブラヴァント氏を訪ね、そして氏のお元氣なうちに、当時の日本人の記録をできるだけだけ集めておこうと努め、今回も同氏のお骨折りで何人かの人々の記録を収集することができた。既に会報「山」に発表したが、会誌「山岳」にも載せて頂くことになった。しかし、私が目にした日本人だけでも二十数名に達し、そのうえ横さんのように一人で何ページも記録を残されている方もおり、その全てを本会誌などに載せることは到底不可能なので、改めて、後日この関係のものを一つにまとめてお見せ出来るようにしたいと思う。予めこのことをご了解頂いたうえで、ここでは、別宮貞俊元会長、藤木九三名譽会員、麻生武治名譽会員、そしてモン・ブラン山群のモン・モディにカガミ・ルートの名を残した各務良幸会員のものを披露することにする。

1. 別宮貞俊氏の記録。

[p. 52~53]

Finsterarhorn in Winter

23. Jan. 1925 : Jungfraujoch → Konkordiaplatz → Grühornhütte

→ Finsterarhornhütte, ...with Ski.

24. Jan. 1925 : Finsterarhornhütte → Gipfel → Hütte.

25. Jan. 1925 : Hütte → Rotloch → Oberarjoch → Oberaargletscher

→ Grimsel → Guttanen, ...with Ski.

26. Jan. 1925 : Guttanen → Grindelwald

The weather was not favorable. It snowed since the night of 23rd till 10 a.m. of 24, to about 3 cm depth.

On 25th, it was much more unfavorable. The Oberaargletscher was covered with new snow and it snowed, and the crevasses were impossible to discriminate. I am very glad that we could pass the dangerous glacier in so unfavorable condition. I am quite satisfied with skill of Mr. Schlunegger.

27. Jan. 1925.

S. Bekku (Tokyo)
S.A.C. Grindelwald

「冬のフィンステルアールホルン」

一九二五年一月二十三日 ユングフラウヨッホ↓コンコルディア
ブラッツ↓グリェンホルンリニツケ↓フィンステルアールホルンヒ
ユツテ スキーで。

一九二五年一月二十四日 フィンステルアールホルンヒユツテ↓
山頂↓ヒユツテ。

一九二五年一月二十五日 ヒユツテ↓ロートロツホ↓オーベルア
ールヨッホ↓オーベルアール氷河↓グリムゼル↓グッタンネン スキーで。

一九二五年一月二十六日 グッタンネン↓グリーンデルヴァルト
天気は幸いせず、二十三日の夜から二十四日の午前十時まで雪が
降り、三センチほど積った。

二十五日は更にひどくなつた。オーベルアール氷河は新雪でおお
われ、雪はなおも降り、クレヴァスを識別することができなかつ
た。その危険な氷河をこのような不都合な条件のなか通過でき、私
はたいへん嬉しかった。シュルネツカー氏の技倆に私はまったく満
足している。

一九二五年一月二十七日

別宮貞俊(東京)

スイス山岳会グリन्दルヴァルト

これはクリスチャン・シュルネツカーの手帳にあったもので、別
宮さんはサムエル・ブラヴァントの手帳にもほぼ同じ内容の記録を

残されている。この時の登山の様子は『山岳(第二十年一号)』の
会報欄に「冬のフィンステラールホルン登山談」としてその一部が
載っている。当日の小集会に出席されていた方のなかに、なおご存
命のかたもおいでなので、この手帳の記録から、垂涎三尺たらしめ
たその時の別宮さんのお話を想起なされる方もおありではなからう
か。

松方三郎さんとグリーンデルヴァルトで会った、とこの時の講演会
で別宮さんは話しておいでだが、松方さんがこの時に記入されたも
のはどの手帳にもなく、七月からのものばかりだった。この時の松
方さんは夏のアルプス登山の下調べでグリーンデルヴァルトを訪ねら
れたのだろう。

二、藤木九三氏の記録

「p. 61

I am very glad to write these few lines concerning my
climbings in Zernatt; I have performed the following ascents
with Mr. Chr. Schlunegger from 26th Aug. to 8th Sept. 1926.

(1) Breithorn

(2) Matterhorn (descending to Italian-Ridge)

(3) Weisshorn

Among these climbings, the Matterhorn was most inter-
esting, because we could celebrate the Emperor's Birthday of
Japan at the top with Prince party. Specially descending to
Italian-Ridge was memorable also; in the other side, the as-

cent of Weisshorn was one of the memorable climbing for me.

7th Sep. 1926

K. Fujiki

S.A.C. J.A.C.J

「ツェルマットでした登山についてのこの数行は書くのがたいへん嬉しい。一九二六年八月二十六日から九月八日まで私はC・シユルネッカー氏と次の山登りをした。

(一) プライトホルン

(二) マッターホルン(イタリア側山稜を下る)

(三) ヴァイスホルン

以上の登山のうちではマッターホルンがいちばん興味深かった。というのは、頂上で、宮様のグループと天皇誕生日を祝うことができたからだ。

わざわざイタリア側の尾根を下ったことも忘れられないことだ。ヴァイスホルンの登山もまた私にとつて忘れられない山登りの一つだった。

一九二六年九月七日

藤木九三(神戸)

スイス山岳会「日本山岳会」

藤木さんが秩父宮殿下らのグループとともにマッターホルンに登ったときのガイド、C・シユルネッカーの手帳に載っていたものである。藤木さんの『雪・岩・アルプス』によると、プライトホルンという山は、鋭さよりも大きさを、高さよりも深さを偲ばせる、と

書いてこの山を賞賛されているが、快晴で穏やかだったマッターホルン山頂で祝った天皇誕生日と、困難な尾根といわれるイタリア側尾根からの下降、そしてシユルネッカーにブランシェンを加えた三人で、長い尾根を登ったヴァイスホルンの印象が、殊更強かったのである。プライトホルンについての印象は何も書かれていない。

三、麻生武治氏の記録

「p. 76

Grindelwald

den 7. Sept. 1927

Zu Bergtouren darf man eigentlich besser immer zu dritt gehen.

Aber nur mit einem so wie Bernet Hans hervorragender u. ausgezeichnete Feiskletterer, gleichzeitig Eisgeher kann man ruhig zu zweit riskieren. So sicher ist er u. Fachkennner. Die Besteigung von drei Gipfeln, Wetterhorn, Mittelhorn, Rosenhorn, und die Traversierung des Gr. Schreckhorns wurden von ihm spielend geföhrt. Die Technik u. Fachkenntnisse von ihm sind amtlich überzeugt. Darüber brauchen wir gar nicht mehr reden u. loben.

Aber sportmännliche u. gentlemanlike Charakter hat nur er im Bergführer Kreise von ganzen Grindelwald. Es ist kein Wunder, dass er Hauptmann u. Patrouillenführer in schweizer-

ischen Militär ist. Wenn einer oder eine ganz zuverlässigen Bergführer haben will, sollte man nur Bernet Hans in Frage kommen.

Aso, Take

S.A.C.]

「グリデルヴァルト
一九二七年九月七日

山旅をする時にいちばん良いのは、いつも三人ですること、そして本当はそうすべきなのが、ハンス・ベルネットのように、抜群の岩登りの達人、そして同時に氷雪の扱いの上手な人と連れ立って行くなら、二人でも安心して行くことができる。彼はそれほどに确实で、専門的なことを知っている。ヴェッテルホルン、ミッテルホルン、ローゼンホルンと三つの峰に登り、グロス・シュレックホルンの縦走をしたが、彼は造作なく案内してくれた。彼の技術と専門的知識については間違いなく保証付きである。これについてわれわれは多くを語る必要も、褒めそやす必要もないくらいだ。

彼のスポーツマンとしての、それに紳士的な人柄は、グリנדルヴァルト全域の山案内仲間では彼だけだ。彼がスイス軍の大尉で、偵察隊長であることは、何等驚くに当らない。もし、どなたか確実な山案内人をお求めなら、ハンス・ベルネットだけを考へに入れるべきではありませんまいか。

麻生武治

スイス山岳会]

麻生さんはスイスやオーストリアの山仲間とガイドを連れずに何

回も山登りをされているので、ザミ・ブラヴァント氏の周囲には麻生さんと登ったガイドがあまりおらず、ツェルマットのゴットフリード・ペーレンの手帳や、ここに掲げたハンス・ベルネットの手帳にあつたものは、偶然ページをめくって見付けたものだ。

日本に戻ってから麻生さんにお会いして直接尋ねてわかつた部分もあつたが、不明な部分はまだまだ多く、当のガイドが死んだり、手帳を保管しているはずの人（それがガイドの子供であることも甥や姪であることもある）を捜すのは容易でなく、今となつては調べようがない。

この手帳に記入してあるグロス・シュレックホルンの登山は、伺つたところではストラールエックヒュンテに泊り、翌日登頂し、横さんや松方さんなど多くの人が下つたアングーソン稜を経て下山したものである。

ハンス・ベルネットがスイス軍の大尉であつたことは藤木さんも『雪・岩・アルプス』のなかで触れているが、先年、UIAA総会がソウルであつたとき立寄られた、スイス山岳会のミルツ会長もスイス軍の大尉であつたから、グリנדルヴァルトのガイドにはかなりの人がいたことが、このことから覗うことができる。

四、各務良幸氏の記録

「p. 155

★—The Weisshorn up by the usual way & I got mountain sickness for first time in my life & I got absolutely kaputt. It is no fault of him.—only too much eating.

★—The Trifhorn & Zinalhorn

I think we crossed this ridge at mad speed of 6 hours 30 minutes. The reason was that we were chased by a lady with a rotten unexperienced guide.

★—Dent Blanche up by the east ridge & down by the usual way.]

★—ヴァイスホルン 通常ルートから登る。私は生れてはじめて高山病にかかり、すっかり参ってしまった。彼のせいではない。たくさん食べすぎたからだ。

★—トリフトホルンとチナルロートホルン

われわれはこの尾根を六時間三十分で縦走したが、これはものすごいスピードだと思ふ。それは、礼儀を知らない、経験の浅いガイドを連れた婦人にわれわれが追い掛けられていたからだ。

★—ダン・ブランシユ 東稜から登り、通常ルートを下った。』
「p. 156

At Chamoniix ★—The traverse of Grépon, ★—The traverse of Grand Dru & Petit Dru, ★—Mont Maudit on its Italian face by a new route following a small ridge between the central & the right couloir. 17 hours work & Gottfried worked magnificently the whole day.

★—Mont Blanc up from Tête Rousse & down by G.M. (Grands Mulets) I have too much to say about his merits but as there is limit in pages, so that is that.

Y. Kagami]

「シヤモニニ」

★—グレボンの縦走 ★—グラン・ドリユおよびプチ・ドリユの縦

走 ★—モン・モディ イタリア側の中央クローワールと右クローワールの間にある小さな尾根の新ルートを登る。十七時間のアルバイトだったが、ゴットフリードは終日、驚異的な働きをした。

★—モン・ブラン テート・ルースよりグラン・ミュレに下る。
彼の長所については、あれこれ言うことがいっぱいあるのだが、ページに限りがあるから。

各務良幸」

ヨーロッパで山登りをしていた頃の各務さんはほとんど日本の登山者たちと交際していなかったとのことだから、客観的な資料がないとその内容はわかりにくかった。

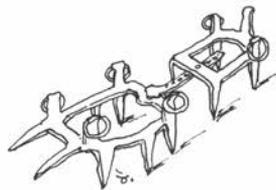
今回ここに掲載したものはいずれも一九二九年（昭和四年）のもので、この前後のページに日付が入っていたので、このページが一九二九年のものであることが確認できた。

フライイング・ジャップと呼ばれた、とかつて本会の山岳史懇談会の席で各務さんは話されたが、当時のクラシックな装備で、トリフトホルンとチナルロートホルンの間を六時間半で縦走した、と同行したペーレンの手帳に記入してあるのだから、その様子を想像することは容易だろう。そして、このスピードが、行儀の悪いガイドを連れていたとはいえ、ご婦人に追い掛けられたから、と書き付けてあるところは、これまで他の手帳ではあまりお目に掛らなかつた表現だけに目を引く。

モン・モディのカガミ・ルートのところは、後日アルパイン・ジ

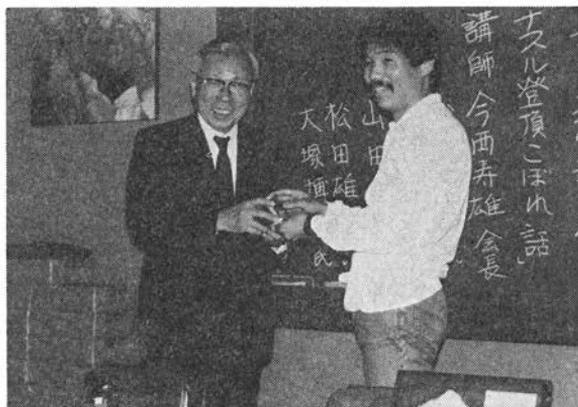
ジャーナルに載ったところなので興味深い部分だ。中央クローワールと右クローワールの間にある小さな尾根、と記述はかなり具体的である。前記、懇談会の時のお話では、小屋を三時に出たとのことだから、トリノ小屋に着いたのは午後八時ということになるだろうか。

それにしても、この初登攀の記録にほとんどその喜びが表わされていないのは何故だろう。たかが遊びのうえのことではないか、と父上あたりに軽くあしらわれるような出来事だったのであろうか。今の時代に生きるわれわれは幸せだ。先輩たちのひたむきな努力のおかげで、趣味は山登りだと卑屈になることなく言えるし、登山家という立派な肩書まで通用する世の中になったのだから。



マナスル登頂こぼれ話

―初登頂三十周年にあたって―



1956 (今西) ~ 1985 (山田)。

出席 (五十音順)

今西 寿雄

(第三次隊、初登頂)

大塚 博美

(第二、三次隊)

小原 勝郎

(第三次先遣隊、本隊)

辰沼 広吉

(第一、二、三次隊)

松田 雄一

(第二、三次隊)

山田 二郎

(第一、二次隊)

山田 昇

(一九八五年十二月登頂)

(一九八六年三月十三日、図書委員会主催「山岳史懇談会」より、会報「山」四九五号参照)

司会 (大橋) 山岳史懇談会、十四回目に
なりますが、今年がマナスル登頂三十周年
ですので、いまだから話せるとか、いまの
うち話しておこうというような、こぼれ話
をしていたらこうと企画いたしました。

なお、この会に先立ちまして、会員の山
田昇さんが昨年十二月十四日マナスルに登
頂なさいまして、三十年前に第三次隊の第
二登をされました加藤喜一郎さんが置かれ
た、横さんほか隊員十二名全部の名前を記
しました会のマツチ箱を入れたピースの缶
を頂上で見つけて、お持ち帰りになりました
。今西会長のほうにそれをお渡ししたい
というお話がございましたので、きょうお
越しいただきました。会に先立ちまして、
玉手箱のような三十年ぶりのもので、皆さ
んだれも拝見してないんですけども、お
返しします。

大塚 そのビニールに入っていたんです
か。

山田 (昇) いや、ビニールには入ってな
かったです。穴があいていて、溶接された
という感じでしたので、見つけたときには
開かなくて、封印してあったんじゃないか

などという気がしたんですけれども、いろいろ考えたところ、カミナリだろうと判断したんです。

今西 加藤喜一郎君はまだ見てないんですか。

山田(昇) 見てないです、お話ししたんですけれども。

大塚 ちょっと開けてみてくださいませんか。

……この石、このままですか。

山田(昇) はい、加藤さんとお話ししたときは、缶が飛ばないように石を入れたと聞きました。

司会 鮮明に名前が残ってますね。

大塚 マッチ箱の裏に鉛筆ですな。

小原 記憶にないな。書いたかな。

大塚 上で書いたんじゃないですかね。たぶんラスト・キャンプか、まさかいつとつってペンじゃやないでしょうね。

小原 喜一が書いたの？ カミナリってどれ？

山田(昇) この穴がきつとカミナリだと思っんです。このカビもほとんどなかったんですけれども、下ろしてきた中に雪が入っていました濡れていて、カトマンズま

で全然開けないで持ってきましたが、カトマンズに着いたときにはもう、ちよつとカビてました。

大塚 五六年五月十一日と書いてありますね。

全西 だから、登頂の朝書いたわけでしょう。

(山田昇氏、ピース缶を今西会長に渡す)

今西 どうもありがとうございます。それじゃ、ちよつとだいたいします。(拍手)

大塚 結婚式のケーキカットみたいだね。(笑)

(笑)

今西 ありがとうございます。これはきょう私からもうより、加藤喜一郎君がもらわないかんものでございまして、まだ見てないそうですから、加藤喜一郎君にまず第一番に見せようと思ひます。

近藤(信行) きょうは今西会長ほか会員の方々、ご参集いただきました、どうもありがとうございます。今西会長のご要望で、第一次(一九五三年)から第三次(一九五六年)までの隊員皆さんにご通知を差し上げてほしいということで、ご通知を差し上げましたところ、ご多忙の方もいらっ

しゃいますし、遠隔地にいらつしやる方もおられ、欠席のお方も多いと思ひます。たとえば、楨さんからこういう文面を

いただいておりますので、ちよつとご紹介申し上げます。「冠省 来たる三月十三日

の懇談会ご案内ください、ありがとうございます。折角のお催しですが、老生病気のため欠席失礼いたします。悪しからずご了承の程、ご盛會を祈り上げます」

そんなことで、このマナスル三十年、山田昇さんのご寄贈もございまして、たいへん有意義な会だと思ひます。それでは、大塚さんから話を雑談ふうに引き出していただきますが、どうぞよろしく願ひいたします。

大塚 それじゃ、これから始めますが、どういふところから話しましたらいいか、ちよつときつかけに困るんですけど。三十年前の話をしたほうがいいのか、それともやはり山田さんのように、日本人としては最も典型的なアルパインスタイルで、二人

でわずか八日間で登った話がいいのか。三十年前はサーブ十二人、シェルパ二十二人、ポーターが四百人、総トン数十二トシ

の荷物で、カトマンズを出て帰ってくるまで約ふた月半かかったわけですね。そういうもののいろんな対比の中で、皆さん方にもいろいろな思いがあるんじゃないかと思うんです。

今西 このピースの缶ね、これはあの時分、たしか木原均先生に専売局に頼んでもらい、百円するものなら十何円ぐらいで安く無税で分けてもらった。それ以来ずっと、タダみたいな値段で……。

松田 あんまり確かな記憶はないんですけど、法政のOBで古い会員の角田吉夫さんが当時、専売公社にお勤めだったんです。それで、私どもは角田さんをお願いしたことがありません……。

大塚 マナスルの記念切手というのもあったけれど山岳会で企画したんですか。郵政省のほうから出てきたんですか。

松田 当時、毎日新聞社にヒマラヤ登山事務局というのがあって、古市さんという事務局長がおられまして、この方が運動されたのかもしれない。山岳会にはそういう知恵者はおりませんから（笑）。それから、ピース缶の中に入っていたマッチですけれ

ども、あのデザインは千谷隊員がデザインされたように記憶しています。中のマッチについては、当時よくわからなかったものですが、三鷹にありました運輸省の技術研究所の低温低圧室の中でテストをした記憶があります。

大塚 そうですね。何でもかんでも最初は「いろは」のいの字からですから、ロウソクを持っていくのもどれがいいかというのでね。低温低圧室では総合テストでして、酸素の器具から始まって防寒具、靴、マッチ類、ストーブなんかを全部あそこに持ち込んでテストをしたんです。

近代的？ 無酸素登山

たまたま装備の話に移りましたので、辰沼先生、先生は酸素係だったでしょう。何か言ってくださいよ。遅刻してきたから。（笑）

辰沼 酸素に関しては篠田軍治先生がずいぶん助けてくれましたね。酸素を使うということについては、いまもいろいろ問題があると思うけれども、医者側から言いますと、やっぱり酸素なしということは怖

いんですよ。

実はおとつい見舞いに行ったんですが、私の同期の男が病気で入院してまして、この人は終戦直後に、胸郭成形ってご存知だと思われども、結核のときに肺をつぶして小さくして病巣を抑えるという治療法をしたんですが、終戦後これだけの年数がたつて、だんだん硬くなっちゃって、いまこのぐらいいしか肺がないわけです。そして見舞いに行ったら、酸素呼吸をして息絶え絶えにおるわけです。結局、その状態とハイキャンプの状態とは全く同じだ、ということとを再認識したんです。

ということは、こんな小さな肺で酸素マスキをかけて息をしているんだけれども、当然呼吸する量が少ないので、息が苦しくなって夜どうしても寝られない。もう一つは、息をぐっと吸い込むことができない。肺が小さいから、そうは吸い込めないけれども、酸素だけやってますと、いわゆる酸素中毒というのになって、また障害が出るんです。炭酸ガスがないと、息をうんと吸い込む力ができないんですね。ですから、純粹の酸素だけ与えていると、その病人は

息を吸おうと思っても吸えない状態で、夜寝られない。

マナスルの当時に入ると、炭酸ガスを混入すれば深い呼吸ができて夜寝られるだろう、と思ったわけです。ところが、英国でも炭酸ガスは使っていないですね。問い合わせたんですけれども、純粹の酸素を使うということでした。それでとにかく、炭酸ガスをボンベの中に入れて持って行ったんです。ところが、技術的にいろんな問題があつてテストにそれをやってみただけです。そうすると、ラッセルか何かパーツとやつて息をうんと吸おうと思つて吸えないというときには、炭酸ガスが入っているのを使うと吸えるということは現にありました。だから、効用はたしかにあると思ひます。

それからもう一つ、当時、私どもが酸素を使ったということの理由の一つとしては、体の中で酸素をいちばん必要として、なければいちばん困るといふのは、やっぱり脳幹です。脳の真ん中のところで、皆さまの耳慣れている言葉では脳死とか、最近盛んに言われています。この脳幹のところ

でいちばんスタンド・プレーしている意識の問題ですね。意識というのは、ご臨終のときに、「もう意識がございません。はい、さようなら」といふときに使う言葉ですけれども、私どものほうから考えますと、なかなかそう簡単なものではないんです。生きていくということと非常に関係があるわけです。脳の高等な中枢を働かせる原動力、エネルギーのもと、そんなやうなところでですから、それがアウトになると、ものの判断が非常に狂つてくるということを恐れたわけです。体は動いていても、ものの判断が狂つたのでは困る。ハイキャンプにおいでになつた方は皆さん経験しておられるはずだけれども、ものの判断が悪くなるとか、ものを忘れるとかいふことが非常にしばしば起こるわけです。大事なことを忘れちゃう。ですから、いくら前に準備して持つて行つても、それを使わなかつたりすることが起きるわけです。そういう意味で、とにかく意識を最低限度でも維持するということのために酸素というのが必要である、ということが基本的な考えでした。

ここところは、最近の方と新しいこと

に關していろいろ論議したらよからうと思ひますけれども、当時はそういう意味で酸素ボンベを使ったということです。

大塚 山田二郎さん、酸素を使うという話は当然第一次のころからあつたんでしょけど、最初のころはどうでしたか。

山田(二) 酸素でいちばん印象的なのは、第一次のときにベースキャンプで圧力テストをしたら、だいたいみんな抜けちゃつてる。輸送の途中、船の中でボンベから抜けちゃつたんですね。二割くらいがどうやら詰まっていたのかな。それもかなりガスが減つちやつてるから、そんなに圧の少ないのを持つて行くと目方ばかりかかちやうというんで、と同時に、まだ酸素に対してあまり慣れてないものだから、それをいいこととして置いていっちゃつて、フーフー苦労したんです。いまにしてみれば、たいへん近代的な無酸素登山だったんだけど。(笑)

松田 ボンベの性能といひますか、入つてかどうかテストのためにゲージをつけて、一回バルブを開けると、閉めたつもりでも閉まつていない。それで、第二次か三

次のときには、風船のようなものをつけて、風船が破けているやつはもう酸素が出たから持つて行くなというようなことをやりました。酸素ボンベ自体も、そんな程度の信頼度なんですね。

今西 その話は聞いたね。第五キャンプで辰沼さんに全部点検してもらって、上でまた私が全部点検して、三本ずつギヤルツェンと、……そのときはあったんですよ。ところが、ギヤルツェンのは一本抜けとった。最終は彼は酸素なしですわ。

大塚 するとカラのやつをずっとしよってったわけだ。(笑) それからもう一つ、いろいろ装備を開発した中で、たとえば綱シヤツとか、辰沼さんがいまパテントを取っておけばずいぶんもうかつたなというふうなもの、なかったですか。

辰沼 「ずいぶん欲のない人ですね。なぜ取らないんですか」と言われたことがあるよ。取っておけばよかったね。(笑)

大塚 だいたい山岳会は、遠征のたびに非常に価値のあるパテントを一つ二つ、必ずこぼしているんですよ。ですから、今後は何かやるときには必ず、山岳会が永久に有

効に使えるいわゆる新案、もしくは特許としてキープしておいたほうがいいんじゃないかと思えますね。

地域社会との対立

小原さん、ぼくらはあのときペーペーで、いまだからうかがうんですけど、一次、二次、三次、と登山隊が続いていき、三次では今度こそマナスルを落とすんだという、タクティックスというんですか、その辺のところは何かありませんか、いまだからという話を聞かしてください。

小原 登山隊をマナスルの村民が拒否したサマ事件というのがありますが、ともかくマナスルに登るとか登らないとかいうことよりも、サマの問題をまず片付けなければどうにもしようがない。それが第三次に受け継がれたときのキーポイントじゃないかと思っただかと思うんです。それで横さんから、「サマの問題を見てこい」と言われたんです。それで結局マナスルへ第三次が入っていいという、スッパというサマの郡長がいて、これはラマの坊さんだけど、その人から登山許可を口頭だけで、もらうわけだ

す。

大塚 それでも、実際に第三次でぼくらが行ったときに、村民からひどい抵抗を受けましたね。

小原 だけど、スッパがそばにいたから。

大塚 また同じことに関連するんですが、これもぼくらはわからないんで、ここではつきり聞きたいんですけど、サマの連中が寺銭よこせと言って、ペーキャンプへ押しかけてきて、あのときは実際はどうだったんですか。たしかに、おさい銭としてお金を払いましたよね。

小原 払ったですね。

大塚 横さんは渋い顔して上ばかり見ていくけど、小原さんが実際に全部交渉したわけでしょう。正直に言いなさいよ。(笑)

小原 あれは大した金額じゃないですよ。邦貨に換算すると、非常に微々たるものです。

大塚 たしか四千ルピーぐらいですね。当時の日本円で、二十万円。あのときは、ポーターの一日の賃金はいくらでしたっけ？ 五ルピーかな。五ルピーなら二百五十円だね。そういうときに四千ルピーでしょう。

そのとき、向こうは最初いくらくれと言っ
たんですか。

小原 一万ルピー。

大塚 当然値切ったんでしょ？

小原 それで四千ルピー。

大塚 小原さんのすぐ腕ですもの。ぼくら
にはちっとも小遣いくれなかったけど。

(笑)

小原 だけど、それでも心配だったか
ら、登山中はスッパのフアミリーをテント
のそばへ住まわしておいたわけですね。で
ないと、村民がまた邪魔しに来るんじやな
いかと思って、スッパに頼んで、スッパと
奥さんと思いを終わったらテントをブレゼ
ントするという条件でテントのそばに住ま
わせたんです。それは一つの安全弁だった
わけです。いまから考えるとずいぶん余計
なことをしていたわけよね。

辰沼 しょうがないやね。

大塚 通行税みたいなものではね。マナス
ルの映画でお金の受け渡しのところはずつ
と映っています、横さんは日本側でこつ
ち側に並んでいて、地元の連中があっち側
にいるわけでしょう。日本側に並んでいた

のは、横さんのほかにだれとだれでした
か。

今西 小原さんが横に座っていて、その横
に松田君がおって、その三人が並んでい
て、われわれは外で見物しておった。村木
君やら、みんな外。

辰沼 あのと私は隠れていたんですよ、
ワラ人形に五寸クギを打たれちゃって。

大塚 先生が？ ああ、病気の住民を殺し
たって？

辰沼 何かそれに近いようなことでね。

大塚 いまのお話は、辰沼先生が第一次の
ときに、村人に薬をやったり注射したりし
たけど、悪い医者だということになったん
でしょう。

辰沼 今でもそうです。(笑)

大塚 マナスルでは三十年前にはそんな状
態があって、その後ずいぶん日本人が出て
行くけれども、山田君たちはそういう目に
は全然遭わない？

山田(昇) 特別遭ってないです。ただ、
去年の話なんですけれども、マルシャナンデ
イのほうのマナで、主に日本人に因縁をつ
けてくるというのがあるらしいですね。実

際に昨年、秋に一緒にエベレストに登った
仲間があらに行ったら、村じゅうで追い
かけられたみたいですよ。サマはメンバー二
人だけで行ったというふうなことで、秋に
スキー隊が入っていたんですけれども、そ
れなんか比べると好意的だったですね。一
九八二年の冬にも自分はマナスルに行っ
て

いまして、そのときはあまりいい印象はな
かったんですが、今度はかなりよかったです。
村人がロキシーを持ってきてくれたり
ということがありましたから、前のときは
ちよつと怖い感じがしたんですけれども、
今回は逆にかなり好意的だったですね。

大塚 きつと、少人数だといひんだね。

山田(昇) そういうことも言われました。

小原 しかし、あの連中はマナスルをカン
ブンゲンと言っていたんだけど、サマの部
落からみれば守り本尊というか、信仰の山
だったことは確かだと思う。われわれを邪
魔する意味で、急にカンブンゲンを振りか
ざしてきたんじゃないと思うんだ。そし
て、第一次、二次までは我慢したんだけ
ど、その後あいにく本当に干ばつがあつ
て、作物が取れなかったり、疫病がずいぶ

んはやって、サマの部落の人が病気になるなり死んだりした。そういうことで、日本隊がカンブンゲンを汚したということで、村長が村民からそうとう言われたらしいんです。それで、ああいう挙に出たらしいんですよ。

晩飯は

クリームサンド・ビスケット

大塚 食糧の話ですが、山田さんは一次のとき食糧担当ですか？

山田 (二) そうです。

大塚 一次と三次では、食糧も装備もだいぶ様子が変わっていると思うんですけど、山田さんの記憶では一次のときはいかがでしたか。

山田 (二) 一次は失敗の連続です。日本からヒマラヤへ行くというのは堀田さん以來、なかったもので、たまたま「ヒマラン・ジャーナル」か何かに「ヒマラヤの食糧問題」という文があって、それをだれかが縦文字にして記録したのがあったので、それをもとにしてつくったわけです。消化するのなるべく酸素消費量が少ない食糧がい

いとか、いろんな講釈が書いてあって、たとえばどういう食糧というのでいろいろ出ているんだけど、それはみんな外国人が食うものでね。それでも、やっぱり上へ行つてメシが食えるかどうか自信がないものだから、そういう食糧のリストを作っちゃったわけです。したら、もう総スカンで……。(笑) ベース・キャンパからいよいよ出発して、最初のキャンパに入つて晩飯になつたら、自分で用意して行つてこう言うのもおかしいけど、なんとクリームサンド・ビスケットが晩飯なんです。(笑) それ一箱。翌朝になつたらまた同じもの。昼メシは乾パンか何かだつたと思つたけど。二回食つたら、それでも嫌になつちやつた。用意した人間が嫌になるぐらいだから、みんなからえらい怒られてね。

今西 ヒットビーというのがあったですよ。

今西 ヒットビーというのがあったですよ。

大塚 ゴムみたいな茶色っぽいので、チョコレートの味がしてね。いちばん上のキャンパでは、最後の晩は何を食べたんですか。

今西 朝はオバルチンとヒットビーとお茶

だけ。晩は何を食べたか、ちよつと覚えてない。

大塚 食べ物の中で、あれは傑作というのは何かありましたっけ。

今西 ロール・キャンベツを食べさせてもらったよ。

大塚 あれは問題ですね。誕生日を偽つて二回ほど……。(笑)

小原 ひとの誕生日を材料にして、ずいぶん食べたね。酒はあまり飲まなかつたろ。

山田 (二) 一次はべらぼうに飲んだんです。「麓酒亭」なんていう名前がついたくらいだから。一次は隊長の三田さん以下、

泰安さん、田口さん、辰沼さん、村山さん……。

大塚 そうそうたるメンバーだ。

小原 三次はほとんど飲まなかつた。

大塚 品行方正ですね。

今西 カルカッタの日本領事館でヘネシーのポケット瓶をみんな一本ずつもらつて、それをチビリチビリとやつつた。

辰沼 ベース・キャンパで、大塚が酒飲めないから飲ましちやえというので、村山と二人で飲ましたんだよ。したら、息が苦

しくなって瀕死の状態になって、酸素ボンベ使った。(笑)

大塚 酸素ボンベとマスクのテストだとばかりに。ほんと、ひっくり返っちゃったんですよ。

山田 生体実験だな。

横マナー・スクール

司会 三次隊の一部が船で行って、船の中で外国人のご婦人と一緒に食事するので、たいへん苦勞したという話を聞きましたけれども。

大塚 ええ、船はサンシア号という名前なんですけど、やがて後世に語り継ぐべきマナスの秘話、「サンシア号の反乱」として残るんじゃないかと思うんですがね。(笑) あれはやっぱり、小原さんが言わなきゃ。

小原 いやいや、思い出してもゾツとするよ。(笑) ハーフ・カーゴの船で、神戸からカルカタまで行くのに、一カ月ぐらいかかったんです。とにかく、無電が入ると、荷物を取りに戻っていつちやう。(笑) そういうような、荷物をあさりながら行く

船なんです。われわれメンバーはみんな等の部屋で……、みんなそうだったろ？

大塚 いや、私と日下田君だけはなぜか、その下なんですよ。(笑) それで、文句を言いに行っただんです。まあ、部屋がなかったんですね。

小原 船長がそういうふうにしちゃったんだな。(笑)

大塚 いや、年の順なんですよ。

船が神戸から出まして最初の晩のディナー、まさに正餐ですが、メシだと合図が来たので、みんな知らないから、勝手気ままな格好で行ったわけです。私はネクタイはしなかったけれども、背広は着ていった。

徳永君はアロハを着ていったんです。……グズグズしていて、いちばん最後に行ったら、横さんの横しか空いてないんです。徳さんもグズグズして行ったら、横さんの前なんです。そして、その隣は小原さんだった。あとの四人はその後ろで、喜一つあんとかヤンチャな連中がいて、八人が二テーブルでいたわけです。

最初はどこへ座ってもいいんだらうと思つて、気にしてなかったんです。そのうち

に二、三日すると、どうも窮屈でしようがない。たとえばネクタイを締めていけないと、横さんにさつそく、「君、ネクタイはどうしました？」と小言を言われる。(笑) 徳さんなんか最初にアロハで行ったら、「君、正餐はきちつとしてこなきゃダメです。すぐにネクタイをしてらっしゃい」と言われて、取りに行ったりとかね。

それから、ボーイがいるいろんな料理を運んでくるわけですね。横さんのところから順々に来て、私のところで私がガバツと取ると、「……君、最後の時まで回るように、ちゃんと取りなさい」と言われて、「はい」なんてね。(笑) それでヒョツと後ろを見ると、後ろはガバガバやってるんですよ。(笑) 「お代り」なんて言って、ボーイが何べんも同じ料理を持ってきたりして、盛んにワイワイやっている。こっちはほうはお代りもできなければ、一つの皿を四人で分けるようにしろと怒られている。これは差別もはなはだしいというわけだ、ある時、小原さんにとでもじゃないけど、こんなのを四週間もやっていたんじゃないかなわないから、席を自由に代るようにし

よう」と言ったら、小原さんも「そうだなうだ」と言うんです。(笑) それじゃ、だれがそれを横さんに言うかということ、
「それは当然小原さんですよ」と言ったら、どうのこうのと言って、なかなか言ってくれないんですよ。

小原 「サンシア号の反乱」というんです。大塚 よし、それじゃ、反乱を起こすべえかということになった。夕食を終ると、別のサロンでお茶を飲むんですが、そこで、横さんに小原さんが言ったわけです。「エー、横さん、どうもみんなマナーが悪いよ。だから、メンバー・チェンジして、みんな一応横さんのテーブルについて、マナーを習ったほうがいいんじゃないですか」。

なかなか名案ですよ。(笑)
さすがは小原さんだな、やれやれと思っていたら、横さんが何と言ったかということ、いまでも私は覚えてるんですけど、「いや、自分のテーブルについてお客さんが替わっちゃうと、そのボーイが自分のサービスが悪いと思って心配するから、小原君、それはダメだよ」。(笑) それでおじゃ。それで、とうとう私はカルカッタまで

終始、横さんの横で、どうしようもなかったですね。

島田 (巽) どうりでいまでも、大塚さんのマナーがいいと思った。(笑)
山田 (二) なんて三次だけ船で行ったのかね。

大塚 いや二次も行ったんですよ。ですから、私はずいぶん船に乗ってるんです。

小原 あれはビックアップ・チームだったから、船の中でチームワークをつくるというか、お互いの個性を知ろうと……。

山田 (二) マナーも教えようと……。(笑)
大塚 「マナスル」の映画の中に、船の中でみんなが一生懸命トレイニングしているカットがありますね。あれはほんとに嫌で嫌でしようがなく、あんなことほとんどしなかったんですよ。でも、カメラの依田さんが頼む頼むと言うから……。あれ、やらせてすね。(笑)
山田 (二) 毎日やってたのかと思った。(笑)

マナスルの雪崩秘話

大塚 話は違いますけど、雪崩のことにつ

いてちよっと触れたいと思うんです。マナスルは踏査隊から三次まで、高木のチャカさんが踏査隊のとき、逆さにクレパスに落っこつて、ちよっとケガしたことはありましたが、それ以外には大きなケガもなく、もちろん遭難もない。ポーターがブリ・ガンダキに落っこつちやつたことはありましたけどね。

そういう意味で、マナスルというのはわかりかし何もないのかと思うと、あにはからんや、私が「山溪」のクロニクルで調べたところによりますと、この三十年で二十八人死んでいるんですよ。十一件・二十八名死んでいて、そのうち雪崩が五件あって、二十一人死んでいる。延べで言いますと、この三十年で五十一隊入っております、二十隊成功し、山田昇さんの隊が七十一、七十二人目ですね。ですから、延べ七十二人が頂上に登っているんです。それを見ても、マナスルという山はうっかり油断をする雪崩でやられてしまうという危険が非常にあるわけです。

私どもの第三次でも、やはりすごいかわい雪崩があつたんです。そのことをちよっ

とお話ししたいと思うんですけど、みんな現場にいたわけですけど、私と辰沼さんは鯨の背とって七二〇〇の第五キャンプにおりました。これはたしか五月八日で、今西さんはその上にいたんです。

今西 登ってる最中。

大塚 その下の第四キャンプはアドバンス・ベースで、小原さんや加藤喜一つあんもそこにいて、その日は登頂態勢の一步前のスタンバイの日だった。五月九日、今西さんは頂上へ登ったわけですから。その前の日の五月八日はわりと天気の良い日で、私や辰沼さんは日なたぼっこをしていたんです。そして、すぐ後ろのものすごいでかい懸垂水河が欠け落ちましてね。下から見ると、私どものキャンプの右側、第四キャンプは左側の方向を通過していったんです。どこも被害を受けず、だれもやられずにすんだんですけど、第四キャンプはすごい雪煙に襲われて、テントの中は真っ白になるくらいだったそうです。加藤喜一つあんの話を聞くと、そのときあわててはだしになって逃げたそうです。

その後いろいろ話を聞いてみますと、や

はりそこがいちばんやられるんですね。近くはつい去年の秋行きました降旗さんのスキー隊、それから最も悲劇的なのは韓国隊が……。一九七二年の第二次隊のときに雪崩で一氣に十五人もやられているんですね。ですから、そういう意味ではあの山は注意しないと雪崩でやられる。山田さんのときはどうでした？

山田(昇) 二度行っただ中で、大きな雪崩というのはいちばんなかったですね。冬ということで、それほどなかったと思うんですけど。ただ、七〇〇〇メートルちよつとぐらいのところを最終キャンプにしたもので、そこところは風が吹くとゴォツツと音のした後に、上のハンギング・グレイシヤーから小さいかけらがバラバラ落ちてきました。そのうち、大きいのがポーンと落ちてきたら危ないなという気持ちでしたんですけど、一晩だけだからということ……。(笑)

今西 私、帰りまして、伊藤憲さんという甲南の方が入院しておられるのを見舞いに行きましたら、「何というけしからんルートをとった」と言うて叱られました。そ

の下をトラバースしているわけですから、やっぱり危険なところですね。

小原 あのと、大塚君は第五にいて、ぼくは喜一と一緒に第四にいたんだな。そのときにぼくは、上の雪庇が折れるのを見ていたんです。ちよつとスローモーションみたいに、ザーッと落ちてきた。第五に向かってダーツと落ちてきたんで、喜一と「あ、第五がやられる」なんてやっていった。(笑) そのうち、だんだんこつちへ向かってくる。(笑) 喜一は靴をぬいで水虫がどうだとか言って、寝転がって日なたぼっこをしていたわけ、そこへ加速度をつけて、第四にまっすぐ来た。それで二人で、反対の崖へ駆け上がったんだ。そして、テントのすぐそばをすごいスピードで落ちていった。喜一とくだらない話しながら、ちよつと外にいたからよかつたんだね。大塚 そのとき、マメちゃんはいくえにいたんでしよう。ナイケの話、しなさいよ。松田 楨さんがちよつと用を足している最中で、腰を抜かしてその上に座ったとかいう話があるけど、それは全くのウソで……。(笑)

辰沼 あれは喜一がつくった話だな。(笑)

松田 慎さんは雪崩のことを非常にうるさく言ってます、第四から第五へ行くときなんか、寒いから朝スタートが遅いんですよ。そうすると慎さんが、下から無線機で「もっと早く行きなさい」と、言うときもたいへん丁寧に言うんですけど、そうすると上で、「そんなこと言ったって行けるもんか」なんて言っていてそれが全部聞こえてきちゃうわけです。(笑)それで慎さんはまたカッカしている。

慎さんは終始雪崩のことばかり気にしています、第四キャンプの場所を選定するときも、両方からの角度とか死角を検討しろとか、非常に慎重でしたね。ほんの10メートルでも寄っていたらやられちゃうというようなところでしたから。

小原 収まって、大丈夫だって無電で話したね。

大塚 その無電が二から四、ナイケから小原さんのところ、そして小原さんを経由してぼくのところへ来たときにはもう、慎さんはウンチの上へ尻餅ついて、つてなつていた。(笑) みんなでワーツと拍手をして

ね。だれがどこでつくったのか知らないけど、いまでも信じてるわけ。

山田(二) あの場所は第一次のときにも喜一つぁんと一時間ぐらい盛んに議論したんですよ。たかだか一〇メートルぐらいしか違わないんですけど、おれはこっちだとか、あいつは向こうだとか言ってるね。そのときには結果的には落ちてこなかったけど、非常にいやな感じでしたね。

大塚 ……そろそろ時間になりますけど……。

ただいまリクエストがあったんです。まだ世間に発表してないことがあれば、今西さんに登頂の感想、様子を話してもらいたいです。

今西 何もありません。第三次の登山隊が失敗したら、もうこれで日本は行けない、終りだ、というような状態になってましたね。資金的にも、もうお金は集めることはできないということ。ですから、何とかして登らないかんとということでしたから、

山田(昇) 頂上に行くところの最後、ピークが五つぐらいありますね。あの辺に自分たちも行って見て、ザイルをつけないで

行こうかという気持ちもあつたんですけども、結局あそこまではザイルを使わずに行つて、あそこだけザイルを二人でつけたんです。あそこら辺、かなりいやらしい感じが続くんですけど……。

今西 雪がちよっと軋らなく、気持ち悪いところ。

山田(昇) ギャルツェンと登っているときには、彼が確保したわけですか。

今西 はい。

山田(昇) 心配とかなかったですか。

今西 いや、ありましたね、ややこしいところで、向こう側は雪庇みたいになっていて、こちらはスポンと切れるし、雪が締まっていなくてフワフワしてるから、気持ち悪かったです。下のほう、プラトリーのほうはかなり締まってるんですけどね。頂上も雪は締まっていな。

会員 頂上ではギャルツェンとどんな話をしたんですか。

今西 ベリー・ラッキー。(笑) それ以外は何もない。(笑)

(カット写真撮影・滝川清/構成・大森久雄)

図書紹介

島田 巽

『山稜の読書家』

茗溪堂 一九八五年九月刊 A5判 三八〇
ページ 定価三九〇〇円

書物を通じて先蹤者の足跡を辿るたのしみ

これはいい書名だ。この本を最初に見た時にそう思った。いい書名というのはその本の内容を的確に表すと同時に、著者に接した時に常々感じ取っている雰囲気があるまま思い出されるようなものでなければならぬ。

私は早速、今からちょうど十年前に出版された島田さんの『山・人・本』を取り出して机の上に並べて見た。何れも同じ出版社が念入りに作り上げた二冊の本であるから当然かも知れないが、読了後は書架に並べて置き、屢々読み返したくなる本である。なお、山稜の読書家とは、遠征中の登山家たちが山中でどんな本を読んでいたか、についてのこの本の最初に置かれた名篇である。

勿論島田さんにはマロリーの追想『遥かなりエヴェレスト』があり、三十年前には『ふだん着の英国』があり、ヒラリーの『わがエヴェレスト』、エヴァンズの『カンチエンジュンガーその成功の記

録』の訳もある。朝日新聞社欧米部長、論説委員、人事院人事官など島田さんの公の御仕事を一つ一つ紹介して行く訳には行かないが、仮りにこの本で初めて島田さんの本に接する読者は、随所でこの経歴を感じられるに違いない。

一九〇五年生れの著者は八十歳。「旧稿を読みかえしながら痛感したのは、私の眼が、山登りの主体であるはずの山そのものよりも、山と取組む人たちの反応のほうに、より強く向けられがちな点であった。自伝や評伝を好むのも、おそらく同一線上にあるのだろう。」とあとがきにあるように、この本にはいわゆる登攀の記録や紀行の類はない。然し書物を通じて先蹤者たちの足跡を辿るたのしみ、また彼ら登山家としてのさまざまな心情を私たちに伝える文章は、まことに興味深いものがある。『山・人・本』に取り上げられている登山家の数、その書物の数を併せれば、これ程多くの内外の山の書物を丹念に読まれた人は珍しい。

今度の『山稜の読書家』では、六十篇近い文章が八つのグループに分けられ、直接山に関係のない題材も入っているが、それがまた著者の雰囲気をもよりよく読者に伝えるものであって、笠信太郎、小泉信三、久保田万太郎などの回想なども貴重な話である。

要するにこうした本からは、山を愛する多くの人たちが、山に登る以外に、山に対し、また人に対してどういう態度で臨み、何を考へて実行すべきかを、懇ろに教えられる。単に山岳書を愛好する人たちのための本ではない。

(串田孫一)

(信濃毎日新聞 一九八五年九月三十日より)

にじみ出る人柄と学識

これは著者のあたたかなお人柄と深い学殖がさりげなくにじみ出ている書物である。日頃、日本山岳会の図書委員会で親しくさせていただいている私は、山と人と本をめぐる随想のどれをとっても、島田さんならではの感をふかくする。それだけに、くりかえし読みたくなる本である。

表題となった巻頭の「山稜の読書家たち」は、ヒマラヤへ出かけた登山家がどんな本をたずさえていったかを中心に話がすずめられる。一九八二年、ドゥラギリI峰の冬期登頂をはたした北大隊の隊長安間荘氏は、島田さんの『遙かなりエヴェレスト・マロリー追想』を持っていったという。老登山家の著者は「私自身よりも著書の方が、はるかに高いところまで登らせてもらったわけだ」と書いているが、それにつづいて、マロリーがロバート・ブリッジス編の詞華集『The Spirit of Man』や『ハムレット』『リヤ王』を、ティルマンやノイスが『カラマーズフの兄弟』を、ボードマンが『ジェルミナル』『分別と多感』をキャンプのなかで読んだというエピソードが紹介される。山稜での読書がその登山家の内面をしめすものとして、実に興味ぶかいエッセイである。

このことはたんに登山家のエピソードをひろい上げたという点にとどまるものではなく、むしろ著者の人生に大きくかかわってきたものとおもう。朝日新聞にあつては欧米部長、ロンドン総局長、論説副主幹をつとめ、のちに人事院人事官の大役を全うした島田さんが、青年時代からの登山と交友と読書をとおして、優れたものをつ

ねに学びとってきたことの証左にほかならない。本書のなかには、ウエストン、小島鳥水、木暮理太郎、辻村伊助、横有恒、三田幸夫、松方三郎、大島亮吉、藤島敏男その他、さらにシプトン、ヒラリー、ハントなど英国の登山家たちの生涯について、このころのこもった多くの記述があつて、著者が山と人のなかに読みとった、芸術味ゆたかな、自由な精神を感じとることが出来る。登山家の自伝、紀行、記録、あるいは評伝をとおして、未知と高みをもとめつづけた登山家たちへの共感とともに、控え目におのれを語っている。それが読むもののこころを打つ。

「ある朝の回想」「記憶のページ」にあらわれる歌人・片山廣子（松村みね子）、日本亡命中のブルーノ・タウト、雪後庵の谷崎潤一郎、恩師・小泉信三、先輩・笠信太郎、ロンドンにおける久保田万太郎なども、島田さんはその一面をとらえて鮮かに人物像を浮きぼりにする。たとえばタウトに若い記者として親しく接したいきさつは、たいへん感動的である。これらの文章は、ハントがモットーとした *Life is meaning* に通ずるものとして収録したというが、人との出会いを大切にしてきた著者のあたたかさを改めて教えられるのである。

(近藤信行)

(週刊読書人 一九八六年二月十日号より)

田淵行男

『黄色いテント』

実業之日本社 一九八五年十一月刊 A5変

型判 三七八ページ 定価三八〇〇円

内容外観ともに格調高い、近來稀な山の本の傑作

—四十余年の歳月をさかのぼって思いをその頃に馳せると、随所に黄色いテントの花開いた遠い日の山旅の基地が回想の翼を張って次々に臉の裏に甦ってくる。(自序にかえて)

田淵行男さんにとって、この本は二十九冊目になる。

昭和二十六年に朝日新聞社から刊行された「田淵行男山岳写真傑作集」で山岳写真家として独自の世界を創り、昭和三十四年には「山の朋文堂」から不朽の名著『高山蝶』を上梓してナチュラリスト、エコロジストとして確乎とした業績と地位を示していらい、私にとって田淵さんは山の上に輝く星のように遥かに仰ぎ見る理想像であった。

その写真集から受けた感動が自分の道を山岳写真へと向けさせ、高山蝶という稀品の生態を追求し解明していくフィールドワークの手法と学問上の業績に、自然や生物たちへの新しい眼を開かされたものである。

ことに、今でこそ一般的になった生態学を氣象条件の悪い高山帯に持ちこんで、例えばタカネヒカゲが卵から成虫になるまでに三年

もの歳月がかかるといった、他の蝶類の常識をくつがえす生態を発見するなど、象牙の塔にこもりがちの排他的アカデミズムを超越した存在であった。

その果実は二十八冊の著書の中にたわわに実っているのだが、映像表現の適切な技法と同時に、臨場感のある文章が実に魅力があつて、学問上の成果を種子に、写真、詩、随想、紀行などを豊かな果肉にした作品集として、読者それぞれの姿勢によつて自由に読まれてきたと思う。いや、読むというより、正確で余韻のある写真を見、その周辺の情景を文章で補足して、自然科学を一種の芸術として觀賞して来たというのがおおかたの接しかたであつたろう。

この二十九冊目の『黄色いテント』は、今まで写真を主体にし、文章を従にしていた作品集とは異質の随筆集である。

しかし、ただ書きとばしただけの、並の文章ではない。この一冊の中に、ずしりと座っている田淵行男像のすべてが描かれているのである。

今までの著書は果実や花を中心にしていただけで、この一冊では、田淵さんという巨木の幹や根、枝から葉末の露の輝きに至るまで読者に見せてくれる。それも第二次大戦前から現在に至るまでの五十余年にわたる田淵行男の人・心・仕事の全域について、である。

「今時、夢にも考えられぬ類の自由な山との応対」があり「今時とは別世界のように原始の静けさを保ち、自然も無傷で豊かで魅力に満ち……私はテントを好き放題に張って、何はばかるところもなく山を歩き、山を眺め、山を写し、山に没入できたわけで、私の

山歴中で最も豊富な時代であったように思われる。(自序にかえて)という戦前から戦後の一時期に、山の自然のすべてに異常なほどの興味と執念と集中力とを持った自然科学者兼写真家が存在したということさえ奇蹟のように思えるのだが、それを楽しい読みものとして机上に置き、読後に爽やかな山の風を感じることができるといふ幸せの向うに隠された著者の努力や忍耐、工夫など、この一冊の本でいわば舞台裏まで垣間見ることが出来る。

最初の一章「山頂の石」では、やっと辿り着いた山頂の喜びを他の人にも分かちたいと三六〇度のパノラマ写真を撮り、同時に記念になる石を探した古き良き時代が舞台。

しかし、ただの石ではない。大きさは拳二つぐらい、形はその山に似たもので、そのままずしんと座りのいいもの、しかも初めて山頂を踏んだ時のものに限る、などといった制約をつけている。その蒐集のエピソードと同時に山容と対比した写真までつけられている。その、その相似性に感心するばかりだ。

この最初の文章で、読者は遊びや記念品にさえきちんとした規格を与え、それを満すために何時間もの採集時間を割く、という几帳面で、しかも粘り強い著者の姿勢に気づくに違いない。そして同時に、五十年前の行為を振り返り、現在高まっている自然保護の点から見て自責の念を抱くといった、繊細な心の動きを正直に告白している。第三者から見れば戦前のことだからと気にするはずもないのだが……ここにも奥床しい著者の人柄を見るのである。

「雷鳥の寝袋」という文章では「由来、私は山でいろいろ拾いものをする癖があった。落葉や木の実から始まって、昆虫の死骸や

変った岩屑、蝶の翅まで、山路で目にする自然の落し物はどんな些細なものにも心を惹かれ、そのまま見過せなかった」と言い、ライチョウの落し羽からいろいろな推理を働かせている。その好奇心に満ちた蒐集や分析推理癖は、高山植物などの突然変異・アルビノを探し求め、クロユリ、ハクサンフウロ、コマクサなどの白花や、コマクサやハクサンイチゲの黒花、八重咲のクロユリ、シナノキンバイ、チングルマなど五十七種にも及んだ。ゴゼンタチバナの実が一本に十九箇もついているものを探し出し、そこから頭状花序の精細な観察に入り、実は最も多い場合で四十一、少なくとも九つの小花群がついているのを発見し、結実確率の少なさを実証している。また、六葉は結実するが、四葉のものは実がつかない、と言われている点も、観察を重ねて正しくないと断定している。

一見、何でもないうようなことだが、この現場観察主義こそ、田淵行男さんの仕事の神髄なのである。

山の怪談というタイトルの中の「さまよう砂」、「山頂の蛙」なども好奇心と蒐集、観察推理、実証といった不断の訓練がなければつい見逃してしまう出来ごとであろう。

「山路蝶信一束」の項では独擅場とも言うべき高山蝶についての作品が納められ、「山の樹列記」と共に著者の自然に対する柔らかくて優しい眼ざしと鋭い観察眼とを充分に堪能させてくれる。

そして写真集ではなく随筆集ならではの作品として「或る単独行者の独白」や「滑落の心理」など登山者としての内面の吐露や、ユーモアを混えた「山の残酷物語」の中の「登り優先」や「いびきノイローゼ」など、山好きなら何時か或る日、どこかで思い当る思い

出を持っていて、思わず笑いをさそわれてしまう作品など、この一冊には、今まで見せなかった（というより見過していた）多彩な田淵行男像の破片がいっぱい散らばっている。

『黄色いテント』というタイトルは、長い歳月を田淵さんと共に山行を重ねた愛用のテントの、明るいキスゲ色のような回想を含めた作品集にふさわしい。

出版予定は昭和三十五年頃だったとか。二十五年も遅れてようやく陽の目を見たことになる。遅れたおかげで北海道大雪山での高山蝶その他の新しい作品も収録され「登山風俗誌」という一面さえ持つようになっている。

彼が長年使ってきた黄色いサブマリン型テントは解体され、この本の特装限定版（八十五部）の装幀に使用されたとか。本造りの点でも、実にユニークな作品集で、いかにも凝り性の田淵さんの本らしく、内容外観ともに格調の高い、近來稀な、山の本の傑作である。

（三宅 修）

（編注。『黄色いテント』特装限定版（定価二万円）の表紙に使用されたのは、本文中にある「彼が長年使ってきたサブマリン型テント」ではなく、それ以前に使用していた薄緑色のもの。黄色いテントは、現在、長野県豊科町の郷土博物館に展示されている。）

久保田展弘

『山岳霊場巡礼』

新潮社 昭和六十年二月刊 四六判 二二四
ページ 定価七八〇円

青木 保

『御岳巡礼』

筑摩書房 一九八五年六月刊 四六判 二二三
四ページ 定価 一三〇〇円

近代登山につながる信仰登山を見直す好著

私事で恐縮だが、私の祖父は御嶽教の信者であり、生前、先達として多くの信者を連れて木曾へでかけていた。父は無信心だったが山は好きで御嶽に登っており、私も家族を連れて爆発騒ぎの年の七月に登った。御嶽は我が家にとって父祖四代の山である。

しかし、私自身御嶽には三度登ってはいるものの、御嶽教についての知識はほとんど皆無に近い状態だったのだが、最近右の二冊の本に接する機会を得た。これは山岳信仰の書というばかりでなく、山に登る日本人の心の問題にも触れており、登山者にも推奨したい好著なのでここに取り上げた。

『山岳霊場巡礼』の著者、久保田展弘氏がジャーナリスト（『大法

輪』副編集長、『御岳巡礼』の著者、青木保氏が文化人類学者（大阪大学人間科学部教授）とそれぞれ立場はことなるが、両者共通している点は、実践的、体験的な方法で山岳宗教の核心に迫ろうとしていることで、この点つよい説得力をもっている。すなわち、久保田氏の場合は南部恐山、出羽三山、木曾御嶽、比叡山、大峰山と熊野三山、高野山、立山、白山をとり上げているが、「歩く宗教学」を提唱し羽黒修験の峰入り行や奈良大峰山系の奥駈け修業を通じて、浮世離れたものにみえる山中の「行」が、いかに現代の「生」に密着し直結したものであるかを体得し、青木氏の場合は御嶽教の信者の中に入り、「御座立て」の儀礼に参列して、中座に神が降りる憑霊現象——神おろしの状態を直視し、実際に御嶽に登拜している。ともに机上の文化論でなく、自己の心身をその対象に没入している点が魅力で、読む者の共感を呼ぶ。

日本民族は、東南アジアの人びとと同様、多宗教的性格をもっている。それは人間の住みやすいおだやかな自然環境と深い関係があるが、悪魔が棲んで山麓の住民と対峙した西洋の山岳とちがい、日本の山は自然の恵み豊かな、里人に摩訶不思議な生命力を与えてくれる「神霊の宿る高み」であった。わが国では役行者の大峰開山など、修験者の峰入りにはじまる「行」の登山ののち、近世に入ってから「講」形式の宗教登山がおこり、民衆の間に浸透していったことは周知の通りだが、木曾の御嶽もほぼ同様の歴史をたどっている。しかし青木氏によると、御嶽は他の霊山とちがい多くの人びとにむかつて開かれた自由な山であった。これは修験者による入山の時期が他にくらべて非常に短く、しばらくは行者不在の状態であったこと

によるもので、そのために特定宗教集団の管理下に入ることをまぬがれて一部の行者の山になることなく、大衆登山の時代を迎えられたのだという。

山が大衆のものとなるのは、前述のように近世の講による集団登山からだが、御嶽の場合、このさきがけとなったのは尾張の覚明と武蔵の普寛の二人の行者だった。

覚明は地元黒沢村で霊山御嶽を護る神官武居家の圧力と闘いながら、ついに山を多くの民衆に解放することに成功する。百日の精進潔斎の行をおこなわずに簡単な水行で済ませるといふ軽精進で、黒沢口から登拜を断行したのである。その後も武居家を通じてさまざまな迫害が加えられるが、これに屈することなく、木曾福島代官所や尾張藩に働きかけつつ登拜をつづける。この結果入山者は日を追って増加し、木曾谷の村々に経済的な潤いをもたらすことにもなり、一七一九（寛政三）年、軽精進による御嶽登山は正式に認可される。この背景には、天明期の深刻な飢饉があったのだが、救世主はもう一人あらわれる。江戸の普寛で、彼は翌年王滝口を開いたため、御嶽登山は隆盛にむかう。しかし、経済的な理由から黒沢村と王滝村が登山口をめぐる対立し、これが覚明講と普寛講の宗教的対立にまでエスカレートしてゆくことになり、結局各講の先達の名前や、出身地の名称を自由に名乗ってよいという、「講名の自由」の方法をとることで解決したという（青木氏）。

御嶽が、「開かれた山」であることの理由の一つがここにもあり、宗派を超えて多くの登拜者が山を訪れていることが納得できる。

もう一つ、私自身が登っていて気がつくのは、中高年の女性が多

いことである。この点について久保田氏は、「御嶽山には白装束の女性の登拝者がことのほか多い」のは、女人結界までで山頂こそ踏めなかったが、女精進、井田道者と呼ばれる女性信者が、古くからいて修業に励んでいた名残り、女人禁制がきびしかった時代から、御嶽は女性の入山について寛大だったとしている。ちなみに井田道者、湯田道者は、東北地方のイタコや沖繩地方のユタに通じる、と御嶽研究家の生駒勘七氏もすでに触れており、男性がつかさどる御嶽特有の中座の前身が、あるいは巫女のような性格のものだったのではないかと推測されて興味ぶかい。

御嶽といえ、木喰僧円空も登拝している（久保田氏）。円空が木曾谷に入ったのは、覚明や普寛が大衆登山をめざした時代より百年も前の江戸初期で、生涯十三万体の造仏を悲願とした円空の素朴な鈍彫仏のうち、木曾谷一円から十九体が発見されている。木曾の銘木ヒノキの素材に、ナタとノミを振って荒々しく刻みこんだ大泉寺の韋駄天像の合掌姿に、覚明や普寛ら先駆者の姿を連想するが、円空は地元の道者のガイドで御嶽に登拝し、そのあと木曾駒ヶ岳にも登頂しているという。餓飢に苦しむ民衆救済のために五穀を断ち、みずからの肉体に苦行を課し、おびただしい数の木造仏を祈りつつ刻み、霊山に分け入った木喰僧達のすさまじいばかりのエネルギーはどこから湧いてくるのだろうか。

彼等は、「山中に入って自然と一体となりすべての思ひつきにわが身の鼓動を聴く」（久保田氏「あとがき」）ことよって、山中に潜む霊力を全身に吸収しつくし、下山してはナタやノミを振った。求めて山に入る人間に対して、山は若々しい生命力を与えてくれる

「行」の場であったのであろうか。

しかし、こういつたきびしい修業をわが身に課する行者や、重精進して登拝する道者の数はきわめて少なく、「講」による集団登山者の数はかなり多かつたはずで、一般人はたとえ信者であってもピンからキリまであって、少なくとも生活が安定しはじめた明治以後には、信仰半分、レジャー半分が大部分を占めたにちがいない。この江戸時代からつづく講が、日本における近代登山の底辺を構成したことを考える時、改めて講の歴史をじっくりと振りかえってみることが大切なのではないかと思われてくるし、この二冊の本が日本人の山に対する心の軌跡をたどる、いい道しるべ——案内書となるように思われるのである。

（伊佐 九三四郎）

ワルテル・ボナツティ、千種堅訳

『わが冒険』

白水社 一九八六年三月刊 四六判 二四三
ページ 定価一九〇〇円

シフトン、ティルマンと重なるボナツティの魅力

三十年ほど前に、総天然色の映画「K2」を見たことを憶えている。一九五四年、イタリヤ隊はK2に初登頂。だが、この遠征で隊員のプシヨーズが死んだ。雪降りしきる中を、彼の遺体がスノー・

ポートで氷河の中を降されて行く。セピア色の画面が胸を苦しくさせ、それがそのまま未だに、ひよっこり思い出されることがある。ポナッティはこの時二十四歳で、最年少の隊員であった。

『ガッシュヤブルムIV』マラーイーニ著、牧野文子訳のこの本は二度も三度も読んだ。カラコルムへの憧憬をかき立てられ、筆者も彼の地を踏むことになった。ポナッティはこのとき朋友カカロ・マウリと共に岩峰GIVの頂きに立った。一九五八年、彼が二十八歳の時である。

そして、一九六五年、三十六歳の時、彼は単独でマッターホルン北壁の冬期登攀に成功。全世界の報道機関が、信じられないほどの驚異的な登攀であるとして、大々的に伝えた。

しかしながら、彼はこれを最後にアルピニズムの世界から去って行く。

山を降りたポナッティは、以後世界の秘境を訪れる冒険の旅に身を委ねる。本書はそのルポルターージュである。「オリノコ川の源流で」では、南米のコロンビア、ペネズエラ、ブラジルの三国の境界が合する原始林の中に分け入り、現地人ワイカとの出会いなどを記している。

「クラカタウ」では、スマトラ島とジャワ島を区切るスンダ海峽にある火山クラカタウを、「オーストラリアの赤い中心部」では、オーストラリア中央部にある大岩塊エヤーズ・ロックやデーヴィルズ・マーブルを訪れ、無人の荒野エア湖東部をたった一人で踏破する。「メルヴィルのあとをたずねて」は、太平洋上にあるマルケサス群島の一つ、ヌク・ヒヴァ島へ渡るのだが、これは『白鯨』を書

いたメルヴィルの処女作『タイピー』を読んで、その舞台となったこの島を訪れてみようと思ひ立つのである。本書冒頭の「オリノコ川の源流で」でも、ドイツの偉大な地理学者アレキサンダー・フンボルトの書いた『新大陸の赤道地域の旅』が彼の冒険欲を唆ったようだ。すなわち、「一七〇年以上も昔の偉大な学者の日記に描かれた景色が変わっていないかどうか、またどれくらい変わったかを見ようというのだ」と彼は書いている。

本書の中では、残念と言おうか、もつともだと言おうか、「アコンカグアの不運」がやはり読物としては面白い。アコンカグアの単独登頂といっても、これまでの熾烈極まる彼の登攀歴からすれば、物の数ではないのだが、かつての世界最強の登山家が、登山許可を出す軍人や、たまたま一緒になったスペインの三流登山家達とのいざこざに悩まされながら、登頂を果す様子などは、何となく物悲しい。

「世界の果てで」は南米最南端のホーン岬やパタゴニヤでの体験を書き、「ニイラゴング、地獄落ち」ではアフリカ中央部のザイールにある火山ニイラゴングに登り、火口の様子を描写してみせる。彼は南洋の火山クラカタウにも行っているから、火山行は二度目だが、彼の描写より映画や写真で見ると火山の方が凄まじい。

「原始の人びとの間で」は、ザイルのピグミー族やニューギニヤのペニス・ケースで名高いダーニ族訪問記である。

「わが思い出の地、南極」では、南極のスコット基地のすぐ近くにあるリスター山やラッカー山での登攀のことなど記している。

最後の「アマゾン川の水源にて」では、アマゾンの源流を求め

て、ワイワツッシュ山群の東部へと入り込む。ここからアマゾンの大支流マラニオン川が流れ出ているのである。そして貧しいインディオ達との出会いなど。これは一九六七年の旅である。その後、十一年を経過した一九七八年にもこの地を再訪し、今度はこのマラニオン川に沿って下って行く、荒れ果てた風景が続き、貧しいインディオ達と再会する。

本書には、原始林、荒野、氷原、火山、砂漠、岬などの文明果つるところを背景に、孤独、哀感、無意味、幻滅などといった、若き日のスパー・アルビニストにはあまり縁のなかった情感が、色濃く漂っている。

十九歳（一九四九年）の時のグラランド・ジョラス北壁の登攀から始まり、モンブランのフレネイ中央岩稜の死の脱出行までを書いた『わが山々へ』（近藤等訳・白水社）と、それから以後、マッターホルン北壁の冬の単独行まで、すなわち彼がアルビニズムと決別するまでを記した『大いなる山の日々』（横川文雄訳・白水社）を合わせて読めば、アルビニスト・ボナッティと言ひより、人間ボナッティの姿が次第に浮彫りにされ、超人のことや孤独、スパー・アルビニズムや荒野の旅などについて、考えさせられることが多い。八千峰への大遠征隊の記録とはまったく異なる、個人を追求しようとしたボナッティの手記には、シプトンやテイルマンの姿などとも重なり合うものが多い、と思うのは筆者だけではないだろう。

（田村俊介）

田中清光

『山と詩人』

文京書房 一九八五年十二月刊 A5判 六
九四ページ 定価八五〇〇円

日本近代の自然詩人へのオマージュと精細な山の詩の通史

昨年の暮、日本の近代詩史にかんする二つの力作が刊行されたのは、それが山と自然と風景にふかいつながりがあるだけに、たいへんよろこばしいことであった。ひとつは野山嘉正氏の『日本近代詩歌史』（東京大学出版会）であり、もうひとつは、ここに短い感想文を綴ろうとする田中清光氏の『山と詩人』である。野山氏が幕末の漢詩史から近代詩への変容を語り、西洋詩憧憬と伝統詩の変革のなかで、透谷、藤村、有明、泣菫、鉄幹、酔茗、白秋、茂吉、啄木、哀果、子規、赤彦らを中心に詩歌史の構想をうちだしたものとすると、田中氏のそれは、明治、大正、そして昭和の現代にいたるまでの山をうたった詩人、山と自然を描いた散文家たちを祖上にのせている。前者は篤実な近代文学研究者による論述であり、後者は、戦後、詩作をつづけてきた著者の自然詩人たちへのオマージュであり、詩書博搜のレポートと読める。

レポートという手軽そうにきこえてしまうが、実はたいへん重厚で、精細な山の詩の通史である。序の一節に「百年の詩のテキストは歴大なもので、当たった書物は単行詩集、雑誌、アンソロジーを

含めて三千冊を越えたと思う」とあり、山の詩を読みなおすことによつて、近代における日本文化の変容のなかで「自然」がどのように見出されたか、古来の自然観がいかに生きつづけたかを考えようとしたという。近代詩を考えることによつて、現代の最大関心事である「自然」の問題を問ひなおそうとするあたり、その意気はさかんである。

北村透谷の『蓬莱曲』から筆をおこしたのは、野山氏の「西洋詩憧憬の結実」の章と軌を一にしたようなおもしろさもあるが、田中氏はさらに執拗に、綿密に、山と自然に魅せられた詩人・文人たちを逐つてゆく。落合直文、国木田独步、宮崎湖処子、島崎藤村、土井晩翠、横瀬夜雨、伊良子清白、河井醉茗、与謝野鉄幹、薄田泣菫、蒲原有明、加藤介春、小島鳥水、高村光太郎というぐあいに、ひろい意味でいうと、明治の浪漫主義文学の側面にきりこんでゆくのである。詩人たちの伝記的な事柄をも多く援用し、時代背景を書きこみつつ、彼らの「自然」をとりだしてみせる。

大正期にはいると、福士幸次郎、千家元麿、北原白秋、三木露風、室生犀星、山村暮鳥、萩原朔太郎、日夏耿之介、田部重治、吉江喬松、辻村伊助、横有恒、白鳥省吾、福田正夫、富田碎花、佐藤惣之助、野口米次郎、三石勝五郎、八木重吉、宮沢賢治、大島亮吉、冠松次郎、中西悟堂らが、昭和前期となると、岡村潤、萩原恭次郎、小野十三郎らアナキスト系の詩人たち、春山行夫、安西冬衛、北川冬彦、村野四郎、中野重治、小熊秀雄、壺井繁治ら、モダニズム、プロレタリア系の詩人たちをはじめ、藤木九三、竹内勝太郎、井上康文、尾崎喜八（戦後にもあらわれる）、吉田一穂、更科

源蔵、伊藤秀五郎、河田楨、田中冬二、草野心平、金子光晴のほか「コギト」「四季」の詩人たち、さらに「疎開文学の自然」の章が設けられて、堀口大学、佐藤春夫、三好達治、丸山薫の四人を登場させている。このように周到な配慮がなされ、詩の鑑賞と詩人たちについての叙述が一体となっている。

また昭和の戦後期となると、「書くことはすべて戦後にはじめられた」という著者の生きてきた時代だけに、実感をともなつて先輩知友の詩業にふれている。鳥見迅彦、串田孫一、井上靖、秋谷豊、山本太郎、辻まことにそれぞれ一章がたてられているのだが、そのなかに著者自身の詩業も、『山脈韻律』『メモ』の章としてくわえられる。

「自分が戦後、山を題材にした詩も書いている以上、自分の詩における山や自然についての考えを述べておく責務のようなものにも促される。ここでは窮余の策であるがメモ風のものを記しておく。」
「私が山を題材にして詩を書いたのは『アルプ』からの依頼にはじまる。その頃の私にとって『自然』はたいへん興味ある題材ではあったが、それは無垢の神話的な空間を紡ぐべき素材としてであり、その土壌としての暗部をもつエロスとして感受されていた。」とあって、自作「冬の牙」「岩壁登攀」の二作を引用している。

私はこの大著を、日本近代の詩と自然にかんずるもつとも精細な通史として読んできたのだが、ここに至つて客観性の失われるのをおぼえた。詩人として山と自然にかかわつてきた自分の責務というのはわからぬこともない。しかしたいへん残念なことだが、著者はついに一章を設けて顔を出してしまつたのである。

顔を出すなどというのではない。むしろ己れを語るのはいかに結構だ。その己れの語り方、表わし方によって、そしてまた自分を律する力によって、文学表現は生きるのである。そこには自分にたいする慎ましき、厳しさが問われるはずである。

短歌、俳句など短詩型文学がとりだされていけないのは、自由詩と散文を中心とした著者の意向によるものであろう。たとえば、短歌における斎藤茂吉、窪田空穂のごとき存在、俳壇における飯田蛇笏、前田普羅のように山を凝視してやまなかつた人々、そのような透徹した詩境をとりだしてみてもよかつたのではないか、とおもつた。

(近藤信行)

山崎安治

『新稿・日本登山史』

白水社 一九八六年一月刊 A5判 五四四
ページ 定価 六八〇〇円

山岳愛好者に与えられた最良の贈り物

どんな分野でもあれ、通史というものを書くのは難かしい。莫大な知識の蓄積と鋭利な歴史感覚が必要とされる。その上、単調に陥りやすい叙述を避け、読者の興味を最後のページまでつなぎながら、書きおすのは至難なわざだ。そのための手法として、物語的

叙述が工夫されたりするが、これとて度が過ぎると、誇大で空疎な弊をまぬがれないし、資料に忠実であろうとすれば、どうしても客観的事実の羅列に終始してしまうというわけなのである。通史の作者は、この二つの狭間はざまにあつて、報われぬ苦闘を続けているといえよう。

本書『日本登山史』の著者、山崎安治氏もまた、この狭間でながく苦闘して来た一人である。先きにヒマラヤ登山史の分野では、深田久弥先生が『ヒマラヤの高峰』で、この狭間をみごとに昇華させ、今では堂々たる古典的著作として座を占めていることに、誰も異論のないところであらう。

山崎氏の遺著となつた本書もまた、『穂高星夜』以来孜孜として止まぬ資料博搜の成果を基に、昭和四十四年刊行の第一版を経過して、ここに『新稿・日本登山史』として結実したものである。深田先生の著作ともども、その後半生を集中した畢生の代表作であり、われわれ山岳愛好者に与えられた最良の贈り物となつた。

*

深田さんのヒマラヤ登山史が、物語的叙述に力点を置かれているのと対照的に、山崎さんの叙述は、ご自身の発掘されたものも含め、おびただしい資料を駆使し、事実を簡潔に記した点に特色がある。資料としての信頼度が極めて高い著作であり、その故に、故小林義正氏は、第一版刊行時の書評において、山崎さんを「日本のクーリッジ」(『山岳』第六十四年)と評したのであつた。

本書を通読してみても、私は二つの見どころを本書の生命だと感じた。一つは明治以前の、特に江戸期の登山の実相を、種々の資料を

用いて解明した点であり、他の一つは明治期の、近代スポーツとしての「登山」が誕生、開花して行く過程を詳細に論証した点である。山崎さん自身が、明治大正期の本邦登山史の生き証人の方々と、日常親しく交わられたことが、この部分の叙述に奥行きと厚みを与えていることも大切な点である。

さて、前述のように、江戸期の文人墨客の徒が、日本各地の山々に残した足跡を解明した点に、本書の見どころの一つがあるが、山崎さんが何故、この点に興味を持ち、どのように調査して行ったのかを物語る文章がある。それは『新選・覆刻日本の山岳名著題』（昭和五十三年刊）の中で執筆された『明治以前の山の本と資料』という文章である。これを読むと山崎さんの勉強ぶりや、研究の経緯が実によくわかる。そのきっかけは、まずこうである。「露伴の『紀行文編』や統帝国文庫の『校訂紀行文集』から、わが国において中世以降多くのすぐれた紀行文が書かれていたことを知り、それらのものを直接眼にする機会に恵まれた」というのである。

山崎さんはさらに、塙保己一編の膨大な資料集『群書類従』中の「日記部」と「紀行部」に目を通すことになる。ここには比較的近年になって文学研究の対象となった^{ヒツクンチウキョウ}准后道興の『廻国雜記』などが入っている。いずれにしても、ふつう、人のほとんど読んでいない中世以降の記録がたくさん収められているのである。それら近世までの文人のうちで、山崎さんが最も熱心に読んだのは、俳人大湊三千風の紀行集『日本行脚文集』（全七巻）であり、その足跡については、本書の「近世の登山」（第三章第六節）に詳しく論じている。三千風との遭遇ももとはと言えば、露伴編『掌中山水』（明治四十

四年）を読んだ賜物であり、後には「元禄三年（一六九〇）に上梓されたこの原本を私は秘蔵している」といわしめるほどのレベルに達する。詳しく例示はしないが、とにかく、本書の前半部の資料的うら付けは、全てこの『明治以前の山の本と資料』で言及されていると言って良いので、一度この文章を併読されることをおすすめしたい。

*

次に本書の内容を概観してみる。前述したように前半の見どころは、スポーツ登山以前の山のぼりに綿密な考証を加えた点にある。第一章「山の発見」では古代人と山の関わりを、第二章「中世の登山」では、各地の主だった山が、修験道の霊場だったことから、本邦の高山のほとんどが、この時代にすでに登られていることに注目し、具体的にそのあと付けをされた。いわば、登山という行為のルーツ探しである。第三章「近世の登山」では、修験道一辺倒という感じの中世の登山が、ここに至って、さまざま展開を見せる様相を詳細、執拗なまでに論じる。

曰く「諸藩の山林巡視」、「諸国採葉登山」、「北辺の探検と測量」、「遊吟歌人、俳人の旅と山」、「播隆の槍ヶ岳開山」、「文人、墨客の登山」等々の興味深い項目が並んでいる。小林義正氏を始めとする先人の業績を踏まえ、山崎さん自身の踏査、資料の新発掘が多く行われた分野であることにも注意を払いたい。

次いで、もう一つの見どころ、第四章「近代登山の芽生え」と第六章「アルピニズムの勃興」である。明治という西洋文化の流入期の中で「登山」という行為が開花していったという歴史的なからみ

もあって、誰が読んでも面白い部分である。

実は、ここ（第七章の第一節「昭和初期の北アルプス」）までが、本書で山崎さんが実際に執筆された文章であり、そのあとは、近藤信行、濱野吉生両氏が整理、執筆して、現代までの登山史をフォローして、本書の完成を見たのであった。山崎さんのライフワークを仕上げるために、これら編集に携わった人たちの労を多としたい。

なお、第一版刊行時に、小林義正氏により本書の原型『日本登山史』は、「山岳」第六十四年（一九六九）で書評されている。その中で、小林氏はいくつかの、不備、誤りを指摘された。それについて、山崎さんはどうフォローされたか、若干記しておきたい。

谷文晁の『名山図譜』の所収山座数を、旧版では八十九座としたが、小林氏は八十八座が正しいとされた。この指摘について本書では八十八座と訂正された。また、ウエストンの槍ヶ岳試登の年について、明治二十一年と取られる書き方をしたことに對する指摘があり、小林氏は二十四年説を明快に説明した。この点についても、本書では小林説を取り入れた。これまで、各書によりまちまちであったウエストン師の本邦に於ける足跡が、近年に至り、日本山岳会員の努力により、ようやく確定しつつあることは喜ばしいことである。山崎さんも、この最新の成果がある程度取り入れることが出来たのは、本書の価値を高めているよう。

小林義正氏は、さらに「この種の書物には、西暦、日本暦双方の年代附記は欠かせない」と要望していたが、今回の新版では双方併記の形をとって、それに応えている。こうした点にも本書に対する山崎さんの愛着と誠実さが、よく表われているように、私には思え

るのである。さらに、旧版になかった人名索引が付されたことは、本書の利用価値を一段と高めるものである。

さいごになったが、谷川岳を中心とする昭和以降の社会人山岳会による活躍ぶりが、本書では、その初期を除いて欠落しているのが惜しまれる。山崎さんの真意を一度うかがっておきたかったが、今は問うすべもないのが残念である。

（雁部貞夫）



会報「山」図書紹介一覧

—一九八五年度—

「山岳」は図書紹介欄を重視していますが、スペースの関係その他から、話題図書、寄贈図書のすべてを紹介または書評することができません。そこで、この欄では、過去一年、会報「山」でとりあげられている本をまとめてみました。見落された方、山岳図書を愛好される方の参考になれば幸いです。

- 四月号 (四七八号)
 - 清水敏一編『続・大雪山わが山—小泉秀雄』(私家版)
 - 村岡謙治著『写真集 ふるさと鳥海山 I』(株・六兵衛館)
 - 小倉董子著『生涯楽しめる山歩き山登り』(文化出版局)
- 五月号 (四七九号)
 - 平野惣吉『山人の賦 I』(白日报社)
 - 吉沢一郎監修 三省堂編集所編『コンサイス外国山名辞典』(三省堂)
- 六月号 (四八〇号)
 - 川喜田二郎監修 日本ネパール協会編『ネパール研究ガイド—解説と文献目録—』(日外アソシエーツ発行、紀伊国屋書店発売) 中島博著
 - 『カンテラ日記—富士山測候所の五十年—』(ちくま少年図書館90・筑摩書房)
- 七月号 (四八一号)
 - 慶応義塾山岳部OB大登会編『大登会年誌(一九五九—八四)』(大登会)
 - 七月号 (四八一号)
 - 矢島保治郎著 金井晃編『入蔵日誌』(チベット文化研究所)
- 八月号 (四八二号)
 - 多田等親著 牧野文字編『チベット滞在記』(白水社)
 - 山崎安治著『登山史の周辺』(茗溪堂)
 - 山下喜一郎編『現代山岳紀行 ヨーロッパ アルプス』(あるつく社刊、山と溪谷社発売)
- 九月号 (四八三号)
 - 平石鉦吉著『いつまでも—山』(茗溪堂)
 - 草川啓三著『近江の山』(京都山ノ会出版局)
 - ヘルリツヒコツプファー著 岡沢祐吉訳『ナンガ・バルバート回想』(ベースボールマガジン社)
 - ヒーバー夫妻著 宮持優訳『ヒマラヤの小チベット ラダック』(未来社)
 - オーレル・スタイン著 谷口陸男、沢田和夫訳『アレクサンダーの道—ガンダーラ・スワート—』(白水社)
 - 北海道大学体育会山岳部編『北大山岳部々報 十二号』(北海道大学体育会山岳部報編集委員会)
 - 澤頭修自著『御嶽の見える村—木曾開田高原日記—』(実業之日本社)
 - 山村正光著『車窓の山旅・中央線から見える山』(実業之日本社)
 - 上村幹雄著『片雲往来—私の山路歷程—』(学生書房)
- 十月号 (四八四号)
 - 図書紹介なし
- 十一月号 (四八五号)
 - 浅野孝一、打田鏡一、楠目高明、横山厚夫著『関東百山』(実業之日本社)

●十二月号(四八六号)

『ЗВЕДЕТ '82 (エヴェレスト'82) —ソ連隊の世界最高峰登攀—』

(モスクワ、体育スポーツ出版社)

『ЗВЕДЕТ, ЮГОСАЛИА, ДИНАР СТЕПА (エヴェレスト南西壁)』

(レニングラード出版社)

久合田弘著『エーデルワイス』(大阪書籍)

●一月号(四八七号)

Krishna Bahadur Verma

『日本 (What I Found in Japan)』

(Nepal-Nippon Research Studies Center)

穂苅貞雄著『私の槍が岳』(朝日新聞社)

山下喜一郎著『山岳写真帖』(山と溪谷社)

内田良平著『ネパール百描』(小学館)

小倉厚著『新北越雪譜物語』(岳書房)

●二月号(四八八号)

西沢憲一郎著『ネパールの歴史—対インド関係を中心に—』(勤草書房)

渡辺兵力著『山旅の足音』(茗溪堂)

—海外登山報告集から—

吉野禎造著

『ヒムルン・ヒマールへの道—マナン街道旅日記—』

仙台—高山の会天山登山実行委員会編

『天山博格達VI峰登山報告書』

酒田ヒマラヤ研究会編

『シムシャルからパミールへ—カラコルムの未知の峠—』

—遭難・追悼集から—

明治大学山岳部炉辺会編

『極北に消ゆ(植村直己の搜索報告・追悼集)』(山と溪谷社)

『風狂を尽して(竹中昇の遺稿追悼集)』(創作社)

『そしてケルンは残った(市川寛一追悼集)』

(一九八二年カラコルム登山隊実行委員会)

『天の匂い(柳沢幸弘の遺稿集)』(登攀クラブ蒼永・早大岳友会)

●三月号(四八九号)

島田巽著『山稜の読書家』(茗溪堂)

CJ編集部編『関東の岩場』(白山書房)

林照茂編『関西の岩場』(白山書房)

富山県立図書館編『中島文庫目録』(富山県立図書館)

渡辺康之著『日本の高山蝶』(保育社)

寺林峻著『富士に生きる—十七人の男たち—』(日本経済評論社)



高所登山におけるアルパイン・スタイルの問題について

昭和六十年十一月二十七日開催のシンポジウム記録

高所登山研究委員会

*近年、ヒマラヤなどにおける高所登山に関して、わが国の登山者の持つ意識や登山の方法など、その種々の分野で急速な変化や新しい展開が行われていますが、それらが、経験の比較的少ない登山者の間にも浸透し、遠征登山の計画の中にも、ある価値づけのために安易に組みこまれる傾向があるように思われます。

当委員会では、本会ルームで開催したシンポジウムで、標題のように、その中でもきわめて重要な課題の一つを取り上げ、マッシュヤブルム、ブロード・ピーク両峰に、それぞれ対照的な登山方法を用いて連続登頂に成功した関西カラコルム登山隊の例を中心にして、それらの中にある困難度や危険性などの問題について積極的な討論を行いました。その内容は今後の海外登山に役立つことも多いと思われるため、多少の整理を加えて、採録したほぼ全文を掲載致しました。

パネラーには、同登山隊の登攀隊長である重廣恒夫、隊員の和田城志、山本宗彦の三氏のほか、医学的な問題にそなえて田中壮佑氏に参加いただきました。

司会は、坂下直枝委員がとめました。なお、当日の参加者は五十三名。このシンポジウムのためにご尽力いただいた各位にお礼申し上げます。

担当理事 松永敏郎

坂下(直枝) 今日、マッシュヤブルムとブロー

ド・ピークに連続して登頂された重廣さん、和

田さん、山本さんにおいていただき、医学的な

立場から田中ドクターも、パネラーに迎えて、ここ数年、ヒマラヤ登山に採用され始めたアルパイン・スタイルにおける種々の問題について、みなさんといっしょに有意義なディスカッションをしたいと思います。

最近、高所登山にアルパイン・スタイルという方法が、外国ばかりではなくて、日本でもだんだん取り入れられるようになり、ポピュラーになって来たわけですが、まず最初に、パネラーの方々から、アルパイン・スタイルの定義づけについて触れていただきたいと思えます。まず重廣さんから。

アルパイン・スタイルとは

重廣(恒夫) これは、それぞれ個人によって認識の仕方が違うだろうと思えますし、登り方も違ってくるわけです。ヨーロッパの壁と同じように、短時間で軽快に頂上へ登っており来るといのが、とりあえずアルパイン・スタイルの基本だろうと思えますが、なるべくテントの数を少ななくて、ということ、少ない装備で、なるべく自分の体を酷使しながら登頂して降りてくるのが、僕自身はアルパイン・スタイルだろうと思います。

坂下 和田さんはどのようにお考えですか。

和田(城志) 重廣さんのいわれたとおりの定義づけでいいと思いますが、僕はそれに加えて、アルパイン・スタイルの対局にあるのが極地法だと思えます。極地法以外の登り方はすべてアルパイン・スタイル≠非極地法でわかりやすいんじゃないかと思えます。

極地法がほとんど制覇してきていたものを、いまは極地法じゃない方法で登ろうとしていく。それをアルパイン・スタイル——アルプスの登り方ということでしょうけれども、適当な言葉があれば変えてもいいと思えますが、要するに、極地法でない方法。

坂下 山本さんはどうお考えですか。

山本(宗彦) いまのお二人の言葉でほぼ言いつくされていると思えますが、私自身が登り方に關して細かいことを考えたことないんですが、簡単に自分の考えを述べれば、早い話が、一つをかついで一度登り始めたらそのまままで行って、登ったら降りてくる。だめなら途中で降りてくる。ただそれだけの単純な登山行動がアルパイン・スタイルではないかなという気がします。一度荷物を取りに戻ったり、荷上げ行動を繰り返すとか、そんなことのない、最も単純な登り方ではないかと思えます。

重廣 そういふ点では、坂下さんのほうがはるかにこの思想の先輩だろうと思えますから、坂

下さんから、ご自身のお考えを話してもらった方がいいと思います。

坂下 私も、いま山本さんがいわれたような意見なんです。

これまで、ヒマラヤの難しい壁のほとんどが、あるいは高いピークが、シージュ・スタイル(Seigyo style)といいますが、いわゆる重いスタイルで登られてきたんですけれども、そのような登り方では、山の持つ力よりもクライマーの持つ力の方がだんだん大きくなってしまい、山登り本来の楽しさ、いわば、冒険的要素が非常に少なくなってきたと思うんですね。そういうことで、登山者の側で意識的に酸素を減らしたり、あるいは、フィックスト・ロープをなくしたり、人数を少なくしたり、そういうった形の登山を行うようになったわけです。その中でもっともシンプルで、山登りの本道に還る形がアルパイン・スタイルではないかと思えます。

普通の登山、たとえば、日本で冬の八ヶ岳に登るとか槍ヶ岳を登る方法、つまり、ザックの中にテントや食料などのすべてを入れて登っていく方法は、一時代前のヒマラヤ登山に取り入れるのは無理だったわけですね。そのため、シエルバを使ったり、フィックスト・ロープを使ったり、キャンプを張って荷上げを何回もやつたりしたわけです。それが、だんだん経験を積

むに從つて、アルパイン・スタイル——日本の山を登ると同じような方法——で登られるようになった。それが私はアルパイン・スタイルだと思います。

ここにおいでの方で、いや、アルパイン・スタイルはこういうものじゃないかというのを、いまのパネラーの意見以外に考えておられたら、ご発言願いたいのですが。

ここには、海外の山、特に、非常に高い山やむずかしい山を登った、あるいはそれをアルパイン・スタイルで登った経験をお持ちの方も大勢おいでです。できれば、そのような方にお尋ねしたいのですが。

吉田さん、いかがでしょうか。

吉田(憲司) 私の場合、特にこういう登り方ではないのだというふうに考えて登っているのではないのですが。ただ、これまで、ヨーロッパやヒマラヤを登ってきて、——ヒマラヤの場合、極地法でしか登っていませんが、山登りそのものはヨーロッパのほうが面白いと思います。ヒマラヤ登山でも、私のように経験がない場合には、安全面からも、仮にアルパイン・スタイルがより楽しいとしても、危険が多いと判断すれば、メンバーの力量を考えてそれより極地法を選ぶという、結果として極地法になったというだけです。

アルパイン・スタイルの定義づけは、みなさんのいわれたようなことではないと思います。

マッシュブルムとブロード・ピーク

二つの山の場合を考える

坂下 きょうのシンポジウムのメイン・テーマは、松永さんのほうからのお知らせの中に入っておりますけれども、最近、アルパイン・スタイルという登山方法が高所登山にとり入れられるに從つて、その中でいろいろな、ふつと極地法では起こり得ないような危険が存在しているといえますか、そのような現象が出て来るのですが。

今回の関西カラコルム登山隊は、マッシュブルムを極地法で登つて、その後、ブロード・ピークはアルパイン・スタイルで登つた。スタイルを変えて登っているわけですが、その辺の動機を重廣さんからお聞かせください。

重廣 最初にマッシュブルムの計画が出て来まして。その後で、せっかくマッシュブルムへ行くのだからと。あのあたりは魅力的な山が群っております。今回は、大阪府岳連がカラコルム合宿ということで、最初にスキャンカンリ、それからブロード・ピークとマッシュブルムの許可を取得していたわけです。ただ、いろんな条

件から、その間にスキャンカンリが脱落をし、あるいはブロード・ピークが脱落ということ、基本的には、我々はマッシュブルムの北稜を登ることになり、この北稜への取り付きを大前提にして、登るためにはどういうことが必要だろうかと思えたわけです。

一つは、いままでに数隊が敗退しています。一つは、非常に悪いとか、いろんなことがありますから、それに対して、包圍網を作つて、安全かつ全員が登頂して帰つてくるという目的のために極地法をとつたわけです。あの北稜であのルートに登るためには、とりあえずそれが必要だろうと思えたからです。

そこで、ルートがむずかしいということは、進度が非常に遅いということですから、高度順化に関してはそう苦労することはないだろうということと、人員が十人と、ローテーションについては恵まれていましたので、なるべく疲労度を軽減して、その後、残した力でブロード・ピークへ登ろうと思えたわけです。

最初は、その後でもう一峰、ガツシャブルムに行こうという計画を立てていましたけれども、こちらの方は入山パーティーが多いということで、残念ながら許可がおりませんでした。ブロード・ピークを選んだ一つの要因というのは、この山が過去何パーティーにも登られて

いるため、はっきりとルートが確立しているというところで、私自身、アルパイン・スタイルという登り方は今回が初めてでしたが、とりあえずこの方法を活用する導入部分としては非常に手軽でいいだろうと考えた次第です。

アルパイン・スタイルというのは、最初はやさしいところを駆け登って駆け降りてくる。その後、これがどんどん進行してくと今回、クルチカとロバート・シャウワローのパーティーがやったような、非常にむずかしいルートを、ピバークを重ねながら登って降りるということになると思います。これも、メンバーの力量その他、レベルの幅というのはかなりあるだろうと思います。

今回の我々は、そういう意味で、アルパイン・スタイルとしては、どちらかというと入門編を最後に持ってきたというような経緯になったわけです。

どちらが面白いのか

坂下 和田さんは、今回ブロード・ピークをアルパイン・スタイルで登られる前に、一九八四年にナンガ・バルパットへ、ディアミール側からアルパイン・スタイルで試登されています。アルパイン・スタイルと極地法の感じ方の違い

と異なりますか、登山の面白さの違いとところをお聞かせください。ナンガ・バルパットや今回のブロード・ピークの経験、それと、それまでのカンチエンジュンガ登山とか、マツシヤブルムでの極地法との差みたいなどころに触れて欲しいんですが。

和田 ヒマラヤの山へは一九七七年から行き出したんですが、少し出おくれた感じでした。

その前に、ランタン・リルンとгентII峰という七〇〇〇m峰を登りましたが、ともに大きな山を登ったのはカンチエンジュンガが始めてでした。これは、ご存知のように大遠征隊でして、八十人ほどがベース・キャンプにおりました。登山期間も長く物資も相当豊富で、ヒマラヤで初の縦走という大目的というか、プロジェクト自体が大きかったので、極地法の採用に関してはごく当然だと——いまでもそう思っています対象となる山によってスタイルというのは変わるのではないかと思うんです。

アルパイン・スタイルが是で、極地法は否というような対立した考え方ではなく、やりたい対象がどこにあるかで方法を選んだらいいと思います。たまたま今回もそうでしたが、去年はカンチエンジュンガが終わってからナンガ・バルパットに合流したので、ナンガ・バルパットの時には高度順応ができていました。疲労は少

しありましたが、ブナール橋という橋が高度二〇〇〇m、そこからベース・キャンプの四三〇〇mまで二日のキャラバンで到着。翌日キャンブIに入り、その次はキャンブII。キャンブIIIをとおしてIVと、結局、二二〇〇mのブナール橋のあるインダス河の河原から歩き始めて、五日目で七四〇〇mまで登りました。

六日目にアタックしようかと思ったのですが、先に入っていた仲間が降りるということ、単独でのアタックはうちの隊では禁止されていたので止まったわけです。

さすがに、五日間歩きっぱなしで七四〇〇mまで登ったので、登攀意欲というのがなくなつて、すんなりそこから一日で降り、翌日にはベース・キャンプに入りました。それが、去年のナンガ・バルパット登山のほぼ全容です。

それから、もう一度アタックして八〇〇〇mまで行つたんですが、あまり厳しい歩き方をしなかった。それも、新ルートではないんです。単に、高度というものを対象に山を登っている感じですので、ディアミール側からの登山をアルパイン・スタイルでやったとはいえない。

目標が異なっていますので比較はできませんが、ただ、坂下さんの質問の意図を汲んでどちらが楽しかったかといえ、答えはそこに含ま

れていまして、非極地法のほうが楽しいに決まっています。

極地法よりは高度のテクニクなり体力力が必要とされるアルパイン・スタイルのほうが、これから、というよりすでに登山の本流になつていふと思うんです。ただ、それができるかどうかになると問題で、経験の浅い人がすぐ真似して行くという、そういうたちのものじゃないはずです。スタイルそのものが洗練されていますから、ザイル・シャフトに頼るといふ、よくいえばチーム・ワークによつてというようなのではなく、単独行に近いような、研ぎ澄まされた感覚というか、個人の力量が本物でないと思ふずかしいし、ちょっとした甘えがあれば非常に危険な登り方になると思ふます。

坂下 山本さんは、この中では比較的经验が浅くて、一九八二年にボゴダに行かれた後パミール、そして、八四年にカンチエンジュンガに参加、今回の遠征につながつてくるわけですが、和田さんと同じようにカンチエンジュンガ登山という大きな経験をしており、マッシュヤブルムも極地法で登つておられます。そのあたりと、四日間で登つたブロード・ピーク、その前のパミールでのアルパイン・スタイルの登山など、中身の比較と個人的な楽しさの感じについても述べてください。

山本 一般的なことです。和田さんと同様、その是非は非常に個人的なことでするので特に答えは持つていないのですが、山によつて、登りたいやり方で登ればいいんではないか。私も、パミールと今回のブロード・ピークは、たまたまアルパイン・スタイルに近い形で登つたと思つています。どちらが楽しいかといへば、私の少ない経験からいつても、アルパイン・スタイルに近い登り方のほうではないかという気がします。

極地法となりますと、単純に考えてもわかるんですが、非常に長い日数がかかる。その間に、恥かしいことですが、カンチエンジュンガの時に後半になると登攀意欲そのものが本當に失せてしまったのではないかと思うような時期もあつて、山への執着心というか、意識を持続させることが、長くなればなるほどむずかしいのではないかという気がしました。

それ乗り越えて登つた後は、一種の快感めいたものもあるんでしょうが、そんなところではじつと我慢して登つて、本當によかつたなと思えるかどうか。私はいい人間関係に恵まれてきたので、嫌な思いは全然ないんですが、それでも、アルパイン・スタイルに近いほうが、結果として登れなくても、たいへんすっきりしているんじゃないかという気がします。たまたま

運がよければ、あるいは、山と自分の力とのバランスがとれていれば登れるし、駄目ならだめではつきりした答えが出るということで、単純に私の考えをいへば、アルパイン・スタイルのほうが煩わしさのない分だけ楽しいだろうと思つています。

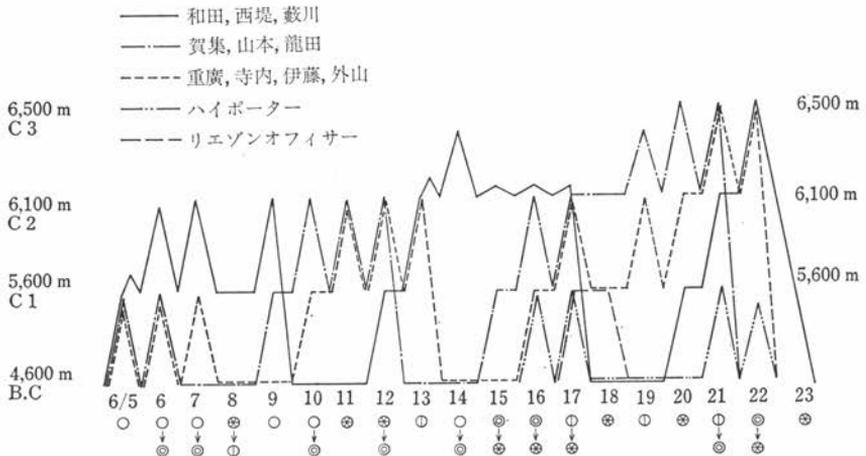
要求される個人の力

坂下 極地法とアルパイン・スタイルとの大雑把な違いをみたいなものが、みなさんにもわかっていただけだと思います。

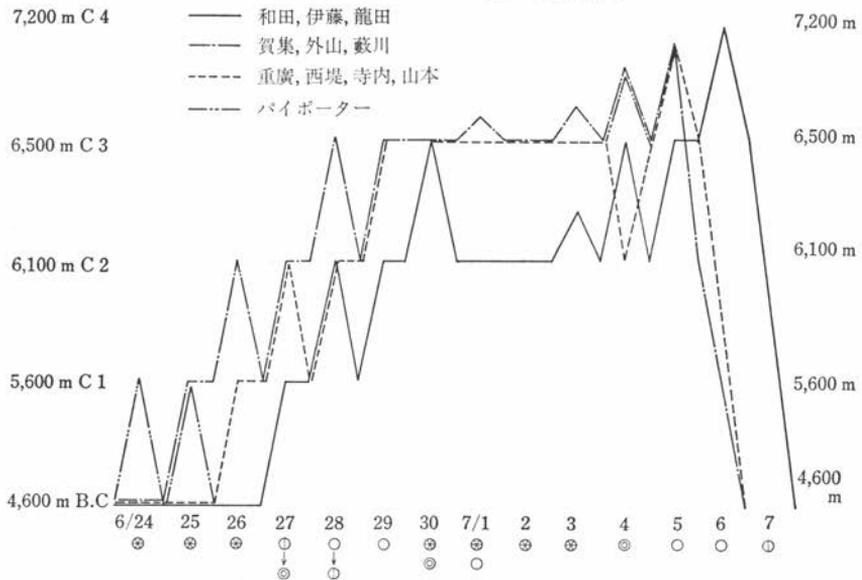
実際にアルパイン・スタイルをやつた場合、非常に個人的な力が強くなければならぬ。チーム全体の力に頼るようではなかなかアルパイン・スタイルはできにくいんだ。研ぎ澄まされた精神力といえますか、そういうものが大事だと和田さんもおっしゃいましたが、マッシュヤブルムではなかつた危険性というのが、ブロード・ピークではそれとして感じたことがありますか。

重廣 マッシュヤブルムは、先ほどスライドで説明しましたが、どちらかというと、ザイルをベタ張りした山ということになるわけです。これには賛否両論ありますが、我々はそのルートをおの方法でしか登れなかつたでしょう。ただ、

マッシュブルム 1985・第一期行動表



マッシュブルム 1985・第二期行動表



これからどんな情報かふえていきますから、そういう中で、アルバイン・スタイルで登ろうという人も出てくるかと思いますが、現実には、我々の力量というんですか、パーティーの力ではあれしかできないかった。あの時は、個人的な技術の差というのはそう問題にならず、フィックスト・ロープを張りながら先頭を行く者があれば、そのルートはとりあえず確立されるわけです。だから、そのルートでの進み方が特に遅いこともあり、比較的全員が高度順化がうまくって、頂上へ到達して安全を確保しながら下ることができたわけです。

その後、ブロード・ピークではリエゾン・オフィサーを入れて九名が頂上に向かいましたけれども、結果的には、そのうち六名しか登れなかった。リエゾン・オフィサーともう一人の隊員は、ほとんど頂上直下まで行っていました。天候や、それまでなかった時間なども考えて、頂上を踏んで帰ってくるのはむずかしいだろうと判断、途中で断念してもらったわけです。

仮報告書の末尾にある行動表を見ればわかりますが、我々は最初、一隊でブロード・ピークのベース・キャンプを出発しました。その後、途中のコルでビバークして翌日頂上を狙うことを考えたのですが、ここでの判断では、それを

比較的強い隊に絞って出すか、あるいは、全員でビバークするかという点でした。結果的には全員がビバークする場所がなくて、パーティーはいったん七五〇⁰まで下ってビバークしています。

その後、分れた二隊が相次いで頂上に向かいましたが、七八五〇⁰でビバークした隊員一人が途中で挫折して、単独で下降を始めます。

それぞれの隊員が頂上へ登ってキャンプへと戻って行くわけですが、第一隊はキャンプIIに到着したものの、残念ながら第二隊は七五五〇⁰でまたビバークすることになりました。その時に、一番初めに単独で下降をした調子の悪い隊員というのが、ビバーク時の疲労と、ルートの取り違えから大変難しいユマリーニングをやったことで、それらの複合した形で非常に疲労したため、そのまま高度障害につながっていったと思います。

ビバークをした後、私は高度による障害だろうと考えていますが、彼が一人で下降していた時に何人もの人に会っており、まったく同じルートを通過しながら最終的には彼が最後になりましたので、結果的には彼を連れて降りることになりましたが、それを置いておきますと、その時の彼自身の判断では、なかなか帰って来ること

ができなかったらと思うと思います。ということでは、極地法などでフィックスト・ロープがつながっている、あるいは、ロープをつないで行動している場合には、遅れた仲間を待たざるを得ないわけです。しかし、それがアルバイン・スタイルになりますと、自分の持つ力をフルに使用して、頂上へ登って自分だけおりののが精一杯の場合と、なおかつ余力を残して、パテた者、障害を受けた者をいっしょに連れおろさなければならぬことも、時には要求されるわけです。

こういう極限的な登攀中には、他人を思いやることはなかなか難しいように思います。そういう意味では、心理的な状況というんでしょうか、あるいは肉体的に、そういう高々度で行動する中で、人がどう変質していくかというのが大きな問題になると思います。

結果的には、今回その隊員は凍傷になり、残念ながら帰国後指を切断しました。そうなるまでにまだまだ救う方法があったのではないかと思います。そういう高々度で我々の思考力や体力がどう衰退していくかを、田中先生にお聴きしたいんですが。

アルバイン・スタイルと高所順応

田中(杜佐) 話が逆もどりました形になります

が、高所での思考力や体力の衰退と関係あることですので、アルパイン・スタイルについての私の意見を述べたいと思います。

従来の極地法とアルパイン・スタイルとの大きな相違点の一つには、高所順応期間の有無があると思います。前者は、高所順応を重要視したものであり、その結果登山期間は長く、隊員や物資も増えますが、後者は、アルプスや日本の山を登るように、小人数かつ短期間で頂上をめざすものであり、高所順応期間のことは考慮しなくてもよいわけです。

坂下 ただ、アルパイン・スタイルをやるパーティーは、まずどこかで馴化しないと。人間の能力からいって、ゼロ・メートルから一気に八〇〇〇メートルで行ける人というのはほとんどいないと思いますので……。

田中 厳密に言えば、入山してそのまま登りつづけて頂上に立つのがアルパイン・スタイルだと思っています。重廣さんたちは、確かにアルパイン・スタイルでブロード・ピークに登りましたが、マッシュアップで十分な高所順応ができていました。

先ほどご質問のあったブロード・ピークでの状況を考える場合、低酸素などの高所環境、疲労、体力、技術など、さまざまな条件が関係していると思いますが、高所障害の問題が一番重

要だと思えます。

私は極地法登山の経験しかありませんが、一九七八年に、加藤、清水らと三人でマナスルに行った時、数回の荷上げとルート作業をした後、ベース・キャンプに下り、そのまま一気に頂上を狙いました。高所順応のことは考えず、短期間での登頂を考えたアルパイン・スタイルに似た形だったと思います。

これからの話題になると思いますが、アルパイン・スタイルにおける高所障害を考えると、高所順応の問題が中心になると思います。

坂下 そういう知識がないからお聞きしたいんですけど、それでも、この中でご存知の方があればお答えください。ゼロメートルから一気に八〇〇〇メートル、七千いくつでもいいんですが、高所順応なしにやられたケースがありましたか。アルパイン・スタイルで。

池田さん、そういった、何もしないでいきなり頂上へ行って成功したというのは……。

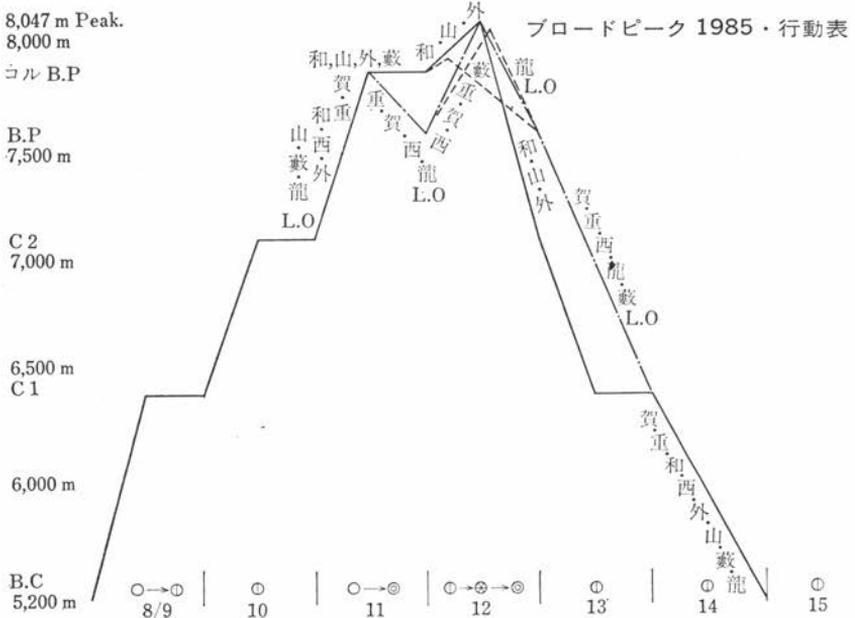
池田(常道) いま、ヒマラヤのような山をやる場合、とり付いて頂上に行き、おりて来るまでをアルパイン・スタイルでやる時、馴化もそのルートでやる。たとえば、七〇〇〇メートルまで上って下り、もう一回行くということも許容されている。ただその場合、ルートの途中でフィックス・ロープを張っておいたり、物資を上げ

ておいたり、そういうものはアルパイン・スタイルの定義から外れるんじゃないか、というのがいまの世界的なクライマーたちの見方じゃないかと思えます。

いままで、七〇〇〇メートルくらいですと、あまりはっきりしないんですが、七五〇〇メートル以上の高峰をアルパイン・スタイルで登った例はたくさんあります。ほとんどが、順応のために何回かルートを上下している例です。そうじゃない場合には、事前に六〇〇〇メートル程度の山で馴化行動をとっている。

それをなしでやれると言ったのは名古屋の原さんです。この場合は、日本で低圧トレーニングをすることによって馴化をし、現地へ着いたら三日で八〇〇〇メートルを登るといふ飯説を立てられました。シシヤパンマまで行かれたわけです。現実にはシシヤパンマでは天候も悪かったです。ところが、一気にには行けない。たしか、二、三回行ったり来たりして、最後にアルパイン・スタイルになった。そういう形だったと思います。

ですから、ヒマラヤのような山の場合に、アルパイン・スタイルだから順応を山でやっちゃいけない——いけないというか、やるのはアルパイン・スタイルじゃないというような定義は現実的じゃない。



いまの人間と山との関連では、恐らく将来もそうなるだろうということであれば、まったく別の方法で、低圧訓練によって順応を獲得するなり何なりしなきゃいけない。あるいは、二シーズン連続の遠征で、どこかの山へ行つて来て、次にその目的の山についてはアルパイン・スタイルで登攀できるという条件があるとしてもですね。だから、事前の順応のことを、登山のスタイルの問題に絡めない方がいいんじゃないかと思ひます。

むしろ、周到な順応をちゃんとやってベース・キャンプから出発することがアルパイン・スタイルを成功させる秘訣だというふうに考えた方が現実合っているし、前向きじゃないかと思ひます。

坂下 現実には、アルパイン・スタイルをやっているクライマーたちは、ほとんどの場合、事前に高度馴化をどこかで——別の山とか、あるいは同じ山でも最初に五〇〇〇で行き、六〇〇〇以降、次に七〇〇〇で行くとか、そういう順応をどこかでして、それから行くケースが多いですね。重廣さんたちの場合も、結局、実際はマッシュアップルムでやってから行つたわけですからね。

田中 ですから、ヒマラヤの高所へ登るのに、あえてアルパイン・スタイルという言葉を使う

ことに抵抗を感じています。もしアルパイン・スタイルというなら、高所順応期間などを考えないで、山に入ったら一気に頂上へ向かう形だと思っています。

言葉のことはさておき、アルパイン・スタイルにおける高所障害を考えると、高所順応期間の有無を取り上げた方が、少なくとも混乱は少なく、理解しやすいと思います。

隊員の力と危険のバランス

坂下 先ほどの話に戻りますが、重廣さんのいわれたプロード・ピークにおける危険というのが、隊員間の実力のバラつきがあつて、それをうまくフォローしていかないと、アルパイン・スタイルというのは非常に危険だということをおっしゃっていましたが、その前の和田さんのご意見では、個人個人がきっちりした力を持つていて、バラつきのないチームじゃないと難しいというような、ちよつと違う考え方を持っておられるような感じでした。和田さんの場合、二人ですか。

和田 いや、パーティーには八人おりました。僕が単独で行動してました。すでに山へ入つてから三週間ほどたつていました。僕はカンチエンジユンガ登山で遅れていたの、インド

を経由してパキスタンに行つたんですが、そういう形で残つたということです。既成ルートにロープもあるという状態ですね。単に、五日間で六五〇〇メートルほどの高度を一気に登つたというだけのことで、食糧と燃料は全部持っていきましたが、ルートができていて、テントもあるというのが大前提で……。

坂下 重廣さんにしたと同じ質問ですが、マツシャブルムとプロード・ピークの間、大きな違い——危険に関する違いがありましたか。

和田 やはりルートがあるかないか。簡単にいえばフィックス・オンですね。これが一番大きいということですよ。フィックス・オン——ロープがあるということは、安全性を完全に確保している。フィックス・オンがあればまず遭難しないだろう。そういう感じがありました。危険性というのは、いま田中さんのいわれた高所障害のそれではなくて、ルートを確保してあるかどうかという意味の危険性の有無ですね。

先ほどの、高所登山の事前にする順応の方法とか、順応するしかないかという問題をアルパイン・スタイルの定義に持ち込んだら、田中さんの言われたように、しないほうがわかりやすく、いかにもアルパイン・スタイルという言葉に合うんですが、もつと極端にいいましたら、国内でするトレーニングのためのランニン

グも高所順応の一部で、山と全然関係のないレベル挙げたりすることも、考えてみれば、事前にする体力増強のためのトレーニングでしょう。山へ登るには、いろんなトレーニングとか、前もつてやるべき準備期間があつてそれを山登りの一部に持ち込む。その有無を持ち込むというのは、医者立場とかそういうことでいうなら別ですが、山へ登る人間に質問しても全くナンセンスです。

池田さんがいわれたように、おおむねみな同じルートを上がつて、荷物も置かず、フィックス・オンもせずにおりて来て、できればトレースも消してきたら一番いいんですが、ベースから一気に頂上に行く。これがいまの常識的なアルパイン・スタイルの形だろうと思います。

ただ、それも非常に不透明なわけです。原さんがいわれる低圧実験室を使うなんていうのは、酸素ボンベを使うのと変わらぬような感じがするんです。いろんなところで分けないと、高所のアルパイン・スタイルという登り方を正確にとらえにくい状態になっている。

いまでも、高さに対する挑戦と、ルートと山のラインの話が重なつてわかりにくいんですが、アルパイン・スタイルは危険性を伴う。これは当然前だと思えます。同じ場所でも極地法なら登れます。あらゆるルートで僕はそうだと

思います。たまに、早いから安全やといった方もされますが、遅い方がやはりいろいろな意味で安全です。ラビネン・ツークを登るのは論外として、雪崩の危険性のあるところを登るにも極地法のほうが優れていて、安全で確実だ。それに飽き足らぬからアルパイン・スタイルが出たという坂下さんの言葉と、もう一つ、アルパイン・スタイルのほうが安くあがるというのも非常に大きな魅力です。

これは、荷の量を考えても、アルパイン・スタイルのほうがずっと軽いですね。物に頼るかどうかという点、多いほうが頼っている感じがしますね。だから、アルパイン・スタイルのほうが優位であるし、それで話をつめていくと、こっちのほうが将来的な展望がひらけてくる。

ただ、月とか火星とかに遠征登山ができるようになるとして、やはりいろいろな問題や限界もでて来る。アルパイン・スタイルであつても、服も何も着ずに行くわけにはいきませんし。ロボットを使うことになったりする。それらを登山の対象によって使い分ける。アルパイン・スタイルで行けるところはそれで、行けないぐらいいごつといとこを考える人は、極地法という従来の方法をもっと洗練した形で使っていけばいいんじゃないでしょうか。

ご質問への答えですが、アルパイン・スタイルのほうがはるかに危険性が高いと思います。重廣 先ほど田中ドクターが言われたように、アルパイン・スタイルの究極というのは、事前に何のトレーニングもせず、あるいは馴化をせずに頂上に到達できるというのが一番理想だということですね。ということは、その裏には、ドクターの立場から見ているんな危険性がひそんでいると見えるわけでしょう。我々が体験したこともその一つですが、逆にその辺りで、普通に行われるアルパイン・スタイルの限界がおのずから現われてくるだろうと思うんですね。

たとえば、事前に何の高度馴化もせずにそうした高い山頂へ達した場合には、いろんな形で障害は出てくるだろうと思うんですね。一つには、精神的・肉体的な衰退も含めてですが、その辺で、人間の持つ能力をどこまで拡大できるものなのか。あるいは、極限がどこにあるのか。医師の立場ではどうお考えでしょうか。田中 かつて、科学者がエベレスト無酸素登頂は不可能だと言っているうちに登山家は登ってしまいました。人間の呼吸機能や必要酸素量などをとに、エベレスト無酸素登頂の可能性が議論されましたが、いずれも、それまでにわかっている知識や種々の前提条件をもとにしたものだったわけですね。

個人の能力差や、高所順応によって拡大される能力などは未知なことが多い上、各臓器の能力を統合し、体全体でとらえることはきわめてむずかしいことだったと思います。私には、人間の能力の限界などまったくわかりません。ただ、重廣さんのように優れた体力と技術を持ち、豊富な高所登山の経験を持つ人なら、八〇〇〇m級のアルパイン・スタイルは可能だと思います。先ほど話した我々のマナスルの場合にも、天候に恵まれず登頂できませんでしたが、身体的には十分可能性がありました。

坂下 いきなり何の高度馴化もなしに行くことがですか。田中 始めての人がいきなり高所順応なしにというわけではありません。高所適応能力があり、すでに高所に順応している人の場合です。我々のマナスルの場合、加藤、清水ともに十分な高所経験がありましたから、多少のルート仕事と荷上げをしてはいますが、高所順応期間を考えずに、ベース・キャンプから一気に頂上を狙いました。坂下 最初アルパイン・スタイルの定義をパネラーに言って貰いましたが、田中ドクターを抜かしていただんですね。いまドクターの言われたことは、私などが理解しているアルパイン・スタイルとちよつと違うような感じもしますの

で、アルパイン・スタイルとは何かという点で、田中ドクターの理解の仕方を少しまとめたいただきたいんですが。

ふたたびアルパイン・スタイルとは

田中 話が前後して申し訳ありません。私が理解しているアルパイン・スタイルは少人数かつ短時間で頂上を狙うもので、アルプスや日本の山と同じように登山中に高所順応期間を考えなくともよいものです。

坂下 たとえば、ルートが非常にむずかしくて、今日は一〇〇%登った。そして下においてきた。次の日上まで一〇〇%、都合二〇〇%延ばした。で、おきて来た。これを毎日何回もやったとしますね……。

田中 それもアルパイン・スタイルでよいのではないのでしょうか。登りきれないからいったんもどり、また登りなおす。結果的には時間をかけていますか。

坂下 そういう方式でもアルパイン・スタイルというわけですね。

田中 あまり細かいことで議論しても仕方ないと思いますが、登り方として、従来の極地法で重要視していた高所順応期間を考えることなく、いつも前進しているわけですか。

坂下 正直いいますと、私は、原さんのシシャバンマも加藤保男さんのマナスルも、純然たるアルパイン・スタイルとは思っていないんです。これは、各人各様アルパイン・スタイルのとらえ方というのは違いますので。

アンドレ・ザワグという冬のエベレストを登ったポーランドの隊長さんがいまして、いままで三十回くらい遠征にいらっているんだそうですが、その方と、ジェフ・ロウという、何回か遠征にいらっているアメリカのアイズ・クライマーと私の三人が、偶然一つの部屋に閉じ込められてまして、アルパイン・スタイルとは何かという話になったことがあります。

ザワグさんが例に出したのが、二十何日間かけてやったタトラ山群の冬季縦走でした。山群の縦走ですから、日本の北アルプスの縦走みたいな感じだと思わんですが、途中でデポするとか、途中でおきて、またルートを引き返すとか、そういったものが一切ないものだったそうです。出発したらゴールまで引き返さない。補給の全くない、そういったのをアルパイン・スタイルというんだ。そういうことを言われまして。それに対して、ジェフ・ロウは、降りたついでいいじゃないか。おきたついで途中でデポしないで戻ればいいんだ。戻ってもう一度最初からやり直したら、それは純粹にアルパイン・スタ

イルになる。そういうことをいまして、最近のハード・フリーのフラッシングといますか、一発で登るか、それとも、途中でおきて来てもとにかく登り切れればいい。あるいは、一回ザイルにぶらさがっても、ぶらさがった地点から登り直せばそれでいいじゃないかという、それとかなり似たことを言っていたわけです。

アルパイン・スタイルがどんどん取り入れられるに従って、高所登山をおこなっている登山者の間でも、ずいぶん理解の仕方が違ってきているような感じがするんですね。僕はそういう認識を持っていましたので、バネラーの方々にまずお聞したわけですが、この四人のバネラーの間でも、アルパイン・スタイルの定義づけの差があったと思うんです。

ここにおいでの方で、バネラーの方々と違ったご意見がありましたらご発言ください。尾形さん、どうお考えですか。

尾形(好雄) 私は保守的な極地法しかやったことがないんですが、山登りというのは、確かにこうなってくると方法論も大事になります。山登りの場合、まず一枚の写真を見て、自分がどこにラインを引くかでしょう。そしてそのライン上でいっしょにやる仲間を考え、ここではどんな登り方が自分らの十の力を限りなく十に近づけて満足を得られるか、その方法として何が

いいかというのが大切だと思います。そういう中で、最近のように、アルパイン・スタイルにあらずんばヒマラヤ登山にあらずという風潮が、急速に底辺レベルに流れ込んで来ますと、まず、アルパイン・スタイルでなくちゃならないということで方法論が先に立ってしまい、私たちの目標の山がそれに適合するかどうかもわからないまま、方法論はアルパイン・スタイル、行った結果ではアルパイン・スタイルどころではなかったという例をよく聞きます。自分たちの力量・技術・経験、そういったものを含めて、どういう物差しで判断するかというものが、非常に大切な問題だと思います。

これを、本当に従来の極地法登山とまったく色分けして考えれば、たとえば、それが既成のルートとか、何登もされて情報が豊富なルートでは判断もだいぶ違うと思いますが、きびしいアルパイン・スタイルを標榜し論じていくのであれば、いまいわれたように、フリー・クライミングにおけるフラッシング的な形で登るのが、一番典型的でわかりやすいのじゃないかと思えます。しかしながら、それを究極のアルパイン・スタイルに位置づけたとしても、その過程として、いろいろな方法でいまは行なわれているんじゃないかと思うんです。高峰登山の経験者がつとふえ、これが煮つまってきてシビ

アナ方法論がたたかわされるようになったときには、先ほど坂下さんや田中先生のおっしゃるように、アルパイン・スタイルがきびしく問われてくるんじゃないかと思えます。

アルパイン・スタイルへの傾斜

坂下 どうもありがとうございます。

主題から少しそれておりますが、これまでのディスカッションの流れからいって、アルパイン・スタイル全体について、いま尾形さんの指摘されたような問題もあるし、和田さんなどは、よりきびしいアルパイン・スタイルの登山をやっていききたいという立場でしようし、あるいは、やはり極地法にはこういった良さがあるんだという、そういう考えを持った方もおいででしょう。何か、その辺をもっと、危険性がかりにとらわれないで、最近の流行といいますが、目の目を見るようになったアルパイン・スタイルということ、極地法も一般的というか、いろんな方向からも少しディスカッションしたいと思います。

山森さんは、日本ヒマラヤ協会まで多くの登山隊を組織されているんな資料も持っています。最近のアルパイン・スタイルのこと、特に日本におけるそれらの情報も持ちだと思

ますので、全般的な感想とかご意見を伺いたいんですが、

山森(欣一) アルパイン・スタイルが叫ばれ出したのは、先ほど坂下さんの言われたように、山に楽しみがない、そういう発想からだと思うんです。その発想に加えてコストの問題。日本の日本の登山の趨勢を見ますと、お金はあるんですね。けれども、一回行くコストがかかり過ぎる。それだったら、そのコストを下げた登りの方が何回も山へ行って楽しい。日本の場合、そういうところがアルパイン・スタイルの支持されている大きな要因だと思うんです。

ただ、アルパイン・スタイルそのものにどんな危険があるかについては、まだ、あまり討論されていないように思うんですね。アルパイン・スタイルによる登山には、すべて、極地法登山の持つ危険以上の危険性がある点、あまりわかっていないように思います。とにかく、スタイルだけは実施してみたい。けれども、その前にやるべき登山活動そのものはあまりやりたくない。あまり経験を積みたくないという傾向があるわけです。

いま登山界の傾向として体力トレーニングというのが一般化されてきていますが、非常にいいことだと思います。そういうことについてはだいぶんな一生懸命になれるわけです。しか

しながら、アルパイン・スタイルでいこうという山は高所山岳であり、そこには万年雪があるわけですよ。そうした危険——高所順応ももちろん大切ですが、雪崩のルートを見る、危険を避ける。そうしたトレニングは実際に雪のある山に行かないとむずかしい。体力そのもののトレニングはやるんだけど、雪の積った山へ何度も出かけて、経験を積み重ねていこうというトレニングについては敬遠したいというような風潮が、いまの日本の登山界の底辺にあると思うんです。

極地法で登っていることはいい面ももちろんあるけれども、実際にはだいたい煩わしいわけです。それから脱皮していくことは素晴らしいことだし、それに対応して一つのスタイルが出てくるというのは、時代の流れとして、当然あるわけですね。

だけれども、たとえば山田昇さんのように、一年のうちに二回も三回もヒマラヤに行っているような人達、あるいは、国内の山でもトレニングを積んでいっている、パネラーのような人達が実践する分には非常にいいと思います。が、まだ、日本の山もあまり登らないような人達の段階では、アルパイン・スタイルというのはやれないんじゃないかという気がしますね。ですから、いま、この場では突っ込んだ話は

できないでしょうが、コストを下げるということとどうかかわってくるのか、そんなこともっと議論されて欲しい。安ければいいというのが遠征じゃないと思うし、そうした経験がいろんな形で発表される必要があると思うんです。

これは、原さんや小西さんにしても同じようなこと言っていると思うんですが、やはり、アルパイン・スタイルには危険が伴うんだ。経験を積んだ人しかこういうことはできないんだという説得が必要だと思えます。しかし、特にここが危険なんだよということは、いまの登山の構成の中では、これからの人たちになかなか伝わっていないように思うんですよね。やっぱり、仲間の会合や雑談などの時にも、このスタイルのいいところだけじゃなくて、危険について経験者が声を大にして言って欲しいですね。アルパイン・スタイルのよさ、極地法のよさというものは、それぞれ個人的な登山の主義・主張によるものだと思います。どうせ自分達で金払うんだから、その選択はどちらでも構わないとは思いますが、そこに潜んでいる危険を必ず前提にして考えるべきじゃないか。

いま一つは、こういう議論の時に僕は思うんですが、さっき田中先生が言われた、アルパイン・スタイルとは高所順応の期間を設けないというふうな、大変わかりやすい言葉ですが、実

際には、登山者側にはチクリと痛い言葉です。その原点は何かというと、われわれ登山者側がそれをスポーツとしてとらえているかどうかにあるともいえるからです。

坂下 デニス・グレーというイギリス登山評議会の事務局長から聞いた話ですが、エベレスト財団といって、イギリスの遠征を統括しているというが、審議するところがあります。アラン・ラウスなど審議会のメンバーが何人かいる席上、イギリスの非常に若いクライマー、十九才の二人パーティーだそうですが、それが、ジャヌーの東壁に二人でアルパイン・スタイルで行きたい、審議してくれといって計画書が出された。

アラン・ラウスというのは、実際に四人でジャヌーへ出かけ、アルパイン・スタイルによる登山を成功させ、その後、エベレストとかK2とか、いろんな所に行っていますが、その彼が、ジャヌーというのはそんなに簡単に行けるところじゃないから、アルパイン・スタイルだとか、二人で行くことよりも、まず低い山で経験を積んで云々という話をしましたら、「お前らができたんだ」と、つまり、「お前らがやったのは六年も七年も前のことだろう。クライミングというのは非常に進歩しているし、そ

れを俺達ができないってどうして言うんだ。」十九歳の子たちがそんな具合にアラン・ラウスに言って、デニス・グレーも絶句しちまったそうです。

確かに、そうした経験のない人達でも、アルパイン・スタイルという一種の流行といえますが、彼らにとつてやりやすい、つまり、ライント・エクスペディションでやることで、コストもかからず、二人でも十分ジャスナーへ、少なくとも麓までで行けるわけですね。

これが極地法になりますと、ある程度しっかりしたパーティーを組まなくちゃいけない。必然的に費用がかかる。あるいは、時間がかかって来る。そういった大変な問題を十九才の子達はしたくないわけですね。その辺で彼らはアルパイン・スタイルをすつと採用して、アラン・ラウスやデニス・グレーに食ってかかって許可をくれということになつたらいいです。われわれの周囲にも、そういう傾向がなきにもあらずだと思えます。日本人の中でもヒマラヤに最近出かける人は、たとえば、十年に三回とか五回とか、頻度が高くなつていふと思うんです。

昔は三十年に一回、一生に一回ヒマラヤに行けばよかつた。それが自分の人生にとつていい思い出になつていたのである。現在のヒマラヤ

登山者はそれでは満足しないで、二年に一回とか、一年に二回も三回もということになり、ライント・エクスペディションを組もうという傾向はもつと伸びてくるんじゃないかと思うんです。

そのような理由で、ルートが難しいとか、自分たちの実力に合わないといつても、アルパイン・スタイルを取らざるを得ないというか、そうした形が多くなる。酸素も、もちろん非常に高く、一本七万円もしますから、酸素なしにすれば遠征自体のコストもがさつと下がる。それに、荷を上げるシェルパだとかポーターとかの雇費もさがるわけですから、無酸素登山という形を取り入れたという傾向はもちろんあると思えます。

危険ということがさつきから言われてますけれど、私などは、山登りの一番おもしろいのは危険なところじゃないかなという気がするんですね。全く安全で、必ず登れるということになれば、多分、私なんか行かないと思えますし、ここにおいての何人かの方もそういう登山はしないと思うんです。

恐らく、私の意見はかなり片寄つたものだと思いますが、私は、ヒマラヤ登山には必ず危険がつきまがつて、その危険をいかにクリアしていくかが山登りの面白さだと思つています。ア

ルパイン・スタイルにつきものの、危険というものを楽しむかしないのか、その辺のところを聞いてみたいんですが、松本さんはどうお考えですか。

つまり、極地法でいけば非常に安全である。アルパイン・スタイルで行けば、フィックス・ロープもないので、帰る時も自力で下ることになり、非常に危険なわけです。しかし、これでやれる確率というか、何とかできるんじゃないかといつた所へ登れるんだと……。松本(正城) 僕の考えも、坂下さんが言われたように、危険性があるから面白いのだと思えます。やはり、僕の場合は、確実な方法よりもアルパイン・スタイルで行きたいと思つてます。多少危いかと思つてもできればそちらを採用したいと思つてます。

さつき山森さんのいわれたこと、きわめて当然なんですが、外国隊の例を引用すると、ポードマンとタスカが最初ドクナギリをアルパイン・スタイルでやつた時に、彼らも、もつと低い山とか、やさしい山を目標にするようアドバイスされているんですね。でも彼らは、やつてみなきやわからぬと言つて出かけたわけです。僕は、どつちかという、そういう考えのほうがいいですね。

坂下 ここで、年配の方という失礼ですが、一九五〇年代にマナスルに行かれた先輩の方々がお見えですので、ちよつと伺いたいと思います。

山田さんがヒマラヤに行かれたのは、いまのようなアルパイン・スタイルとだいぶ時代が違っておりますけれども、率直なご意見をお聞かせください。

山田(二郎) たいへん面白くお話をお聞きしました。私たちは、いまスライドで見せていただいたような山登りをしたこともないし、大変クラシクな登山しかしたことないんですが、先ほどから意見が出てるように、対象とする山と自分たちの実力とのバランスを考えてみて、その時に一番よさそうな方法で行っているんじゃないかと思うんです。山は変わってなくて、技量はどんどん進んでいるんだから、登り方も変わってくるんじゃないか。

山登りというのは、もともと、なるたけ人工のサポートなしで登りたいというのが基本でしょうから、力がなかったり経験がなければ相当厚ぼったいものを着ていく。その厚ぼったい登り方の一つが極地法かもしれないが、そういう

ものをやっていくうちに、ここは少し削ってもいいというようなことで、だんだん進歩していきんじゃないか。そういう過程の中で、当然、

いまいわれたようなアルパイン・スタイルというものが進んでいくだろうし、あるいは、極端にいえば、もつとてつもない登り方が始まるかも知れない。それは当然というか、必然の流れだと思わうんですね。ただ、最初の段階で話が出ていたように、何といつても、山と自分たちの力量とのバランスでどういう登り方をすることが大切でしょう。自分たちの力量を無視して、これが流行だからこれだけでなくやらないんだといって、飛びつくことだけはやめた方がいいと、僕はオールド・ファッションだからそう思います。やっぱり、力に相応して、一番スリムな格好で山登りをするというのが、昔からの基本的な考えだと思わうですね。

我々は経験がないから、いろんなものを厚ぼたくく着て登っていたのかもしれないし。そんな感じを受けていまお聞きしております。

坂下 大塚さんは、その後一九七〇年にエベレストに行かれているわけですが、それから十五年経った現在、アルパイン・スタイルが隆盛してきたこと、どうお思いでしょうか。

大塚(博美) アルパイン・スタイルについては、山田さんと同じで私も経験ないし、最近、

いろいろ書いたものや人の話を聞くので、自分でも一生懸命理解に努めようとはしているんです。

やはり、それでいちばん思うのは、山岳会の会員で僕らの仲間だった植村君が、単独で行方不明になってしまったというようなことと、はなばなしい成果では、メスナーが単独でエベレストに登ったとか、そういうことを思いあわせ、今日、いろいろなデイスカッションを聞く、アルパイン・スタイルというのは、一度登り始めたら、成功するかしないかわからないけれども、そのまま登り続けるんだというふうな感じで受け止めています。私も未消化でよくわからないんですが、話を聞いた限りでは、まだまだ議論として、または理論として、みなさんそれぞれが持っているようですね。何かはつきりしない。

私がいちばん教えて欲しいのは、山の危険に對する考え方です。それぞれの立場で、そういうスタイルの山登りをしていけば、ここから先へ行ったら指が何本なくなるぞ。ここから先へ行ったら足のこの辺からなくなるぞ、もうちよつと無理したら帰ってこれないぞという、いわゆる山の危険に對する見極めをどういうふうにするのか。アルパイン・スタイルの中では、当然、そういうふうな

な難しい問題が入ってくるんじゃないかと思うんです。

私は経験がないからそういうことは言えないんですが、いままでも我々の身近な仲間や友達があちこちの高所で果敢な登攀をやった中で、純然たるアルパイン・スタイルではないにしても、いろんな形の中で最後にはそういう場面に直面して、たとえば、残念ながら、エベレストでたて続けに優秀なクライマーが帰って来なかったことなんか思いあわせると、いったい、それとアルパイン・スタイルがどういうふうに噛み合ってくるのか。

それから、いま、あなた方のような現役のトップ・クライマーの人達がアルパイン・スタイルを口にする事によって、これからそういうふうな登山を始めようとする人たちに、自分の力量をちゃんと見極めてからおやりなさいよというふうに、言えるかどうかという点を知りたいと思います。

ずいぶん話がとんで恐縮ですが、一九七〇年のエベレストの前にマナスル登山がありました。僕自身も登りたいほうの部類に属していたと思うんです、若い頃は。でも、自分自身が登れなくなつて、いまこういう現状を見たとき、登る人達が怪我をしないで、もしくは、命を落とさないで山をやってもらいたいという願ひの

ほうが痛切ですね。人によっては、山登りなどは個人個人が好きで自分の責任でやるからいいんじゃないかと言いかも知れないが、僕はそうじゃないと思ってるんですよ。植村の話じゃないんですが、山で死んじゃ駄目だ。絶対死んじやいけないと言いながら、本人がいなくなつちやうんだから。こんな馬鹿な話はないんで、これは、やつこさんの大失態だと私は思うんです。

山の登り方で、指の一本や二本なくなつても、やつぱりここは行くべきだ。頂上へ行っていいんだという考えもあるようですが、その辺のところはどうなんでしょうか。いまの若い人達が、そういうふうに果敢に山に挑んで、その山登りの価値をどういうふうに見ているのか。そのあたりを教えてください。私がどう思うかではなくて。

段階を踏むということ

坂下 最初のご質問は私がお答え致します。若いクライマーたちが、アルパイン・スタイルで出かける危険性についてどう思うか。また、何かサセステジョンがあるかという点についてです。

山登りの基本的なことですが、やはり、最初

は低い山から始めるわけです。冬山よりはまず夏山を登る。やさしい岩場から難しいそれに移って行く。これと全く同じことが高所登山にもいえるんじゃないかと思うんです。

重廣さんあたりになると、ブロード・ピークがアルパイン・スタイルの入門コースだなんていつてられますが、普通の若い人たちにはそれは難しいことだと思ふんですよ。何回かトレースされたルートでも、やつぱり、五〇〇〇呎から六〇〇〇、七〇〇〇というふうなステツプ・パイ・ステツプでやっていく。ルートの選択も、やはり、簡単などころから難しいところへ進んでいく。これが基本だと思ふんです。

私は常々思ふんですが、日本のクライマーは、三〇〇〇呎の山からいきなりヒマラヤに行き過ぎると思ふんです。現在のヒマラヤ経験者のおそらく半分以上、八割くらいだと思いますが、中級山岳といえますか、いつてみれば、五〇〇〇、六〇〇〇呎の山をほとんど登っていない方が多いと思ふんです。

ヨーロッパのクライマーは、アルプスから始めて、モンブランですと四八〇〇〇呎ありますね。その後、アラスカへ行ったり、アンデスへ出かけたたり、そういう登山をしているわけです。ソ連のクライマーは、パミールがありますから、その辺は十分ですし、アメリカは、アラス

カ、ロッキーへ出かけ、アンデスへ出かけ、それからヒマラヤへ来るわけですよ。そういう点で、かなりステップを踏んできています。

一方、日本人は、アンデスへ行くには非常に金がかかる。アラスカはたいへん寒い。アルプスはちよつと難しい。いろんなことがあって、なかなか中級山岳を経験する機会がない。その点、やはりヒマラヤは手軽ですし、距離的に近いですね。情報も豊富だし、一回行くんだったらヒマラヤへ行きたいという思いもありますので、中級登山をカットして、いきなり高い所へ行くというケースがかなりあると思います。その辺のところで、方法がまたアルパイン・スタイルということになるわけですから、なかなか無理があるんじゃないかと思えます。最初の話に戻りますが、日本の山を登ったら、できればアルプス、次はアラスカ、次はアンデスというような、さほどきつちりしてなくてもいいんですが、ステップを踏んでやってもええは安全じゃないか。こういうように私は思います。それから、後のほうの質問で、指をなくしたらとか、あるいは死をどう思うかとか。これはなかなか難しい問題でして、実際に登っている時はあまり考えないですね。馬鹿といえは馬鹿ですけれども。

大塚　ですから、その辺のところを常日頃から、メンタルな面でもトレーニングしておかないと、いざとなった時に大きな問題点になりやすい。そうでなくても、ポーツとしちゃうわけですから。

坂下　大塚さんがおっしゃったような、見極めといえますか、どこまでが本当に危険なのか、自分でどこまでできるかという、ぎりぎりの所を楽しむのがいちばん面白いんじゃないかと思えますね。着のみのままのビバークができないのに、八〇〇〇呎にいきなり行って、凍傷になったというのは無茶だと思わうですね。しかし、五〇〇〇呎でビバークの経験を積んでいく。六〇〇〇でもかなりの余裕をもってできた。となつたら、次に七〇〇〇呎でビバークすれば私はいいと思わうですね。ただ、三〇〇〇呎の冬山でやられた程度でいきなり八〇〇〇呎の高さでビバークをやり、結局失敗したとなつたんじゃないかと思わうんです。

やはり、自分の力と山の力を見極める経験を、少しずつ、簡単な山から段階を踏みながら身につけていくといえますか、それが大事だと思わうんですが。

重廣さんはどうですか。いろんな山へ行かれています。

影響する時代の雰囲気

重廣　話が戻るかもしれませんが、いまなぜアルパイン・スタイルなのかはよく言われていることです。昔の遠征というのは、基本的には一家を挙げていくような、規律と統制のもとに培われた団結の力で征服率を高める。これがうまくいけば、頂上へ行って帰って来るという確率が高くなると思わうですね。ところが、最近では、残念ながら大学山岳部でも社会人山岳部でも部員や会員が減ってきている。それでいて、一つの流行とか風潮とかいえるように、表向きでは非常に山登りがとつきやすくなった。要するに、欲しいものは簡単に手に入る。昔みたいな苦労はなくて、どんな場面でも使える装備ができ、食糧も軽量化されて用意されている。情報もあり過ぎるほどになって、非常に身軽に山の麓まで行けるようになった。そういうことが結果的にはこういうアルパイン・スタイルにつながる。ポルダリングなんかもそれと同じような傾向じゃないかと思わうんですが、実に安直に行けるようになってきた。

先ほど、山森さんはコストということをいわれましたが、そういう点でも、日本人というのは比較的金を持っているほうですから、トレ

キングと同じようなとらえ方で山へ行くことができるようになったわけです。

一方、山登りとなると、我々のマッシュャブルム登山の中で、フィックスを張ってやる極地法では事故が少ないということを言いましたが、隊員個々の判断する範囲についても、極地法の場合は非常に狭く容易だろうと思うんです。要するに、ルートができあがっているわけですから、トップにいる人は別として、後に続く者はルートを探さず必要はとりあえずないわけです。天候が急変した場合でも、フィックスが張ってあるから比較的無事に帰って来ることができ。自分が自分の判断力で動くという範囲が狭くなってくると思うんです。ところが、アルパイン・スタイルというのは、総称してそう呼ばれていると思いますが、それとは違った面での山登りであり、どちらかというと、隊員のチーム・ワークというのが、山へ行くための方法としてとられている。実際に山の中へ入ってくると、その隊員の持った個人的な力量と、その外のいろいろな条件から、必ず優劣というんでしようか、差がついてくる。そういう中で、これからいろんな不都合がでてくるだろう、というの、判断をする人がそれに失敗したりすればそれだけで、生きて帰るか帰らないかの分れ目にもなってくるわけです。

危険をチェックする仕組み

先ほどから田中先生にお聞きしたかったんですが、高所に行けば行くほど、我々が肉体的に受ける影響というのは大きいと思うんです。必ず体力は衰退してきますし、精神力というんでしょうか、それも減退して行く。我々が通常持っている能力を百パーセント発揮できないと思うんですね。しかし、先ほどから坂下さんがいわれていますが、山登りは経験だ。経験を積むことによって、自己の能力は強化されますし、その限界値をどんどん上げていくことができるだろうと思うんです。

そういう経験を積んだこと、自分の体験したことが、条件反射じゃないですが、何かことがあった時に、自分の思考能力が減衰していても正確な判断ができる根元になるだろうと思うんですね。これは、山登りを何回やったというんじゃないに、いろんな条件を体験したことのできた能力が、その場その場で対応的に発揮できれば、死なずに帰れるだろうと思うんですね。

高所障害という言葉で総称されていますが、高度による影響、あるいはそういう特殊な空間で行動することによって、僕らの能力がどんど

ん減衰したとき、やはり自分が行くべきか帰るべきかという判断するのは難しい。その力量の差が大きければ、結果的には当然登れる者と登れない者が出てくる筈ですし、その結果が事故につながることも多いとなれば、やはり、的確な判断をする人が傍にいないという点が一番問題になるだろう。だから、どこで本人がそれを判断するか、または能力的に優れた者が外から判断するか、これも難しいことですが、やはりこれも経験の問題でしょう。

楽しみとか面白さとか、スリルというんでしょうか。我々が山へ行くのに、始めからその山が容易に登れるという前提で計画を立てるのは、特殊な例を除いてまれだと思えます。むしろ、登れそうにない山をできるだけ研究して、あるいは、実際に現地に入って、始めて出合った山をどういう風に自分の能力で登って来るかというのが、いちばん面白いだろうと思うんです。それによってどんどん自分の力量を拡張するというか、常にその延長線上にあるその範囲を大きくしていく可能性がでて来るのだと思います。だから、アルパイン・スタイルをやるにも、必ずそういった力量の優れた者がついていれば、比較的安心して登って降りてくる。結果的に安全に行ってきたかどうかはその山の難易の目安にはならない。何の障害もなく、

ドラマもドキュメントもなかったから困難も危険もなかっただろうとか、反対に、いろんな故障が起き、何日もろくな飯も食えずにへとへとになって帰ってきたから、その山が難しかったなどという表現は、一概に正しいとは言えないと思うんです。最近の報告などには、それらが誤ってとらえられているのじゃないかという気がするんですが。和田君なんか、この点についても明快な意見を持っているんじゃないかと思えます。

またび、アルバイン・スタイルとは

和田 話の筋がちよつとわからないんですが、大塚さんのご質問に答えてきたと思うんです。山に対する危険の度合いとか、それに対処する側の人間の話というのは千差万別で、答えがしにくい。確かに短小軽薄の世相が現われているという表現が、おぼろげで一番いいんじゃないかと思えます。現代の社会風潮が山にあらわれていると感じます。

山の中で危険を予知するとか、それを回避して命を長らえるというのは、方法論としてはないと思います。各自がいろんなやり方で本能的にやっているのがいい。植村さんが亡くなったことも、彼が際立った探検家とか冒険家、

登山家などいろんな面を持った人だったから、一回の失敗が非常に重大かつセンセーショナルに伝えられている。

僕も二十年近く登っていますが、登山を、足の一回の動きの繰り返しだとしますと、平坦地であれ岩場であれ、何億回でもきかぬくらい動きを繰り返しているわけです。そのうちの一回くらいはどこかでチョンボしてもおかしくない。しかし、それで死んだら、多分同じようにいろんな方面から状況のミスが突かれると思います。山のそういう危険性というのは、グレイディングされた危険性じゃなくて、本当に、あたり一帯人間が住めないような、一木一草もなく生き物もおらぬ、そういう状態の場所ですから、そこへ行くこと自体大変なリスクを背負っていると思えます。

アルバイン・スタイルであるが故に、事故がふえるという懸念というのはあまりないと思います。確かに、非常に危険だというのは事実です。だけれども、それで登山者がいっぱい死んでいくというような状況には、まず人間の生き延びようとする本能がそれをさせぬと思えます。

いまは、登り方がどんどん過激になっているように見えていながら、洗練されて技術も高くなり、物も豊富になっている。一見、ハードに

登って、人間の可能性を上げていくように見えますが、実際は繰り返しをしているだけのような気がしますが、将来的にも、あまり人をして感動させるような記録などは、これからふえるとは限らないし、むしろ、ますます逼塞ひつそくしていくかも知れません。ただ、登り方は多様化し、カラフルできれいになっていくのは事実だと思いますが。

山登りの楽しみとしては、先ほど尾形さんがいわれた中に、一枚の写真から云々がありましたが、あれはきわめてベータシツクなもので、ああいうのをなくしてしまつたら、何もならぬです。しかし、これは方法論じゃなくて、山がどうして好きかという話です。

方法論はすでにいったように、採算ベースにのつた、物に頼らないこと。物量を極力少なくしていきたいと思っているということでしょうね。それがいま、山を登る表現としてはアルバイン・スタイルになっていると思うんです。

また話を戻しますが、アルバイン・スタイルの定義は、田中さんがいわれたように、一刀両断するのが一番すばらしい。素敵なんです、アルバイン・スタイルといえは、昔の人のほうがはるかに優れたアルバイン・スタイルリストがおったんじゃないか。ただ、目標が大きくなったので極地法という方法が入ってきたというだ

けで、精神においていいますと、逆にいまの人のほうが、そういうシンプルな登り方をしてないんじゃないかなという気がします。

いま流行のハード・フリーでも、カムとかナツツ、フレンズなどたくさんの種類のギアを持つ、ああいうことは、何かシンプルさを求めているようでいて、決してシンプルではない。クライマーが持っているたくさんのギアの数を見たら、昔の、ボルトだけでまっすぐ登ったほうがよりシンプルじゃないかと、皮肉りたくなるほど、用具への依存度が高まってきているように思う。

細分化することによって物に頼っているし、ハードにやっているといながら、酸素を使わないなら実験室に入るといような、——当然、酸素の七万円よりは低圧実験室のほうが高いですからね。そういう事柄で登山理論ができていくような、何か狂っているような感じが、いまのアルパイン・スタイルに象徴的に表われてきている。調子に乗ってやれば、即、死にます。

ことしの僕らのアルパイン・スタイルは、確かに初心者には難しいですけれども、入門コースです。ところが近くで、ロベルト・シャウワールとクルチカが、アルパイン・スタイルでガツシヤブルム四峰の西壁を登ったんですが、彼ら

は意気軒昂で登っています。ただ、田中さんのご意見でいえばルール違反ですが、北稜上七〇〇〇のちよつと下に、帰りの荷物を逃げる時のために生き長らえたんですが。彼らのスタイルは、デボをちよつとしただけマイナス点になったとしても、昨今で見える最高のアルパイン・スタイルの一つじゃないかと思えますね。これを見ると、さっきの定義はほとんど全部入っています。

新ルートをワン・プッシュで上がって生きて帰ってきた。そういうスタイルはクルチカさんに聞きますと、スタイルよりはラインだという。先ほどの尾形さんのように、写真から見ると一枚のラインにもっとも近い考え方で、たくさんの写真見せてもらいましたが、その中にチョゴリザが入っています、ごつつききれいな雪稜でしたがラインを引いてある。そういうように、山を見て一つのラインをひき、自分にとってもっとも合理的な方法で登る。そのための山探しをする。これがクルチカさんの素晴らしいところだと思いました。ここではスタイルにこだわっていない。それだけに、新しいスタイルを造っていきけるという優れた彼らの能力をかいま見たような気がしました。

アルパイン・スタイルのもつ可能性

坂下 非常にいいお話だったと思います。私も

ミュンヘンで、ちょうど登山の後にロベルト・シャウワールに偶然会いました。実は、ジェフ・ロウのところに彼はきたんです。ロウは来年マイケル・ケネディといつしよにガツシヤブルムの四峰をアルパイン・スタイルで行く予定でいたわけです。そこへロベルト・シャウワールがきた。いやもう登っちゃったよ、ごめんねというような感じで入って来て、ナイン(九)・ピバークだったと、写真に印したピバーク・ポイントをなぞって見せていました。

このルートだったら、日本人でアルパイン・スタイルやっている人でもちよつと思いつかないし、いままでの極地法のスタイルで行くようなルートだと思えます。それで気がついたことというか、私も前々から少し思っていることなんですが、アルパイン・スタイルの可能性というのは思想だと思っんですね。

つまり、このルートはむずかしいから極地法でなければ登れないという考え方をしますと、絶対登れないと思うんです。それをまったく切り換えて、これはアルパイン・スタイルで登らなくちゃいけないというか、登れるかも知れな

いという考え方に立ちますと、意外にラインが見えてくるものです。同じ壁を見るのでも、極地法に頼らざるを得ないという頭で見ずに、アルパイン・スタイルで落とすにはどうしたらいいかと考えていくと、だんだんラインが見えてくる場合があると思うんです。

クルチカは非常に有名ですが、シャウワーは日本ではそれほど知られていません。彼は、メスナーといっしょに高い山を何回か登ったり、この冬三月頃にはアイガーの北壁を登っているそうです。この後にも、ヨセミテへ行ってフリー・クライミングするんだと聞きました。技術的にも非常に優れ、ハード・フリー・クライマーとしても高所登山の面でも優秀な登山家です。もちろん、クルチカもポーランドの岩登り大会というか、スピード・レースで一位になった人ですし、高所登山だけじゃなく、岩登り、アルパイン・クライミング、ものすごい経験を積んだクライマーですね、この二人は。

だから、いま和田さんがおっしゃったように、ガッシュブルム四峰の登山はアルパイン・スタイルの金字塔といいますが、最高の結果じゃないかと思うんです。それはもう、極地法の登山で測られないような価値観といいますが、非常に価値のある登山じゃないかなと私もは思うんです。私なんかアルパイン・スタイル

を追い求めているというのは、そういったことでもあるんですね。その素晴らしさというんですか、極地法では得られないクライミングができるのだと思います。

さて、それでは、アルパイン・スタイルの持つ危険性に視点を置いて、これからその方式で山をやるうとする若い人達に、特にどういった注意をしたらいいか、あるいはどんなトレーニング、これは体だけじゃなく頭のそれも含めて、準備すべき事柄など、皆さんの経験から見てアドバイスして欲しいんですが、山本さんいかがですか。

山本 私自身しっかりした思想を持って登っているわけではありませんが、あまりはつきりしたことはないんです。経験が浅いものから、アドバースということで申し上げれば、いままで皆さんのいわれたことにつきると思います。私が今回アルパイン・スタイルに近い形で登れたというのも、階段を昇るような形で登ってきたから、たまたまそういうことになったというだけです。学生の時に日本の冬山を始めて、卒業してから少しずつ高い山を登ってきたら、結果的にここまで来たというだけです。それよりも、いままで皆さんがいわれたような状況に乗りうというより、自分がどうい

ことをしたいのかということのほうが、重要じゃないかなという気がします。

山登りはスポーツかどうかという問題もあるんですが、たとえば、ほかのスポーツをやっている方は、はつきりいつて危険が何もなくても、そのスポーツが好きだからやっていると思うんです。私も、山登りに危険という要素が別になくても登ると思うんですが、自分がなぜこれをやっているのかを考えることで、刹那的な登り方が少なくなるのではないかと気がします。私自身、最近、登山の内容がいろいろ分れていますので、把握しきれないでいるんですが、一つには、そっとしておいて欲しいみたいなところもあります。

分野がわかればわかるほど、そこで優秀な人が出てきて、お山の大将がたくさんできるわけです。そういうことになりますと、和田さんがちよつといわれたように、非常にせこい部分が出てくるような気がします。たとえば、アルパイン・スタイルの定義といっても、田中先生がいわれたような形が一番すっきりしているんですが、ヒマラヤ単独行などと大げさにいってみても、ベース・キャンプまでは一人ではないんですね。出発から終了まで単独でもないのに、単独行ということがまことしやかに言われているわけです。

冬の登頂にしても、はっきりしたものが無い。期間中に頂上に立てば冬の登頂というふうには、いまの段階では言われているようです。

私が言うのは生意気なようですが、山に競技的な要素を入れていけばいくほど考え方がせこくなつていくような気がします。本来、個人の満足というと非常に短絡的ですが、他人とくらべてどうだというのじゃなくて、自分個人の気持ちの上でどういうふうに登れば満足するのか。そういうことを個人がもつと自分に突きつけて考えていくことが大切なように思います。

最近、山岳雑誌見ても、私と縁のないフリー・クライミングとかアイス・クライミングとかばっかりで、あまり面白くないのですけれど、もつとベーシックな山登りがみんなの頭の中にしっかりと位置づけられていてもいいんじゃないかという気はします。

アルパイン・スタイルの危険性

坂下 仮定で恐縮ですが、コストの面、ライト・エキスペディション志向、組織的な面、クラブの中に人が少なくなつてきているという事実。これは山森さんが指摘されたことですが、そういったことから、アルパイン・スタイルが若い人達の間でとり入れられつつあるという現

象を踏まえて、医学的な立場からアドバイスするものがございませうか。

田中 高所登山におけるアルパイン・スタイルの危険性を考える場合、高所にかかわる問題と、登り方にかかわるそれに分けられると思えます。

後者については、メンバーの力量やフィックスト・ロープの問題など、すでに話が出ました。一方、前者は、低酸素や強風など種々の高所環境条件によるもので、思考力の低下、運動能力の低下、幻覚や意識障害など、なかなかむずかしい問題だと思えます。先ほど大塚さんが指摘された危険に対する判断力や、その受け止め方とも関係すると思えます。

山は変わらないが、人間の力はどんどん進歩しているというお話も一面では確かだと思えますが、高所での危険に対する判断力とか、それを回避する能力はほとんど進歩していないと言ったほうがよいのではないのでしょうか。少くとも、山の力と人間の力の差を考えれば進歩していません。

登山中の高所障害の判定や、登山前の高所適応能力の判定などは、十五年前と大差ないと思えます。

高所順応について極地法から得た私の知識では、四〇〇〇mまではほとんどの人が容易に順

応できる。六〇〇〇m以上になると、頭痛、嘔吐、食欲不振、肺水腫などの高所障害が出現しやすく、七〇〇〇m以上では順応できない人が出てくる。八〇〇〇m以上、あるいは八五〇〇m以上はごく限られた人しか登れない。

高所順応が良好で、六、七〇〇〇mの高さで元気に行動していた人の脳波にも異常所見があり、判断力の低下していることがよくわかりました。低圧実験室のデータと登山中の行動はかならずしも一致しませんでした。

アルパイン・スタイルでは、眼底出血など、種々の高所障害が高頻度に出現すると思えます。ただ、調子が悪ければすぐに下山するということになれば、血拴症などある種の高所障害は回避されるかも知れません。アルパイン・スタイルにおける高所障害や高所適性の問題も一度検討してみる必要があると思えます。

いずれにしろ、高所登山におけるアルパイン・スタイルは多くの危険性をはらんでおり、体力的にも技術的にも優れ、経験豊かな人のみが試みるべきものだというのが、医学的というだけでなく、私の考えです。

さらに言わせてもらえば、ヒマラヤにおいてアルパイン・スタイルを試みるのではなく、登山家の気持ちをより満足させ得る、新しいヒマラヤン・スタイルを追求していただきたいと思

います。

振返って考える

坂下 ありがとうございます。重廣さん、アドバイスみたいなものがあれば――。

重廣 アドバイスというはつきりしたものはないんですが、自分の経験からいえば、いまの登り方に至った経緯をもう一度振り返って見たらと思います。登り方や装備、技術の面でどういふ変化をしてきたか、その歴史を振り返るだけで結構いい勉強になる。ということは、アルパイン・スタイルで登る方法に備えて、何をしなければならぬかがおのずから明確になってくるだろうと思います。上すべりした形式だけのアルパイン・スタイルではなしに、いったん十分に掘り下げてみて、登山者個人として何をすべきかを考えて欲しいのです。

坂下 和田さん、何かありますか。

和田 もう簡単にいえば、植村さんは強かったのが一つですね。向こうの人みたいに。植村さんのすばらしさは、向こうの人になりきったことですね。アラスカに行けばアラスカの人になって、アラスカの水とアラスカの飯食って。向こうの人になりきるのが一番いい方法。高い山のある地域の生活をそのまま早目に覚えてい

く。これがいちばん高所の登山にもあたっていいんじゃないかと思います。

これはちよつと批判になるんですが。何かのために何々するという発想で、筋力トレーニングで上腕、十二分走が何キロとかで高所登山うんぬんというような科学的にはつきりした目安が欲しい感じはしますけれども、そういう発想がもう矛盾していて、何の目安にもならぬことをわざわざ目安にしているという感じがしてならないんです。

そんなものではなくて、一番いいのは、郷に入れば郷に従え式でやっていけばいい。別の所において、そこで共通項を求めめるのは、はなから間違っている。特殊性のあるものには特別な場所にて別になつて行かざるを得ない。十二分走でヒマラヤを登れるんでしたら、全然問題ないわけです。ランニングするにしても、タータン・トラックじゃなくて、砂利道走るなり、自然の状態の場所に行くほうが結果的にはトレーニングになる。目的のためのトレーニングじゃなくて、そのこと自体を楽しむようなトレーニングがメインでありたい。僕も、さつき言ったように、酒飲み過ぎるせいもあってすぐ肥えてしまう。ランニングしても、すぐ息が切れて非常に苦しいしつらいんで、ランニングはなかなかしてないんです。山へ行った時に思った

んですが、ポーターみたいになつたらいいじゃないので、タブレジュンから十八キから二十キ。かついでベース・キャンプまで行く。その間に体がタブレジュンのポーターの体になつたんじゃないか、そういうふうには思っています。アドバイスするとすれば、まず、臨機応変にどこでも順応する力を作ることです。

坂下 どうもありがとうございます。

最後に、宮下さんから、いままでの総括みたいなことを、これまでのご経験を踏まえてお願ひしたいんですが。

宮下(秀樹) きょうは勉強になる話ばかり聞かせてもらいました。

和田さんの話、東京の人は聞かれる機会が少なくないと思うんですが、たいへんユニークなこと言われて、その中でも、いろんなハツとするようなことがあって興味深いものでした。

いままでお聞きした中で、いまの傾向とか方法論というか、頭でっかちの感じがだいぶあるんですが、どうなんでしょう。私、現在の価値観というのが、こういう山やたら誰がどうという評価を下すかということのほうが先にきて、自分がどういふ満足感を得るかとか、自分で価値を認めるかというところが隠されてしまっていることが多いんじゃないかという気がする

んです。

若い人達へのアドバースについては、坂下さんのそれもお聞きしたかったのですが。私としては、どうも明確なものがないんですが。いまの学生さんを見てても、さっきの十九歳のイギリス人の話じゃないですが、先輩がこれくらいのことやっていて、我々がなぜやらせてもらえないんだと言われた時に、何て答えたらいいだろう。たとえば、アルパイン・スタイルにしても、ヒマラヤの経験が何回かなきゃやっちゃいけないとか、そういうことで単純には押し切れないところがあるんですね。

そうなると、どういうふうにしたらいんでしょうか。基準をつくるというのは、多分皆さんにも相当反対が多いと思うんです。じゃ、その人がその山に向いているのかいないのかの判定は、誰が、いったいどういう形で下していくのか。

重廣さんのように、相当の時間を勉強してあげばわかるんでしょうけれども、逆にお聞きしたいくらいで――。

坂下 本当にむずかしいんですね。私なんかも、クラブの中で、ヒマラヤだけじゃなくて、国内の山行計画を見て、お前行っていいよとか、お前だめという結論を出すときに、ときどき迷うことがありますね。経験の浅い若い人が

冬のむずかしい壁を登りに行くのは、一般的にいうと危険なわけですね。しかし、リーダーがチェックしないでそのまま行かしたらすんなり登ってきてしまい、その会員はおおいに自信もついて、次の、もっと大きい登山ができたというケースも結構あるんですね。その逆に、きつくと、どんどん規制していきますと、会全体が沈滞して、若い連中がなかなか育ってこないというケースもあるんですね。さっきのジャスナーのケースも、私は悪い意味のほうに出しましたけれども、本当の気持ちからいうと、そういう若い連中の心意気というのを買いたいんですね。

それで、大塚さんに言われた時に、ステツプ・バイ・ステツプでいきなさいみたいなことをつけるといいましたが、じゃ、私がどんな所に行っても、そういう見切りができるかといったらんでもない話です。私自身は、ヒマラヤへ行くときは、次は結構死ぬんじゃないかと、ある程度覚悟はしていつているというか、自分で多少ミスが多いですし、さつき和田さんがいわれたように、長い間危険にさらされていると、当然、命を失うケースもあるんですね。加藤藤さんとか吉野さんとか、かなり経験積んだ連中でも逝っていますし、それから、ジョー・タスカーとか、ピーター・ボードマンと

か、世界的にいっても一流の人達が遭難しているわけですから、どんなトレーニングしても、ほとんどの人が死ぬ、あるいは、事故を起こす可能性というのは常にあると思うんですね。

これは、田中先生がおっしゃったように、人間の決断できる能力というか、判断力というのはレベル・アップしていかない。ただ、装備とか情報、あるいは他人の経験、そういったものが私どものバネみたいなものになって、新しい登山といいますが、アルパイン・スタイルの登山をどんどん押し上げていこうな気がしますけれども。その辺のところは、はたして和田さんの言われたように、ママリーを超えているかどうか、たいへん疑問となるところのような気がしています。

話がとんで、私自身どう結論出したらいいのかわからないんですが、ただ、アルパイン・スタイルという方法論は恐らくまだ十年くらいしか歴史がないと思います。もちろん、かつては非常に古典的な感じでした。それはあつたんですけども、現代のそれが一般の登山者の間に受け入れられてきたのは、ここ数年だと思うんですね。

そういうことで、定義づけもそうですし、認識の仕方や、あるいはそれに対する取り組み方も、みなまちまちで、一つの結論は出ないん

じゃないかと、最初から私は覚悟をしていたわけです。そのような視点から、この場は皆さんのいろんな意見を聞いて、私自身もこれからのアルパイン・スタイルについて勉強したいし、ここにおいでのパネラーの方々も、重廣さんも入門者だとおっしゃっていますが、皆さんの話を聞かれて少しは糧になったんじゃないかと、私は思っているのですが。

今日は、まともな役員会で申訳ありませんでした。長い間ありがとうございました。(拍手)
山田 お話を聞きながら、私なりに頭を整理して、昔、ポーター・メソッドで山へ行った経験から、もう一度白紙に戻って考えてみますと、ポーター・メソッドというのはあくまでもメソッドに過ぎない。目的でも何でもありません。我々が昔やっていた山登りというのは、ヒマラヤへ行つた時はそういうことばかりやっていたので、いかにもそれが目的みたいに誤解されていたけれども、大変な間違いじゃないか。学生時代を考えてみると、日本の山をポーター・メソッドで登ったこともあるけれども、それはごく限られたときであって、あとは、いまのアルパイン・スタイルとは違った、程度の低いものかも知れないけれども、日常にやっていた山登りはアルパイン・スタイル的だったと思うんですね。山に入ったら誰も助けてくれないんだ。自

分の力でとにかく登って、降りてくるということとをほとんどやっていたいと思うんですね。

繰り返していいなのは、ポーター・メソッドは一つのメソッドだから、それを構成する人たちは優秀なクライマーでなければならぬが、優秀なクライマーが育つ一番基本というのはやはりアルパイン・スタイル的な山登りじゃないかろうか。これで、かえって元に戻ってくるんじゃないかということを非常に強く感じました。ただ、今日は、高所におけるアルパイン・スタイルということで、ヒマラヤの非常に高いアルパイン・スタイルだけが話の対象になっていますけれども、たとえば、ヒマラヤでも五〇〇〇呎の山も六〇〇〇のそれもある。坂下さんがさっき、日本人は三〇〇〇から八〇〇〇呎へ行くと言ったけれども、五〇〇〇呎とか六〇〇〇とか、そんなにすごいクライマーでなくてもできるアルパイン・スタイルの山登りが、ヒマラヤの低い山でできるかも知れない。そういうところでやっていくことが、これからは大変、いいんじゃないかと思うわけです。

そのような時に、力を超えないことはもちろん重要だけれども、アルパイン・スタイルの山登りというのは全部八〇〇〇呎を登るのがそれだと考えてしまうと、ちょっと、おかしくなりやしないか。

私は、アルパイン・スタイルというのは山登りの基本に忠実な登山の仕方じゃないか、それでこそ力が付いてくるんじゃないかという感じを非常に強く持った。我々が、ポーター、ポーターと言った罪を感じていますが、あれはメソッドに過ぎないことを再度確認しておきたい。坂下 山田さんのおっしゃったことに、私は全く同感です。若い人、あるいは年輩の方も命令の差を感じさせないご意見で、最後の締めくくりに貴重なお言葉だったと思います。

松永 パネラーの方々大変ありがとうございました。最後に、当委員会を代表しまして、金坂がご挨拶いたします。

金坂 本日は長時間にわたって、非常に突っ込んだお話を聴かせていただき、皆さんのご参考になったんじゃないかと思えます。

今日、お話を伺っておりまして、ここにおいでのパネラーの方々は、第一線の先頭を切つて動いている人達で、やはり、そういう人々の気にかけている問題は、ずいぶんレベルの高いものだと、いうことを認識しました。

それと同時に、平凡なレベルの人達が、高い山にだんだんに近づいていきたいというような場合に、どうしたらよいかということがまだはつきりしない。そうした中級者が面倒を見てもらえるような組織が、まだ、なかなか出ていな

いんですね。

皆さんは、当然いろんなメンバーを連れて歩いておいでだから、その中に経験の浅い連中とか、どじな人がいるのはご承知でしょうが、そのような人達が怪我をしたり、あるいは死ぬようなケースを、経験の深い方でしたら事前によく止めるというようなことも、かなり可能じゃないかと思うんですが、また、機会がありましたら、そんな点についてもお知恵を借りたいと思います。

私ども、高所登山研究委員会などと言っておりますが、実際には、高い山で遭難を起こさないように、むしろ、遭難対策に近い仕事などを主にしてやっていきたいと思っておりますので、またご協力をお願い致します。

どうもありがとうございます。(拍手)



吉田久兵衛氏（一九〇九〜一九八四）

吉田久兵衛氏の追悼を私が綴るのは、必ずしも適当と思われないが、偶々私の手許に同氏の記した「古絵図で山路楽しむ」（昭和四十四年四月十八日、日経新聞収載）と、新聞記者の聞きがきによる「『古書』を商って十一代——わが家族史39——」（昭和四十八年十月三日、毎日新聞収載）の切抜きがあるのです、それに基いて吉田さんの生涯を瞥見し、同氏を偲んで追悼にかえたいと思う。

吉田家のもと佐倉藩（千葉県）藩士の出でサムライだったが、庄左衛門という人の代で浪人になり、その子清左衛門が初代久兵衛として書店を始めた。真享年間（一六八〇年代）のことで、場所は浅草、雷門の近く、浅草と佐倉から「浅倉屋」の家号をつけたらしい。古書籍専門、しかも明治初期より前の和本しか扱わない「純古書籍店」になったのは明治以降で、敗戦後本郷へ移るまで浅草で開業していた。江戸末期から明治にかけては榎本武揚、副島種臣、徳富蘇峰のような「歴史上の人物」も常連で、創業時代の顧客に赤穂浪士のあったことと共に、吉田さんには忘れられないことであろうだ。

代々襲名で、現在の久兵衛さんで十一代目、幼名は直吉、明治四十年（一九〇七）の生れである。大正十三年に茂子さんと結婚し、十人の子供さんに恵まれた。東京の下町はよく火災にあい、二十年に一回は焼かれたという。古書は燃え易い。だから大正十四年に「二十年後の災害に備えて」四階建ての耐火ビルを建てたが、昭和二十年三月十日の東京大空襲では、猛火を防ぎきれず、本は全部ダメになった。家族を疎開させた吉田さんは、唯一人東京へ戻り上野図書館の嘱託になって、疎開させる貴重な古書を選び出す仕事を続けた。「商売はともかく、本を守りたい気持ちしかなかった」と言い、この関係でその後長いこと国会図書館の評価員を務めた。

昭和三十年代、浅倉屋は本郷へ移った。久兵衛さんの後継ぎ文夫さんは、明大の博士課程を出た歴史学者の由、古書に縁の深い学者と言えよう。

大正十五年七月下旬、本会々員松本善二、野口末延、両氏と久兵衛さん（当時は直吉）の三人は、谷川岳から仙ノ倉を経て三国峠までの上越国境山脈を縦走したが、これは登山史上初縦走とされている。^{*}後年、吉田さんはこの旅を懐しく回想して筆をとっている。先ず、谷川岳へゆくのに、当時は清水トンネルの開通前だから、信越線でいったん日本海に出て、上越北線に乗り換えて湯沢へ回るという長旅、湯沢からトンネル工事用のトロッキに便乗して、登り口の土樽村へ着いた。

そこで熊撃ちの猟師五人を雇い、米一俵、懐中じろこ五十本、猟師用のショウチュウなどを用意、履物は勿論わらじ、道もなく地図と磁石だけをたよりに、クマザサを刈りながらの山行であった。縦

走にかかって二日目から、ひどい風雨に見舞われ、同じ場所に二晩くぎづけされたが、七月三十一日は快晴となり、眺望も素晴らしく、六日目に日光キスゲの咲き乱れる三国峠に辿り着いた。連日の疲れを癒すべく訪れた法師温泉には、東京から安否をたたずねる電報が待っていた。以上がその思い出の概要である。

吉田さんは、山のない東京の下町に育ったためか、子供のときから遠くに見える山なみに、ある種の憧憬をもっていた。父の配慮であてがわれた古文書に絵入りのものがあり、その中に寛政年間に刊行された『遠山奇談』という山の探検談があった。京都、本願寺修築用の良材を求めて、人跡未踏の山にわけ入った僧が、種々な妖怪変化に出会うという幻想的な物語である。

晴れた夕暮れに、遠くの間々が影絵のようにくつきりと浮かび上ると、吉田さんは、その古書でみた幻想的な世界を想像し、それらの山の名がわかったら素晴らしいだろうと思うようになる。

そんな時、木暮理太郎氏の「東京から見える山」というスケッチが新聞に掲載されているのを見つけ、その図を手にして近所の浅草十二階（凌雲閣）へ登った。まだ小学生のころである。そして箱根から富士をへて丹沢山塊、大菩薩連嶺、秩父連山、浅間山、はるかに上越国境の山々、日光群峰を展望する。二千メートルを超える山が、そのなかに六十余もあるときき、それを一つ一つ確認するため、十二階通いを始めた。そして、一生かかって登り尽くしてみたと思うようになる。

関東近辺の山だけではあき足らず、夏がくるときまって北アルプスへ足を延ばした。この山行には、いつも大倉商業学校時代の山好

きの先輩、金子佐一郎氏（後年の十條製紙社長）と一緒にだった。

山の本や地図を集める楽しみを覚えたのも、そのころである。以下吉田さん自身の文章を引用しよう。

「戦後、私は珍しい写図を見つけた。それは、江戸中期の作と推定される『信濃国四方道程之覚』と題され、信濃十郡を美しく色分けした絵図である。この後にできた『天保板信濃国大絵図』や『富士見十三州』に描かれた飛驒山脈には、北アルプスの名峰がずらりと並んでいるが、いずれも肝心の主峰、槍ヶ岳が欠落している。ところが、この彩色図には、白色に塗りつぶされた飛驒山脈の中心に、マッターホーンを思わせる鋭峰が、とりわけ抜き出て描かれているのである。ただ、図には槍ヶ岳の名は見当らない。播隆上人がこの山を開山したのが文政九年であるから、この図はそれ以前の作と推定できるのである。また、かなり誇張して描かれた『槍』であることから、この作者は、峻険な山容に肝をつぶし、その感動を率直に地図に移したものと思われる。それは山男が山と対峙して感じると同じ感動である。（中略）

私はすでに六十六歳。自分の目と足を確める機会も少なくなつた。集めた山の絵図をながめては、『東京から見えない山』に思いをはせて、楽しむばかりである。」

吉田さんは大正十一年（一九二二）十二月本会入会、会員番号八二六。有志閑談会には第一回からよく出席されていた。また霧の旅会の会員でもあった。昭和五十九年（一九八四）九月七日歿。

（望月達夫）

*（編注、『山岳』第二十五年三号「上越境の山とその地名」松本善二）

金光正次氏（一九〇九—一九八五）

金光正次君は明治四十三年十月、秋田県湯沢町で産れた。昭和三年北海道大学予科医類に入学し、北大文武会山岳部に入学して山歩きをはじめた。当時北海道の登山は原始開拓の時代で、狩猟、ヤマベ釣り、測量のために入山するくらいで、そのほとんどは原住民の援助なくしては実行できず、純粹登山としては一般社会人の参加は少なく、大部分が学生団体の活躍が主流となっていた。その北海道で、故伊藤秀五郎氏等先輩諸兄の良き指導の下に彼もまた中央高地へ、日高山脈へと登路開拓の歩を進めて行った。特に冬山登山に於て、スキー登山術の研究実践を行うとともに、十勝岳連嶺の冬山合宿にはほとんど大学卒業まで毎冬参加し、その経験の積み重ねは後輩への良き指導となり、名リーダー振りを発揮し、皆から「メタ」さんの愛称をもって親しまれていたのであった。

学生時代の彼は真面目な勉強家である反面強力な登山家でもあり、日曜祭日ごとに共々に札幌近郊の山々と、特にスキー登山を行ったのは懐かしい憶い出として残されているが、彼はまた北海道の山山だけでなく、北アルプス、南アルプス、谷川岳等にも行動範囲を拡げて行った。

当時われわれ医学部の同級生の山仲間には金光、小生に加えて菊池寛、また中野征紀が加わり活発な登山が行われていたが、日本山岳会入会には山行歴が重視されていた時代で、現在のように容易に

入会出来なかったもので、われわれ山岳部員は部が代表して会員権を持つているのに便乗していたのであるが、日本山岳会にはひとかたならぬ関心と憧れを有し、金光もその一人であった。またヒマラヤ行に対しても憧憬少なからぬものがあり、内々の研究の結果が北大山岳部々報第四号に「高山に於ける風土順化作用と酸素吸入に就て」という小論文となって示された。

医学部を卒業した彼は一時兵役を勤めたが、日支事変勃発とともに昭和十二年九月召集を受け北支戦線に従軍し、翌年四月右上膊部に戦傷をこうむり、やがて兵役免除となり、その後の長期にわたる戦争継続の間に本業の学究の途に専念することができたのは不幸中の幸であったといえよう。ただ山歩きを存分に楽しむ状態ではなかったが、しかしそれでもその年の八月に小生の夏休中いっしょにまだ右腕の神経痛と右手指の硬直があるのにそれをかばいながら南アルプスの塩見岳から悪沢岳、赤石岳と登って早川へと越えたのであるがその意気や壮たるものがあつた。その後も症状の恢復とともに登山活動をつづけたはずだが、昭和二十八年国民体育競技大会が北海道にて開催された折、山岳部門の実行委員長を仰せつかり、大雪山縦走の計画を実行させた。実施は若い委員に任せ本人は小生等といっしょに一週間遅れでそのコースを確認踏破した思い出があるが、その他の登山記録は未詳である。

彼は昭和二十五年に札幌医大の教授となった。札幌大山岳部の設立に力を借し、また定山溪奥の白井川二股上流に白井川小屋の建設に貢献したが、北大山岳部の発展と北大山の会の充実に大いに力を発揮した。昭和二十八年五月には待望の日本山岳会入会をはた

し、その直後小生が札幌に居を移したことから、時折り彼の教室を訪問して語り合うのは日本山岳会北海道支部を設立することにあつた。札幌大には山崎春雄先生、伊藤秀五郎氏がともに教授として勤務しており、前後して藤井運平さん、望月達夫さんが札幌勤務となつて在札中であつた。しかし毎月一、二回の昼食会を開いて談笑するにとどまつて支部開設は時期尚早であつたが、金光を交えての懐しき良き憶い出となつてゐる。後年ようやく北海道支部が設立され、盛會に發展してゐるのも、多くは今亡き先輩達と金光のふだんの連絡の緊密さが大きな原動力となつてゐたのだ。

一方、北大山岳部内の活躍としては中野征紀を第一次南極遠征隊副隊長として派遣し、ヒマラヤ、チャムラン峰登頂隊長として送るに当つても金光は陰になり陽になりにして機運を盛り上げるのにつくしてくれたのであつた。

彼はその後本業の学究の道に全力をつくし、数々の学問上の功績をあげたのであるが、お互いの生涯の仕事に多忙のあまり時偶の休日にもともに山登りを楽しむ機会の少なかつたことは多少心残りのするところである。

金光との長い交遊の一端を述べて追憶のよすがとし兄の冥福を祈る次第である。

略年譜

- 明治四十二年十月七日 秋田県湯沢町に生れる
- 昭和三年四月 北海道大学予科医類入学、同十年三月医学部卒業
- 昭和十年四月 東京都泉橋病院外科入局
- 昭和十一年一月 陸軍短期軍医志願、近衛師団入營、四月 陸軍々医中尉

任官

- 昭和十二年三月 除隊、泉橋病院復帰、九月 応召
 - 昭和十四年一月 戦傷の爲除役、六月 東京大学伝染病研究所勤務
 - 昭和十七年五月 熊本医科大学衛生学教室助教、昭和十九年七月 ジャカルタ医科大学附属熱帯研究所細菌部長
 - 昭和二十年十二月 東京大学より医学博士授与、昭和二十四年六月 北海道立女子医学専門学校衛生学教室教授
 - 昭和二十五年六月 北海道立札幌医科大学衛生学教室教授
 - 昭和二十八年五月 日本山岳会入会(四〇四五)
 - 昭和三十九年十二月 北海道自然保護協合理事
 - 昭和五十一年三月 札幌医科大学停年退職、四月 札幌医科大学名誉教授、十月 インドネシア生物学医学研究所プロジェクト総括者、在インドネシア
 - 昭和五十二年四月 日本衛生学会名誉会員、昭和五十四年十月 日本ウイルス学会名誉会員
 - 昭和五十四年十一月 インドネシアより帰国
 - 昭和五十六年十一月 同五十七年十一月 トヨタ・モビルンド健康管理顧問、在インドネシア
 - 昭和六十年五月十四日 逝去
- 主要山行略歴(札幌近郊の山歩きは省略)
- 昭和三年七月 大雪山(黒岳)―白雲岳―忠別岳―トムラウシ山
 - 昭和四年二月 ヘルヴェチアヒュッテを中心としたスキー登山、五月 十勝岳―美瑛岳―美瑛富士―オプタテシケ山―トムラウシ山
 - ―白雲嶽―黒岳、七月 日高山脈神威嶽(未登頂)、九月 芦別岳、夫婦岩
 - 昭和四年十二月 北大山岳部冬期登山合宿(十勝岳に於て)

昭和五年二月 蝦夷富士（後方羊蹄山）、五月 松山温泉（天人峽）―化

雲岳―沼の原山―石狩岳―三国山、七月 南アルプス縦走

（甲斐駒ヶ岳―仙丈岳―間ノ岳―北岳塩見岳―悪沢岳―赤

石岳―聖岳）

昭和五年八月 雌阿寒岳、雄阿寒岳、十二月 十勝岳冬山登山合宿

昭和六年二月 夕張岳（厳冬期天幕野営）、五月 雄冬山、浜益岳、六月

夕張岳、七月 利尻岳（アーノルド・グブラー氏同行）、

八月 谷川岳、尾瀬沼、十二月 十勝岳冬山登山合宿（初

年班リーダー）

昭和六年十二月 ニセイカウシユベ山、天狗岳

昭和七年三月 鳥海山、七月 白馬岳―唐松岳―劔岳、十二月 十勝岳冬

山登山合宿（二年班リーダー）

昭和八年一月 日高山脈（戸簷別岳）、五月 ユーフレ沢より芦別岳―

昭和九年五月 大雪山彙、七月 日高山脈（幌尻嶽―エサオマントツタペ

ツ岳）、十二月 十勝岳冬山登山合宿（リーダー）

昭和十年三月 大雪山彙（愛別岳、比布岳、旭岳）、八月 東駒ヶ岳―仙

丈岳―北岳

昭和十四年八月 塩見岳―悪沢岳―赤石岳

昭和二十六年八月 旭岳―白雲岳 忠別岳―トムラウシ山

（相川 修）

交野 武 一 氏（一九〇八―一九八六）

『エベレストは二〇三高地にあらず』と記されたメモが、ナムチエ・バザールにいた交野総隊長からとどけられた。一九八一年五月十九日、重苦しい空気が漂うベース・キャンプで私はこのメモを手にし、気が和らぐのを今でも鮮明に憶えている。翌日、最後の攻撃も実らずナムチエへ戻った時、「ヤア!! ご苦労さん」とチベット人装束に身を包みニコニコして出迎えてくれた総隊長は、小声で「みんな揃っているようだね。これでいいんだよ……」と耳打ち、チャンを注いでくれた。昨秋、やつとつなぎ合わせた8ミリフィルムを浦の交野宅へお持ちし酒盛りをしたさい、フィルムを見ながら「次はカイラスへ行くぞ」と独り言を言い、スヤスヤ鼾をかく交野さんに接し、今冬は東京でおすごしになってはとみんなで遠まわしにすすめたが「俺はお前より若いよ」と一笑された。「来訪者が多くて楽しいぞ……」と電話してこられる時は「オイ、そろそろ浦へ来ないか」のサインであるが、仕事にかまけて春先にでもと思っていた矢先の悲報であった。一九八六年二月十三日午後七時頃、交野武一先輩はこの世を去った。

明治大学創立百周年記念事業として一九八一年にエベレスト西稜に挑んだ明大隊の総隊長、交野さんは当時72歳で、私より30歳離れており、最年少の隊員とは半世紀の隔りがあった。だが交野さんは若い連中とともにラムサンゴよりキャラバンを続け、すんなりとべ

ース・キャンプ入りした年齢を感じさせない体力と気力は、山暮しで培われていたのだろう。

最も好きな山、仙丈岳。その西面が望める三峰川左岸段丘の長谷村浦にセコンドハウスを構えられたのが十八年前になられるだろうか。一九七四年から本格的に念願であった山暮しに入られ、犬のボチやライナー、猫のゴン太やサツチャー、チトウたちと山を歩きまわり、好きな仙丈岳を撮り続け、読書を楽しみ、気がむくと筆をとるといった悠々自適の生活を送られていた。畑も耕やされ、羊を飼われる生活は労力を要した。戦後、交野さんは夢科大門峠付近で数年間をすごされた経験があったので、70歳を越されてもなお一人で山の生活が送れたのだろう。「俺は20歳は若いよ」が口癖であった。浦の生活で最大の行事は、秩父宮妃殿下へクリスマス・ツリー用の寄生木を献上されることであつたように思う。いつからなさつていたのか定かではないが、一九七七年暮に呼び寄せられお伴させられたので、少なくともそれ以前から献上されていたのだろう。豪放無比の交野さんであつたが、妃殿下の前ではコチコチに緊張し、失礼な表現が子供のようになってしまつてしまうが、寄生木の献上は交野さんの生甲斐であり、自慢の一つでもあつた。

人一倍お洒落な交野さんは、JAC総会などにも古風なザツクを背負い、前時代的服装でひときわ人の目をひくことが多かった。また、炬辺会など特に気の許せる仲間との会合では一変し、生まれたままの姿になられたりして、どこまでが冗談なのかわからないことも多かった。

「最近の登山はせっからだね。山は逃げないのだから、逆らわず

にのんびりやりたいね。山暮しをしていると新しい発見をすることが多い。まだまだ山を知るためには時間がかかるよ」一人暮しをする交野さんの実感が耳に残る。日本山岳会の名誉会員に推挙された時、「俺もついに年寄りの仲間入りだよ」とテレながら大喜びしていた交野さんは、浦の家のいろりの脇に、エーデルワイスの押葉を添えて、MACリーダーバッジと共にJAC名誉会員バッジを煤けた小さな額縁に入れて誇らしげに掲げられていた。だが、それも多数の貴重な蔵書や日誌、写真などと共にすべてが灰と化してしまつた。

新緑がまぶしい浦で五月十一日伊那市や高遠、地元長谷村の人們が「交野さんを偲ぶ会」を呼びかけ催された。集つた人たちは、村長さんをはじめ、病院長、焼肉屋の主人、サラリーマン、看護婦、新聞記者、電気屋などさまざまな職域の人たちであつた。「右も左も、上も下も関係なし、争い事は嫌いだよ」と誰からも親しまれ、友人になつてしまう不思議さが交野さんの魅力であろう。

「生活の目標は一つで先は長い。目標に到着するかどうかかわからないが、それに向つての一日一日の積み重ねだけだ。この歳になると盆も正月もない。だから年が改まっても特にどうということはない」が身上であつた。

「長寿の心得」が部屋に貼られていた。

七十歳にしてお迎えが来たら、留守だといえ

八十歳にしてお迎えが来たら、まだ早いといえ

九十歳にしてお迎えが来たら、さようせかずともよいといえ

百歳にしてお迎えが来たら、よい時期を見てこちらからぼつぼ

つゆくといえ

あまりにも早い旅立ちであつた。何も語らず、何も残さず、たった一人の旅立ちであつた。

略年譜

合掌

明治四十一年十一月二十六日 交野武之助、ぎんの長男として愛知県知多郡横須賀町(現・東海市)に生れる。

その後、家族とともに上京、礪川小学校、錦城商業を経て、大正十五年四月に明治大学政治経済学部へ入学。在学中は水泳部にも籍を置き、山岳部にあつては近代登山の導入に情熱を傾ける。

昭和八年三月、明治大学卒業後、同年八月、坪内富士子と結婚、素、紀太郎の二児をもうく。

昭和九年四月、三井合名会社へ入社、昭和十九年～二十年、兵役につき終戦。

昭和二十一年四月、三井不動産へ入社後、上司の命により、薯科の大門峠付近(現在の白樺湖畔)で、羊の飼育研究のため山暮し。昭和二十七年、東京へ戻る。

昭和三十五年四月～六月、明治大学アラスカ学術調査団のマツキンリー登山隊隊長として参加し、日本人の同峰初登頂に成功。

昭和四十年十一月、退社後、第一整備(株)へ就職、昭和四十一年に高層ビルディングの総合清掃の研修のため渡米、翌四十二年十月に同社社長に就任。

昭和四十九年七月、同社社長辞任後、すでに確保していた伊那・長谷村浦の民家で単身生活に入る。

昭和五十六年二月～六月、明治大学創立百周年記念事業として派遣した明治大学エベレスト登山隊総隊長を務め、同峰西稜ルートより挑戦するも、

八七五〇峰で断念。

日本山岳会には昭和三年六月に入会。会員番号一〇六八番。昭和二十八年、三十年同会理事、三十二年～三十九年、評議員。戦中に上高地のウエストンのレリーフを取はずし隠匿、戦後、復元に寄与す。昭和五十五年、名誉会員に推挙さる。

和六十一年二月十三日午後七時、伊那の長谷村浦にて逝去。享年七十七歳。三月三十日、静岡県富士霊園に納骨。

(中島信一)

高橋 照氏(一九一四～一九八六)

—照さんをしのぶ—

高橋 照君は「テルさん」と呼ばれて、多くの関東の岳人に親しまれていた。実はテルではなく「アキラ」と読むのが本当なのだが、誰もがそうは言わなくてテルさんという呼び名のほうに親しみを感じていたのであろう。

それは、彼のなんとはなしに時々見せるニヤリとしたほほえみや、彼の穏やかさの陰にあるいささかの不敵さなどの人柄のあらわれなどによつたものだったと思う。こうした彼の独特の雰囲気は、若い頃からの彼の持ち味であつた。

彼が行つた一九六二年のビッグ・ホワイト・ピーク以後のネパールなどでの山登りや民族研究の優れた業績は、すでに多くの人に知

られており、また本学会報「山」の490号（一九八六年四月号）の追悼欄に、高橋定昌、星野 重の両氏が執筆され、本号にも高橋定昌氏が新しく彼のヒマラヤでの活躍を記されている。

東京の好日山荘を神田小川町に私が開店した翌年、昭和八年頃から、彼はしばしば私の店をたずねてきた。年齢が私とはひとまわりも若い彼と、どうしたわけか私は妙に気が合って、彼は自宅からよりも、まだ独身だった私の下宿に寝泊りして勤めに出ていくことがたびたびだった。また、三ツ峠や谷川岳、鹿沼の岩場などに、他の親しい山仲間も含めてよく登りに行ったものだった。

上高地から涸沢や槍ヶへ、などの山行には、彼と私達の仲間は幾度となくいっしょに歩いた。春、夏、冬、そして秋もいっしょに登高をたのしんだ。涸沢でのキャンプの夜は、彼の歌う「オーソレミヨ」や「サンタルチア」「帰れソレントへ」などが、私たちの「山に在る」気分をいっそう深めたものであった。

彼は生まれつきほっそりとしたプロボーションで、何よりもパランスが良かった。そのクライミングのすつきりとしたフォームは、私たちが著した山の技術書のなかに充分に表現されている。（編注、『岩と氷雪への登山技術』昭和十四年、三省堂刊、『山と闘ふー山岳写真傑作集ー』昭和十四年、朝日新聞社刊など）

彼と「酒」については、若い頃にはそれほどではなかったが、それでも腰をすえて飲み出すとつよくて、上高地徳沢小屋の西山隠居爺さん相手に軽く一升あげたなどは、あたりまえのことだった。ただ酒に飲まれて乱れることはなかった。戦後、ネパール入りが頻繁になるにつれて酒のほうはますます激しくなったよう、地酒のロ

キシやチャンなどのつよいものを、朝からチビリ、チビリとやっていたようだ。従って、山歩きをあまりやれなかったのは致し方ないと思う。しかし、ただ飲むだけではなくて、それら地酒のつくり方やその地方の民族、民話のことなど、いくつかを集録してきたこと（『ネパール曼陀羅』など）は、登山だけが目的の隊の多い昨今のネパールの記述の中で異彩を放っている。ただ残念に思うのは、あれだけ長期間、ネパールに滞在していたのに、その著書が、前記のものど『秘境ムスタン潜入記』の二冊しかないことである。もつとネパールやシツキム等についての研究や紀行等の記述を残しておいてくれればよかったとおもう。隊としての諸々の報告の中に彼の記述があるのだろうか、それは現在私の手もとになく、紹介出来ないのを遺憾に思っている。

（昭和六十一年六月二十日）

（海野治良）

ヒマラヤ浪人 高橋照（たかはしあきら、登山家、昭和六十一年二月二十一日午後四時半、食道がんのため千葉市仁戸名の千葉県がんセンターで死去、七十一歳。告別式は二十三日午前九時から東京都東神田一ノ十三ノ十三の自宅で。喪主は長男真（まこと）氏。

以上が新聞報道である。

私とテルさんとの交友は、昭和十四年の京浜山岳団体聯合会結成の折でした。すでに彼は若手論客の一人としてなかなかの雄弁家なので岳連運動の重きをなしていた。下町同志の突き合いで親しくしていたが、十八年に応召されて中支戦線に従軍された。

戦後、各山岳会とも会員が離散して收拾がつかない昭和二十二

年、いち早く再建した私達山岳巡礼クラブに、テルさん、藤代豊喜、斉藤清太郎のベテラン三君が入会してこられたので冬山登山が多くなった。この年にテルさんはJACにも入会したのである。

戦後は第二次日本岳連が始まり、三君と私は同志としてその中心勢力として活動を続けたので、「岳連屋」の称号をいただくことになった。

テルさんが映画「富士山頂」製作の折、技術指導を頼まれて主演の藤田進氏らと何日間か富士山頂で暮らした時のことである。テルさんも藤田氏も酒豪として知られていたので、飲みくらべをする羽目になった。勝負は簡単にテルさんの勝ちに終わった。藤田氏は高山病に負けたのである。

テルさんは、酔えば十八番の正調安藝節を上手な節回しで唄ったり、スキーも一級の腕前という器用人でもあった。

テルさんの「ヒマラヤ研究」は本格的なもので、日本岳連結成以来推されて「海外委員長」を勤めていた。日本岳連に年一回一隊五千ドル内外という外貨枠を獲得したにもかかわらず、踏査隊一隊、ジュガル・ヒマールは二回とも敗退した時である。テルさんは第三次ジュガル・ヒマール隊の選考、審査、とりまとめの送り出し役の海外委員長を辞して、自分から隊長を買って出たのである。もちろんメンバーの構成から成算あつての立候補であつた。一九六二年、全日本山岳連盟、第三次ジュガル・ヒマール遠征隊長として主峰ビッグ・ホワイト・ピークに挑み、アタック七隊員が全員初登頂という輝かしい金字塔を打ちたて、後援の読売新聞社は大々的に報道した。テルさんはこの記録の総てを十六ミリ映画に収録してい

て、日本テレビから放送され、この年の「民間テレビ・ドキュメンタリー部門最優秀賞」を獲得した。テルさんのクランク技術が高く評価されたのである。

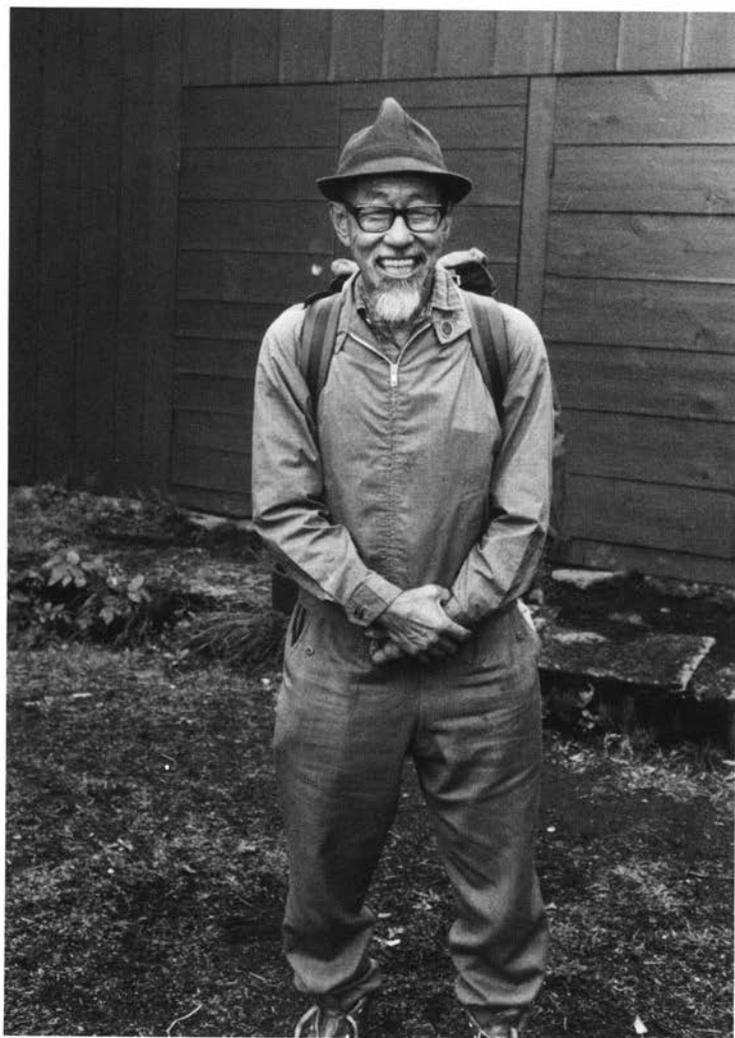
七十一年には、東京岳連の「マナスル西壁」登山を企画し、隊長を引受けて困難なルートからのアタックに成功した。サミッターの一人である田中基喜君（山岳巡礼クラブ）は若冠二十歳で、サミッター世界最年少記録を作った。テルさんはなかなかのアイデアマンで、知る人ぞ知る「エベレスト・スキー滑降」もテルさんの発案であつた。しかし、アイデアは出すが、まとめる能力は伴なわなかつたようである。

七十六年に「ダウラギリ工峰サウスピラー」アタックを計画して出発した時は、六十一歳というから、本当にヒマラヤに憑かれた男である。

恋愛結婚したその夫人との間には、二男一女をもうけたが、家業の卸問屋は家族に任せ、自分一人ネパール浪人をきめこみ、ここ十年間の大半はカトマンドゥ暮らしをしていた。テルさんは文才にも秀れ、何冊かの本を書いている。「マナスル西壁」の報告書はなかなかの力作。八十年には、狙っていたムスタン王国入城に成功し『秘境ムスタン潜入記』を著述した。また、雑誌「岳人」に「ネパール夜話」として発表していたものをまとめて『ネパール曼陀羅』と題して単行本として発表したり、ネパール語の読み書きも自由にできる腕前は「ネパール浪人」生活の酒を飲んでばかりいた訳ではなく、結構忙しく勉強し活動していたのに違いない。

そのテルさんが八十五年は日本に居て、土曜会の有力メンバーと

追 悼
OBITUARY



名誉会員

交野 武一氏

KATANO Takeichi (Hon. Mem.)

(1908~1986)

1980年、富士山麓明大山荘にて



金光正次氏
KANAMITSU Masatsugu
(1909～1985)



吉田久兵衛氏
YOSHIDA Kyūbē
(1909～1984)



高橋照氏
TAKAHASHI Akira
(1914～1986)

右は1938年頃、谷川
岳シンセン尾根の氷
壁を登る同氏（海野
治郎氏蔵）





名誉会員

平 沢 亀 一 郎 氏

HIRASAWA Kameichiro (Hon. Me
(1890~1986)

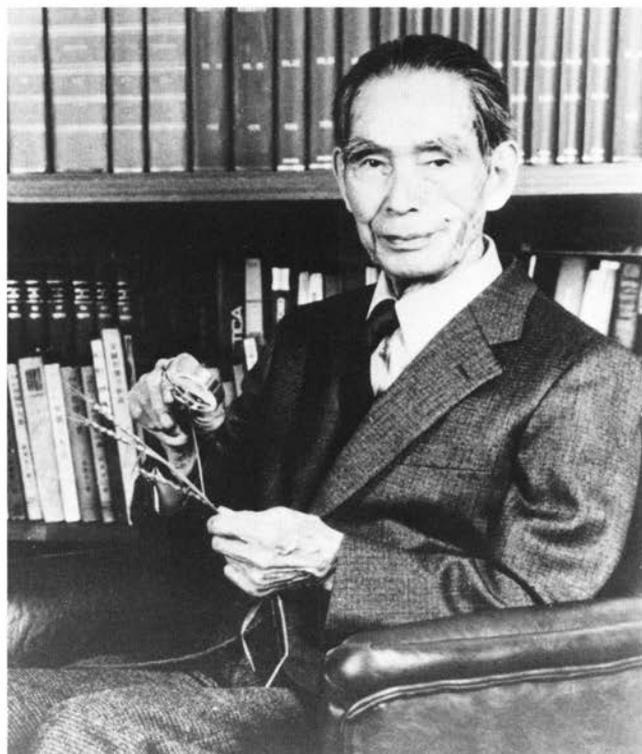
今 井 嘉 道 氏

IMAI Yoshimichi

(1903~1986)



木原均氏
KIHARA Hitoshi
(1893~1986)



金坂一郎氏
KANESAKA Ichiro
(1920~1986)

して、ルームでチビリチビリ快気炎をあげていたのである。

四月の「日本登高会」にテルさん出席、五月「食道がん」の診断で千葉県がんセンターに入院、コバルト治療で全快し六月退院。十月加藤太郎君を囲む会に出席、元気に一ぱい。十一月に地下鉄階段で左足首骨折しギブス一ヶ月。十二月にも布団の上で倒れて右肩鎖骨々折でギブス一ヶ月。たばこは止めて三年になる由だが、毎晩お酒は飲み太っていた。しかし死は突然訪れた。

八十六年一月十七日、突然下半身不随となり、歩行不能のままがんセンターに担ぎ込まれた。ガンが脊髄に転移し余命一、二ヶ月の診断であった。二月八日に見舞った時は「痛み範囲も狭くなった」と胸に手でその位置を示し、今年は寅年で、年男だからキツと直るよと訴えておられた。急性だから必ず直るよと元氣付けを言つて辞したが、二月二十一日、病いの進行は早く、腰の激痛を押える鎮痛剤を点滴に入れる応急手当ても空しくテルさんは黄泉に旅立った。四月五日、三田林泉寺に埋葬、戒名「浄岳照道居士」合掌

(高橋定昌)

大正三年二月二十八日生まれ。日本山岳会入会、一九四七年六月、会員番号三〇四七。

今井嘉道氏（一九〇三—一九八六）

日本山岳会の山岳博物館を考える会に出席していた、去る七月十

七日夕方でした。その夜図書委員会の集りで来ていた大森さんから今井さんの訃報を聞きびっくりしました。

その時まで知らずにいて、亡くなられて一ヶ月以上も過ぎていたのでもた驚き入るばかりでした。事務局からは三水会代表者へ知らせましたと云われ、連絡のゆき違いでその時まで知らずにいたことを悔いるとともに、ご家族の皆様にも本当に申訳ないと思う方が先で、何と申し上げてよいやら、ただただお詫び申し上げたい気持ち一杯となりました。

今井嘉道さんは三水会の古い会員で、私達が昔婦人部で色々活動していた頃、よくルームにもお見えになっていて、山や音楽のお話をされていました。特に今井さんはヨードルがお好きで、そのレコードの蒐集も大変なもので、ヨードルの今井さんと云つてもいいくらい詳しい方で、各国のレコードを百枚位集めて、楽しんでおいでになられたようでした。

日本山岳会の三水会では会員の親睦をはかるため、色々の催しを企画しましたが、吉祥寺の成蹊学園の脇にある立派なお庭に集つて、今井さんの説明でヨードルの夕べを五回ぐらい催させて頂きました。広い庭の林は小鳥が多く、花の咲く涼しいお庭でヨードルを聞きながらのビールパーティはととても楽しい催しで、その当時は折井さんもおいでになつて、それは楽しい夕涼みパーティを、毎年恒例のように催すことができました。

お庭に椅子を並べたり、レコードのマイクの設営等、男性の仕事は今井さんと息子さんの協力で、パーティ料理は裏方の奥様のお料理で、私達はほんの少しお手伝いするだけで、総て今井家のご家族

皆様のもてなしに甘えて、申訳なく思いつつ続けておりました。

そのうちあまりにもご家族にご負担がかかり、奥様の後始末のお疲れがあつてはと、ご遠慮することになり、以後二回ほどJACルームで坂本さんの解説で、ヨーデルを聞く会を催しましたが、それからはやらなくなって久しく、今井宅庭園での楽しかった雰囲気の違いが、いつまでも残っていました。

そうしてヨーデルの思い出を持つ人も今ではだんだん少なくなり、特にこの催しに関係した方も見出せず、とうとう私に今井さんの追悼文の依頼ということになった次第、ところが私がヨーデルの夕べに世話人となつて、お手伝いしただけで、さて山へご一緒した記憶もなく、ルームでいつもお会いしたり、三水会の催しでお話したりしたくらいで、学校時代から勤務先のお仕事や、略歴や登山歴など何も知らず、早速奥様にお詫びがてら、お悔みに参上して、色々伺つて参つたことがらを記録させて頂き、私の追悼文と致したく思います。

去る七月三十一日後れ馳せながら、三水会代表として沼倉さんが三水会有志の献花を届け、お悔みに参上されるということだったので、私も同行してお宅に伺い奥様よりご病状など詳しく聞くことができ、ご生前の様子もあらまし知ることができました。

登山歴については二十歳の頃、軽井沢に行かれていて、浅間山へ登られたのが最初で、昭和十一年頃霧ヶ峰の長尾広也さんの小屋へ泊つたり、十五年には赤城山へ、十六年には谷川岳、昭和十七年には八ヶ岳へ、そして戦後は三十年頃より裏銀座縦走で雲の平付近、槍ヶ岳―双六岳―槍見温泉―中尾峠―上高地、穂高岳、白馬三山そ

の他へ、ほとんど息子さんと一緒に、大阪へ単身赴任の時は、伊吹山、大山、大台ヶ原等へ登られたそうでございます。三井信託在勤中はご夫妻で、大雪山へ一週間ぐらい行かれて、無人小屋に泊り歩いたとかで、今井さんは非常に足が早かったそうでした。また東北では安達太良山や盤梯山へは毎年行かれ、七〇歳頃先年亡くなられた成瀬さんと二人で白根山へ登られておられます。

さて登山の他にクラシック音楽、バイオリンもひかれ、N響会員でもあつたそうで、植物も愛され、広いお庭に植えて楽しんでおられ、生前は自然に親しまれ、本当に恵まれたご生活だったように伺いました。晩年は武蔵野愛鳥会の会長として、武蔵野在住の主婦の会の指導をされ、軽井沢の星野へ野鳥の会を主催して、車で行ける所へよく行かれ、お庭に来る鳥の声に耳を傾けて、心豊かなご生活をなさつていたそうでございます。

また山の随筆や紀行文をよく読んでおられて、足が弱くなられても武蔵野の風趣の残る庭木の多いお宅での晩年は色々の趣味に生きられて、奥様とも山へ行かれた思い出もあり、お幸だったのでないかと思われました。

さて、この度のご病状については、三十歳代から糖尿病の持病があつて、近年メヌエル病とかいうめまいのする病気にかかられ、最後は老人性の腸閉塞でひどくなり杏林病院へ四十日入院、一度自宅に戻られてまた再入院後、一週間意識不明のまま、昭和六十一年六月十一日永眠、目黒教会で告別式が行われました。

成人された一男一女がおられ、横浜の第一勧銀にお勤めの息子さん、当夜吉祥寺宅へ来られ詳しくお父上様とご一緒に山へ行かれ

た当時の思い出話をして下さり、十年前頃のヨーデルの夕べのことなど思い出し、今井さんをしのぶことができました。ここに心よりご冥福を祈りつつ追悼の意を表する次第です。

略 歴

明治三十六年八月六日、東京麻布生れ、豊島師範小学校、成蹊中学校、早稲田高校、早稲田大学校、英法学部卒業。
三井信託銀行勤務、五十五歳停年退職。小滝園観光開発事業、ロイヤル・コントロール、東洋大学及東海大学講師、目白椿山荘等に勤務後、フリーとなり、七十歳頃より武蔵野野鳥会を創立し、会長として活躍八十二歳で永眠された。

(坂倉登喜子)

編注。今井嘉道氏は記録によると、一九四三年五月、日本山岳会入会、会員番号一〇六九ですが、望月達夫氏によれば、この入会年と会員番号は符合せず、本人も、なぜその若い番号が与えられたのか生前から不思議に思っておられたとのこと。

平沢亀一郎氏（一八九〇—一九八六）

昭和六十一年六月二十七日、名誉会員（会員番号三七二一）平沢亀一郎氏が逝去された。明治二十三年十二月の生誕であるから教育勅語と同年の九十六才であった。「巨星墜つ」の思いが深い。

平沢亀一郎は何する者ぞ、と問うならば、
一、日本山岳会の名誉会員であり、仙台二中（現在の仙台三高）

で五年間、楨有恒氏と同級生であった人。

二、台湾総督府の農業技術者として、「蓬莱米」の生みの親で、台湾の農民から今日もなお神様あつかいされる人。

三、今日、台湾山岳協会によって引き継がれ隆盛に生き続けている台湾山岳会の生みの親で、台湾の中央部で藩地と称せられた頃の、台湾山岳の開拓者。

四、円満活潑な人格者で、終生人を愛し、人に愛された、生れながらの山岳人。

などをあげることができよう。

平沢亀一郎氏は旧仙台藩主伊達家の一族で、伊達宗亮氏の十二人の子女の七男で末子であった。後、若くして平沢家を継いだが、根が御家老のお家柄なので、おたずねすると応接間には立派な鎧が飾ってあったり、何かしてさし上げると「いや、かたじけない」などと言って足輕級のわれわれを「ギョツ」とさせたりしたが、ねっから人のよい、末子的性格が、老若にかかわらずわれわれの誰をも友人あつかいしてくるので、いつも楽しい先輩であった。

日本山岳界の大長老、楨有恒氏とは中学生の五年間同級生であり、後の台湾時代にも製糖会社の役員であった楨氏とは常に近くに在ったから、山岳に関しては深い影響を持ち合ったものである。

大正五年、東北帝国大学農学部（現北海道大学）を卒業すると、台湾総督府に赴任された。そして、台北州内務部に農務主任として出向し、一年に三回収穫できる台湾の気候と品種の高い内地米の条件を考え合せ、竹子湖という高所に設けた試験場で新品種を開発し、その成果を「蓬莱米」と名づけた。これは台湾にとっては画期

的な功績であり、質量共に台湾を食糧の豊庫とした。春秋の筆法を以てすれば、今日台湾の独立維持は平沢氏の功績といえるかも知れない。

折しも総督府専売局の技師であった故沼井鉄太郎氏との出会いは台湾山岳会の誕生となり、これは台湾独立後も台湾山岳協会に受け継がれ、今も台北（旧制）高等学校の同窓、周百鍊氏が会長をしていられるはずである。

平沢氏には山に関する一冊の著書がある。『台湾の山と私』（昭和五十六年茗溪堂刊）がそれである。台湾の山の記録はすべて消滅してしまつた戦後に、台湾の山の生き証人であつた平沢氏が、横氏のたつてすすめで記憶にたよつて書かれた貴重な文献である。

「台湾では三、四千米級の山岳が全島を南北に走り縦断し、私が登り始める頃までは、蕃人（後の高砂族）が占拠して跳梁を逞しくし、首狩りの習慣があつたので、全島の四十七％にあたる山岳地帯は特別行政区域に指定され、警察が行政を司り、平地人の入山は差止められていたので、何人も入山することが出来なかつた」

のであるが、大正の中頃からようやく「特別者に限つて入藩が許可されるようになった。言わば暗黒の世界が漸く開かれ」ることになつた。当時は「藩地々形図」と称する地図を頼りにしたが、それは未だプランクも多く、印刷もひどいものであつた。だから、

「未だ曾つて文化人の足跡を印しない土地であるから、何処を登つても、何処を歩いても初登攀、初縦走となり、その記録は初めて世に紹介されることになる。それで私が山から帰ると新聞記者

に囲まれて記事を提供することになり、紙面を賑わしたものである」（同書（自序）による）

戦後は郷里仙台に帰つて、宮城県の嘱託をうけ、海外移住の仕事に従事したり、台湾の山岳協会との橋渡し役を引きうけたりした。晩年は日本山岳会の長老として、宮城県支部の会にもよく出席し、若い岳人を愛し、若い岳人に愛された。

「巨星墜つ」の思いが深いのはこのためである。御冥福を祈りた

略歴

明治二十三年十二月二十二日、伊達宗亮（むねすけ）、ゑんの十二子として生る。

幼年時代、父の旧領地宮城県亘理郡坂元村で過し、後仙台に移る。

少年時代、仙台木町通小学校、仙台二中（現仙台二高）に学ぶ。中学三年の時平澤家を継ぎ平澤姓を名乗る。中学時代は野球、水泳、陸上競技に活躍する。

明治四十四年三月、仙台第二中学校卒業

大正五年七月、東北帝国大学農学実科（現北海道大学）卒業。陸軍一年志願兵となる。

大正七年一月、台湾総督府技手、殖産局糖務課勤務

大正八年五月八日、錦織ゆきと結婚す

大正九年九月、台北州内務部勸業課勤務（技手）。同課にて稲の品種改良に従事蓬萊を産出する。

昭和七年六月、台湾総督府技師、殖産局兼警務局理番課勤務。蕃地駐在警察官の授産技術指導、山地農業開発指導。この間台湾山岳協会常務理事となり、登山の振興に尽力する。

昭和十年十月、全国米穀大会（於台北市）にて蓬萊米改良発達の功を表彰

される。

昭和十四年、台湾總督府内務局地理課勤務、全島の国有地を主管し、平地の未利用地及び高地に「キナ」「油桐」「カカオ」「トバ」等の熱帯有用植物の栽培、企業計画並に増産に尽くす。

昭和十七年六月、海軍省嘱託として一年間南洋諸島（主としてセレベス）の資源調査を行う。

昭和十九年九月、正五位、勲五等旭日中綬章を賜る。同年同日、退官して、三井報恩会の事業である「化研生菓株式会社入社（常務取締役）」セフアランチンの原料である玉咲つらふじの栽培に当る。

昭和二十年九月、中華民國台湾省衛生局諮詞に留用せらる。昭和二十年十二月、帰国。

昭和二十三年十二月、宮城県農地部開拓課勤務。

昭和二十八年十月、宮城県海外協会常務理事となる。

昭和三十一年一月、日本海外協会連合会よりブラジル、アルゼンチン、パラグアイ各国の移住状況調査を命ぜらる。三百名の移民に同行してケーブタウンを回りパラグアイの入植地に入る。さらにアマゾン河の奥地ポートベリオの入植地を始め各入植地を回る。十月、帰国。

昭和四十三年春、勲四等瑞宝章に叙せらる。ブラジル国より文化章を送られる。

昭和五十三年六月、ブラジル宮城県人会創立二十五周年の祝賀会に招かれ、ペルー、アルゼンチン、パラグアイ、アマゾンの各移住記念式典に出席。

日本帰国後の登山、台湾への登山——四十年十二月、四十九年十月、五十

二年十二月、五十六年十月の四回

ヨーロッパ・アルプス——四十四年

アラスカ・カナダ——五十年

ネパール——五十七年四月

昭和五十七年七月一日、妻ゆき逝去

昭和六十年九月、日本山岳会八十周年記念年次晩餐会にて名誉会員となる。

（早坂禮吉）

金坂一郎氏（一九二〇—一九八六）

金坂一郎君

逝去の報に接し、錦ヶ丘坂上の邸にいたれば、家内平穩なり、彼が日頃の遺訓なるべし。

日本山岳会にありては、よく歴代会長、諸先輩に従い、その功は一々枚挙すべきことに非ずといえども、戦後最初の「山日記」の編輯、および横会長に仕え、日本体育協会国民体育大会登山部門の実施は特記に値すべし。

わが日大山岳部にありては、尖銳のクライマーとして山行し、よく後輩を指導す。

奇人変人の雲の如き間を周旋し、独断専行し余人の響聲を得しこともありといえども、その結果は概ね良好なりし。

工学技術者として登山術の改良、登山器具の改善に尽力す。

良妻を得て、夫唱婦隨、ますます多方面に活躍し、友人、後輩の期待大なりしが、病魔の避け難く、晩年甚だ円満の相となり、浜松

市、聖隷三方ヶ原病院ホスピス病棟にて静かに逝く。それ幸と云うべきか。

告別式にあたり、大先輩の弔辞、臨席を得る。光榮と云うべし。もつて瞑すべし。

鎌倉靈園に自ら設営せし墓碑に眼る。

合掌。

(千谷壮之助)

金坂一郎君を悼む

病臥中であるときいたのは、今年二月初めであった。しかも快復の見込みのないガンであることも知らされた。

長期療養し終身治療の病院へ移転したことを耳にしたのは、虎の門病院退院のあとであった。つきっきりで身内の人間の二十四時間看護が受けられる特殊なシステムの病院、浜松の聖隷三方ヶ原病院ホスピス病棟への入院ということで、もしかすると、または万が一にもとの希望が、われわれ仲間うちにおいてきたのも事実であった。しかしながら、それは無残な結果となってしまったのだ。

癌で亡くなった人は少なくない。登山史家といつてもいい故山崎安治君もその一人である。しかも山崎君と金坂君は、旧制中学の同級生で、共に神奈川県立第二中学校で学び、共著で山の本も出してゐる。

その山崎君が胃癌であり、金坂君が肺の癌であったことも奇遇であり、しかも死亡時期が六〇年三月と六一年七月と十数ヶ月のちがいであった。奇しき縁えんというべきか。

金坂君の印象で強く残っているのは、富士山の雪崩遭難事故の時

のことである。これも既に三十三年も昔のことになるのだが……、急報届いてすぐさま富士吉田へ直行し搜索の手立て、段取りをつけ、対策本部を設置して後続部隊の配置に万全をつくしたのは、云うまでもないが、自らもスコップ、ゾンドの鉄棒を握って、常に先頭にたつて全体の指揮をとってくれたのである。

生身なまみの身体で五合目まで登り、初冬の頂上から吹きおろしてくる風の中で、軍手一枚、息をふきかけふきかけ、かじかむ指先をほぐしながらスコップを振りあげる。かたく氷化したデブリの中に突きこみ、こざり上げるゾンディーレン、その時の彼の姿をいま鮮かに思い出すのである。

彼が精力的に取組んだのは、日本山岳会の関与した、否関与をせざるを得なかった国体の行事での登山部門であった。前後何回の国体にかかわったかは、筆者の知るところではないが、四国での時は誘われたが参加できなかった。これは少々残念であった。というのは四国には一歩も踏みこんだことがなかったからで、これはいまま変らない。よい機会を逃してしまつたわけである。

「ヒマルチュエリの偵察―一九五八年」という一文を「山岳」第五十四年に発表している。これは、金坂君が発表した数多くの文章の中で唯一の紀行文ではないかと思われる。

よくまとまつているし、気負いもなければ銜ぶくいもない、淡々たる態度は好ましい文章になって表現されていると思う。文中で気がつくことは、よく薬をのんでいることだ。睡眠剤、腹薬など間断なくのんでいる。どうも若年の時から薬蝕やくじくに親しんでいたのではないかと思われる。筋骨たくましい身体つきではなかった。筋骨上からい

えば同行者の石坂君のほうがすぐれている。これは都会育ちと田舎育ちの差ではなからうか。事実本人は肺のほうも患ったことがあるようで、数年間の療養の経験があったという。それが完全に治癒してのヒマルチュリ遠征時には、最良の健康状態だったらしい。

この追悼文をしたためるために再読してみた。しかし再読は眠気を誘うものだ。ついうとうととしてしまいがちだ。

小生は行ったことなどないが、場所はヒマルチュリのベースキャンプだ。一面の枯草が広がっている。ミゾレがふつてくる。風も強くなる。風があゝの密雲を吹きとばしてくれないものか、と思ってしまううちに雲が切れる。陽がさしこんでくる。テントの裾がはためく。

「なんだ、まだそんなところでウロウロしてるのか」と怒声を出しかけたところで眼がさめた。

白昼夢だ。お笑草だが金坂君の夢をみていたのだ。 合掌

(一九八六年重陽の日) (初見一雄)

* 誠実の人・金坂一郎さん

もうかなりまえのこと、定期券を買って日本山岳会ルームに通う人がいたと聞いたことがある。そんな奇特な方がいるのかと感心していたので、たまたま越後支部三十周年の会(昭和五十一年六月十九日、越後湯沢)で金坂一郎さんと同席したとき、それとなく話すと、金坂さんはひとこと「俺だよ」と言われた。そのさりげない、短かい言葉が深く印象にのこっている。翌日、記念山行で苗場山に出かけたが、神楽峰まで登ったところで「二千メートルを越すと、

頭が痛くなる」と言われたのは、少々痛々しかった。どこからか病魔がしのび寄っていたのだらうか。

昭和二十年代の後半から会務に精励され、登山技術の理論的權威として、高所登山、遭難対策、指導の各委員会の委員長として、後進の育成にあたられたのは、多くの人々の語るところである。枉がったことのきらいな金坂さんは、物事にはつねに誠実に対処されて、仲間たちの敬愛を一身にあつめておられた。その金坂さんが図書委員会に加わりたいと言われたので、私たちはよろこんで「顧問」になっていただいた。この十年間、委員長の山崎安治さん、顧問の島田巽さんともども楽しく語りあったのは、いまと比べてみると懐しい日々であり、山と人生その他、もろもろのことを教えられた、かけがえのない貴重な時間であった。

中学時代以来の盟友である山崎さんに先立たれたのは、大きな衝撃だったようだ。今年の一月、会合に出られたことがあったが、それ以後はひっそりと身をかくすようにしておられた。最後にお目にかかったのは三月十六日のこと、山崎夫人房子さんといっしょにお見舞い上ったのだが、房子さんから贈られた版画「穂高星夜」(鈴木正俊作)を居間の壁面にかけて、たのしそうに眺めておられた。浜松の聖隷三方ヶ原病院に入院なさる前日に、わざわざ電話を下されたのは、それとなく別れを告げられたのであらう。それをおもうと、悲しみに耐えない。

七月二十六日、横浜の富士記念館での葬儀は、誠実であたたかなお人柄をよくあらわしたお別れの会であった。桜門山岳会会長の横沢利武氏は弔辞のなかで、戦後の再建に尽力された金坂さんを「明

治維新の志士」にたとえたが、金坂さんの生涯は、いついかなるときも自分の信ずる道を着実に歩んだ、男らしい生き方で貫かれていたようにおもう。われわれ後進にとって、かがえのない、よき指導者であった。

陽子夫人が病床の御主人に「だれか会いたい人、いる？」とたずねると、金坂さんは「おまえ……」と答えたといい。それを聞いて、私はいかにも金坂さんらしいとおもった。

(近藤信行)

略年譜

大正九年三月二十六日、金坂金一郎、ますの長男として横浜市生麦に生まる。生麦小学校、神奈川県立第二中学校(現・翠嵐高校)をへて、昭和十二年四月、日本大学専門部工科に入学、在学中日本大学山岳部に入部、チーフリーダー神山勉氏の指導を受ける。

昭和十五年三月卒業、四月大阪にある阪神内燃機株式会社に入社。昭和十七年千葉県習志野の陸軍戦車隊に入隊、その後指揮官としてシンガポールへ赴任。昭和二十年十月復員後阪神内燃機株式会社を退社、同年十一月父の経営する神奈川組に入社、昭和二十七年五月同社常務取締役。昭和三十三年五月、神奈川企業株式会社専務取締役、昭和三十六年五月、同社長。昭和五十四年三月社長を退任以来取締役として現在に至った。昭和二十九年五月水上陽子(本会会員番号三一七九番)と結婚、冬樹、春樹の二児をもうく。

日本山岳会には昭和二十二年九月に入会、会員番号三〇八三番。終身会員。昭和二十七年以降理事、常務理事十二年、常任評議員七年、監事二年を歴任、他に遭難対策委員長、高所登山委員会委員長、図書委員会顧問と

して、長期間にわたり会務にたずさわり、後進の指導にあたった。さらに日本雪氷学会理事、日本山岳協会常務理事、校門山岳会理事長等をつとめたほか、文部省登山研修所専門調査委員を長期間にわたりつとめ、物故時は同研修所の運営委員の要職にあった。

その間「山岳」には第48年に「確保論」、49年に「再出発の断面―日大山岳部の場合」、53年に「富士山の雪崩遭難について」、54年に「ヒマルチユリの偵察―一九五八年」、57年に「西穂高登山技術講習報告」、69年に「高所登山の忘れもの」を執筆。自著に『冬山技術セミナー』があるほか、山崎安治氏と共著で『登山の基礎』を刊行している。他に日本山岳会編の『登山技術』には「確保論」(第一巻)、「雪渓技術」(実用山岳写真術)(第二巻)、「ヒマラヤ登山入門」(第三巻)を執筆、日本山岳会高所登山委員会編『高所登山研究』の刊行にも委員長として監修にあたり、また、『登山の技術』の編集に際しては編集委員長として上巻に「序論」「確保論」を、下巻に「雪崩」を執筆している。

昭和六十一年七月十九日午前零時三十五分、浜松市聖隷三方ヶ原病院にて逝去。享年六十六歳。十月二十六日鎌倉蓋園に納骨。

(松田雄一)

木原 均氏(一八九三―一九八六)

木原先生は本年七月二十七日に逝去された。私たちの世代では「木原先生」といわないと、どうしても感じがない。

麻布学園の中学時代は運動会で一度も勝ったこともなく、小さく

弱々しい子供だったと述懐しておられる。ところが北海道帝国大学へ入るや、野球選手で剛球投手として鳴らした。また一九一二年に北大入学と同時に始めたスキーの方は、既にスキー部があったとはいえ、まず日本の草分け級だった。ジャンプも大好きで、スキーの花だと最後まで愛された。一九一九年には遠藤吉三郎・木原均共著で『最新スキー術』の著もある。北大の頃は、半年小麦の研究で半年は冬季のスポーツ、むしろスキーの方が本業みたいなものだったと記しておられる。

全日本スキー連盟の国際スキー連盟への加盟やオリンピック冬季競技大会への選手団長としての二度にわたる参加、その他いろいろ枚挙できぬ活躍をされ、一九五六―六六年には全日本スキー連盟会長をも勤められた。一九七〇年の赤倉がすべり納めである。

当時は全く珍らしかったスキー登山ないしツアーを北大時代に数かずしておられる。毛無山、手稻山、藻岩山、銀山をはじめ、羊蹄山、十勝岳、芦別岳など片っ端からであった。一九一七年のエゾ富士登山では、初めてアザラシ、アイゼンを使ったとある。一九二〇年頃の富良野岳では同行者に板倉勝宣氏、奥手稻から手稻への縦走では松方三郎氏の名も見える。ドイツ留学中もスキーには余念がない。一九二七年にはグリーンデルワルト、ユングフラウヨッホなどに行き、イタリアを回った後再びサンモリッツ、グリーンデルワルトへ。グリーンデルワルトでは、横有恒、松方三郎、松本重治、浦松佐美太郎、麻生武治など錚々たる「雪友」かつ岳友との交流がある。榎さんのアイガー北壁登頂の二、三年後のことだった。

木原先生の京大時代は永い（一九二〇―一九五九年）。この間、本

職は別として、スキー部をはじめスキー連盟など育成に尽力されたことは勿論である。この間に京都大学の旅行部の部長をしておられた関係で、今西錦司さん初め登山の猛者連が入部し、木原先生の記すところでは「いつの間にか私も登山家の仲間に入ってしまった。山に登らぬ登山家であった。」とある。

こうして一九三〇年にAACK（京都大学学士山岳会）がヒマラヤを目指して結成された時には、初めから御関係であった。ところが間もなく戦時に入り、ヒマラヤは絶望となった。今西さんの画策もあり、木原先生をリーダーに一九三八年にはモンゴルの学術探検。次いでその二年ぐら以後に、木原先生を代表として京都探検地理学会というものが結成された。このように、いつも木原先生が御大で、今西さんがコンビで、京大が探検大学の異名をとる伝統が育つていたのである。

戦雲が収まるや否や、ネパールヒマラヤを目指し、この伝統がいち早く起ちあがった。そこでその母胎とするために、京大関係者で「生物誌研究会」が結成された。遠征実現のため今西さんが西堀栄三郎さんを口説き、ネパール入りの交渉に向いて頂いたのである。当時は厳しい外貨統制のもと、外国へ出かけること自体が頗る困難事だった。結局インドの科学会議（一九五一年末）に出席される木原先生に便乗して西堀さんは渡印し、次いでネパール入りしてマナスル登山の緒を掴んだのである。それからが大変だった。嗅ぎつけた毎日新聞社と朝日新聞社の間で、木原先生をとつ掴まえる激戦が始まり、遂に毎日の後援ときまったのである。それは木原先生が、学術は朝日、スポーツは毎日と、おつきあいを使いわけておら

れたからである。まあ、時効にかかったような話なので、申し上げておこう。

木原先生が遺伝学におけるゲノム学説を発表されたのは、実に一九一九年以來の一連の論文においてであった。一九二三年にはスィバを用いての性染色体の発見があり、これは高等植物では最初だという。その後三倍体を利用する種なし水瓜の開発で日本人に親しまれている。一九四四年にはタルホコムギが栽培コムギの一祖先であることを発見し、実際それを用いてパンコムギを作りだされた。そればかりか、生物誌研究会の事業として、一九五五年にはカラコルム・ヒンズークシユ探検隊を率いて、そのタルホコムギの野生状態までアフガニスタン、イランで発見された。また「核置換法」というもので細胞核と細胞質を交換する方法により、植物発生以來十数億年の進化史と種の生成分化機構の解明に努められたときく。

その後も一九七三年にはカワゴケソウの探検で南米へ。さらに一九八三年に至っても、チベット探索行を計画しておられた。小麦の研究ひと筋できたとして、時々御自分を一粒舎主人と号しておられる。しかし、そのほかに栽培稻の起原を求めて、ロックフェラー財団の援助を得て、みづからアッサムやシッキムへ探検隊を率いて赴かれた。

私はこの稻探検への親切なお誘いを受けながら、カンジロバヒマル行の方を選んでしまい、今に至るまで申し訳なく心が傷んでいる。その代り、私たちの隊で野生大麦を発見したこと、木原先生の御依頼で野生稻を生かしたまま持ち帰ったことで、喜んで頂いたのがせめてもの罪滅ぼしとなった。

木原先生は、常にフレッシユで人類や学問に重要なテーマを追ってこられた。スケールが大きく、見透しが確かである。万年青年なのだ。それと共に、帝王ならば一私生児の名まで記すのに、生命を支えてくれる主作物についてすら深い関心を抱かない人類の愚かさを歎いたファアプルの言葉が、先生によって指摘されている。常に清廉な生き方を通してこられた。晩年にヤマボウシの木や花を愛しておられたことにも窺える。公明正大そのものであったが、同時に暖かいお人柄。それは旧野球部の仲間との交流を最後まで大切にされたり、母校麻布学園の理事長まで引きうけられたところにも窺える。北大育ちらしい、潤達なスポーツマンシップで人生を全うされたというべきであろう。

とくにノーベル賞のわが国第一号になるべき方であったが、時代が早すぎた。なお一九四二年には(財)木原生物学研究所を創設。一九四八年文化勲章受賞。一九五五九年国立遺伝学研究所長。一九七五年旭日大綬章受賞。

日本山岳会入会一九三七年、会員番号一六九八。

(川喜田二郎)

支部だより

富山支部

熊野川（大山町）の上流、山深い旧河内の郷に生まれた「播隆聖」の顕彰碑を建立し、大山町へ寄付採納（昭和六十年五月七日付）してから早や幾歳年が過ぎ、過疎の郷となった山里に播隆聖の碑が世の移り変りを想像だにしなかった何物かを感じとっているかに見えて景仰の念をいっそう深めるものがある。

播隆祭といっても世にいう敬慕の祭典と志を異にし、人、山岳愛好者等の尊敬に従い年一回の神前集礼をもって播隆聖の人となりを感じ槍ヶ岳開山の信仰的熱意とその徳に半輪にも充たないわれわれを反省すると同時に、幼小の頃即ち出家前の行動（家業のための）範囲と考えられる地域の道をたどって当時を偲び支部山行行事のつに算えている。

近時、問題の一つに採り上げられることに「双六谷の国立公園編入」という問題がある。

現地は岐阜県内にあるが、大局的自然保護の観点から、双六谷が国立公園区域から除外された経緯過程の研究も肝要点ではあるが、現在において国立公園から除外されたままでは双六谷の自然景観と環境保全が護れるだろうかと猶予されるものである。

早急に双六谷地域の国立公園編入対策運動の展開が必要であると

考えられ、日本山岳会自然保護委員会に研究対策の要請をし、国立公園編入対策推進運動を進めている。

こうしたことも支部活性化への階段であるが、それよりも実際活動の活性化として脳裡に浮かぶことは、支部会員の増強であり老齢化から脱却することであろう。その脱却の一步は新入会員の勧誘対策で、具体的に一支部員一新入会員募集という運動の展開であり、魅力活力のある活動内容の具体的推進であると考えられる。定例化した山行も会員充足の一駒となり拍車を呼ぶであろう。だが社会人としての責任においていま一步のところまでで全輪の歩みをみずに終わっていることに沈痛の感を禁じ得ないものがある。

人それぞれに人格を異にし画一的活動への参入度合を考慮しつつ、いま一步のレールの結合とポールト、ナットの噛み合いを活動のポイントとし、スプリングの反撥で活動の向上に努めたいと願い努力している。

一、六一年度行事計画

一、富山支部総会

四・二二日

二、本部総会

五・一六日

三、播隆祭（播隆の足跡を歩く）

五・一八日

四、春季山行会（大辻山）

六・一日

五、例会

八、未定

六、秋季山行会（馬場島、中山）

一〇・二五～二六日 一般参

七、例会

加歓迎
一二日

八、年次晩餐会

未定

九、例会

一月以後日

(注) 六、については会報「山」で案内する。

二、新役員

支部長 若林啓之助、委員 石坂久忠、森立 実、広瀬 誠、竹

本融司、木戸繁良、高塚武由、太田 昭、中西紀夫、佐伯久雄

(石坂久忠)

静岡支部

当支部創立前後の事情については、年報の『山岳』一九七九年号
△支部の歴史▽に詳しい。しかしそれに書かれているのは昭和二十
五年二月創立から、昭和三十二年の静岡県国体参加前の混乱期を経
て、昭和三十六年度までの記録で、それ以後については書かれてい
ない。いずれ続きは山本朋三郎現支部長によって記録されていくだ
ろうが、ここでは現在の支部として考えなければならなくなった二
三の問題について書くことにする。

第一は毎年延々と続けてきた「紅葉会」という行事のことであ
る。

総じて山岳会というものは長年月を続けていくためには、時々
会の動きの消長・起伏に耐えていくことが必要である。特に当支部
のように地方山岳会の性格を持つ会では、会員の動きを刺激するも
のがないと忽ち会の活動は衰微してしまう。戦後の被占領時代の支
部は日本人の行動に制限があったため、地元近辺の秘境の山、ヴァ
リエーション・ルート探索などが会員活動の中心となっていた。つ

いで海外登山の流行がはじまり、当支部員においても、欧州アルプ
ス、ヒマラヤの登山さらに世界辺境の山への遠征などが行なわれ、
それが会の活力推進の刺激剤となってきた。しかしそれは現在でも
登山活力の源泉の一部であることには変わりないだろうが、遠征登
山の普及で物珍しくなくなったことと、対象となる知名度の高い高
峻山岳の減少などからマスコミの関心の薄れたこともあって、ひと
ころの勢いなく山岳会活力の刺激剤としての効用が薄れてしまっ
た。こんなことから支部はこのままでよいかという疑問が、支部員
の意識のなかに膨らみはじめている。

最近、日本文明の高度成長にたいする反省が必要とされているの
に関連して、登山自体にも「知」と「心」と「もの」との調和・安
定した発展を考えるべき時がきたのではないかと考えられてきた。

全国の会員に呼び掛け開催してきた当支部の年行事「紅葉会」は
支部活動の推進力として意味があった。だから三十回も続いたので
ある。ところが近年内容がマンネリズム化し硬直化してきた。三十
年続いた「紅葉会」をここで思いきって廃止すべきか、このまま続
けて、なんとなく消滅するのを待つべきか、あるいは目的、内容を
十分に検討のうえ再出発させるべきか、この三路の分岐点に今年は
立ったのである。

次の問題は若手支部員の不足対策である。

支部は発足当時の会員数二十名前後から出発し、現在では約百名
にまで達した。しかしその年齢構成をみると、正確に調査したわけ
ではないが、支部の将来を託すべき青壮年層の不足が最近目立って
いるように思われる。一時的ではなく長続きする若手の会員を増加

させることが当面の課題となっている。

静岡県の「青少年活動研究所」が今年度まとめた「青少年団体活動実態調査」によると「現在青年の多くは自分の生活をエンジョイするのに忙しく、個人の行動を制約する団体活動を嫌う」という結果が出ている。これからみると現代の青年層にとって山岳会支部はまことに魅力に乏しい会であり、若年会員の増加は到底望みなし、という悲観的な結論が出てくる。しかし反面この調査のアンケートで青少年は、「新しい行事に取り組んでみたい」と答えたものが五十八パーセントもあり新しいイベントを望んでいる。では「何を望むか」の問いに対しては「何か変わったこと」でそれを具体的に示すことのできないものが五十七パーセントもあった。こうした調査結果からみると、若年支部会員の獲得と育成は会のイベント如何にあり、それも若いものに自由にまかせるのではなく年配者・先輩がある程度お膳立てしなければ駄目だということがわかる。

当支部は新しくイベントをということで、昨年は完成したばかりの市立図書館視聴覚ホールで「山岳文化講座」を開催してみた。最新設備のオーディオ・映像システムは不慣れと準備不足で生かしきれなかった点はあるが、支部活動としてのイベントのあり方が打診できたものと思う、また今年から年四回、支部通信を発行し支部員相互のコミュニケーションを密にすることも試みている。そのなかから何かが見えてくる可能性もある。

「紅葉会」については、やり方によって強力なイベントとなり得るとも考えられるので、弱体化したからといって廃止に持つて行くのは、惜しい気がするがながいかなものであろうか。(西郷正郎)

越後支部

「玄さん」のこのころ「老化現象は地盤沈下の如く、ごく自然に漸次進行するものと思っていたが、ある日突然に地震の断層亀裂の如くガタツと進むのに驚いている」と藤島玄氏は昭和五十八年の誕生日の挨拶状に書いておられたが、喜寿を迎えたその頃から体力の衰えが目立つようになり、室内の起居にも不自由な様子で、「山はもう駄目だね」と諦め顔であった。

日本山岳会の名誉会員に推され、叙勲の栄にも浴して本懐遂げた感じの藤島氏ではあるが、昨年五月に倒れて入院されてからは、山が遠ざかったという寂しさが輪をかけたのか、身心ともに弱って一時はどうなることかと案じられ、あの鋼のような強靱な体躯、精悍な行動力で越後の山々を駆け巡った人とは思われぬ憔悴ぶりに暗然となつた。現在は在宅療養に専念しておられ、先ごろ支部役員会の折に連れだってお見舞に伺ったときは、喋られぬながらもみんなの話を耳を傾けて、ニコニコと嬉しそうな顔付きであった。ご家族の話ではひと頃より快方に向っている様子で、自ら歩こうとする意欲が湧いたのか、ときには戸外へ出たがったり、たまたま話が山のことに触れると、興奮してなだめるのは一苦勞することである。おそらく山恋う心はいまも飯豊の峰々を歩き続けておられることであらう。往年の気力は望まれぬまでも、徐々にでも回復して、まだまだ越後の登山界を見守ってもらいたいと思う。

支部の行事 今年は昭和二十一年に発足した当支部の四十周年に当るので、八月上旬に記念登山「飯豊山花見山行」を実施する。梅

雨が明け高山植物も盛りとなって、飯豊の山々が最も美しい季節である。会津の川入口から登って切合せ小屋で植物の講習と交歓会、翌日は飯豊山頂を往復して下山するが、自主山行の形で参加費は不要、各自のペースで心ゆくまで飯豊の花を楽しんでもらおうという計画である。また秋には記念祝賀会を催し、古稀を超えた支部会員十九名を囲んで、山の思い出話を聴きながら長寿を讃え、ますますのご健勝を願って乾杯する。

支部総会は例年どおり七月二十五日に弥彦山上で開催する。総会終了後は支部が国見平に建立した、越後生れで日本山岳会の発起人であり、第二代会長にもなった高頭仁兵衛翁の寿像前で、第二十九回高頭祭を挙行し、さらに雨乞い行事を再現した新潟県登山祭の松明行進に加わって、約三百名の登山者と一緒に松明を掲げながら、灯笼祭りで賑わう越後一の宮弥彦神社へ下山する。

支部行事に準じた催しとしては、六月一日に姫早百合の観賞会を行なう。姫早百合は東北地方の特産といわれ、初夏から夏にかけて淡紅色の可憐な姿で登山者の眼を楽しませるユリ科の多年草である。御神楽岳に近い山村に住む斎藤弘会員が所有している山に、実生から育ててふやした姫早百合が数千株も群生して、開花期にはみごとな花園となるので、数年来花見を兼ねた会員の野外パーティーを催しているが、年毎に参加者が多くなり今年には百名近くも集まるらしい。来年は県外の会員にも呼びかけて飯豊、朝日連峰の山歩きを想起させる高嶺の花の風情を手軽に楽しんでもらおうと考えている。

支部の在り方について 当支部の会員は昭和六十一年五月現在で二十七名おり、道府県単位とすれば最も人数が多い。これは支部結成

以来三十年間も支部長を務めた藤島氏が、支部の勢力拡大と会員の指導に、非凡な力柄と情熱を傾けたお陰といえる。また県外の会員が多いのは、同氏の精力的な登山活動から生れた交友の広さと、人徳の然らしめるものであろう。支部会員の心の拠りどころである「玄さん」が引退したいま、大所帯の支部をまとめてゆくのはやさしいことではないが、それでも昨年度は七名の新入会員を迎えた。また会員の多くが県登山界のリーダーとして活躍し、山仲間の交情を温め合っているからには、支部の運営に齟齬をきたすことはあるまいと信じている。

当支部の名譽会員笠原藤七氏は八十三歳の高齢ながら、なお鑿鏘と山行を楽しんでおられるし、佐久間惇一、金山淳二、佐藤金一氏ら越後の山の先蹤者も健在である。かつて県山岳連盟の中心として活躍され、民俗学でも著名な森谷周野氏が入会されたのも嬉しいことであつた。

支部の存在を意義あらしめるには、どんな活動が効果をもたらすかが問題で、他支部の動向も何かと参考にさせてもらってはいるが、当支部の会員のほとんどがそれぞれ所属している地元山岳会の年間行事を優先させ、あるいは県山岳協会の主要メンバーとしてその活動携わっているから、支部独自の行事を持つことはなかなか難しい。支部会員であるという仲間意識が親近感を生んで、個々の友情を育てるのに役立つているが、会員同士の交流をさらに深め、共通の喜びを見出すためには、やはり魅力的な行事や会報の発行を続けることなどが課題と思われる。当支部の機関誌『越後山岳』は結成二十周年記念の県境全縦走踏査記録をまとめた第六号を発行以

来、足踏み状態となっている。藤島支部長時代に第七号を、一三三
角点の山と海外登山の特集にしようとした原稿が、諸般の事情か
ら長く藤島氏の手許に留め置かれたが、このほど氏の諒承を得てこ
子息が持参されたので、時機を逸した感はあるが支部の記録として
発行しなければと、いま委員が検討している。

本部に望むこと 来年度からの会費改定に伴って、より肌理細やかな
な会員への対応が要求されることになろうから、本部役員各位のご
苦勞は察しられるが、各地方支部の充実強化と会員の増加を促進す
るためにも、支部対策には格段の留意をお願いしたい。

会報「山」によれば、東京都内では各委員会の多様なシンポジウ
ムや講演会、映画会など、登山者に関心の深い催しが随時行なわれ
ているが、遠隔の地方から上京参加する会員は数少ないに違いな
い。そうした地方会員からの要望として考慮してもらいたいこと
は、各支部の主催行事には本部役員の派遣をお願いして、宿泊のお
世話をさせていただく程度で、地元会員たちと膝を交えた話し合い
や意見の交換ができるどうか、年に一、二回でも海外委員会や指導委
員会の委員を講師とするセミナーを、各支部が開催できるよう配慮
を願って、登山界の新鮮な情報を耳からも提供していただきたいと
いうことである。

支 部 だ より
また本部の総会や年次晩餐会に出席する地方会員が少ないこと
に、いつもいささかの寂しさを感じる。会場その他の都合もあろう
が、慣例的な通知だけでなく、「山」などを通じて地方から上京し
ても出席してみたいと関心を抱かせるような内容と、積極的な呼
びかけが欲しいものである。本部と支部会員とのコミュニケーション

ンを深めるために、新しい発想とご配慮をお願いしたい。

(佐藤一栄)

宮崎支部

日本山岳会創立八十周年の申し子
郷土愛に燃ゆる 太陽と緑と神話の国「みやざき」は、山岳が多く

農耕地域はわずかな地域に限られている。ちなみに山林原野の面積
が、総面積の七五・九パーセントをも占めているのである。

山岳地形は、水成岩の九州中央山地、火成岩の祖母、大崩、尾鈴
山地、新しい火山群の霧島山地といったように変化に富んでいる。
気温が高く雨量に恵まれ、美しい大らかな自然がいっぱい残ってい
る。この自然環境が、多彩な動植物をはぐくんできた。

植物を例にとると、九州では宮崎県だけにある植物はヒュウガギ
ボウシほか四十五種類に及ぶ。また、世界で宮崎だけにある植物は
十一種類もある。その中でも、日本が世界に誇れる「キバナノツキ
ヌキホトトギス」は、地球上で尾鈴山のみに自生しているという。
また、鬼目山の「ツチビノキ」も世界唯一を誇っている。

自然は、このように宮崎の山野に北限 南限といわれる珍しい植
物をたくさん恵んでくれた。ふるさとのこのすばらしい豊かな自然
の幸を心から愛し、損なうことなく次の世代に引き継ぐことが私た
ちの努めである。

「ディスプレイふるさと」。言い古されたキャッチフレーズであ
る。だが、この一点に心を寄せ合い誕生したのが「宮崎支部」。

一九八五年七月十二日、日本山岳会の支部二十番目として発足し、一年が過ぎた。先輩各支部のような輝かしい歴史と伝統はない。でも、支部員三十七名の心に熱く燃え流れているものは、限りなき郷土愛と山を愛し山を尊ぶ情熱と心意気と日本山岳会員の誇りである。

支部発足のいきさつ 今西錦司元日本山岳会会長は、生態学研究を本県都井岬に選ばれて戦後の一時期を過ごされた。その間に宮崎の山々に深い関心を寄せられ、祖母山（一七五六・七）をはじめ多くの山を登られている。その後、一九七九年速日ノ峯（八六八）から八五年の扇山（一六六一・三）に至るまで、毎年宮崎の山々を登られた。その都度、支部結成を促されたのである。

支部発足前の県内居住日本山岳会員は七名。一九六〇年、大分県と宮崎県の会員で「東九州支部」が発足、本県から五名が所属した。二名が、居住地域に近い熊本支部に所属、活動してきたのである。このような状況から、先輩支部の熊本、東九州支部の御指導と御助言を仰ぎ誕生させていただいたのである。この一年、主旨賛同の岳友十六名を新たに迎え、いま、ディスカバーふるさとに燃えている。

支部の道標とあゆみ 支部発足と同時に、次のような三つの行事推進を決めた。

・「みやざきウェストン祭」を毎年開催

一九九〇年十一月六日、祖母山に登山したウォルター・ウェストンをしのび顕彰する目的で、一九八五年十一月二、三日九州各地から六十名の参加を得てウェストン碑献花、山岳講話、エーデルワイス

スの歌合唱、夜神楽と交歓の集い、晩秋の祖母登山を行った。今年の第二回ウェストン祭には、本部からの出席で盛大になるとだろう。

・宮崎百山を登ろう

百山を選定、五年計画で再登山をなし地形、山と自然、動植物の分布、山の文化と民俗、山の神話と伝説、コースガイド、パリエーションルートなど盛り込んだディスカバー「みやざき百山」の小冊子を刊行する。「百山を登ろう」は、今西錦司元日本山岳会会長をお迎えして、扇山の支部発足記念登山を皮切りに常時二十余名の参加で五月末現在すでに二十五山を消化した。

・諸塚山・赤土岸山山開き

朝日森林文化賞を受賞した諸塚村との共催で、毎年三月二十三日に山開きを開催する。第一回開催には、地元を含め九州各地から三百五十名が参加した。

支部員プロフィール寸描 ここでは支部員の多士済々若干のプロフィールを紹介し、支部だよりのまとめとしたい。

男性二十三、女性十四名で夫婦会員五組。平均年齢は高く四十七・一歳。ヨーロッパアルプス、ネパールヒマラヤなど海外体験者九名。新聞社論説委員、県庁職員、警察官、銀行員、英語・音楽教師、看護婦、寮母といったように職業もバラエティに富んでいる。年一回の総会を二、三回にせよと、強い要望があったが今検討中である。

支部一番の古い会員番号は「三一二六」。医師でスイス山岳会員。なぜか注射も投票も拒否する不思議なドクターで、ワインのオーソ

リテイ。第二回総会時に「登山と呼吸のしくみ」の講義を張った。

二番目が「四八五四」。高千穂登山専門家。三百六十五回目の高千穂登山登頂祝賀パーティが、雨のため流れた。焼ちゅう霧島に命をかける山男の執念か。九州脊りよう完全縦走者の一人。

三番手は「五一一七」。体は小さいが、しゃべることは山より大きい。ニックネーム「岩虫」。岩登り専門官が転じて、アマ無線狂いと大型飛行機のプラモデルを熱愛中。

四番手が「五一二〇」。本職は野鳥の恋人。鳥の一声に満身笑みが浮かぶ。副業は林業担当高校教諭。樹木の生態と野鳥の生態研究に懸命。総会時の講義テーマ「野鳥との恋物語」が決定している。

五番目「五一二二」。表も裏も区別がつかないほど色黒し。黒人ならぬ歌人を自認したがる。「飲んだらしゃべるな、しゃべるなら飲むな」の焼ちゅう博士。飲まないときは仏様。九州脊りよう完全縦走者の一人。

六番手は「五九九七」。ボーイスカウト団長。一九八五年十月、イムジャツエ峰（六一六〇㍎）に遠征するも、出腹のため登頂無念断念。ワイワイガヤガヤで山も困っている宮崎支部丸の船長。腕の見せどころは今から。

以下七番目「八〇五三」から「九六六六」以降と、新しい会員番号で続いている。
(大谷 優)

福 島 支 部

日本山岳会創立八十周年の諸行事はすべて終了した本年。当支部

のことを振り返って見ると、終戦間もない昭和二十二年（一九四七）暮に初代支部長の故伊藤弥十郎氏を中心として同好の士が日本山岳会に入会し支部を結成したのである。助言者は越後支部の藤島玄氏であった。それ以来四十年にならんとしている。その間幾多の変遷もあったが、会員数も三桁に達せんとしている。しかし近年は入会希望者も多くなってきたが、それにもまして他界される方も多く、なかなか大台を越すことがむずかしい状態である。これを裏返して考えると高齢者の方が多いことであろう。

とかく地方での日本山岳会会員とは山好きの年寄りのサーロンの集りであるとの見方が多く、若い人達の入会がままならなかったことを物語っている。とは申せ近年は年々若い層の入会が増す傾向が出てきたことは喜ばしいことである。

支部総会は山で実施するのが本来の姿であろうとの意見から、今年は去る五月、福島県中心部の那須火山系の二岐山山麓の秘湯「二岐温泉」あすなる荘で開催された。露天風呂に杯を傾げる姿も見られ、和気あいあいのうちに終了し、翌日は残雪のブナ原生林をノンピリと二岐山に登り、春山を満喫したのである。

次に例年と異なる行事として、先に述べた通り、支部結成四十年も近い故に、当支部を陰に陽に協力応援していただいた古老の方、事情あって退会された方を混え、一晚旧交を暖め、思ひ出話を語り合う会を実施することにした。会場はスキーに、冬山に常に根拠地とした吾妻山麓の高湯温泉である。盛会を期待している次第である。

また会員相互の親睦を計り、家族共々「幻のそばを喰らう会」を

昨年から実施している。場所は会津の飯豊山の懐に抱かれたひなびた集落である。新たな家族の理解も得られ、認識も深められ、今年もやろうとの声もあり晩秋に計画している。

その他、日帰りの山行を、夏、秋、スキーツアに実施することは例年の通りである。
(中島正夫)

北海道支部

北海道支部は六十一年五月末で一七一名の支部員を携し、主要行事として夏の山行一回、秋の観月会、冬のスキー合宿。集会として春の支部総会、年末の忘年会とそれぞれ定着してきている。

北海道は広域なため、山行開催場所を重複せぬよう各地域ごとに選択し、地区集会などを組み合せ、出来る限り各地の会員と親睦を計るよう開催している。現在まで十勝岳、芦別岳、幌尻岳、ニペソツ山、ペテガリ岳、トムラウシ山、大千軒岳、カムイエクウチカウシ山、駒ヶ岳、羅臼岳、黒岳、暑寒別岳等で開催した。また台湾の玉山やヒマラヤ踏査行に出かけ、和気あいあいに多くの参加者を集めて実施してきた。

北海道支部は昭和六十四年に二十周年を迎えることになり、その記念行事をどの山で開催するか、候補地をあげて委員会検討中である。多くの参加者を収容できる山城で、全員が満足いただける山行にするには屋台裏も大変である。二十周年に向けて魅力ある支部作りに励まなければならない。支部役員を強化し、運営の活性化を計り、もっと若年層の会員をふやすことが当面の課題である。

六十一年度支部総会で支部規約が一部改正され、支部役員に新たに顧問制度が設けられ、若干名おくことになった。

支部規約改正事項

顧問は支部委員会の推薦により、支部長がこれを委嘱する。

顧問は支部委員会の諮問にこたえ、必要と認めた事項について助言する。

今年度顧問には支部設立に尽力された相川 修氏と、長年にわたる副支部長として活躍された兼平治水氏が推薦された。これからの支部発展のため一層のご助言をお願いする次第である。

支部報「スプリ」は今年一回発行を目標に、現在まで十六号を発行している。二年後の二十周年には増ページ記念号を予定し、編備準備に取りかかっている。北海道の山と人にふれた原稿を募集中で、この欄を借りてお願いする次第です。締切は六十二年十二月末。問い合わせ、送稿先は左記宛。

T004 札幌市白石区厚別中央一条七丁目五—一四一〇 平野 明方

日本山岳会北海道支部事務局

T003 札幌市白石区北郷三条四丁目—十二 高澤光雄
(高澤光雄)

信濃支部

昭和六十年年度 支部通常総会 昭和六十年年度日本山岳会信濃支部通常総会は、昭和六十年四月二十一日(日)午後三時より松本市上土

町「しづか」に於て行われた。出席者二十六名。議事は、予め全員に連絡してあった。一、昭和五十九年度事業報告、同会計報告、二、昭和六十年年度事業、会計計画案につき審議、いずれも原案通りに可決された。その他、支部三十五年誌刊行、第三十八回ウェストン祭、アンナプルナ実行委員会昭和五十八年八月以降分等についての会計報告があり、いずれも可決承認された。

第三十九回 ウェストン祭 第三十九回ウェストン祭は昭和六十年六月一、二日、ともに晴天に恵まれ、例年のスケジュールにより実施。一日目の記念山行には一般参加を含め約六百名が徳本峠を越えた。二日目の神前祭は約千百名が集い、今西新会長、大塚新副会長、佐々前会長等の出席のもとに開催。記念講演には大塚博美副会長が「植村直己のこと等」と近藤信行評議員の「ウェストンと初期山岳会の人々」の演題で各々行われた。支部会員四十五名出席。

昭和六十一年新年会 六十一年支部新年会が新たに仲間入りした七名を加え、四十六名の出席を得て、松本市上土町「梓」で一月二十六日午後三時より行われた。今年は支部創立四十周年と、四十回を迎えるウェストン祭を会員の協力を得て成功させたいとの蒲生支部長の挨拶があり、夕方と気あいあいのうちに閉会となった。

支部山行 夏・剣沢 秋・明星山 冬・乗鞍高原 支部最重要年中行事である山行は、昭和六十年七月二十六日、七、八日。十一月九、十日及び昭和六十一年二月一、二日の三回、剣沢、新潟県糸魚川市明星山及び乗鞍高原に於て行われた。以下そのうちの一つ剣沢合宿の記録。

今年の夏山山行の参加者は福井さんと角田だけとなり、少人数の

山行ではありましたが、それなりに充実した内容になりました。

七月二十六日 例年どおり観光客で賑わう室堂をあとに、雲ひとつない真夏の日に照らされながら三田平の天幕場へと向かう。三田平には多くのテントが張られ、夏山最盛期の観があった。

雑踏を避け、雪解け水が流れる横にテントを張り、夕暮れの剣岳の雄姿を眺めながらの贅沢な夕食となった。なお、剣沢小屋で一志会員と出合い、缶ビール差し入れを受ける。(三田平テント泊)

七月二十七日 登山者で混雑しないうちに、朝早くテントを後にして一般ルートから剣本峰へと向かう。頂上で小休止のあと、三ノ窓へと人のいない剣主稜線をたどる。

三ノ窓からは更に人気のない北方稜線に入るとお花畑が広がり、静かな山を満喫しながら池の平山に着く。池の平山からは裏剣独特の山容を眺めながら、緩やかで牧歌的な尾根を仙人池山荘へと下り、仙人池に映る剣を楽しむ。(仙人池山荘泊)

七月二十八日 仙人池に映る朝焼けの剣の写真撮ろうと朝早く起きる。何回か写真で見ていた風景だが、実際に見る景色はさすが仙人池という名にふさわしかった。三ノ窓雪渓出合までは急な下りを、空に突き上げるチンネの岩壁を見ながら下り、真砂沢出合へと急ぐ。真砂沢の小屋からは、剣沢を避け、別山沢へ入る。

別山沢には登山者は一人もいなく、ここもまた静かな登山を楽しむながら雪渓をつめ、上部のお花畑を登り稜線に出ると眼下に三田平のテント場が見え、ガレ場を下り、三田平のテント場に着いた。

七月二十九日 剣岳を一周した我々の山行も今日が最後の日。人数も少なく、とにかく歩くことを目的としたのが今回の山行だっ

た。何回か劍岳を振り返り見ながら立山を越えケーブルには乗らず炎天下の中を歩き、たんぼ平の駅に着く。満足感に酔いしれながら、缶ビールで乾杯をして今回の山行を終えた。

参加者 福井・角田

(角田啓蔵記)

昭和六十年(一九八五年)度の概況報告をもつて支部だよりとさせて頂きます。
(田中弘美)

宮城支部

宮城県には奥羽山脈の東側に山岳地帯から丘陵地帯が広く分布している。このなかには形のすぐれた興味をそえられる山が多い。標高にこだわらずよい山に登ろう、ということ、このところ支部山行でも低山指向が続いている。

昨年は七ヶ宿の蛤山(九八〇・七^分)に登ったし、今西錦司先生がおいで下さった折には、鬼首の荒雄岳(九八四・二^分)、三陸沿岸の田東嶺山(五一二・四^分)、そして牡鹿半島の大六天山(四四〇・三^分)に登った。いま支部では、「みやぎ百山」をめざして、県内の低山行を楽しんでいるところである。

仙台附近に広がる丘陵地帯のなかには、ところどころに眼をみはるような、ひとときわ突出した山がみられる。ときには、それらが群峰をなして連なっている。これらの山は、奥羽山脈よりひとむかしまえの第三紀の火山の残存形で、火山岩類と呼ばれるものである。

北からみると、栗駒町の文字三山、加美富士と呼ばれる小野田の菓菜山、吉田の達居森、宮床吉田の七ツ森、仙台のシンボルである太

白山、さらに南に移って、赤石の三高ヶ森、坪沼の愛宕山などである。これらの山はいずれもせいぜい五〇〇^分級でしかないが、鋭く尖って周囲の丘陵地よりぬきんでいる。

このような火山岩類がたくさん集まってみられるのが仙台の北西に連なる七ツ森である。この七ツ森については、以前に久野久さんや佐々保雄先生が「山岳」にその立ち並ぶ姿などを紹介されている。

人ならばはらかなれや並み立てる七ツ森てう山の姿は

(保田光則)

と詠まれたほど、麓の宮床や吉田はもちろん仙台などからの七ツ森は詩情豊かである。最高峰は大森山(笹倉山、五〇六^分)、少しはなれて三〇〇^分前後の鎌倉山、遂倉山、蜂倉山、撫倉山、大倉山、松倉山の六峰がひしめくように立ち並んでいる。この風景は、笹倉を母親に、ほかの六峰を子供に見立て、母親におやつをねだる子供たちの姿にもたとえられるし、水鳥の子供たちを引き連れた母鳥にもたとえられるほど、ほほえましい風景である。

昔、朝比奈三郎という巨人が、弓的的をつくるためタンガラを運んでひとつずつ山を築き、大小七ツの山をつくった、それが七ツ森で、土を掘ったところは品井沼、ノシノシと何回も歩いてできたところは吉田川、モッコに付いたタンガラをほろけたところが、タンガラ森となつて、タンガラ森は七ツ森に加えられるかたという話が伝わっている。七ツ森の特異な姿が、このような面白い話をつくりださずにはおかなかったであろう。

品井沼は、いまはすっかり干拓されてしまったが、この八月五日

に台風くずれの低気圧によつてもたらされた大雨による宮城水害では、この吉田川が数ヶ所で決壊し、元の品井沼にあたる鹿島台南部地帯が氾濫原となつたところである。

仙台藩の伊達騒動のときの幼君がのちの四代綱村で、その後を継いだのが宮床伊達の宗房の子であつた五代吉村である。吉村公は中興の祖と呼ばれるが、彼こそ七ツ森を中国の九巍山にならつて七巍山と命名した人物である。その後、この名称は藩の地理書に頻繁に使われていくのである。

七ツ森にはそれぞれの山頂にお薬師さまが祀られている。これらのお薬師様を一日ですべて回峰するのが七葉師掛けという行事で、昔は成人になる証しとされた。いまは薬師掛けはすたれてしまつたが、登山はなかなか盛んで、主峰の大森山と、子供の山群の最高峰、撫倉山には立派な登山道が整備され、遂倉山にも登れる。

大森山は乳首山とも呼ばれ、北側の登山口から姥坂、亀の子岩などを通り、標高差三〇〇^弱、距離二・五^{*}のところを山頂まで登る、山頂には、まだブナやイヌブナの森が残っており、国見崎から見る仙台方面の景色は素晴らしい。撫倉山は南麓の信楽寺跡しんらくじを起点として、大森山を見る展望台から、カモシカの息をするさるすべり岩の下を通つて急な登山路を一気に山頂に登る。山頂附近は岩が露出し、天狗の相撲取場など高山に登つたような気分を味わえる。

七ツ森の南山麓宮床は宮床伊達氏の居館のあつたところで歴史と史跡の街であり、民話のふるさととしても知られる小文化圏をつくつている。七ツ森修験道の本拠地となつていた信楽寺跡、宮床伊達家の御廟所、覚照寺、松森の宮中八幡、中野地藏、さらにはアララ

ギ派の歌人、原阿佐緒の洋風建築の生家などみるべきものが多い。

家ごとにすもゝ花さくみちのくの 春辺をこもり病みて久しも

原阿佐緒の宮床での歌である。

七ツ森は見る人にそれぞれの姿で語りかけ、人々に豊かな感性をはぐくむ山と思われるのである。

宮城支部で皆さんで登つたのは秋が深まってからだつたと思うが、冬の小登山も楽しいものである。

「みやぎ百山」には、低山でも人々の生活にかかわる山を多く選んでいきたいと考えている。

(柴崎徹)

京都支部

日本山岳会の招きで来日したポーランド山岳会一行のうちアンジエイ・ザヴァグ氏ら四人は、成田空港から京都へ直行する英国のダイアナ妃並みのスケジュールであつた。

その日、五月二十一日は浄土真宗の開祖、親鸞上人の生誕日で、西本願寺の飛雲閣では記念の行事が行われていた。飛雲閣は桃山時代の国宝建築で、幽玄の古典芸能である能楽が催され、手入れの行き届いた庭園ではみやびな茶会。まさに古都にふさわしい雰囲気ではなからうか。本願寺内局にいる支部委員のはからいで、遠来の客は京都駅からただちに飛雲閣へおもむく手はずになつていた。

チエルノブイリの原発事故の影響もあつたとか、ポーランド隊の来日は遅れていた。おまけに「アエロフロート便なんて、いつ着くかわかりません」との悲観的な情報もあつて、受け入れ側はやき

もきした。京都着の時間は直前までわからず、夕方になったため、結局、能楽や茶会への案内は実現しなかった。

しかし、夜の映画会は盛況であった。何語をしゃべられても対応できるように、と通訳は英語のほかドイツ語、フランス語の達人もとりそろえ、歓迎態勢は完璧であった。翌日の市内観光もスムーズに運び、二手に分かれたポーランド隊を無事東海支部と関西支部に引き継ぐことができた。

ところで、京都とポーランド山岳会は浅からぬ縁があった。

一九六〇年の八月、パミールの処女峰ノシャック（七四九〇呎）をめざす京大隊はベースキャンプを建設していた。なんと、そこへポーランド隊十二人が現れたのだ。初めて外国隊を受け入れたアフガニスタン当局が、同時に二国に許可を出すという、登山界では信じられないヘマをやっていた。京大隊は驚いた。ポーランド側も驚いたに違いない。話し合いの結果、日ポ合同登山計画が生まれるが、後発のポーランド隊の高度順応がうまくいかず挫折する。

京大隊はもともと偵察隊のつもりであったが、ポーランド隊の出現で急拠頂上を目ざすことになった。激しいライバル同士の両隊の間に、不思議な友情が芽生える。初登頂をあきらめたポーランド隊は、旧式の京大隊の装備を見かね、軽い高度計（トーマン）とガスコンロ（キャンピングガス）を使ってくれ、と提供する。ライバルからそんな好意を受けてもよいものか、ととまどいながら京大隊はこれを借り、初登頂に成功した。登頂を終えた帰路、高所テントに「ショパンの国からきた同士たちへ。どうもありがとうございました。皆さんのご成功をいります。サクラ咲く国からきた二人の

ボーイズより」の置き手紙を添えてコンロは返却された。山頂に埋めた二つの小さなこけしのうち一つは、後で登頂したポーランド隊が記念に持ち帰った。「いろいろのことはあったが、ともかく気持ちよくつき合うことができたのは、お互いの幸せであった。これがスイス隊かドイツ隊であれば、こうはいかなかったような気がする。もっと激しい競争になったであろう」と酒戸弥二郎隊長（一九七六年没）は報告書『ノシャック登頂』に書いている。サクラの国とショパンの国の山男のきづなは固く結ばれた。

この時の登頂隊員だった酒井敏明、岩坪五郎の両会員が中心になって、今回のポーランド隊の受け入れ準備を進めた。残念ながら、当時のノシャック隊員は来日していなかった。しかし、写真を見ながら話は弾んだ。ポーランド隊が持ち帰ったこけしは、クワシチェンスキー隊長の娘さんとともにアメリカへ渡ったこともわかった。支部を結成したとたんに、海外からのお客さんをお迎えするというイベントがあった。京都という土地柄を考えれば、こうした行事は今後とも増えこそすれ減ることはないだろう。ホーム・ステイなども含め、受け入れ態勢が今後の課題である。海外からの来客担当も決めなければいけない、との声も支部委員の間から出ている。

（四手井 靖彦）

会務報告

昭和六十年（一九八五）六月～昭和六十一年（一九八六）五月

一九八五年度役員・評議員・支部長

会長 今西寿雄

副会長 山田二郎、大塚博美

常務理事 嶋原啓佑、橋本 清、大橋 晋、松永敏郎、梅野淑子、浜口欣

理事 一 高遠 宏、鈴木郭之、太田晃介、長谷川良典、大森久雄、岡沢祐吉、村木富士、新井陽一郎、関塚貞亨、平井吉夫、絹川祥夫

監事 竹田寛次、金坂一郎

常任評議員 松田雄一、山口節子、中村純二、宮下秀樹

評議員 伊藤紀克、田口二郎、望月達夫、織内信彦、村山雅美、渡辺兵力、越智英夫、近藤信行、宗実慶子、大森薫雄、中世古隆司、

支部長 田中弘美、安間 荘、小西政継、佐々木豊喜、吉田 宏

橋本誠二（北海道）、佐藤敏彦（岩手）、岡田光行（秋田）、村上勝太郎（山形）、庄司駒男（宮城）、中島正夫（福島）、佐藤一栄

（越後）、蒲生明登（信濃）、大沢伊三郎（山梨）、山本朋三郎

（静岡）、尾上 昇（東海）、松井辰弥（岐阜）、若林啓之助（富山）、増江俊三（石川）、今西寿雄（関西）、港 叶（山陰）、末

松大助（福岡）、野口秋人（東九州）、西沢健一（熊本）、魚本定良（宮崎）

理事会は会長、副会長、理事、監事、常任評議員によって構成される。

◇六月（一九八五年）理事会 六月十八日（火）ルーム

出席者 二十一名

▽審議事項

一、常務理事の選任、理事の常務分担の件

▽報告事項

一、各委員会報告

二、八十周年関係の各分科会報告

会報「山」四八二号参照

◇評議員会 七月五日（金）ルーム

出席者 田口二郎（議長）、望月達夫、織内信彦、村山雅美、渡辺兵力、

越智英夫、松田雄一、近藤信行、山口節子、中村純二、宗実慶子、大森薫

雄、田中弘美、宮下秀樹、安間 荘、佐々木豊喜、今西寿雄、山田二郎、

大塚博美

▽審議事項

一、常任評議員互選の件

二、名誉会員推薦の件

▽報告事項

一、会務報告他

会報「山」四八二号参照

◇七月理事会 七月十日（水）ルーム

出席者 二十一名

▽審議事項

一、支部長会議日程の件

▽報告事項

一、評議員会報告

二、八十周年記念事業について

三、委員会報告

会報「山」四八二号参照

◇八月理事会 八月十二日(月) 私学会館

出席者 二十名

▽審議事項

一、宮崎支部設立承認の件

二、東洋大学K2登山隊推薦について

▽報告事項

一、各委員会報告

二、自然保護全国集会について

三、八十周年記念式典、晩餐会について

会報「山」四八四号参照

◇支部長会議・支部懇談会 八月二十四日(土) 椿山荘

出席者39名(支部長および支部役員)、9名(会長他理事および総務委員)

▽報告事項

一、会務報告

二、創立80周年記念事業について

三、各支部の概況および活動報告

四、支部担当役員との意見交換

◇九月理事会 九月十一日(水) ルーム

出席者 二十名

▽審議事項 なし

▽報告事項

一、80周年記念式典、記念晩餐会について

二、関西支部50周年記念晩餐会の件

三、会員名簿発行の件

四、各委員会報告他

会報「山」四八五号参照

◇十月理事会 十月九日(水) ルーム

出席者 十八名

▽審議事項 なし

▽報告事項

一、80周年記念行事最終の富山地区記念講演会、記念晩餐会が終了

二、80周年記念募金収支について

三、各委員会報告他

会報「山」四八六号参照

◇十一月理事会 十一月十三日(水) ルーム

出席者 二十一名

▽審議事項

一、O A化委員会発足の件

▽報告事項

一、常務理事会での検討事項、事務のO A化準備、財務関係等

二、各委員会報告他

会報「山」四八七号参照

◇十二月理事会 十二月十一日(水) ルーム

出席者 十六名

▽審議事項 なし

▽報告事項

一、80周年記念事業委員会最終報告

二、O A化委員会報告

三、評議員会開催について

四、各委員会報告他

会報「山」四八八号参照

◇評議員会 十二月十九日(木) ルーム

出席者 田口二郎、織内信彦(議長)、渡辺兵力、越智英夫、松田雄一、山

口節子、中村純二、大森薫雄、中世古隆司、宮下秀樹、安間 荘、

佐々木豊喜、吉田 宏、今西寿雄、山田二郎、大塚博美

▽審議事項

一、会費改訂(案)の件

二、特別基金の件

▽報告事項

一、80周年記念事業について

◇一月理事会 一月二十二日(水) ルーム

出席者 二十四名

▽審議事項

一、京都支部設立について

二、東京農大、中国崑崙山脈最高峰登山後援について

三、会員管理のコンピュータに伴う事務処理事項について

▽報告事項

一、支部長会議提案の会費改訂案について

二、各委員会報告他

会報「山」四八九号参照

◇支部長会議 二月八日(土) ルーム

出席者 二十三名

▽審議事項

一、会費改訂(案)の件

▽報告事項

一、六十一年度からの会費納入方法の件

二、支部懇談会の件

三、会務報告

四、支部の主要行事予定他

◇二月理事会 二月十二日(水) ルーム

出席者 十四名

▽審議事項

一、会費改訂(案)について

二、京都支部設立承認の件

三、国際アルピニストシンポジウム後援依頼の件

▽報告事項

一、支部長会議報告

二、各委員会報告他

会報「山」四九〇号参照

◇三月理事会 三月十二日(水) ルーム

出席者 二十一名

▽審議事項

一、昭和六十一年度事業計画(案)承認の件

二、昭和六十一年度収支予算(案)承認の件

三、総会日程、会場の件

▽報告事項

一、名誉会員交野武一氏死去について

二、集委員会、東九州支部合同ヒンズラジ踏査について

三、新入会員オリエンテーションの予定

四、各委員会報告他

会報「山」四九一号参照

◇四月理事・評議員会 四月十七日(木) ルーム

出席者 十七名(理事)、十三名(評議員)

▽審議事項

一、総会提出議案について

二、60年度事業報告・収支決算報告

三、61年度事業計画・収支予算案

四、61年度監事選任の件

五、定款一部変更の件

六、細則一部変更の件

七、61年度除籍の件

▽報告事項

一、関西支部長変更

二、東宝映画「植村直己物語」後援

三、ポーランドより交流登山のため七名来日予定

四、各委員会報告他

会報「山」四九二号参照

◇五月理事会 五月十四日（水）ルーム

出席者 十三名

▽審議事項

一、日本・中国・ネパール三国合同チョモランマ登山の件

▽報告事項

一、ポーランド山岳会来日件の件

二、各委員会報告他

◇支部長会議 五月十六日（金）ルーム

出席者 二十名他執行部五名

▽報告事項

一、総会議案について

二、会務報告他

◇昭和六十一年度通常総会

五月十六日（金）於 千代田区二番町二、番町
グリーンパレス

出席者 今西寿雄会長以下一八三二名（委任者を含む）

▽総会次第 司会 鴨原啓佑

一、会長挨拶 今西寿雄

二、会務報告 鴨原啓佑

三、昭和六十年事業報告承認の件 高遠 宏

四、昭和六十年収支決算・財産目録承認の件 西村政晃

五、監査報告 竹田寛次

六、昭和六十一年度事業計画（案）承認の件 高遠 宏

七、昭和六十一年度収支予算（案）承認の件 西村政晃

八、昭和六十一年度監事選任の件 監事として次の通り決定

金坂一郎（再任）、山本健一郎（新任）

九、定款一部変更の件 高遠 宏

(1)会費値上げ、(2)監事任期の延長、(3)定款変更時期と会費値上げ実施時期（六十二年より改訂）

十、細則一部変更の件 高遠 宏

十一、昭和六十一年度除籍対象者の件

十二、議事録署名人選任の件

総会終了後、引続き懇親会が行われた。

会報「山」四九二号参照

◇主なる行事と集会

▽昭和六十年六月二日（日）上高地

第三十九回ウェストン祭

▽昭和六十年六月八日（土）～十日（日）上高地・西糸屋

第五回日本登山医学シンポジウム

▽昭和六十年六月十三日(木) ルーム

山の気象講座Ⅷ 講師 大井正一

▽昭和六十年六月十五日(土)～十六日(日) 小川山

岩登り講習会(学生部)

▽昭和六十年六月十五日(土)～十六日(日) 長岡・北越銀行ホール、東泉閣、八海山

本会創立八十周年越後地区記念講演会・晩餐会・記念山行

▽昭和六十年六月十五日(土)～十六日(日) 秋田市文化会館

ブナ・シンポジウム

▽昭和六十年六月二十二日(土)～二十三日(日) 志賀高原

高山植物探索山行

▽昭和六十年六月二十二日(土)～二十三日(日) 根烈岳

秋田支部設立二十五周年記念山行

▽昭和六十年六月二十八日(金) ルーム

講演会「チャンタン高原の自然」 講師 五百沢智也

▽昭和六十年七月五日(金)～七日(日) 早池峯山

懇親山行

▽昭和六十年七月六日(土) 私学会館

本会創立八十周年記念中国登山隊歓迎会

▽昭和六十年七月六日(土)～七日(日) 楢形山

懇親山行

▽昭和六十年七月十一日(木) ルーム

山の気象講座IX 講師 大井正一

▽昭和六十年七月十三日(土)～十四日(日) 札幌・北方圏センター、署寒別岳

本会創立八十周年北海道地区記念講演会・晩餐会・記念山行

▽昭和六十年八月十九日(月)～二十三日(金) 三菱センター

本会創立八十周年記念・会員による絵画・写真展

▽昭和六十年八月二十二日(木)～二十七日(火) ルーム

本会創立八十周年記念展

▽昭和六十年八月二十四日(土) 椿山荘

本会創立八十周年記念式典、祝賀晩餐会

▽昭和六十年九月八日(日) 高尾山周辺

現地視察(首都圏中央連絡道路計画他)

▽昭和六十年九月十二日(木) ルーム

山の気象講座X 講師 大井正一

▽昭和六十年九月十五日(日)～十六日(月) 北八ヶ岳

懇親山行

▽昭和六十年九月二十八日(土)～二十九日(日) 上市町北ア文化センター、馬場島・家族の森

本会創立八十周年北陸地区記念講演会・晩餐会

▽昭和六十年十月十日(木) 皇居周辺

第二十二回学生部マラソン大会

▽昭和六十年十月十日(木) 群馬・碧岩、大岩

現地小集會

▽昭和六十年十月十一日(金)～十三日(日) 鳥海山、月山

懇親山行

▽昭和六十年十月十五日(火) ルーム

会員懇談会「ナムナニ峰登頂報告会」 講師 斉藤惇生

▽昭和六十年十月十七日(木) ルーム

中国登山隊報告会

▽昭和六十年十月十七日(木) ルーム

秋山山行勉強会

▽昭和六十年十月十九日(土)二十日(日) 城ヶ崎

フリークライミング、ボルダリング講習会 講師 池田 功

▽昭和六十年十月十九日(土)二十日(日) 仁川ハイッ

関西支部五十周年記念晩餐会

▽昭和六十年十月十九日(土)二十日(日) 鈴鹿・湯の山温泉、御在所岳

第十一回自然保護全国集会

▽昭和六十年十月二十日(日) ルーム

学生部後期総会

▽昭和六十年十月二十四日(木) ルーム

講演会「登山中の栄養と食べ物」 講師 本山十三生

▽昭和六十年十月二十六日(土) ルーム

山岳図書交換会

▽昭和六十年十月二十六日(土)二十七日(日) 安達太良山

秋山山行

▽昭和六十年十一月二日(土)四日(月) 恵那山

懇親山行

▽昭和六十年十一月三日(日) 巻機山・米子沢

現地小集会

▽昭和六十年十一月六日(水) ルーム

秋山山行写真発表会

▽昭和六十年十一月九日(土)十日(日) 丹沢

丹沢・丹水会山行

▽昭和六十年十一月九日(土)十日(日) 梅ヶ島温泉

第二十八回紅葉会

▽昭和六十年十一月十四日(木) ルーム

大学山岳部との懇談会

▽昭和六十年十一月十五日(金) ルーム

会員懇談会、ドイッ映画「銀嶺に帰れ」観賞

▽昭和六十年十一月十七日(日) 湘南・高麗山

自然保護観察会

▽昭和六十年十一月二十七日(水) ルーム

シンポジウム「高所登山におけるアルパインスタイルの問題について」

パネリスト 重広恒夫、田中壮吉、山本幸彦、和田城志、坂下直枝

▽昭和六十年十一月三十日(土) 中野サンブラザ

シンポジウム「ヒマラヤの生態系と環境」 パネリスト 川喜田二郎、

中尾佐助、沼田 真、渡辺 桂、渡辺兵力

▽昭和六十年十二月七日(土)八日(日) 秋山二十六夜山

懇親山行

▽昭和六十年十二月八日(日) 三浦半島・双子山

懇親山行

▽昭和六十年十二月二十二日(土) 石老山

現地小集会

▽昭和六十年十一月十一日(土)十二日(日) 柵池

スキー山行

▽昭和六十年十一月十八日(土)十九日(日) 伊豆二十六夜山

懇親山行

▽昭和六十一年一月二十三日(木) ルーム

講演会「北アルプスにおける自然エネルギーの利用」 講師 鳥居 亮、

重村 清、森 武昭

▽昭和六十一年二月二日(日) 独鈷山

現地小集会

- ▽昭和六十一年二月五日(水) ルーム
講演会「幻の山と開けゆくブータン」 講師 吉永英明、村木秀男
- ▽昭和六十一年二月十三日(木) ルーム
講演会「高所障害の後遺症について」 講師 川久保芳彦
- ▽昭和六十一年二月十四日(金) ルーム
会員懇談会「軍窓の山旅―中央線から見える山」 講師 山村正光
- ▽昭和六十一年二月十五日(土) ルーム
第十七回「山岳図書を語る夕」 講師 白旗史朗
- ▽昭和六十一年二月十五日(土)～十六日(日) 日光・松木沢
アイスクライミング講習会 講師 勝山康雄
- ▽昭和六十一年三月八日(土)～九日(日) 愛鷹山
現地小集会
- ▽昭和六十一年三月十日(月) ルーム
講演とスライド「ニュージーランドの近況」 講師 佐々保雄
- ▽昭和六十一年三月十三日(木) ルーム
第十四回山岳史懇談会「マナスル登頂」 講師 今西寿雄他
- ▽昭和六十一年三月十四日(金)～十六日(日) 志賀高原周辺
山岳スキー技術講習会 講師 小林政志他
- ▽昭和六十一年三月十五日(土) ルーム
第十二回新入会員オリエンテーション
- ▽昭和六十一年三月十八日(火) ルーム
セミナー「トレーニング」 講師 柳沢昭夫、松永敏郎
- ▽昭和六十一年四月二日(水) ルーム
映画と講演「穂高は生きている」 講師 神 憲明
- ▽昭和六十一年四月六日(日) 幕山

現地小集会

- ▽昭和六十一年四月十五日(火) ルーム
会員懇談会「東部カラコルム・マモストン・カンリ初登頂報告会」
講師 尾形好雄
- ▽昭和六十一年四月二十日(日) 扇山
会員懇談会「さくらハイク」
- ▽昭和六十一年四月二十六日(土)～二十七日(日) 岐阜・能郷白山
岐阜支部十五周年記念登山
- ▽昭和六十一年五月二十四日(土)～二十五日(日) 湯殿山
東北ブロック・シンポジウム
- ▽昭和六十一年五月三十一日(土) 聖マリアンナ医大
第六回日本登山医学シンポジウム
- ◇海外登山界との交流
▽昭和六十年八月十日(土) ルーム
鄭在泓先生を囲む会
- ▽昭和六十年十月十四日(月)～二十八日(月) 小川山、城ヶ崎、富士山他
アメリカ山岳会アラスカ支部とその交歓登山
- ▽昭和六十年十月二十一日(月) 私学会館
アメリカ山岳会歓迎会
- ▽昭和六十一年一月十六日(木) 電気ビル
インド登山財団ジャヤール氏歓迎会
- ▽昭和六十一年五月二十五日(日) 富士山
ポーランド山岳会員との交歓登山
- ▽昭和六十一年五月二十七日(火) 日体協
ポーランド山岳会員との交流、高所登山シンポジウム
- ◇その他トピック

SANGAKU

The Journal of the Japanese Alpine Club

Vol. 81

Issued in December 1986

Contents

In English (also in Japanese, pages in parenthesis)

- K 2, Everest and Manaslu. Successive Climbs of 3 Eight-Thousanders
in 1985.....YAMADA Noboru.....21 (24)
- Cho-Oyu 1985.....MITANI Toichiro.....31 (33)
- 1985 Japanese Alpine Club China Mountaineering Expedition 1985
.....MIYASHITA Hideki.....37 (49)
- First Ascent of Geladaindong Xueshan and Exploration of True
Source of Chang Jiang (Yangtze River)
.....MATSUMOTO Yukio and KURACHI Kiyoshi.....41 (38)
- First Ascent of Mount NamsilaYOSHINAGA Hideaki.....43 (44)

In Japanese

<Historical Notes of the JAC>

- The Beginning of the Annual Dinner PartyORIUCHI Nobuhiko..... (7)
- The Origin of the Regular Chat Meeting (with the Frontispiece)
.....MOCHIZUKI Tatsuo..... (16)

The Beginnings of the Mountain Photography by the Dry Photographic
Plates in Japan (with the Frontispiece).....SUGIMOTO Makoto..... (54)

From the "Bergführerbuch in der Schweiz" (with the Frontispiece)
.....OKAZAWA Sukeyoshi..... (59)

A Symposium of the Alpine Style Climbing in High Altitude..... (92)

In the Days of the First Ascent of Manaslu—A Commemorative Talk
of the 30th Anniversary of the First Ascent— (65)

In Memorial (120)

Reports from the Local Sections..... (139)

Club Notes : June 1985—May 1986..... (151)

The Medical Examinations of the Eight-Thousander Mountaineer
without OxygenKAWAKUBO Yoshihiko..... (45)

Topics on Avalanche AccidentsNITTA Ryuzo..... (53)

From the Editor..... (222)

The Japanese Alpine Club

(Founded 1905)

Address : Sun-View Heights, 5-4 Yonban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo

Office Bearers and Committee

1986 (May 1986-April 1987)

President : IMANISHI Toshio
Vice-president : YAMADA Jiro, OHTSUKA Hiroyoshi
Honorary Secretary : SHIGIHARA Keisuke
Honorary Editor : OHMORI Hisao
Honorary Librarian : OHHASHI Susumu
Honorary Treasure : HASHIMOTO Kiyoshi
Auditors : YAMAMOTO Ken'ichiro

Committee

SHIGIHARA Keisuke	HASEGAWA Ryoten	ARAI Yo'ichiro
HASHIMOTO Kiyoshi	HIRAI Yoshio	SUZUKI Hiroyuki
OHHASHI Susumu	KINUGAWA Sachio	OHMORI Hisao
MATSUNAGA Toshiro	MURAKI Takashi	OHTA Khosuke
UMENO Toshiko	OKAZAWA Sukeyoshi	SEKIZUKA Sadaaki
HAMAGUCHI Kin'ichi	TAKATŌ Hiroshi	

Council

MIYASHITA Hideki	YOSHIDA Koh	ANMA Soh
NAKAMURA Junji	ITŌ Norikatsu	NAKASEKO Takashi
YAMAGUCHI Setsuo	MOCHIZUKI Tatsuo	SASAKI Toyoki
MATSUDA Yuichi	ORIUCHI Nobuhiko	TANAKA Hiromi
WATANABE Hyoriki	TAGUCHI Jiro	KONDO Nobuyuki
MURAYAMA Masayoshi	OCHI Hideo	OHMORI Shigeo
KONISHI Masatsugu	MUNEZANE Keiko	

Chairmen of Local Sections

<i>Hokkaido</i> : HASHIMOTO Seiji	<i>Gifu</i> : MATSUI Tatsuya
<i>Iwate</i> : SATOH Toshihiko	<i>Toyama</i> : WAKABAYASHI Keinosuke
<i>Akita</i> : OKADA Mitsuyuki	<i>Ishikawa</i> : MASUE Shunzo
<i>Yamagata</i> : MURAKAMI Katsutaro	<i>Kansai</i> : ABE Kazuyuki
<i>Miyagi</i> : SHOJI Komao	<i>Kyoto</i> : SAITO Junsei
<i>Fukushima</i> : NAKAJIMA Masao	<i>San'in</i> : MINATO Kanoh
<i>Echigo</i> : SATOH Ichiei	<i>Fukuoka</i> : SUEMATSUMI Daisuke
<i>Shinano</i> : GAMOH Akito	<i>Higashi Kyushu</i> : NOGUCHI Akito
<i>Yamanashi</i> : OHSAWA Isaburo	<i>Kumamoto</i> : NISHIZAWA Ken'ichi
<i>Shizuoka</i> : YAMAMOTO Tomosaburo	<i>Miyazaki</i> : UOMOTO Sadayoshi
<i>Tokai</i> : ONOE Noboru	

K 2, Everest and Manaslu

Successive Climbs of 3 Eight-Thousanders in 1985

YAMADA Noboru

I had just returned to Japan in a downcast mood after failing in a winter attempt on the South Face of Annapurna in February 1985, when my permission came through for a winter climb of Manaslu.

I was already scheduled to participate in a Himalayan Association of Japan expedition to K2 that summer. We shipped our supplies, and then I set about making my own preparations. I had been away from Japan since the previous summer, and felt guilty about not having participated in the preparations. I decided to make up for that with a strong effort on the mountain. About that time Mr. YAGIHARA Kuniaki asked me if I would be available to go to Everest in the fall to participate in making a movie about UEMURA Naomi. It was a rare chance to get paid for climbing a mountain, and I immediately accepted. But Manaslu in winter right after Everest would be difficult both physically and time-wise. I considered canceling the Manaslu climb.

May 18 I departed for K2. On the way I detoured to Kathmandu and visited the Section of Mountaineering of the Ministry of Tourism to discuss the Manaslu climb. P.M. Shresta, Director of the Ministry's Mountaineering Section, told me that "as far as the Government of Nepal is concerned you haven't officially canceled yet; if you decide to go all you have to do is pay your fee". I promised to return with a final answer after the K2 climb. I continued to dream of Manaslu, but for the moment my efforts were directed at K2.

Summiting K 2

Our K2 expedition of 15 climbers led by TOBITA Kazuo planned to climb the mountain via the Southeast (Abruzzi) Ridge. It was an orthodox plan, which our leader had been working on for 3 years. One might think what is the attraction of climbing a mountain's normal route by the polar method, but it was, after all, the world's 2nd highest mountain, 8,611 meters high, and had plenty of appeal. The Abruzzi ridge, even though considered the "normal" route, is a difficult route that had been climbed only 3 times, by the Italians who did the first ascent, a Japanese expedition and Messner's International Expedition. We wanted to put as many people on the summit as possible and to do it without oxygen.

May 27 we had all our expedition members and supplies together in Islamabad. We repacked our supplies, and on the 29th headed for Skardu. We started in early morning, expedition members traveling by bus, supplies by truck. It was very

hot in the bus. If we opened the windows we would be blasted by a hot wind, so we had to keep the windows closed. Mountain climbers can withstand cold well but the heat gave us trouble. We kept going all night, arriving at the Indus River by morning. After 26 hours of straight traveling we arrived at the P.T.D.C. K2 Motel in Skardu. It was where I had stayed on my first overseas expedition, to the Latok Mountains, 10 years previously. The city of Skardu had changed greatly in 10 years.

June 1, we left Skardu in early morning, headed for Dusso. We hired 243 porters. The 2nd we started our approach march in drizzle. We had thought it rained very little in Pakistan but here we were and it was raining. But at least it was cool, which made it easy to walk. June 4 we arrived at the last village on our route, Askole. It was the place where I had had a big argument with our porters on a tour of the Latok Mountains in 1975. I remembered the incident well. As we purchased food for our porters and goats, we suddenly found that the number of porters had increased by 30. June 6 we arrived at Paiju with its thick clumps of trees. We rested there for one day and distributed food to the porters. The porters became a bit unruly when we distributed the meat but the disturbance soon quieted down. The porters individually are nice enough but when they become unruly as a crowd it can get scary. Perhaps their behavior was affected by its being Ramadan.

June 8 we arrived at the Baltoro Glacier. There we met an Italian expedition headed for Gasherbrum I and II. June 9 we arrived at a grassy place called Urdokas with good views of the rocky spires at the entrance to the Baltoro Glacier, Uri Biafo Tower, Trango Tower and Cathedral. It would be our last view of greenery until after the climb.

June 11 we arrived at Concordia in a snowstorm. Toward evening the snow stopped, and the massive figure of K2 appeared through the mist. The 12th we pitched our temporary base camp alongside a Swiss expedition that had just completed an attempt on the mountain. It was the usual Base Camp site, but we left 25 porters there and moved our permanent Base Camp to the base of the Abruzzi Ridge.

Climbing started on June 22. For me it would be an attempt to climb without oxygen. I had already climbed 5 eight-thousanders including Everest, and was confident that I could do it. Route construction, camp pitching and load carrying proceeded smoothly, and on July 6 we pitched Camp 3 at 7,400 m. Then we carried supplies to the site of our Attack Camp at 7,840 m.

Then everybody descended to Base Camp to rest. We had completed our preparations in less than one month. I was in excellent condition.

July 16 I left Base Camp with Yoshida and Murakami ; the three of us would form the first assault party. We climbed all the way to Camp 2 in one day. The 17th it snowed and our departure was delayed. We had planned to climb to our Attack Camp that day but only made it to Camp 3. The 6 members of the second summit party moved up to Camp 2 the same day. A wind started up at night, and became stronger the next day. Visibility was poor in blowing snow. Our schedule called for a summit assault on the 19th, and we wanted to keep our stay at high altitude as short as possible.

At 2:00 p.m. we pitched our Attack Camp at 7,840 m. It took a long time to pitch one tent as we struggled to clear the snow away. We got into our sleeping bags, thinking of the summit assault planned for the next day. We got up before midnight to start preparations. The blizzard was getting worse. It was the worst day of the expedition thus far. We decided to call the summit assault off and descended to Base Camp, where we decided to rest for 3 days and then try again. Our next assault would take place July 22 to 26. Our rest days the weather was clear ; it seemed that we were out of phase with the weather cycle.

July 22,9 climbers, members of the first and second assault parties, climbed to Camp 2 en masse. The 23rd the 3 climbers of the first assault party climbed directly to the Attack Camp, while the others stopped at Camp 3. Broad Peak, behind us, didn't look so high from that altitude. It was only slightly above the height of our Attack Camp. We arrived at the camp at 3 p.m. and struggled to dig our camp out of the snow.

We ate dinner and got into bed early. I slept well but woke up quickly, in less than 2 hours. Then I had trouble getting back to sleep. I lay in my sleeping bag, waiting for midnight, when we planned to get up. Yoshida and Murakami both used oxygen and slept well. For me, unable to sleep, time passed slowly. I looked at the others enviously. Sleeping without oxygen at that altitude is difficult.

Just before midnight I woke the others. I peeked outside. It was windy, but the sky was full of stars. I thought, today is it. I went through 4 bowls of "ramen" noodles for breakfast. Without oxygen I had less preparation to go through than the others. All I had to do was fill my thermos bottle with tea and pack my lunch.

I started climbing at 2:30 a.m., a bit ahead of the others. The wind was strong, but the snow was firm and easy to walk on. A short while later the others came up from behind with their headlamps on. We climbed toward the high couloir known as the "bottleneck". Just before it there is a triangular snow patch, where the three of us huddled in a crevasse to drink tea. About that time the sky started to get light. The others had climbed without oxygen up to that point in order to save their oxygen. We cached our extra alpenstocks, headlamps and empty

thermos bottles in the crevasse and climbed toward the bottleneck. The slope gradually steepened, but our crampons gave us good traction and we climbed steadily. At the narrowest part of the couloir a serac towered over us menacingly. A 6 mm rope was dangling, but we couldn't find where it was dangling from or how securely it was supported, so hesitated to use it. Past that point we felt that we had passed the worst of the "bottleneck". We traversed toward and then climbed up a large snow slope to the left of the serac. From that point we started to struggle in deep snow. Progress was slow in snow up to the chest.

I had no intention of merely following a path made by others, and took my turn at trail-breaking, but without oxygen I couldn't keep it up long. I gradually fell behind the other two. My throat became dry. At 8,400 m I took a short rest and radioed Base Camp. Blowing snow kicked up by the wind made visibility poor. Here and there were short stretches of crust but for the most part I had to struggle through deep snow. From about 11:00 I was enveloped in a blizzard with visibility of only a few meters. If that kept up I worried that even if I made the summit I might not make it back safely. I had the feeling that I had been lucky in my previous Himalayan and Karakoram climbs. Perhaps my luck was about to run out. Perhaps I should turn back early. I shouted to Yoshida, but my voice was drowned out in the blizzard and I didn't hear an answer. I waited 30 minutes but there was no sign of him. He must be continuing to climb. I couldn't simply abandon the others and go down by myself. I started to climb again. After 2 more hours the blizzard miraculously cleared. Blue sky gradually appeared through the clouds. I could hear Yoshida shouting. He was just below the summit. The summit was just up ahead. My luck hadn't run out after all.

At 2:20 p.m., blessed by good luck, I stood atop K2, completing my conquest of the four highest mountains in the world. However, that was the last day that the goddess of K2 smiled. After that the weather turned bad. Our second assault party and a Polish party that followed were both unable to make the summit. At Base Camp I was fortunate to have an opportunity to talk to W. Kurtyka of the Polish expedition. We talked extensively about Himalayan and Karakoram climbing. He kindly invited me to join him on a 1986 climb of Trango Tower that he had been planning for several years, a climb which I am looking forward to. We traveled together back to Islamabad and went over our plans in considerable detail. I departed from Islamabad, in blazing hot sun, looking forward to meeting again a year later, and immediately headed for Nepal.

To Everest

August 25, I walked the streets of Kathmandu after an absence of 3 months. I immediately visited the Ministry of Tourism, Mountaineering Section, where I

completed the procedure for a trekking permit, talked about my experience on K2, and discussed the problem of Manaslu. P.M. Shresta told me that "we still don't have any other applications for Manaslu; if you decide you want to go through with the climb there shouldn't be any problem". I told him that in that case I wanted to leave my final decision until after Everest.

The Everest expedition was part of a plan to make a movie of the life of the great adventurer UEMURA Naomi, filming on-site in all the places he had been. I was to provide support and help with the filming above Base Camp, which was the highest the regular film crew could go. Perhaps I would also get a chance to climb Everest.

The filming party and the main climbing party had already left Kathmandu for the approach march. Trouble was anticipated on the approach march. A glacial lake that forms the source of the Bhote Kosi had burst through an ice dam, flooding the Dudh Kosi and washing over 10 bridges away on the route. This was in addition to the normal difficulty of hiking the route in the summer rains. The party was large, over 40 people including not only climbers but a director, actors and staff.

Murakami, who accompanied me from K2, had previously hiked the trekking route to Everest with me in 1983. We rested in Kathmandu for a week before starting. A vehicle road now goes all the way to Jiri, cutting 4 days off the trek which formerly started at Lamosangu. We started with 7 porters on September 3, hiking in the rain. We estimated that the main party should be approaching Namche Bazar. The 5th day out, before reaching Kalikhola, we came to our first washed-out bridge. It was a forceful reminder of the power of a flood. A wire bridge had been stretched across. We had to pay to have each person and each pack carried across one at a time on a gondola. Between Lukla and Namche Bazar was another washed-out bridge. We had to detour through the forest.

We reached Namche Bazar after 8 days, 4 days less than it used to take, and caught up with the main party at Lobuche. It had been decided to set Base Camp up at a site 100 m from the Base Camp of an Indian Army Expedition that was already climbing. When all of the tents were set up and a kitchen and dining room built we had ourselves a little village. The tents were arranged the same way they had been during the 1970 Japanese Mount Everest Expedition, in which Uemura participated.

Our permission was to start climbing after the Indian Army expedition finished. We watched their climbing with interest. We had permission to make a film up to the South Col, but at that time did not yet have permission to climb to the summit. The Indian expedition, which was intended not only as a climb but also

as an Army high altitude exercise, had many people and was evidently very well funded. They were climbing on two routes, the Southwest Face and the Southeast Ridge. Our climb depended on the Indians climbing the mountain and getting down quickly.

By October 3, after 2 weeks in Base Camp, the main filming party completed all of their filming and left Base Camp. All that was left was for us climbers to film the scenes on the mountain. It would sure be good if we could climb to the summit as a bonus. We had 11 climbers including 2 climber photographers.

October 7, 7 Indian climbers attempted the summit. They made it to the South Summit, but it took too long and they had to abandon the summit. On the way down one of them slipped and fell to his death. The Indians mounted one more summit assault but with winter approaching, fierce winds defeated them. We had only until October 30 to climb the mountain.

October 29, tents for 11 people, 9 expedition members and 2 Sherpas, were pitched on the South Col. Food cartons that had previously been cached had been blown away by the wind. As at the Attack Camp on K2, I slept well for only the first two hours. I got up at 11 :20 p.m., ate a breakfast of Sherpas' tsampa, and prepared to climb. There was trouble with our oxygen apparatus. One person would have to stay behind. We were in good shape. Time passed quickly as we made our preparations quietly, without talking. Suddenly Murakami spoke up. "I have already climbed this mountain. I'll stay behind. Then there was trouble with another oxygen apparatus. Saito, a photographer's assistant, withdrew. We climbed up the snow slope on the Southeast Ridge by our headlamps. The wind at that time of year is plenty cold. Even with down mittens on I lost all feeling in my fingers. I banged my hand against my ice axe to warm it up until I restored feeling.

About the time the eastern sky began to light up we found ourselves below the South Summit. There were 7 of us ; our 2 Sherpas had given up. One, assigned to carry cameras, had trouble with his oxygen apparatus. The other, our sirdar, was attempting his fourth ascent of Everest, this time without oxygen, and found it too difficult. As a result we would not be able to take motion pictures on the summit. We cached our headlamps along with the now useless movie film and resumed climbing. Our leader, Yagihara, was the strongest. He had the most Himalayan climbing experience. He and Nazuka took the lead. I was third. Just before the South Summit we had to struggle through deep snow. Yagihara and Nazuka were having a rough time, so I detoured to the Southwest Face side of the ridge and arrived at the South Summit first.

The Hillary Step was filled with snow, forming a snow wall. Nazuka, using

oxygen, climbed it first and fixed a 6mm rope. Yagihara and I followed and headed for the summit.

As we climbed above 8,800m the lack of oxygen (in my case) was proving troublesome. I couldn't keep up with Yagihara. In the last hour to the summit he pulled 25 minutes ahead of me. Nazuka joined us and took still pictures. There was a great deal of snow, and no sign of a pole that had been set up by a Chinese expedition. Unable to wait for the others, we started down. We passed 3 more climbers at the Hillary Step, and Kimoto, who was last, just above the South Summit. Everybody was moving well and it was still early in the day, so there were bright prospects for everybody to make the summit. We exchanged greetings and then headed down. To stay at high altitude for too long is dangerous. We arrived at the South Col about 2 p.m. We were down safely. Saito and Murakami greeted us.

Yagihara, Nazuka, Saito and I continued down to Camp 3, leaving Murakami to take care of Camp 4 on the South Col. Just before reaching Camp 3 I suddenly felt very tired. Just to descend one fixed rope length became difficult. I sat down to rest many times. There was no hope of making it to Camp 2 that day. I decided to stay at Camp 3. I radioed the South Col to inquire about the others. Murakami reported that he could see two climbers coming down, but there was no sign of the other two. Photographer Akutsu and Kimoto were the two who were late. We learned that they had to bivouac. Murakami took one of the good oxygen masks and climbed up to look for them. He reached them in the middle of the night, waited for morning and brought them down. I can't say enough about Murakami.

October 31 we descended to Camp 2. There we were greeted by Assistant Leader Miyazaki. He was very happy to learn that Leader Yagihara had made it to the summit. He graciously congratulated the rest of us, not showing any outward sign of displeasure at having been unable to climb himself. Miyazaki had been leading the route construction on our 1983 winter expedition when he was hit by a falling rock and had to give up on making it to the summit. I felt doubly sorry for him for having missed out on the summit both times.

To Manaslu

On the way down to Camp 2 I thought about Manaslu. I discussed it with the Leader and Assistant Leader. They encouraged me to go. "If you have enough physical and mental strength left to think and talk about Manaslu in winter right after climbing Everest without oxygen, then you're in good shape. Go ahead and try it." I had climbed with both in the Himalaya several times, and they knew me better than anyone else. Getting the go sign from them gave me confidence.

I had tried Manaslu in winter 3 years before. The first day of climbing I fell into a crevasse and broke my right foot. Then one of our summit party slipped and fell to his death. It was a disastrous expedition.

I collected all the leftover food from the Everest expedition and claimed it for Manaslu. At the time I had not yet selected partners, On the return march from Everest, Murakami, Saito and I climbed Island Peak to take photographs. I invited Saito to join me on Manaslu. He had made it to the South Col on Everest only to have to abandon the summit because of oxygen equipment trouble. He had gone along as a photographer's assistant and hadn't really gone all-out, so that he still had plenty of life in him. He was strongly attracted to the idea of a winter attempt on an eight-thousander, where he would be able to burn up his unused energy. That settled it. We would have a two-man expedition and climb alpine style.

We would do everything by ourselves from the moment we left Base Camp until our return, without help. We would do without fixed camps. We would not install or leave fixed ropes. We would dispense with climbing up and down several times to acclimatize. Of course we would climb without oxygen.

It was November 15 when we arrived back in Kathmandu. I immediately went to the Ministry of Tourism to pay my climbing fee. We prepared our food and equipment. Most of our preparations were completed in one day, but our personal equipment was still back at Lukla, swarming with trekkers. It was November 25 before we packed our Sherpas off on the approach march. Saito and I, with our liaison officer, flew to Sama by helicopter.

On a climb with no expedition members left in Base Camp, it is particularly important to select reliable Sherpas. I selected a sirdar I had already climbed with several times, and hired two Sherpas who had done well on Everest as cook and mail runner. Since we would climb alpine style, in selecting Sherpas I was not concerned with their climbing technique, but with rather their reliability and ability to manage porters in transporting supplies. There were 5 porters to carry 5 loads, a bare minimum for an eight-thousander.

We took off from Kathmandu on December 2. Visibility was excellent. The three peaks of Manaslu came into view almost immediately, along with Ganesh Himal and Annapurna. We flew over Trisuli Bazar, then entered the gorge of the Burhi Gandaki through which the approach route passes. In less than an hour we were in Sama. We borrowed the cooking hut of a gompa at the edge of the village, and there waited for our Sherpas to arrive. The sky over Manaslu was clear, with no wind. Conditions were perfect but our supplies weren't there. December 4 our supplies arrived. We had lived for two days on bread

and boiled water, so it was good to have real food again.

December 5 we started up toward the site of Base Camp with enough food and fuel for four days. The sirdar and cook came with us, while the mail runner and liaison officer stayed in Sama. Base Camp was on the same site as our 1982 Base Camp, at 4,900 m on the snout of the Manaslu Glacier. There we pitched a single tent.

Early on the morning of December 6 we held a short ceremony to pray for the safety of the climb. Then we started up, planning to complete the climb in 3 or 4 days. There were just 2 of us. We carried over 20 kg each, including tent, food, fuel and all our climbing equipment. There was more snow than we had anticipated. Struggling through snow up to our armpits, we failed to reach Naike Col that first day, and pitched camp at 5,320 m. Falling behind schedule was unsettling.

The next morning, the weather was still holding, but we were worried that the temperature might actually be too high. As we approached Naike Col the surface turned to wind crust, making walking easier, but then we hit more deep snow as we passed through a group of seracs beyond the col. In the afternoon clouds appeared. In the threatening weather we reached 6,100 m.

That night, as on the previous night, neither of us could sleep well. We were worried. The morning of the 8th our fears turned out to be well-grounded. The entire sky was cloudy, and a strong wind blew above the North Col.

We waited for several hours. About 11 a.m. clearings started to appear in the cloud cover, so we decided to start up although it was late in the day. Luckily there was no deep snow; we had a hard snow slope with crust. We climbed until 5 p.m. We couldn't find a good tent site, so chopped one out of the snow slope and pitched our tent on a platform barely large enough to sit on. We were at 6,850 m. Wind-blown ice fragments rained on us from the seracs above, giving us another sleepless night. Due to the narrow platform we had to sleep sitting.

December 9, the wind was strong but we nevertheless started our summit assault at 3:30 a.m. Our joints ached from lack of sleep. Our principal items of equipment were a single 8 mm 30 m rope and a single thermos bottle. We carried only the food we could stuff into our pockets. As we climbed higher the wind became even stronger and the cold more severe. At 7,200 m, at the base of the snow slope leading to the upper plateau, I lost feeling in my fingertips, and the tip of my nose became blackened with frostbite. We decided that it was impossible to climb higher, and returned to our bivouac site. There we packed our tent and headed down to Base Camp, feeling downcast and defeated.

Climbing in the teeth of a full winter wind is simply impossible. At that rate we would simply not be able to do our climb. However, I had attempted eight-thousanders in winter 3 times before, and every time there was a day or two when the wind weakened. It was mid-December. The odds were against us, but we longed to make the summit and decided to give it one more try. We would stay on the mountain a maximum of 4 days. If we failed again, we would pack up and go home.

When we reached Base Camp our Sherpas, just as instructed, were waiting, ready to pack the tent and leave on a moment's notice. We informed them that we would try for the summit once more.

December 11, after only one day of rest, we headed up the glacier again. That day we reached 6,100 m, the altitude that it took us 2 days to reach the first time. The 12th, it snowed.

Snow is the great enemy of alpine style climbing. The reasons are that it obliterates the return route, and that struggling through deep snow causes physical exhaustion. That day we spent all day in our little tent, praying that the next day would be clear.

December 13, the wind was picking up, but fortunately the snow stopped. We climbed to 7,100 m, and pitched our tent inside a crevasse. The wind outside was strong but it didn't reach the tent. I peeked outside during the night. The clouds were blowing away toward the east, and Manaslu was under a sky full of stars. I started to prepare breakfast. That finished the last of our regular meal food. At 3:30 a.m., we started to climb by headlamp. The wind weakened a bit. The cold was still severe.

Climbing in the darkness, one sees many illusions. I had the strange feeling that a third person was climbing with us. The same phenomenon has been reported by other alpine style climbers in the past. Some people report hearing the phantom climber singing; at the extreme some have even reported having a conversation with him. When I was in the lead, he seemed to be ahead of me. I asked Saito. He also thought there was a third person, between the two of us.

Dawn broke just as we reached the upper plateau. This was the site of the last camp on the Japanese Alpine Club's historic first climb of the mountain. From the upper plateau, Annapurna and Dhaulagiri are clearly visible; they looked close enough to almost reach out and touch.

Crossing such a broad plateau confused our judgment. The route up to the summit ridge starts somewhere in the middle of the plateau. We overshot it. We had to retreat a bit and climb a snow slope up to the left. Luckily we were

acclimatized from Everest, in fact our speed was one reason why we overshot the route. We were moving as fast as we normally do at sea level.

As we started up the snow slope, the wind picked up. I lost feeling in my fingertips again. I kept changing the grip on my ice axe and moving my fingers around inside the mittens to warm them up, but as soon as I stopped they got cold again. I continued the cycle over and over while climbing.

We roped up for the first time when we reached the ridge leading from the East Peak to the summit. It is a knife-edge ridge, with the South Face dropping off to the right and the East Face to the left. The wind became stronger. The rope joining us vibrated in mid-air like a bow string.

We passed a series of small peaks. As we came to the fifth peak there were no more up ahead. The ridge continued to Peak 29 and then dropped precipitously to a saddle. We were on the summit. It was 11:40 a.m. My third eight-thousander in one year, following K2 in the summer and Everest in the fall.

In the fierce wind we couldn't hang around long. We started down immediately. Suddenly, at my feet there was a familiar-looking dark blue can. It was a "Peace" tobacco can. It must have been from a Japanese expedition. I put it in my pocket.

Later I opened it. It was from the Japanese expedition that first summited Manaslu in 1956. Over 70 people had climbed Manaslu since then, but we, the first winter summiters, were the first to find that can. I thought that there must be a reason.

That "Peace" tobacco can is now in the possession of the Japanese Alpine Club.

(Editor's note: Regarding the "Peace" tobacco can, please see the frontispiece of this issue and the Japanese Alpine Club bulletin Yama No. 490.)

(Translated by Harold Solomon)

Cho Oyu 1985

MITANI Toichiro

This plan started in the fall of 1984, when Leader Kanazawa was on an expedition to Lobuche West, found out that there was a possibility of permission to climb Cho Oyu, and submitted a provisional application. As of that time Japanese expeditions had attempted the mountain twice, but no Japanese had yet stood on the summit. Cho Oyu is one of 14 peaks over 8,000 m in the Himalaya and Karakoram. Japanese ascents of 8,000 m peaks started with Manaslu in 1956 and Everest in 1970. Since then one after another was climbed, until a Toyama

Prefecture Mountaineering Expedition climbed Nanga Parbat in 1983, leaving Cho Oyu as the only eight-thousander not yet climbed by Japanese. When Kanazawa returned to Japan he told me that it looked like we could get permission, and we worked together on our plan.

First we had to find a sponsoring organization. We formed an ad hoc group called the Kathmandu Club. We set up a Japanese headquarters in Takamatsu City, Kagawa Prefecture, affiliated with the Japanese Mountaineering Federation, drew up club rules, and started with about 10 members in November, 1984. We decided that the expedition would consist of 4 climbers. We changed the provisional application to a formal application, and waited for permission. Formal permission was granted in the spring of 1985. Our plan was beginning to look realistic, and the pace of preparations picked up. However, a strong party from the Sangaku Doshi Kai was to attempt Cho Oyu in the pre-monsoon season, so we didn't really expect to have a chance to be the first Japanese to climb the last eight-thousander. However, the Sangaku Doshi Kai party had an accident and was forced to abandon their attempt, so opportunity knocked for us. If successful we would be the 13th party internationally to climb the mountain (Reuters mountaineering correspondent Elizabeth Hawley in Kathmandu insisted that we would only be the 12th). It was over 29 years since the first eight-thousander had been climbed by Japanese. We would be the ones to close a period in history.

The story of climbing on Cho Oyu starts with the 1951 British expedition led by Eric Shipton. Returning from their historic Everest reconnaissance, they climbed onto the Ngozumba Glacier, and then went around to the Nangpa La. In 1952, Sir Edmund Hillary and George Lowe crossed the Nangpa La while training for Everest, but they spent too much time getting up the icefall on the northwest side of the mountain and retreated after reaching 6,850 m. The mountain was finally climbed in 1954 by an Austrian expedition led by Herbert Tichy. It was the only first ascent of an eight-thousander to be done in the post-monsoon season, and it was done without oxygen. It was a very small expedition by the standards of those days, with only 3 Austrian expedition members and 11 Sherpas led by Pasang Dawa. And the climbing was completed in 3 weeks, a remarkably short time.

We had little time or money at our disposal. We wanted to keep our climb as simple and as safe as possible. Our members were agreed on this. Our permission was for the Southwest Face, but that route was too long, and involved a formidable rock face below the summit. Crossing the Nangpa La and climbing by the West-Northwest Ridge, the route followed by the 1954 Austrian expedition, would be within our ability but involved crossing the international border. However,

9 expeditions had done it, so we decided to try and kept our fingers crossed that once on the mountain we wouldn't encounter any trouble.

We had 4 expedition members and a budget of only 4 million, raised by simply having each member put up ¥1 million. We dispensed with oxygen. No supplies were shipped separately. Sherpas would be kept to a minimum. We would have about 70 days, from late August until early November. We would take 15 days for the approach march, about 30 days at and above Base Camp, and up to 13 days for the return march. In the event we actually hired 6 Sherpas, a sirdar, cook, kitchen boy and 2 Base Camp workers. We also hired 3 local porters in Thame for the approach march across the Nangpa La.

Approach March

September 6 we started our approach march from Jiri with 41 porters. We were unable to pay the Nepalese Government's standard wage, and compromised at 45 rupees. The four of us were out of shape from lack of exercise in Japan. We stayed in local lodgings along the way. Every morning we would walk for about an hour, stop at a bhatti (tea house) for milk and tea, buy food to eat while hiking during the day, and eat again at our next lodge in the evening. It is no longer possible to follow such a healthy life style in Japan.

September 14, after 9 days, we arrived at Namche Bazar. The town had changed in 5 years. There were more lodges, and more goods were available. There is even a generator, and electricity for a few hours every evening. We rested at Namche Bazar for one day, and sent our lowland porters home. Our plan called for another 5 days to our Base Camp at Josamba (5,200 m). The route from Namche Bazar (3,440 m) follows up the Bhote Kosi. Flooding due to outbreak of a glacial lake upstream had left the trail downstream from Thame in poor condition. We had planned to use yaks and zopkyos for transport above Namche Bazar, but because of the poor trail decided to use them only above Thame. We gained an average of 300 m per day, camping at night. Each climber trained on the slopes around our campsites to acclimatize.

September 20 we set Base Camp up on a side moraine of the Nangpa Glacier. We had wanted to carry the loads a bit farther with the yaks, but the route up to the Nangpa La was in bad condition and it was still early in the season, so we had to give that plan up. From here on we would be on our own.

We took one day to organize our supplies and Base Camp, then started climbing on September 22. We cached supplies above the Nangpa Glacier and used our 3 local porters from Thame to ferry them across the Nangpa La. In 3 days In 3 days we got our supplies onto the Gyabrag Glacier at 5,650 m, apparently near the site of the 1954 Austrian Base Camp. For us it was Camp 1, from

which serious climbing would start. September 25, the four of us arrived at Camp 1 and pitched our tent on the moraine. It still seemed like a long way to Cho Oyu. The slopes just below the summit spawn numerous avalanches when heavy snow falls.

September 26, in order to get to the West-Northwest Ridge we had to descend for some distance down the glacier, cross the glacier and then climb back up. We climbed a long distance up a side moraine to get to the ridge. We climbed up a steep slope with lots of loose stuff. Not until we climbed above 6,000 m did we hit snow. Along the way we piled up cairns and put red flags in them to mark our route, then descended to Camp 1.

The next day we left Camp 1 again, hoping to reach 6,446 m. After 5 hours we cached supplies at 6,400 m on the slope of a 6,446 m snow peak, where we hoped to have our Camp 2. From there a smooth snow ridge continued to 6,800 m. Above that the ridge disappeared into a larger slope.

September 28, Kanazawa and a Sherpa carried more supplies up to Camp 2. The round-trip took them 11 hours. That nearly completed the ferrying of supplies that would be needed for Camp 2 and above. The 29th Mitani, Nakanishi and Kitamura climbed up to Camp 2, pitched a tent and fixed one rope on the snow ridge above.

September 30, we fixed 3 ropes on a steep snow slope above 6,850 m. From there we climbed up to the left, avoiding huge ice blocks the size of buildings, and eventually arrived at a plateau. We reached 7,000 m before retreating to Camp 2. At night we radioed Kanazawa in Camp 1. Our plan called for us to set Camp 3 up at 7,200 m, push the route up a short distance toward the summit from there and then descend to Camp 1. We would rest at Camp 1 and then try for the summit. However, the weather was good and the 3 of us were all going strong, so we decided to give the summit a try the first time up. If we proved to not be strong enough to make it on the first try, we would descend to acclimatize and then try again.

October 1 we rested at Camp 2. A little snow fell in the afternoon, but not very much. The weather had basically been good since September 26.

October 2, we took one tent and a four-day supply of food, and started up. We came to the top of the snow ridge and then to the plateau. Above that, 2 cirques on the West Face come together, with a hanging ridge between them. We set Camp 3 up above that hanging ridge, below a large ice block the size of a building, at 7,200 m. There appeared to be no avalanche danger there.

We had been above Base Camp for 12 days. We couldn't sleep very well. We got up before 1:00 a.m. and prepared to climb. At 2:50 we started up by

the light of our headlamps. We had to gain 1,000 m of elevation and then climb back down it the same day. The weather was good, with no wind. We climbed straight up one of the cirques on the West Face, rotating the lead. It was tiring climbing up the wind crust surface. We crossed a hanging ridge and then angled up diagonally. At 7,500 m we climbed up a crack in a rock band, then headed up diagonally to the right toward the summit. After we got past the rock band our pace slowed. Struggling through the deep snow was tiring, and we rotated the lead more frequently. As the slope became steeper we contoured around toward the Southwest Face.

Just after 10:00 we stopped to rest and took packs off. We snacked on trail food, and radioed Kanazawa in Camp 1. We confirmed that we were at about 8,000 m and were on the correct route. We had only 200 m of elevation gain to the summit, but the clock was ticking away. As we continued up the steep snow slope, we noticed a snow dome off to the left, and headed for it.

There was a broad snowfield that appeared to be higher than the dome. According to the map, the southern end of the snowfield was the highest point. As we headed southeast, our feet breaking through surface crust, suddenly Everest and Lhotse came into view. At 1:50 p.m., there was no higher place to climb to. I waited there for Nakanishi and Kitamura to arrive. We enjoyed the panorama of the mountains of Khumbu from the summit, and took photographs of each other holding the Japanese flag with Everest in the background.

After 50 minutes on the summit we started down. Our pace was slow, and we had to resign ourselves to the need to bivouac. At about 8,000 m we covered ourselves with a "Zelt" (a Japanese-style tube shelter with floor that opens up) and spent the night. Luckily the weather held up. October 14 we started moving past 7 a.m. We roped up for the descent. We had a hard time finding the crack through the rock band, but once we got through the band we had a smooth descent down a snow slope. After the bivouac we were tired, and the descent went slowly. It was 4:30 p.m. before we arrived at Camp 3. Our 38 hour 40 minute summit assault was finally over.

The Descent

We broke Camp 3 on October 5, Camp 2 on October 6 and Camp 1 on October 7. The evening of October 7 we arrived back in Base Camp, completing our climbing activity. Due to heavy snow dumped by a cyclone, neither the yaks nor the porters arrived on schedule. We waited 7 days before the yaks arrived and we could start our descent toward Lukla. At Lukla we hit bad weather again and had to wait for a flight. It was October 25 before our climbers and supplies were all together back in Kathmandu.

Our Accomplishments

Our principal accomplishment was climbing the last 8,000 m peak to be climbed by Japanese. Completing the climb in only 12 days above Base Camp was also an accomplishment. Actually, we felt that it was a bit too fast. As a result we were forced to bivouac on the descent from the summit, and 2 of our climbers suffered frostbitten feet. On the other hand, it was our good fortune to complete our climbing before the 3 cyclones which struck the area between October 6 and October 20. If we had taken longer we might have avoided the need for the bivouac, but on the other hand we might not have had a chance to try for the summit at all.

Our climb of Cho Oyu was technically easy, but for the 4 of us to do it with only 2 months off from work on a budget of only ¥4 million was an accomplishment. We left 200 m of fixed rope on the route. I feel that if each party retrieves their own fixed ropes and oxygen bottles, it doesn't really matter what kind of climbing style they use. As climbing 8,000 m peaks becomes more popular, more and more objects will be left on the routes. The mountains should be left in as near to "first ascent" condition as possible. Using fixed ropes left by a previous party is too lacking in creativity.

Summary

Name of party: Kathmandu Club 1985 Cho Oyu Expedition

Period of activity: August to October, 1985

Objective: To climb to the summit of Cho Oyu (8,201 m).

Members: Leader KANAZAWA Ken (39), Climbing Leader MITANI Toichiro (29), Climbers NAKANISHI Norio (27) and KITAMURA Mitsugu (27).

Summary of activity: Started approach march September 5.

Established Base Camp at 5,200 m September 20.

Established Camp 1 at 5,650 m September 25.

Established Camp 2 at 6,400 m September 29.

Established Camp 3 at 7,200 m October 2. Summited

Cho Oyu (8,201 m) October 3. Arrived in Base Camp

October 7. Broke Camp October 14. Arrived in Lukla October 16.

Reports: Kathmandu Club Bulletins No. 6, No. 7.

(Translated by Harold Solomon)

1985 Japanese Alpine Club China Mountaineering Expedition Quilianshanmai Mountain Range, Kunlunshanmai, Headwaters of Yellow River

MIYASHITA Hideki

The Beginning

During our preparations for our Kanchenjunga Traverse, I was asked to take charge of the mountaineering activity that would form part of the Japanese Alpine Club's 80th Anniversary activities.

At first we were only going to have the Kanchenjunga Traverse, but then I got to thinking that considering the significance of the 80th anniversary it would be good to have some activity in which a wider spectrum of people could participate. I thought it would perhaps be appropriate to have a climb in the Bogda Mountains that would be a fitting climax to our 5 years of activity there begun in 1981. There were still a number of interesting rock peaks and ice walls in the Bogda Mountains that had not yet been climbed. On the other hand, the really major climbs had by then been done, and the appeal, to our leaders at least, of an unknown range had largely been eroded.

Therefore we decided to embark on an all-out effort to obtain permission to climb in the Quilianshan Range, about which we had approached the Chinese Mountaineering Association several years previously. There were a number of obstacles, but fortunately there appeared to be a prospect of success. In February 1985 I visited Beijing together with then JAC President SASA Yasuo and ISONO Gota. We were successful in obtaining permission not only for the Quilianshan Mountains, but also for a climb of Kakasaizimongka-feng in the Kuncunshan Range and trekking in the region of the Yellow River headwaters.

Preparations

Since the 3 areas are widely separated geographically, we organized 3 separate expeditions with KANO Katsuhiko as the titular overall Leader of the combined expeditions.

The Quilianshan Range is a large range running east-west across the boundary between Kansu and Qinghai Provinces. It has a number of peaks over 5,000 m, including Sulhuliang-feng (5,547 m), mainly in the western part of the range. Although the range is clearly visible from Hexihuliang, and has been familiar to the Chinese from ancient times, strangely there is absolutely no record of climbing in the range. We were told that a Chinese expedition had once climbed there and successfully reached a summit but could not obtain any details. Of course

we could not obtain any detailed maps; we had to rely on analysis of Landsat photographs.

Our approach would be through Kansu Province. To the south is the famous Tuanjie-feng (6,305 m), but it is completely in Qinghai Province, and we could not obtain permission for a reconnaissance or climb. As in the case of Bogda, this range provides a great deal of good rock and glacier climbing, making a good playground for young people.

Yuzhu-feng, the main peak of Kakasaizimongka-feng, is believed to be over 6,100 m. It is at the eastern end of the Kunlunshan Range in Qinghai Province. The approach from the Qinghai-Xizang Highway leading to Tibet is short. As a virgin peak over 6,000 m it made a worthwhile objective.

However, looking at the topography we anticipated technical difficulty, so the plan left open the possibility of a return through the desert Tsaidam Basin to Tun-huang.

At first I thought that the more interesting climbing would be in the Quilianshan Range, but because of the height over 6,000 m and the location even deeper inside China, Kakasaizimongka-feng proved to be very popular among our members and many people signed up for the climb, forcing us to reorganize the leadership. We also added an academic party, principally concerned with geology, led by Prof. Koaze.

The Yellow River headwaters trek was planned for 2 weeks around the "O-Bon" festival, the heart of the short Japanese summer vacation season, so there were more applications than we expected and we were forced to reject a few people. We organized 4 groups totaling 85 people, including a group that would travel on horseback.

Our plans crystallized during March. In April we advertised for participants. Although there were many applicants from the provinces, it was mostly people living in and near Tokyo who helped with the preparations. A group of young students were particularly helpful.

July 25 the Quilianshan expedition arrived in Lanchou. The group departed from Lanchou on the 28th, arriving in Jiuguan on the 29th. The 30th the group traveled by bus and truck, and together with the yak transport convoy established Base Camp at Dahaizi at 3,460 m. August 3, Advance Base Camp was set up on a moraine at 4,250 m. By the 7th route construction and load portering were completed, and the Attack Camp was set up at 5,200 m. The 8th the first assault party of Isono, Baba and Meguro successfully reached the summit, although they had a bit of trouble with hard ice just before it. The 9th the second assault party of Koike, Kumazaki, Yamauchi and Suzuki and the third assault party of

Kano, Yamashita and Morimoto combined for a successful summit climb.

Kakasaizimongka-feng Expedition

July 28 the expedition arrived in Lanchou. The 29th the group arrived in Xining. From there travel was by bus and large truck past the shore of Qinghai Lake and through the desert to Dulan. August 3 the group traveled through the desert again to Golmud. The 4th, the group traveled along the Qinghai-Xizang Highway to Xitatan at 4,050 m, where it left the highway and set Base Camp up on a grassy site on the north side of Kakasaizimongka-feng at 4,250 m.

August 5, two parties led by Hamana and Kiryu explored Glaciers No. 19 and No. 20. It was decided to put the main route up Glacier No. 20. The 10th, Camp 1 was set up at 5,350 m. The 11th the route was pushed up a knife-edge snow ridge to the North Peak at 5,800 m. August 15 the route was pushed up past the North Peak and the Middle Peak (5,900 m) to a col in the ridge at 5,850 m, where a snow cave was dug for Camp 2. Due to bad weather the climbers were forced to retreat to Base Camp. August 19th the first assault party, consisting of Baba, Kobayashi, Oonishi, Yamamoto, Asakura and Asakawa left Camp 1, passed Camp 2 and reached the summit. The 20th they were followed by the second assault party of Seki, Tanaka, Inada, Sato, Miyazaka and Iwanaga. The summit was found to be a large snowfield 500 m long and 100 m wide, with a view into far-off Tibet. Unfortunately, though, on the summit of this allegedly unclimbed mountain was found a triangular iron platform with a 1m-high wooden pole on top, causing great disappointment to our climbers. August 23 Base Camp was broken and the group headed back to Golmud. The 25th the group arrived back in Lanchou.

The scientific party led by Koaze moved around on Glaciers No. 19, No. 20 and No. 21 taking observations of topography, air temperature and plant life.

Yellow River Horseback Riding Expedition

The group took the Kobe-to-Shanghai ferry, being restored to service after a gap of 40 years. July 26 the group flew from Shanghai to Lanchou, and July 28 from Lanchou to Xining.

Departure from Xining was delayed due to delay in arrival of supplies. August 2 the group traveled past Qinghai Lake to Gonghe. The 3rd the group passed over Hexia-Shankou (pass 3,900 m) to Wenguan, and over Meiluling-shakou (Pass 4,500 m) to Madoi. From August 4 we had difficult negotiations with the Chinese Government regarding the horses we would borrow. Finally on the afternoon of August 8, 6 expedition members, 2 Chinese who would accompany us and 3 Tibetan horse caretakers employed by the Qinghai Provincial Government, a total of 11 people, departed with 7 horses carrying 400 kg of supplies.

The evening of the 9th we arrived at the shore of Ngoringhu Lake. The 11th we arrived at Gyaring hu (Lake). The 13th we traveled past Xingsuhai to Madoo. August 15 4 members including Masujima and Kageyama climbed Yagradagzeshan (5,202m), believed to overlook the uppermost headwaters of the Yellow River. August 23, everybody arrived back in Madoo. August 25 the group transited through Haining, and arrived in Lanchou.

Yellow River Headwaters Trekking Expedition

August 9 the group flew from Tokyo to Beijing. The 10th it flew from there to Lanchou, and on the 11th to Haining. The 12th the group traveled to the shore of Qinghai Lake, and the 13th on to Gonghe. August 15, at Madoi at an elevation of 4,280m, many members started to suffer from the altitude, so the group was split into one party that descended straight to Xining and another that explored around the shores of Ngoring hu (Lake). August 20, everybody arrived back in Lanchou. August 23 the group returned to Japan.

Summary

I heaved a sigh of relief when all 85 members of the 3 expeditions made it safely back to Japan. Our leaders really had their hands full, something that had to be expected considering that we accepted members without regard to age, sex, determination to reach a particular objective, physical strength or technical skill. I can't thank our leaders enough for their splendid efforts.

The Quilianshan expedition, on which the level of the members was relatively high, could be considered a success in terms of route finding and doing first ascents of 2 peaks.

The Kakasaizimongka expedition had a wider range of abilities represented, something that we deliberately allowed but later came to regret a bit. There was the great disappointment of finding that an allegedly unclimbed mountain had in fact been climbed. On the way back we had some strong words with the Chinese Mountaineering Association about the lack of accurate maps and climbing records in such a vast area of their country. These things will have to be considered in the future.

The Yellow River Headwaters horseback ride was an excellent plan, but there is a clear need for clearer rules governing the negotiations with the various provincial governments regarding the borrowing of horses. Nevertheless the idea of traveling several hundred kilometers on horseback continues to be very appealing.

The trekking expedition came under criticism for involving more trucking than trekking, but considering that the distances to be covered are so much greater than in Nepal this was unavoidable. One thing that we did learn was the danger of traveling above 4,000m in such a short time. This will have to be considered

seriously in the future.

An important feature of these expeditions was that members were given the freedom to travel to and from China on their own, with the groups assembling and dissolving in Lanchou. At first the Chinese didn't like the idea of so many people traveling on their own, but we insisted and they finally cooperated. This put quite a burden on the regional associations, but it is very worthwhile and we hope that such schemes will be expanded in the future.

Most people entered the country by the Hong Kong-Kuangchou-Chengchou-Lanchou route, but some traveled by sea from Kobe to Shanghai. There were even more routes followed on the return, some people visiting Urumchi, some students even going via Chengdu-Lhasa-Kathmandu. It gave me pleasure to see that these people could enjoy their trips.

Most of this article is abstracted from the report "1985 Japanese Alpine Club China Mountaineering Expedition" which was edited by Leader Kano and appeared in November 1985. (Translated by Harold Solomon)

First Ascent of Geladaindong Xueshan and Exploration of True Source of Chang Jiang (Yangtze River)

MATSUMOTO Yukio and KURACHI Kiyoshi

In 1985, the Society of Mountaineering Research on Qingzang Plateau and Kyoto University Exploration Club sent an expedition party to Geladaindong Xueshan (6,621 m) of Mts. Tanggula Shan and the true source district of Chang Jiang (Yangtze River) in China. Our objectives were to climb up to Geladaindong Xueshan and two Xueshans, to conduct cooperative Japan-China geologic research, and to observe nature and nomadic people.

On July 15 1985, 4 members and on July 19th 11 members and 5 reporters left Japan. On July 25 we left Xining Shi, Qinghai Sheng with 21 Chinese members including Mr. Liu (liaison officer), Mr. Li (sub-liaison officer), two interpreters, three geologists, three cooks and eleven drivers. From Xining we traveled in ten Nissan patrols and one truck with about 4.5 tons of equipment.

On July 26, we reached Golmud Shi in Qaidam Pendi, and then, from July 28th, we tried acclimatization for high altitude near Kunlun Shankou. Each member cleared an altitude of about 5,000 m.

On August 1, we left Golmud and reached Tuotuoheyuan. On August 5th, our 41 members from Japan and China and a Chinese guide advanced toward our destination.

On August 6th our Base Camp was constructed at the riverside of Gar Qu at an altitude of 5,280 m. We hired no high portors to Base Camp in this mountain climbing.

We ascended along the right bank of Gar Qu and the side morain of the Geladaindong Glacier which is upstream from Gal Qu. On August 11, Camp 1 was set up on the eastern side morain on the Glacier at an altitude of 5,680 m. We chose the north-west ridge which seemed a saferoute. And then, we traversed this Glacier from east to west. On August 13, Camp 2 was set up at an altitude of 6,100 m, the right below a col between the summit and a peak of 6,293 m on the north-west ridge.

On August 15, four members, KAWASHITA H., KURACHI K., SHIMODA Y. and KOBAYASHI M. climbed up the north-west ridge to a snow slope with three rock protuberances. Here, they made good use of a fixed rope 580 m long. However, from about that time, the weather was clouding gradually with snowfall, forcing an unexpected bivouac in a snow cave abutting on the third rock protuberance at an altitude of 6,510 m. The next day, they were forced back by unfavorable weather to Camp 2.

On August 19, six members, TAKAO K., KAWASHITA H., KURACHI K., SHIMODA Y., KOBAYASHI M. and HIROSE A. attacked again on the same route. They climbed up, but they had to dig out the fixed rope from new snow or set a new fixed rope. At 15:06 p.m. Beijing Time, they reached the summit of Geladaindong Xueshan at an altitude of 6,621 m, the first ascent of this peak.

Meanwhile on August 15, six members, TAKAO K., SAKAMOTO T., TABUCHI T., MATSUMOTO Y., HIROSE A. and YAMAGUCHI K. reached the peak of 6,293 m, the first ascent of this peak. Still more, on 18th August three members, KUROKI K. MIYAMAE S. and URAGAMI F. reached the same peak.

After the finish of climbing from August 26 to September 6, we explored for the true source of the Chang Jiang and its surroundings. On August 31 we reached the Kanabasami Glacier, which is composed of the South and North Glaciers. According to the exploration team of the People's Republic of China, the South Kanabasami Glacier is the true source of the Chang Jiang (Yangtze River).

On September 15, we reached Lhasa, Xizang Zizhiqu (Tibet), to complete our traverse of the Qinqzang Plateau.

Summary of Statistics

Area : Geladaindong Xueshan, Tanggula Mountain Range, China.

Ascent : Ascent of Geladaindong Xueshan, 6,621 m for the first time from the north-

west ridge. The summit reached on August 19, 1985 by Takao, Kawashita Kurachi, Shimoda, Kobayashi and Hirose.

Ascent of the Peak of 6,293 m for the first and second times. The summit reached on August 15, by Takao, Sakamoto, Tabuchi, Matsumoto, Hirose and Yamaguchi, and on August 18 by Kuroki, Miyamae and Uragami. Personnel : General Leader, Prof. MATSUMOTO Yukio ; Sub-Leaders, Assistant Prof. NISHIDA Tamio and MATSUBARA Masatake ; Climbing Leaders, TAKAO Kaoru and KAWASHITA Hajime ; Members, KURACHI Kiyoshi, SAKAMOTO Tsutomu, KUROKI Kazuo, SHIMODA Yasuyoshi, TABUCHI Takuya, MATSUMOTO Yoshihisa, KOBAYASHI Masahiro, HIROSE Akira and SUYAMA Akiko ; Doctor, YAMAGUCHI Kenichiro ; Reporters, MIYAMAE Shuji, SUZUKI Yukio, FUJIMAKI Hiroshi, URAGAMI Fumitoshi and MATSUBARA Hideo.

(Remarks : Jiang and Qu : River ; Shan : Mountain (Snow Mountain))

First Ascent of Mount Namshila

YOSHINAGA Hideaki

We, the Himalayan Expedition of Chiba University, succeeded in climbing a virgin peak, Mount Namshila (6,000 m), in Lunana, Bhutan Himalaya in the autumn of 1985. We were composed of eight mountaineers.

Mount Namshila was opened to a Japanese Expedition in 1984. But they failed to find the peak and climbed another nearby peak of 5,710 m.

Mount Namshila is situated at a point about 15 km southeast of Mt. Ganker Punzam (7,541 m, highest peak in Bhutan) and about 5 km southwest of Gophu La (5,300 m). The mountain is a twin peak composed of the West Peak (The main peak) and the East Peak which are connected by a narrow ridge about 1,500 m long. The North side of the ridge was a steep ice slope and the south side of the West Peak was a steep rock cliff in which several gullies dissected the mountain side up to the peak.

Rocks were very rough and piled up just like childrens' blocks.

Glaciers cover the slope from north to south slope.

We started our approach from Jacker in Central Bhutan on September 19, 1985. To enter the upper reaches of Mangde Chu, we had to cross three passes of more than 4,000 m. Then we climbed along Mangde Chu and passed Gophu La (5,300 m) on October 1 and established base camp at the north shore of Tsorim Lake at the northern foot of Mount Namshila.

From base camp we passed a moraine on the south side of Tsorim and established Camp 1 at 5,430 m. We climbed on the Glacier and established Camp 2 at 5,630m.

On October 8 we reached the top of the East Peak, 5,815 m. We climbed three times and all the member together with one Bhutanese guide reached at the top.

To reach the West Peak, we had to descend to the south slope on the glacier, and established Camp 3 at 5,470 m. After several trials we selected a route in the gully which reaches the peak directly. A 300 m rope was fixed along the gully. On October 12, two members reached the top. Before that date (October 11) another three members climbed a triangular peak of 5,680 m, near C2, and named it "White Peak".

After the climb of West Peak we surveyed its surroundings in several small parties. A party which went to the upper reaches of Mangde Chu climbed a peak of 5,640 m and named it "M-2". Another party climbed a peak of 5,710 m (Tsorim Kang) north of Tsorim, which was climbed by a Japanese team last year. This was the second ascent of that peak. We also climbed Grass Peak (5,700 m, named by Michael Ward) east of Tsorim Kang.

Another party descended to the south on a glacier and reaches at the confluence of Mangde Chu. And they climbed a stony peak of 5,500 m northwest of the confluence and named it Mount Bozu.

For three days from October 16, we suffered from heavy snowfall and abandoned climbing. Yaks and porters could not reach our camp site because of the heavy snow. We managed to cross the Lanana Valley and cross Gonju La (5,050 m). On November 5 we reached Phunaka and returned to Thimphu. Yaks could not pass on our route.

Summary

Area : Lunana Range, Northern Bhutan

Ascent : Ascent of Mount Namshila (6,500 m) for the first time. The summit was reached on Oct 12, 1985 by Sakurai and Kimura.

Personnel : YOSHINAGA Hideaki, Leader, IMAI Mikio, TAKEDA Fumio, MURAKI Hideo, KUROKI Haruo (doctor), SAKURAI Fumitaka, KIMURA Akihiko, KOJIMA Akira.

8000 m 無酸素登山者のその後の 諸検査の結果について

川久保 芳彦
(日大医学部精神神経科)

はじめに

世界的に有名な登山家メスナーが 8000 m 台の無酸素登山に成功して以来、わが国においても 8000 m 台の無酸素登山が試みられ、多くの登山者が登頂に成功している。そして登山者の遠征前での高所順応過程および持久性、体力等に関する情報もゆたかになってきている。

しかし、8000 m 台での無酸素登山者の登山後の身体 および 精神に及ぼす影響に関する検査はわが国においてはほとんどなされていないのが現状である。従って、8000 m 台の無酸素登山の是非をめぐるの討論も、客観的データのないまま行なわれており、今後 8000 m 台無酸素登山者の登山後の検査が急務であろう。

私も今回不十分ではあるが、8000 m 台無酸素登山者のその後の精神医学的検査を行なう機会を得たので、その結果について報告したい。

被験者および検査方法

被験者は 26 歳の男性で、1981 年秋、8000 m 台の頂上を無酸素でアタックし、その後、1982 年から 1983 年にわたる冬期ヒマラヤ登山——この際は 7650 m にて下山——、その後、“どうも山から帰って来てから、物忘れがひどい、出来事の想起がしにくい” また、“今度 7 月より ふたたび 7400 m 台の登山を行うので、登山後の記憶に及ぼす影響を知りたい” とのことで、昭和 59 年 7 月 9 日駿河台日本大学病院精神神経科に来院している。

被験者の話をまとめてみると、1981 年の秋、無酸素で 8000 m 台を登頂し、カトマンズにもどって来た時、カトマンズでバナナを買ったあと、地図を買いに店に行ったが、その店にバナナを置いて来てしまい、さらに民芸品の店を訪れた時、民芸品の店に今度は地図を忘れてしまったとのことであった。

また、1982~83 年にかけての冬期ヒマラヤ登山の際、高所での資料・記録は全て 6000 m 台のキャンプに置き忘れてしまったとのことである。

これらの被験者の話から、2 回にわたるヒマラヤ登山において、下山中、登山後にかんがりの記銘力障害があったことがうかがわれる。

被験者の検査期間と検査内容は表 1 に示した通りである。

8000 m 無酸素登山者のその後の諸検査の結果について

		検査項目						
8000m 無酸素登山体験	前 昭和 56年 7月18日	脳波 検査						
	後							
7000m 無酸素登山体験	前 昭和 59年 7月9日	記銘力 テスト	数 唱 ① 順唱 ② 逆唱	ベント ン 視 覚 記 録 検 査	内 田 クレ ッペ リン 精 神 検 査	乱 数 生 成 法	WAIS 知能診断 検 査	
	後 昭和 59年 8月22日							
	昭和 56年 7月18日	脳 波 C T						コース 立方体 組み合せ テスト

表-1 検査時期と検査内容

8000 m 台無酸素登山前の脳波検査は長野県佐久総合病院で行なっている。

私どもの病院ではまず、7000 m 台の登山前の7月9日に記銘力テスト、類唱、ベントンの視覚記録記銘力テスト、内田クレッペリン精神検査、乱数生成法、帰国後の8月22日に前述した検査のほかに WAIS の知能診断検査および9月18日にコース立方体組み合わせテスト、CT スキャン、脳波検査を新所沢清和病院で行った。

結 果

まず、記銘力テストであるが、このテストは言語性記銘力の検査法で、2つの要素によって成り立っている。1つは有関係の記銘力、他は無関係の記銘力テストである。

有関係は刺戟語と記銘すべき語との間に関係のある語によって構成されているもので、例えば「自動車」という刺戟語に対して「信号」という記銘すべき語から成り立っており、記銘に際し比較的記銘しやすいように作られている。従って、同じテストを3回くりかえすが、1回目の施行で10問中正答数の平均が8.5、2回目9.8、3回目には満点をとりやすくなっている。

これに対して、無関係記銘力テストでは刺戟語と記銘すべき語と間には全く何らの関係もなく、例えば「病院」に対して「線路」というわけで、有関係よりも記銘しにくくできている。従って、正答数も1回目4.5、2回目7.6、3回目8.5と有関係記銘よりも成績が悪くなるのが通常である。

さて、被験者の記銘力テストの結果を7000 m 台登山前と登山後を比較してみると、特徴的なことは登山前の有関係が満点であるのに比し、無関係の第1回目の正答数がわずか1と成績が悪く、3回目の施行でやっと4となり正常平均値の半分値であった。この成績は有関係と無関係との成績の差がはげしいことを物語っている。

これに対して、登山後では正答数よりも低い、無関係での成績が登山前にくらべて良くなっている。

以上、言語性 記銘 に関しての検査結果を述べたが、このテストに関しては7000 m 台の登山による影響はなく、登山後の成績の良さは被験者が自ら語った“前にやったから、なれた”という言葉が示しているように、学習による結果と考えられる。

しかし、7000 m 台の登山前の無関係の成績が悪かったことは、8000 m 台の無酸素登山による影響は否定できない。

次に、数唱であるが、これは数字に関する記銘力を調べるテストである。これには順唱、つまり、いわれた数字通りに被験者にいわせるものと、逆唱、つまりいわれた数字を逆にいわせるものがある。

7000 m 台の登山前後の比較では順唱、逆唱共に同じ成績であり、順唱4桁、逆唱5桁である。通常、数唱では順唱5桁以上、逆唱4桁以上の成績を示す場合が多く、逆唱の方が記銘しづらいのに対して、被験者の場合は成績が順唱と逆唱とが逆であるのが特徴的であり、順唱の4桁の成績は悪く、この結果も8000 m 台の影響を無視できない。

次に、ベントンの視覚記銘検査であるが、これは言語



図-1 ベントンの視覚記銘検査成績

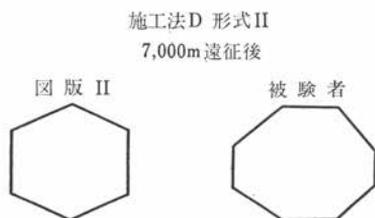


図-2 ベントンの視覚記銘検査成績



図-3 ベントンの視覚記銘検査成績



図-4 ベントンの視覚記銘検査成績

性記銘と数唱の聴覚を通してのテストに対して図形に対する視覚を通しての記銘力をしらべるテストである。

方法は種々あるが、今回の場合、図形を 10 秒間見せ、その後 15 秒後に図形を書かせるという施行方法 D で行った。7000 m 台登山前はセット形式 [I] を用い、登山後は学習効果を防ぐためセット形式 [II] で施行した。

まず、7000 m 台の登山前の成績では 図-1 に示した通りであり、これは図版Ⅶでの結果である。これによると、被験者の描かれた図は右側の三角形をのぞき、いずれも原形の図が 90 度回転された形で描かれている。誤謬数は 2 である。

これに対して、7000 m 台の登山後では 図-2 に示したごとく、図版Ⅱにおいて簡単な正六角形の原形が回転された八角形に描かれている。図-3 は図版Ⅲの結果である。やはり被験者の描かれた例の図は正四角形 2 つが菱形に変形されている。

また、図-4 は図版Ⅷの結果である。これをみると原形とは似つかぬ図が描かれていることが理解できる。

帰国後の検査成績は正確数が 7 で誤謬数が 6 であり、明らかに 7000 m 台登山後の成績が悪くなっており、7000 m 台登山による影響がうかがわれる。さらに特徴的なことは図版ⅡとⅢという簡単な図形の正確な再現ができなかった点である。

次に内田クレッペリン精神検査の結果であるが、出発前では休憩前平均作業量 47.9、休憩後 57.4 で休憩後効果が表われているのに対して、登山後は休憩前 44.5、休憩後 48.8 と休憩後効果がないばかりでなく、全体の作業量が減少している。

以上、7000 m 台の登山前後の検査をまとめてみると、登山後に検査成績が低下してきている検査はペントン視覚記銘検査とクレッペリン精神検査である。このことは 7000 m 台登山による影響と考えられ、帰国後においても低酸素暴露による脳の侵襲に基づく変化と考えられる。

次に帰国後のみ施行したコース立方体組み合わせテストと WAIS 知能診断検査について簡単に述べたい。

まず、コース立方体組み合わせテストでは IQ 114 で全く問題は認められなかった。

WAIS 知能診断検査では IQ 96 であるが、特徴的なことは言語性、動作性においても比較的安易な問題での誤りが認められた点である。

また、評価点を言語性と動作性に分けた場合、言語性の評価点 65 に対して動作性の評価点が 50 で、差が 15 点開いている。

通常、言語性と動作性との評価点の差は少なく、言語性に比し、動作性の低下が 10 以上ある場合は脳の器質的変化の存在が疑われるが、被験者の場合も脳の器質的変化が推測される。

しかし、残念ながら、8000 m 台無酸素登山前および 7000 m 台登山前に検査をしていないため、8000 m 台登山による影響か、または 7000 m 台登山によるものか断定できない。

次に帰国後施行した頭部 CT スキャンの結果であるが、26 歳という年齢より判断すると、前頭葉にほんのわずかな萎縮像が認められるように見える。

次に 8000 m 台の無酸素登山前の脳波の結果と 7000 m 台の登山後の脳波結果を比較すると、図-5 に示した通り 7000 m 台登山後の脳波における基礎波では α -ブロッキング (α -Blocking) の不良化が認められる。この α -ブロッキングの不良化は脳機能および覚醒水準の低下と関係する異常脳波である。

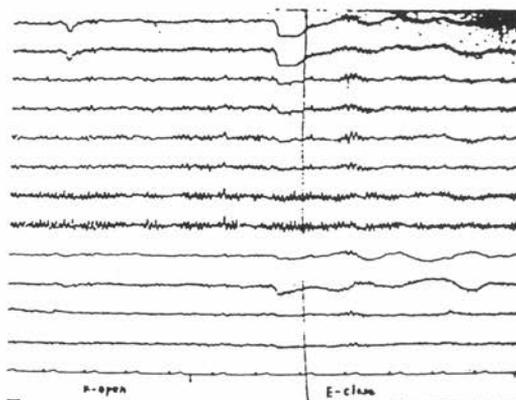


図-5

次に発作波をみると、図-6 に示したように前頭葉 (Frontal)、中心野 (Central) に光刺激の 21~24Hz のインタバルで 8 Hz α を含む 6 Hz の θ -Bms θ (図-6 でアンダラインがひかれている部位) が認められている。

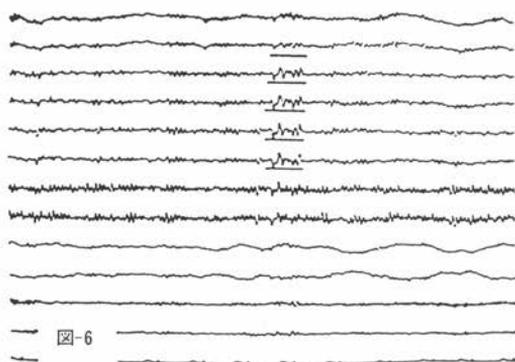


図-6

さらに同じ部位に 100 μ V の陰性の鋭波 (sharp wave) が HV 後 1 分で認められる。この両所見はいずれもてんかん性発作波

(Epileptic paroxysm) と考えられるし、いずれも 8000 m 台無酸素登山前の脳波には出現していない所見である。

従って、脳波所見に表われた異常所見は 8000 m 台無酸素登山およびその後の 2 度にわたる 7000 m 台の登山による影響が前頭葉、中心野での器質的変化をもたらしたものと考えられる。

まとめ

以上、私どもは 8000 m 台無酸素登山者の、その後の 7000 m 台登山の前後にテストした結果について述べて来たが、むずかしい考察はさけ、以下に簡単にまとめてみたい。

まず、7000 m 台登山前後の比較について述べてみよう。

ベントン視覚記銘検査において 7000 m 台登山後の成績が悪かったのが目につく。

8000 m 無酸素登山者のその後の諸検査の結果について

このベントン視覚記銘検査は通常、頭部の外傷の場合とか脳の器質的变化等の病気の際テストを行なっているもので、8000 m 台無酸素登山を行なって来たにせよ、一応都会生活を支障なく行っていることから、テストを行ってもほとんど正常値を示すものと考えていた。

しかし、実際にテストを行ってみると 7000 m 台登山後の成績が悪く、特に結果のところでは述べた 図—2 に示した正六角形の図形が正しく記銘されていなかったことにおどろかされた。

このベントン視覚記銘検査の成績の悪さは 7000 m 台登山の影響と考えられるが、この成績は単に 7000 m 台登山の影響としてはあまりにも低すぎるのではないだろうか。

もし、被験者がより複雑な図形の再現もできなかったとしたら、それこそ老年痴呆と同じレベルの成績といえよう。

元来、記銘力障害——記憶する能力の低下——は単に記憶する能力それ自体の低下によることのほかに注意集中が困難、課題遂行への意欲の減退による場合も記銘障害となつて表われる。

被験者の場合、たしかに憶える能力が低下していると考えられることもできるが、しかし、むしろ与えられた問題が簡単なるがゆえに注意集中や課題遂行への意欲が低下し、いわゆる「気をぬく」、「ぼかをする」という現象が成績を悪くしているようにも思える。このことは WAIS 知能診断検査でも簡単な問題を誤ったり、数唱で順唱の方が逆唱（通常は逆唱の方がむずかしい）より 1 桁少なく順唱 < 逆唱（通常は順唱 > 逆唱）となっている点からもうかがい知ることができる。

次にクレッペリン精神検査ではやはり 7000 m 台登山後に作業量も減り、休憩後効果もなくなっている。

通常、クレッペリン精神検査の作業量は 2 回目の方が 1 回目より「慣れ」の現象——学習効果——で作業量が増加するのが普通である。私どもが昭和 47 年夏にポリビア・アンデスの遠征を行なった際、クレッペリン精神検査を行なってきたが、4700 m での作業量よりも 5200 m での作業量が増加していた。しかし、被験者の場合は異なっており、2 回目の方が作業量が少なくなっている。

また、私どもの場合、5200 m でのクレッペリン精神検査の施行中、「数字が出てこない」、「作業がはかどらない」、「せつない感じ」を体験してきたが、被験者の場合 Sea level で「数が出てこない」、「1 回目よりもつらい感じ」を体験している。

このことは私どもの場合 5200 m での施行であるから、当然、そこには低酸素の影響が強く働いていたと考えられるのに対して、被験者の場合 Sea level にいながら——つまり低酸素の影響も受けずして私どもと同じ体験をしていることを示しており、7000 m 台の登山の影響が強く表われているものと考えられる。

以上、7000 m 台登山前後のベントン視覚記銘検査とクレッペリン精神検査の結果について述べてきたが、7000 m 台登山後の成績の悪さは 7000 m 台登山による影響であることはまちがいないことであるが、それにしても成績がかなり悪いことから、その背景には 8000 m 台の無酸素登山の影響が尾を引いているものと推測される。

この考え方は被験者が“どうも山から帰ってくると、物忘れがひどい”、“出来事の想起がしにくい”との発言によって裏づけられているように思え、低酸素暴露のたびに後遺症としての記憶障害が存在していることを物語ってしよう。

仮りに被験者の場合、8000 m 台無酸素登山による影響が快復していたにせよ、第1回の7000 m 台の登山、そして今回の7000 m 台の登山と、登山をくりかえしていくうちに低酸素暴露による影響が強まってきているとも考えられる。このことは今回の7000 m 台登山前の記銘力テスト、数唱などの成績が決して良い方であるとはいえない結果であったことからもうなずけるであろう。

さらに重要なことは、被験者のテスト結果を通して低酸素状態に対する適応と脳の低酸素による侵襲とは別の問題であると考えられたことである。いちど8000 m 台無酸素登山を試みた登山者にとって、2回にわたる7000 m 台での登山における身体の適応能力は充分あったと思われる。私どもは今回の7000 m 台登山の際、乱数生成法の施行をお願いしたわけであるが、被験者は適確に乱数生成法の施行を行なってきており、1回目の7000 m 台での資料・記録を全て6000 m 台のキャンプに置き忘れてしまうという失敗がなかった。

このことからでも低酸素状態に対する適応と脳の侵襲とは別の問題と考えられる。従って、低酸素に対して上手に適応できたからとて脳に侵襲が加わっていないという保証は少しもない。

また、低酸素による一時的な脳の機能的変化も何回か重なれば器質的变化へと移行することも充分考えられる。

この点、被験者の8000 m 台の無酸素登山前の脳波と今回の7000 m 台登山後の脳波所見は参考になろう。

被験者の8000 m 台無酸素登山後の脳波をトレスしたわけではないが、少なくとも8000 m 台無酸素登山および2回にわたる7000 m 台登山後において脳波上に表われた脳の器質的变化は無視できない。また、脳の器質的变化が表われた部位が前頭葉および中心野である。

そもそも、精神医学的立場から低酸素状態の影響をみた場合、早期に出現する症状は注意力低下、記憶障害、意欲減退等であり、これらの症状の出現は主として前頭葉の機能低下にもとづくものと考えられる。

被験者の場合、種々のテスト成績に表われた注意集中困難、意欲の減退（無気力）等は前頭葉の機能低下によるものであり、脳波上で前頭葉に器質的变化があったことと符合する。

私どもが低酸素による影響で最も重要視していることは、脳の器質的变化が表われるかどうかである。

従って、今回の被験者の諸検査において器質的变化を思わせる所見が得られたことは絶対に無視できない所見である。

今回、8000 m 台登山者のその後の諸検査の結果について報告してきた。たった1例であるので多くを語れないが、しかし、エヴェレストの頂上に無酸素で登った18人の

8000 m 無酸素登山者のその後の諸検査の結果について

うち、9人が死亡しているという事実に向けなければならないと思う。

第4回、第5回の登山医学シンポジウムで8000 m 台の無酸素登山の是非をめぐっての特別討論を行ってきたが、医師の立場としては8000 m 台の無酸素登山は避けるべきであり、この点の指導の必要性ありとの意見も多かった。

私どもは、どうしても無酸素で登りたいなら、1回だけにして、その後の登山は酸素を吸って安全な登山をしてほしいものと考えている。

雪崩遭難に関わるトピックス

NITTA Ryuzo : Topics on avalanche accidents

新田 隆 三

(農林水産省林業試験場)

人間の冷凍と解凍

1982年12月、北アルプス横尾尾根3のガリーで同志社大学の9人パーティが雪崩に約100m流され、1人が死亡した。2日後に発見された遺体について豊科署で検死が行われ、死因は凍死、死亡時刻は雪崩による埋没後4~5時間以内と推定された。凍死の場合は鮮紅色の死斑が体の下側に現われる。この場合、顔面は蒼白で背中に鮮紅色の死斑が認められた。

その後、同大関係者の1人から、雪崩遭難者は窒息死が多いと聞くが凍死はあるのか、という問い合せが私のもとへあった。かつて私も幾度か、山岳雑誌や著書の中で雪崩による窒息を文献の受け売りで紹介した責任がある。この問いを機会に改めて医学関係の新しい文献を幾つか読み、ヨーロッパでは雪崩対策の医療の分野で今日凍死対策が大きい比重を占めていることを知った。

すなわち、70年代に雪崩死について医学的な見直しが行われ、いわば冷水中に落ち仮死した人と同様にデブリの中の人間は冷えきって仮死状態に陥りやすく、適切な保温と加温を主な内容とする治療よりはじめて蘇生することが確認されたのである。

スイス・ウスター病院外科医長 Dr. P. Segantini は、1976/77年積雪期にスイスアルプスで雪崩に埋まった98人の記録を洗い直し、医師の診断をうけた24人の負傷者中11人の体温が著しく低かったこと、重傷者7人のうち3人が掘り出されて後5分後、15分後、90分後にそれぞれ凍死してしまったことを明らかにしている。ここでいう重傷者は凍死寸前の平均2時間以上埋雪していた人々で、大きな外傷はない。いずれにせよ雪崩のデブリから生きて掘り出されても、レスキュー関係者が適切な保温と加温を心得て措置しなければ rescue death (救助のまずさに起因する死) が起こるようである。

Neureuther (1975) や Segantini (1984) によれば、ヨーロッパの雪崩死者の約60~80% は窒息死である。この数は雪崩に埋まって1~2時間以内に死亡した人の数に相当する。

積雪は空気を若干通すものの、空気の拡散速度は非常に小さく、特に酸素の薄い高所のデブリ中ではすぐに酸素分圧が許容度以下になり、身ぶるい、痙攣、昏睡などの後に死亡する。窒息の場合、顔面・くちびるなどが酸素欠乏の血液のため青黒くなる(チア

ノーゼ）とか眼球の中心に針穴大の出血（溢血点）があるなどが遺体検死の際のキーポイントとされている。

窒息は仰向けの場合に雪や融け水、吐物、舌などで喉頭部が閉ざされ、あるいは気管支部がブロックされて生じやすい。

しかし2時間以上デブリの中で生きている遭難者は、体温低下・失神により代謝量が少なくなっている。いかに言えば、生存に必要な酸素量が少なくて済んでいるようである。

デブリの中で体温が低下する速度は平均 $3^{\circ}\text{C}/\text{時}$ といわれる。デブリから掘り出されて風に当たると $6^{\circ}\text{C}\sim 10^{\circ}\text{C}/\text{時}$ の割合で体温が低下するから、窒息の危険はなくなる代わりに凍死する危険が高まる。雪崩レスキューにたずさわる医師が接する患者（遺体ではない）のかなりの数がこうした状態にあるようだ。

さて、心筋の温度が約 28°C を下まわると心房の線維性攣縮（心臓の細動）により即死する危険性が高い。人体の生命防御反応により、図-1 のように体温は四肢と胴体コア部分で著しい差が生じ、重要臓器のあるコア部分の体温は高目である。ところがデブリから遭難者が手荒に運び出されると、四肢の冷えた血液がコア部分に流れ込み心筋の温度は急落し即死を招く。手足のマッサージも同様に逆効果を生むだけである。一方、コア温度が 30°C 未満のときに胸部を急激に暖めると、呼吸商が低いのに周辺の血管拡張だけが進行して血圧が急落し危険である。

Dr. Segantini の結論は次のようである。

第一に、コア温度が 32°C 以上に上昇していない段階では呼吸がなく瞳孔が開いていても「死亡」と断ずるには早すぎるケースが多い。

第二に、いわゆる強心剤のカテコールアミン類、ジギタリス剤や、心臓細動除去剤の投与は、心筋の温度が低下している時には無効であるばかりか有害でさえある。

第三に、体の冷えきった遭難者に対する良いレスキューとは、気管に挿管シマウス・ツー・マウスの暖かい人工呼吸と心臓マッサージを間断なく行いながら、保温と振動防止に気を配りつつ、ヘリコプターで開胸手術の可能な施設と医療チームの待つ病院へ送り込むことである。

病院での処置は心臓を直接流動液でゆっくりと暖める方法が中心である。治療例について関心のある方は、Organorama Vol. 21, No. 1, p. 23-25, 1984 を読み進められるとよいだろう。

ここ数年のスイスやオーストリアの雪崩遭難では、こうした現代医学の進歩の恩恵を

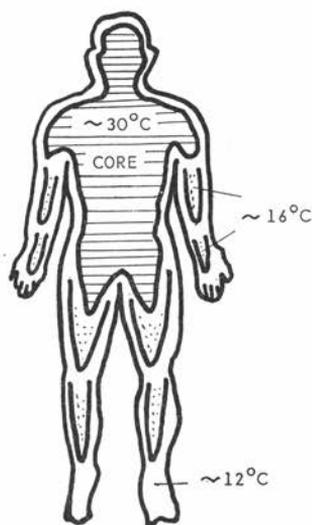


図-1 体温低下にともなう温度分布 (G. Neureuther 1979)

Fig. 1 Hypothermia. Difference between core and peripheral temperature of body.



図-2 富士山のスラッシュ雪崩跡 (1981年3月16日, 太郎坊)
安間荘氏提供

Fig. 2 Slush avalanches of Mt. Fuji. (March 16, 1981)

うけて雪崩から生還できた例が散見される。特に1982年1月31日、オーストリア・ザルツブルク州で起きた学童ツアーパーティの大量遭難では州政府当局による緊急雪崩凍死対策医療チームが生まれ、著効を挙げた。

富士はスラッシュ雪崩の宝庫

1972年3月20日、富士山で春一番の大暴風雨のさ中に地元静岡県の山岳会員を中心とする24人が遭難し死亡した。死因は大半が疲労凍死である。単に風雨にさらされただけでなく、積雪が水びたしになって凝集力を失い登山者は膝から胸まで水べた雪にもぐって行動の自由を失ったことが、遭難者数を多くしたようである。水と細礫を多量に含んだ雪崩によって流されてしまったグループもあった。

当時、筆者は傾斜 $2^{\circ}\sim 25^{\circ}$ の極地や氷河の緩斜面で昔から観察されている「スラッシュ雪崩」(Slush flow, slush avalanche)というものが、まさか日本一の富士を代表する雪崩であるとは思わなかった。

筆者はその後、広瀬 潔・安間 荘・小岩清水など富士研究に情熱を傾けてきた各氏から富士の「雪代」^{ゆきしろ}について教えていただき、富士がスラッシュ雪崩の巣であることを理解した。

スラッシュは半ば解けた雪または軟泥に相当する。水べた雪というよりは水泥雪を表現した英語である。富士山麓の人々がいう「雪代」は、スラッシュ雪崩だけでなく融雪

期の雪崩・土石流・洪水の複合した水・泥・雪の大移動現象をさしていると考えられる。

スラッシュ雪崩は、日本雪氷学会の雪崩分類（1964年）には無いタイプの雪崩ではあるが、国際雪氷学会では昔からとりあげられてきた雪崩である。日本雪氷学会の分類に点発生表層雪崩はあるが、点発生全層雪崩がない。強いて日本の学会流に言えば「点発生水泥雪全層雪崩」になるだろう。

スラッシュ雪崩の特徴について触れてみよう。スラッシュ雪崩の発生条件は、一にも二にも積雪の全層が大面积にわたり水びたしになることである。すなわち、

- (1) 積雪の下に凍土・岩盤・氷板など透水速度の低い層が存在すること

夏には透水性の高い富士の赤茶けた火山細砂礫（スコリア）層は、冬に厚さ数十cm～2mの季節的凍土となる。谷川岳では岩盤がスラッシュを準備し、ある積雪期の大雪山では厳冬の降雨により積雪の中ほどに氷板ができスラッシュの基板となった。氷河圏では前年の積雪が氷化して難透水層となる。

- (2) 急激な暖気の流入による融雪促進または低気圧性の大雨による大量の水供給。

富士山では春に低気圧性の大雨と暖気急流入による融雪とが重なりやすい。積雪の表層まで雪の中の水位が上昇すると、水色または青黒い雪となりますますます熱を吸収して効率よく融雪する。スラッシュ化した積雪は、

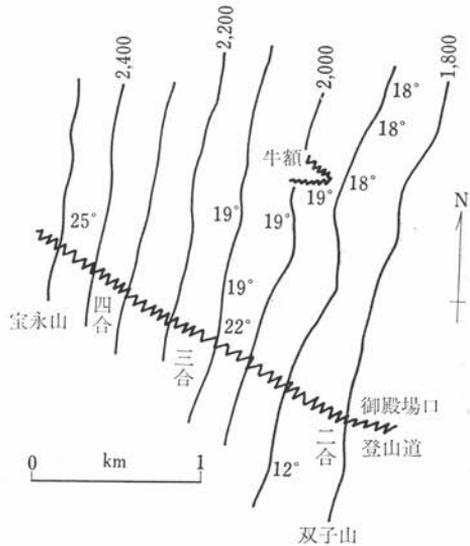


図-3 富士山東面スラッシュ雪崩上端地点の傾斜度。1935年3～5月および1939年3月12日の広瀬潔氏による調査結果から。

Fig. 3 Sloping degrees of the crown parts of slush avalanches observed during March of May 1935 and on 12. March 1939 on the East slope of Mt. Fuji.

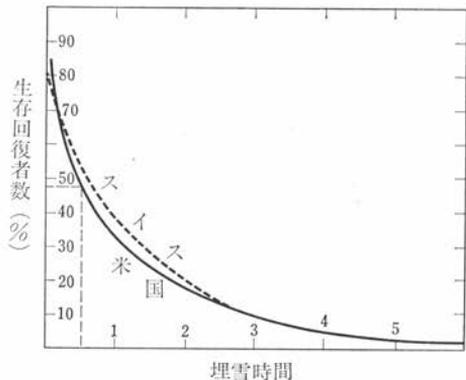


図-4 雪崩に全身埋まった人の埋雪時間と生存確率。米国 82 人とスイス 481 人。
(T. Daffern 1983)

Fig. 4 Probability of survival as a function of the duration of burial.

スキーやカンジキをはいた人間を支える力を失

なう。

(3) 排水速度の小さい緩斜面や凹地形、あるいは全層が早目にスラッシュ化しやすい浅い積雪。

富士宝永火山の南東緩斜面はスラッシュ雪崩の巣である。広瀬 潔氏が 1930 年代に実測された雪崩上端地点の傾斜は 図—3 のように $18^{\circ}\sim 19^{\circ}$ というデータが多い。スラッシュ雪崩はもっと傾斜のゆるい所(下方)で発生し、下方の積雪流亡により上方のより急な斜面に積雪の崩壊流亡が進展し、 $18^{\circ}\sim 19^{\circ}$ の地点で雪崩の上方発達ストップしたと考えられる。また小岩清水氏は富士 5 合目以上の急なガリーでは U 字断面ガリー内よりも V 字断面のガリー内でスラッシュ化が早く、それは積雪内の水位上昇が V 断面ガリーで早いからではないか、との推定をされている。

スラッシュ雪崩は富士山では時として面積数 km^2 の大面積の積雪を流亡させる。しかし雪崩跡の上端が雪崩の出発点ではなくて雪崩の終了時点の地点であるケースも多い。ともかく普通の雪崩の概念でスラッシュ雪崩を割り切ることは出来ない。

「山と溪谷」No. 550 (1982.11) に筆者が「傾斜五度でも起こるスラッシュ雪崩の恐怖」をレポートしたところ、志崎大策氏(当時富士山測候所長)は次のような私信を下された。

春、大雪の後で富士山の沢を下ると五合目以下ではスラッシュ化しているところが多く、飛びこんで転んで「水泳」をして震え上がった経験があります。山頂から(雪崩を)みてきますと、頂上は表層、途中底、下スラッシュとなっており、全くやっかない存在です。

トランシーバー紛争の犠牲

スイス人もアメリカ人も人間である限り、雪崩に埋まってしまった場合の弱さは大して変わらない。図—4 に示すように 3 時間もデブリに埋まっていれば 100 人中 10 人しか生きのびることが出来ない。捜索隊の到着を待っていれば遅すぎて死んでしまう公算が高い。雪崩の現場に同行していて、かつ雪崩からまぬがれた者に、出来るだけ早く探し出して掘り出してもらわねばならない。

これまでずいぶん多くの埋雪者探知器械が発明されると新聞で騒がれてはいつの間にか消えてしまった。それら器械の中で、最も普及率が高く欧米で効果をあげているのが、雪崩用トランシーバである。

常に発信状態にしたトランシーバを各自が携行し、誰かが雪崩から助かったならばその者(同行者)がトランシーバのスイッチを受信に切換え、雪崩のデブリの中から仲間のトランシーバが出す“ピーピー”という発信音をつかまえ、音の大小で仲間の位置を判断する仕組みになっている。

表—1 はスイスでの全身埋雪者がどのような方法で位置をつきとめられ、その結果生きることができたか、死んでしまったか、をあらわす。トランシーバを持った同行者が仲間の埋雪位置を早くつきとめるという点では、トランシーバを持たないパーティに比して明らかに有利である。

雪崩遭難に関わるトピックス

しかしトランシーバにより見つけ出された 15 人が死んでいることは、人間の雪崩に対する弱さを見せつけ、いくら良い器械があっても雪崩にまきこまれない方がずっと良いという教訓を示している。

雪崩用トランシーバは現在 1 台 3 万円前後であり、決して安くはない。従来はオーストリアとアメリカのトランシーバが 2275 Hz の電波を飛ばし、レンジ（搜索範囲）は半径 30 m であった。このトランシーバ市場に後からスイス製品がのりこんだ。値段は従来の製品より 1 割方高いが、電波は 457 kHz と強力でレンジも 80 m と大きくなっている。

しかし 2275 Hz の電波を 457 kHz 用のトランシーバが受信できないため、スイスで遭難した外国人のパーティが折角トランシーバを携行しながらもスイス人によって見つけてもらえない、という悲劇が現実には生じた。互換性のきかない商品の普及による犠牲者数は、ヨーロッパで今日 10 人をこえている。

その後、両方の電波を受信できるトランシーバも造られてはいるが、発信のレンジが 30 m に留まっており、高いお金を払って 2 台目トランシーバとするには付加価値が低すぎると敬遠されがちである。

スイスは将来 457 kHz に雪崩用トランシーバを統一してほしいと国際アルパインレスキュー会議に提案しているが、まだ諸国の意見は不揃いである。アメリカ代表は、457 kHz はラジオ用周波数（日本も同様）だから駄目だといい、またアメリカにはスイス製品は上陸していないので混乱はなく現状が良い、と主張している。

幸か不幸か、日本では雪崩用トランシーバが普及していないため、それによって助かった人は皆無である反面、周波数混乱によって死者が出たこともない。ただ欧米のこの分野の専門家は、日本のハイテク産業ならば付加価値の高い新製品開発によってこの混乱をのりこえてくれるのではないかと、日本に熱い視線を向けているようである。

表一1 スイスにおける雪崩全身埋雪者の搜索方法別生死人数
(1974/75~81/82)

遭難者の生死		生	死	生	死
搜索方法	TR 無し	1	5		
	TR	19	15		5
	TR と犬	1	0		6
	犬			1	0
捜索者	同行者	搜索隊			

TR：雪崩用トランシーバ

[W. Good 1984 より]

MIZUNO

THE WORLD OF SPORTS

背中にも、S.M.L。

あらゆる体型に対応する

調節システム完備の

<ベルグ>アタックザック、新登場。

100人いれば100人とも違う体つき、背中のサイズだって、長短いろいろ。それに対応できるアタックザックの登場です。かつぎやすさを決定するディスタンスを、背負う人の背中に合わせてワンタッチで調節できるシステムを搭載。加えて、肩バンド連結テープと雨フタ調節ストラップが重心位置を背中側に移動し、理想的なかつぎやすさを実現します。このザックなら、背負ったその日から「体の一部」です。

●雨フタ調節ストラップ

雨フタ内の荷物の量に応じて調節、雨フタを正常な位置にキープします。

●肩バンド連結テープ

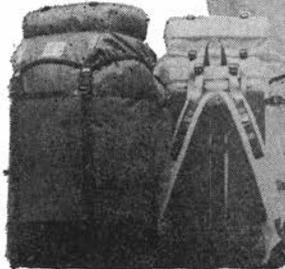
ディスタンス調節に応じて、このテープでザックを背中側に引きつけ体感重量を軽減します。

●ディスタンス調節システム

身長や体型に応じてディスタンスの長さをワンタッチで選択できます。これで、あらゆる人の背中にジャストフィット。

●背面パッド

パッドをソフトなナイロン生地で包みよしました。これで背当たりは最高。



19RA-5051 ¥19,000 □幅70×高さ70cm 55 L
19RA-5135 ¥15,000 □幅62×高さ62cm 45 L



大修館書店

小島烏水全集

全14巻
別巻1

編集委員＝島田 巽・串田孫一・山崎安治・近藤信行

〈第13回配本〉好評発売中!

⑭江戸末期の浮世繪ほか

悠々たる雅境に遊んだ一世の文化人・烏水の昭和期の浮世繪研究を集大成

江戸末期の浮世繪(総説 葛飾北斎の富嶽三十六景 初代広重の風景画に於ける写生と日記 二代歌川豊国 菊川英仙 溪斎英泉伝校註 三代豊国と黙阿弥と五代目菊五郎 豊原国周伝 他)三世歌川豊国大首役者繪集(三世豊国大首絵解説 歌川芳虎大首似顔絵 他)小島烏水翁浮世繪蒐集目録 浮世繪研究資料 他
菊判・口絵他23丁+569頁 定価8,800円

全巻の内容構成

- 1 初期文集 8,800円
 - 2 「文庫」時代(一) 8,800円
 - 3 「文庫」時代(二) 9,800円
 - 4 山水無盡蔵 不二山ほか 8,800円
 - 5 日本山水論 山水美論ほか 8,800円
 - 6 雲表 日本アルプス(第一巻) 6,800円
 - 7 日本アルプス(第二巻・第三巻) 7,200円
 - 8 日本アルプス(第四巻)ほか 8,800円
 - 9 氷河と万年雪の山ほか 8,800円
 - 10 雪斎の岳人 アルピニストの手記ほか 8,800円
 - 11 優松の匂ほか 8,800円
 - 12 山の風流使者ほか 〈続刊〉
 - 13 浮世繪と風景画ほか 9,200円
- 別巻 小島烏水研究 〈続刊〉

図説百科山岳の世界

N.ディーレンファース
T.ヒーペラー他著
日本語版監修 西堀栄三郎
宮下啓三

本書は、600枚におよぶ美術的にたのしめ、かつ科学的に貴重な写真・図版類をもとに、地球上の山岳の全体像を多角的にわかりやすくまとめたスタンダードワーク(基本図書)である。 B 4変型判・上製函入・310頁 18,000円

遥かなり エヴェレスト

——マロリー追想——

島田 巽著

半世紀余り前、エヴェレスト初挑戦の英国隊の一員に選ばれ、その第三次遠征時に頂上を目指したまま還らぬ人となった若きアルピニストG・L・マロリーの素顔を、多様な人々との出会いや英国の社会背景を通して描いた追想記。 四六判・292頁 1,500円

●日本の近代アルピニズム史上に燦然と輝く不朽の山岳名著

覆刻日本の山岳名著 全18点22冊 付・解題書1
特別資料 日本山岳会「會報」第1号-第100号

企画・編集＝日本山岳会 ■現金価格190,000円(分売はいたしません) 内容見本呈

●近代登山の黎明を告げる先蹤者たちの限らない“山への讃歌”

新選覆刻日本の山岳名著 全20点29冊 付・解題書1
特別資料2点

企画・編集＝日本山岳会 ■現金価格175,000円(分売はいたしません) 内容見本呈

〒101 東京都千代田区神田錦町3-24 振替/東京9-40504 電話(03)294・2221<大代表>

信頼されて50年

山とスキー用品専門店



山友社 たかはし

四谷本店 〒160四谷1-20 相田ビル TEL (351)7432・1912
八重洲口店 〒103中央区八重洲1-5-11 TEL (271)1560・8575
新宿店 〒160マイシティ5番街 TEL (352)6 5 6 4



山と山スキーの専門店

クレッターザック

キスリング

夏冬用テント

カナダ、カウチン・

オリジナルセーター

片桐

東京都文京区湯島3-38-9

☎113 片桐盛之助

電話 東京(831) { 1794番
6680番

FACE-NORD **MICRO-TEX**

for ALL WEATHER PURPOSE

アウトドアライフを愛する全天候人へ。

-30℃にもおよぶ氷雪の世界。アルピニストにとって山頂への道は険しい。ちょっとした油断が生命の存続を左右するこの世界において、テントに求められるのは絶対といえるほどの信頼性だ。風雨、降雪、厳寒が

ら確実にアルピニストの身を守り、快適な休息を生み出す居住空間でなければならない。成功への英気と体力をやしなう信頼のスペース、フェースノルド・マイクロテックドームシリーズ。



マイクロドームEX-4-5

株式会社 **キヤラバン**

東京本社	〒170 東京都豊島区巣鴨1-25-1	☎ 03(944)2331代
大阪支店	〒564 大阪府吹田市芳野町1-4	☎ 06(386)0451代
札幌営業所	〒062 札幌市豊平区美園一条6-3-1	☎ 011(822)8664代
福岡営業所	〒812 福岡市博多区堅粕4-23-16	☎ 092(472)0981代

伝統に培われた、 究極のピッケル。

●ピッケル
¥50,000

長谷川恒男モデル
名匠 二村善則 作

●アイスバイル
¥50,000

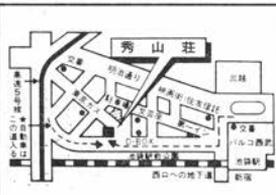
●アイスハンマー
¥45,000

●一般縦走用モデル
¥39,000

※すべて受注生産です。

UC、DC、JCB、VISA、MC、GC、LIFE
SAISON、BC、AMEX、日信販、取扱店

池袋
秀山荘



池袋東口
〈大駐車場完備〉

☎03-984-4211

〒170 豊島区東池袋1-44-8

■営業時間/AM10:00~PM8:00

年中無休

いま踏み締める、山の原点。

世界の山岳史を飾る栄光、偉業の数々。

スイス山岳研究財団が四半世紀にわたり発行し続けた

珠玉の記録、紀行集が遂に日本語版でよみがえります。

原本はヨーロッパでも入手が困難という幻の名書の復活。

別巻にはマルセル・クルツの名作

「ヒマラヤ編年誌」も完全収録しています。

【第Ⅰ期】

●エウゼスト百年史●エウゼスト登頂●K2からの脱出●カラコルム遠征●アルプスの序曲●氷河の研究●アルプス遭難記録●マナスル
の日本隊●南極の山々●ヒマラヤ登山年表 ほか

8巻〜14巻(1953〜1963)
全7巻 昭和62年1月刊行

第8巻付録：ウエスタン・クウムのパラマ写真撮影：アンドレ・ロツク

第13巻付録：マッキンリー山(テラスカ)地図 1/50,000

〈第Ⅰ期7冊セット価格〉現金価格定価 175,000円

分割払価格 182,000円

●支払期間10か月 支払回数10回 ●実質年率8.8% (均等払の場合※分冊売りは容赦ください)

B5判(257×182ミリ) / 平均310頁 / 平均写真頁64頁

日本語版監修委員：近藤 等(早稲田大学教授・日本山岳会会員)

福田宏年(中央大学教授・日本山岳会会員) 望月達夫(日本山岳会名誉会員)
薬師義美(京都大谷高校教諭・日本山岳会会員) 吉沢一郎(前日本山岳会副会長)
翻訳者：田村協子 / 佐藤テル / 山本健一郎 / 倉知 敬 / 新島義昭 / 吉永定雄 ほか

【第Ⅱ期】

●七四〇〇m以上の世界の著名山岳リスト●エウゼスト山頂に立った9人●南極の高峰●マルセル・リュイクワツを悼む●ロシニェ・ゴル谷からの三つの登頂―橋大宇登山隊 ほか

15巻〜17巻(1964〜1969)

別巻●ヒマラヤ編年誌Ⅰ / ヒマラヤ編年誌Ⅱ

全5巻 昭和62年秋刊行予定

【第Ⅲ期】

●世界登山年表●ヨーロッパアルプス●ヒマラヤ(五二九一―四六〇一九七ヒマラヤ遠征隊の編成に当って)●アジアと南太平洋地域●アンデス山脈●氷山の生成と消滅 ほか

1巻〜7巻(1946〜1952)

全7巻 昭和63年秋刊行予定

第Ⅰ期7冊セットご予約の方にもれなく大森弘一郎撮影「エウゼストサガルマタ」遠望のオリジナルプリント(169ミリ×414ミリ)を差し上げます。

栄光の時代を語り継ぐ幻の名書
遂に邦訳。

THE MOUNTAIN WORLD

スイス山岳研究財団編

マウンテン・ワールド
総19巻(本巻17巻・別巻2巻)

小学館

詳しい資料を差し上げます。〒101 東京都千代田区一ツ橋2-3-1 小学館宣伝部「マウンテン・ワールド」係までおハガキで。

山と旅の本

山のパンセ

串田孫一
●A5変型判/1500円

若き日の山

串田孫一
●A5変型判/1500円

心の歌う山

串田孫一
●A5変型判/1800円

山と別れる峠

串田孫一
●A5変型判/1600円

日記

1943年
1946年

串田孫一
●四六判/2300円

山を考える

本多勝一
●四六判/1500円

黄色いテント

田淵行男
●A5変型判/2000円

常念の見える町

安曇野抄
●四六判/1300円

蜂谷 緑

●四六判/1300円

アルプス青春記

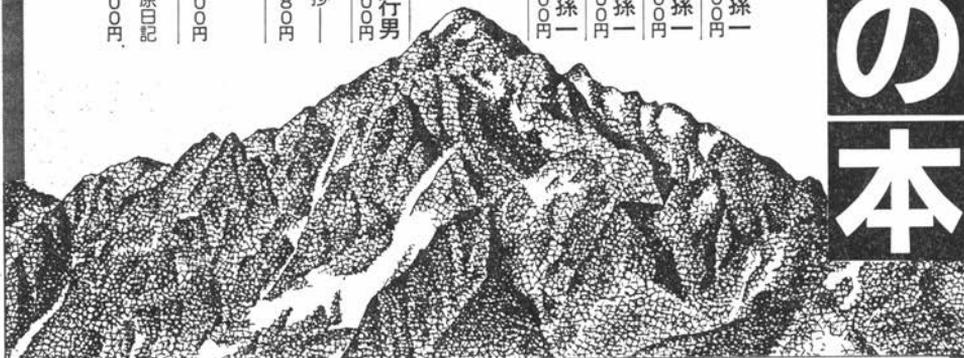
朝比奈菊雄
●A5変型判/1600円

御嶽の見える村

木曾開田高原日記
●四六判/1500円

澤頭修自

●四六判/1500円



車窓の山旅・

中央線から見える山

山村正光

●A5変型判/1900円

関東百山 一〇〇の山へのガイド・エッセイ

浅野孝・打田鉄一・楠目高明・横山厚夫

●A5変型判/1800円

一日の山・中央線私の山旅

横山厚夫

●A5変型判/1700円

カメラの山旅

山の写真と
カメラハイク12カ月

川口邦雄

●A5変型判/1800円

東京付近の山

ブルーガイド編

●A5変型判/1800円

ブルーガイド海外版⑬

ヨーロツパ・アルプス ●1200円

ブルーガイド海外版⑭

ヒマラヤ・トレッキング

ネパール・パキスタン

●1300円

ブルーガイド アラスカ

海外版⑳

●800円

ブルーガイド海外版㉓

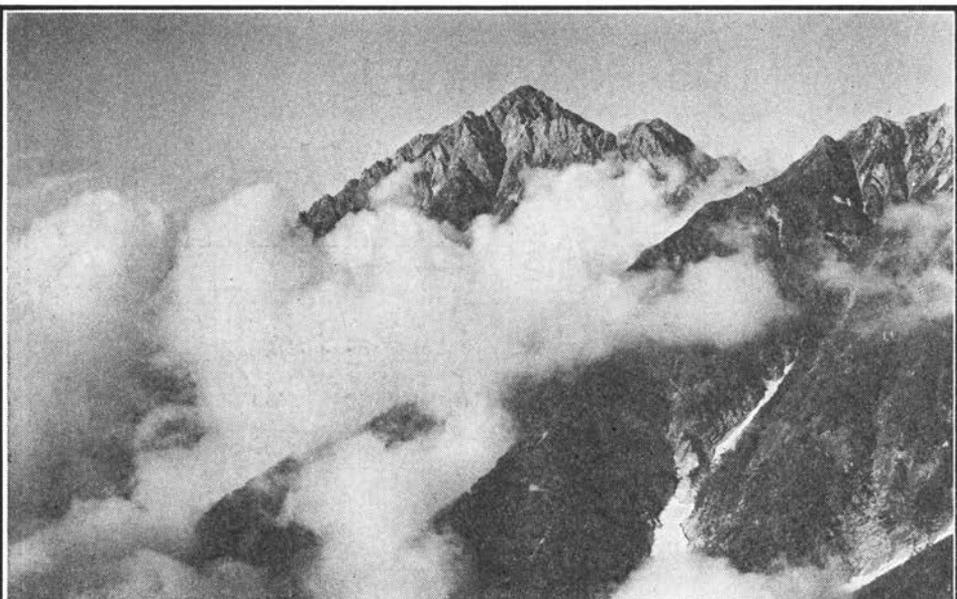
ニュートジーランド

●900円

実業之日本社

東京銀座1-3

振替東京1-326



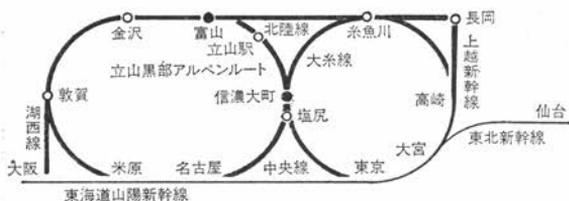
劔岳(中野峻陽)

秀峰讚美

立山黒部貫光株式会社

富山市桜町1丁目1番36号(地鉄ビル3階) 〒930
電話 富山 (0764) 41-3331(大代表)

- 仙 台(営) 022(64) 0504
- 東 京(営) 03 (262)7028
- 名古屋(営) 052(241)2268
- 大 阪(営) 06 (445)0359
- 広 島(営) 082(249)8428
- 九 州(営) 092(714)4510
- 大 町(営) 0261(22)0198



立山黒部P/Lペンルート

LABO (株)電算ラボラトリー

次代のソフトウェアをリード

日本山岳会 様向
公益法人会計・
会員管理
システム
受託
会社

当社のモットー

- お客様に誠意を尽くし、行動で献身する。
- 最新の技術で、ユーザー本意のシステム作りを心掛ける。
- 社員の尊厳と権利を尊重するよう努力する。

業務内容

電子計算機及びその周辺機器に関するソフトウェアの開発、機器販売、コンサルト、教育等

概要

設立：昭和56年9月

資本金：400万円

社員数：20名

所在地：〒160 東京都新宿区西新宿

7-18-12 新都心ビル4F

TEL 03 (371) 1151

FAX 03 (371) 1154

代表取締役：松永 昭洋



全国どこでも御伺いします。

よりよきテントの最高峰を めざす吉田テント!

- 1978年 植村直己北極点単独旅行
- 1978年 日本大学北極点遠征隊
- 1980年 植村直己アコンカグア登山隊
- 1981年 北海道大学バルンツェ登山隊
- 1981年 植村直己冬期エベレスト登山隊
- 1981年 明治大学エベレスト登山隊
- 1981年 早稲田大学K2登山隊
- 1984年 第26次南極観測隊
- 1985年 和泉雅子北極点遠征隊
- 1985年 第27次南極観測隊



夏山用テント

冬山用テント

テントの専門メーカー

小さな店の大きな自信! **吉田テント** 〒167 東京都杉並区桃井1-3-3
☎03(399)2548・FAX03(395)4655

ニッチの

登山・ハイキングシリーズ

※登山・ハイキングシリーズにはこれだけの仲間が揃っています。

- | | | |
|--------------|----------------|---------------|
| ① 奥武蔵 武甲・雲取 | ②③ 蔵王連峰 | ④ 金剛山 葛城・岩湧山 |
| ② 奥多摩 大菩薩 | ④ 八幡平 岩手山・駒ヶ岳 | ⑤ 六甲・摩耶 |
| ③ 奥秩父 | ⑤ 霧ヶ峰 白樺湖・夢科山 | ⑥ 比良連山 |
| ④ 陣馬・高尾 秋川溪谷 | ⑥ 雲ノ平 | ⑦ 大峰・吉野 |
| ⑤ 丹沢山塊 | ⑦ 妙高・戸隠 野尻湖・黒姫 | ⑧ 大台ヶ原 大杉谷 |
| ⑥ 富士・五湖 ミツ峠 | ⑧ 南アルプス北部 | ⑨ 赤目・青山 室生寺 |
| ⑦ 箱根 熱海・湯河原 | ⑨ 中央アルプス | ⑩ 鈴鹿連峰 御在所・伊吹 |
| ⑧ 奥日光 奥鬼怒 | ⑩ 南アルプス南部 | ⑪ 大山・蒜山 |
| ⑨ 尾根 銀山湖 | ⑪ 北アルプス | ⑫ 三瓶山 赤沢峽 |
| ⑩ 軽井沢 妙義山 | ⑫ 加賀白山 白川郷 | ⑬ 秋吉台 三段峽 |
| ⑪ 伊豆半島 大島 | ⑬ 飯豊・朝日 | ⑭ 九重山 久住高原 |
| ⑫ 三浦半島 鎌倉 | ⑭ 大雪山 層雲峽・然別湖 | ⑮ 英彦山 耶馬溪 |
| ⑬ 美ヶ原 霧ヶ峰 | ⑮ 穂・穂高 アルプス銀座 | ⑯ 阿蘇山 |
| ⑭ 谷川岳 | ⑯ 立山・刺 黒部溪谷 | |
| ⑮ 八ヶ岳 夢科山 | ⑰ 東海自然歩道Ⅰ | |
| ⑯ 那須・塩原 鬼怒川 | ⑱ 東海自然歩道Ⅱ | |
| ⑰ 磐梯・吾妻 安達太良 | ⑲ 東海自然歩道Ⅲ | |
| ⑱ 志賀高原 草津白根 | ⑳ 入笠山 守屋山・高遠 | |
| ⑳ 上高地 乗鞍岳 | ㉑ 苗場・鳥甲 清津峽 | |
| ㉑ 黒部・白馬 鹿島槍 | ㉒ 越後三山 奥只見・巻機山 | |
| ㉒ 厚岸半島 | ㉓ 御岳 木曾路 | |
| ㉓ 浅間・菅平 | | |



定評ある著者陣容!
全56巻
定価各500円

全改訂! 日本登山図集 総集篇

第1線級の登山家総執筆
A4版 216頁
5色×2色
定価5,800円
書店にてごらん下さい。

地図の 日地出版

本社 東京都千代田区西神田2-2-15
東京 03 (261)5126
支店 大阪南区南船場2-11-23
大阪 06 (252)7421

スポーツノンフィクションシリーズ

雪に生きる

上・下

いがやくにお
猪谷六合雄 著

新書判
各・定価740円



山と雪とスキーを

愛する人たちに贈る

わが国スキー界の草分け的存在であり、
コルチナ五輪銀メダリスト・猪谷千春氏
の実父である著者が、雪国における、創
意と工夫と忍耐の生活ぶりを、格調高い
ノミのよきな筆致で、鮮やかに浮き彫り
にする。雪に生き、スキーに明け暮れな
がら全国を転々として刻みつけた記録は
そのまま本邦のスキー発達史でもある。
山と雪とスキーを愛する人たちに贈る書

山岳名著選集

A5判

氷山雪嶺二千年
周正著 定価2200円

周正著

ナンガバルバート回想
カール・メルツァー著 定価1900円

北アルプス白馬讃歌
大谷定雄著 定価1900円

大谷定雄著

スイスの山々
オレル・フュスリー社編 定価1900円

オレル・フュスリー社編

アムネマチン初登頂
上越山岳協会編 定価2400円

上越山岳協会編

ブモ・リ 世界で最も美しい山
ゲルハルト・レンザー著 定価2500円

ゲルハルト・レンザー著

“遠い頂”ヌプツエ
登歩深流会編著 定価2500円

登歩深流会編著

遙かなる天山
A.アルダン・セモノフ著 定価2500円

A.アルダン・セモノフ著

パミールシルクロードの城塞
田村俊介編著 定価2500円

田村俊介編著

エヴェレスト登頂記
ジェームス・アルマン著 定価2500円

ジェームス・アルマン著

ダウラギリ登頂
マックス・アイゼン著 定価1500円

マックス・アイゼン著

冬のアイガー北壁初登攀
トニー・ヒベラー著 定価1200円

トニー・ヒベラー著

登山ハンドブック・シリーズ

山岳研究会編 A5判 各定価980円 (全6巻)

1. 登山教本

2. 登山技術

3. 世界の山岳

4. 山の心

5. 山の自然科学

6. 山の資料

豪華写真集 天山

中国新疆人民出版社編 定価6900円

アムネマチン
上越山岳協会編 定価4800円

上越山岳協会編

中国登山ハンドブック
上越山岳協会編 定価1800円

上越山岳協会編

中国人民体育出版 監修 ●A5判

スポーツ・エッセイ・シリーズ
●A5判上製箱入

山に生きて
小島六郎著 定価3500円

小島六郎著

須貴伊・屋磨・加波
スキー ヤマ カワ

高橋半左エ門著 定価2800円

高橋半左エ門著



BASEBALL MAGAZINE SHA
野球ベースボール・マガジン社

〒101 東京都千代田区三崎町3-10-10 TEL 03(238)0181 振替・東京8-46620

SINCE 1975

mont·bell

MOUNTAINEERING EXPERIENCE FOR YOU



Uyramed route BenNews U.K. - Mark Lowe

テントやスリーピングバッグ、
機能的な衣服を満載したモン
ベルカタログをご希望の方は、
切手340円同封の上、下記
住所S・G係までお申し込み
下さい。

モンベル

本社 ● 大阪市西区立売堀1丁目6-17 ☎ (06) 531-4761 (代) / 〒550
東京営業所 ● 港区芝大門1-15-8 布島スカイビル ☎ (03) 437-9391 (代) / 〒105

電話で届くヤマケの本!

テレフォン・オーダー・システム ☎03(436)4021



山と溪谷社

〒105 東京港区芝大門1-1-33

☎03(436)4021/振替・東京8-60249

憧れの本場アルプスをフルカラーでご案内

HIKING in THE ALPS

ヨーロッパアルプス
登山ハイキング案内



中野融著

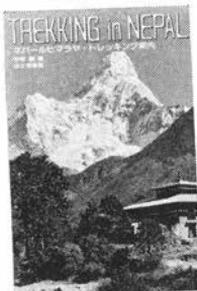
発売中! ●定価3900円 B5判スリム判

天を突く針峰群や優美な白い女神たちへの登頂、そして山麓の花園と牧場を訪ねるハイキング……。本場アルプスの登山、ハイキングコースをフルカラーの写真と实地踏査に基づいた最新情報で紹介するヨーロッパ・アルプス案内の決定版。

白き神々の座を仰ぎながら、ビスタリ、ビスタリ歩いてみませんか

TREKKING in NEPAL

ネパールヒマラヤ
トレッキング案内



中野融著

発売中! ●定価3900円 B5スリム判

親切なシェルパたちのガイドでビスタリ(のんびり)ムードで楽しむヒマラヤの山と人……。東のカンチエンジュンガ山群から西のアピ・ナンパ山群まで約30コースのトレッキング・ルートをフルカラーの写真と最新情報でご案内します。

大滝重直著

星の降る日

中国大陸や日本全国を歩き、常に旅の中にあつた著者が綴る日本の山々の紀行エッセー集。「いま、星の流れるのをみづめながら、私の脳裏を山と人が駆けめぐる」と著者は言う。山との出会いはまた、著者にとつては人との出会いでもあつた。

四六判二二四頁(スケッチ17葉挿入)
原色挿絵二葉 定価二三〇〇円

日本登山大系

卷 柏瀬祐之 A5判
10 岩崎元郎編 二五〇〇円
全 小泉弘 三九〇〇円

新稿日本登山史 決定版 山崎安治著

A5判五六二頁
定価六八〇〇円

ヒマラヤ文献目録

業師義美編 B5判 七五九頁
定価一九〇〇円

わが冒険

Wボナッティ著 四六判二四四頁
千種堅訳 定価一九〇〇円

大岩壁の五十年

リカルド・カシン著 四六判二七八頁
水野勉訳 定価一九〇〇円

▲8000メートル峰全座登頂目前! ▲メスナーの初の伝記

高みをめざして

R・フォークス 四六判写真10頁
新島義昭訳 二九八頁

ラインホルト・メスナーの素顔

定価一九〇〇円

101 東京都千代田区神田小川町三二二四
振替東京九三三二二八 / 電話四五三三〇八一

白水社



〒102 東京都千代田区1番町4 TEL262・0525

山の本

茗溪堂

電話〇三〇一—東京都千代田区神田駿河台三二—
振替東京八—二四七二三

山稜の読書家

島田 巽 3,900円

山・人・本

島田 巽 2,400円

山なみ帖

小谷隆一 3,200円

わが登高行

三田幸夫 上巻 3,800円

下巻 4,500円

静かなる山

川崎精雄ほか 正篇 1,700円

続篇 1,800円

登山史の周辺

山崎安治 3,800円

登山史の発掘

山崎安治 2,500円

快晴の山

織内信彦 2,500円

森林・草原・氷河

加藤泰安 2,500円

山に忘れたパイプ

藤島敏男 3,200円

忘れえぬ山の人びと

望月達夫 1,900円

折々の山

望月達夫 1,900円

山を見る日

川崎精雄 2,900円

山は満員

渡辺公平 2,200円

すこし昔の話

初見一雄 1,200円

我がスキュープール

麻生武治 3,400円

小さな頂

一原有徳 2,900円

北の山 続編

伊藤秀五郎 2,700円

詩集 山の風物詩

伊藤秀五郎 1,400円

原野から見た山 画文集

坂本直行 4,200円

わたしの草と木の絵本

坂本直行 1,200円

雪原の足あと 画文集

坂本直行 3,800円

坂本直行

淡彩画絵はがき

1集、2集、3集 各300円

4集 400円

山旅の足音

渡辺兵力 1,400円

ランタン紀行

エーデルワイス・クラブ 1,500円

エーデルワイスの詩

坂倉登喜子 3,800円

カンチェンジュンガ縦走

カンチェ登山隊 5,000円

ナンダ・デヴィ縦走1976

ナンダデヴィ登山隊 3,900円

マナスル1974

日本女性マナスル隊 3,400円

登頂ゴジュンバ・カン

高橋 進 900円

遙かなる未踏の尾根

日本山岳会東海支部 4,800円

グリンデルヴァルトの山案内人

ブラーヴァン 3,800円

続ブータン感傷旅行

小方全弘 1,500円

山日記

日本山岳会編 850円

山岳 日本山岳会

62年～80年(1985年)

2,000円～3,500円

山岳総索引 1,000円

低山高蹠

神谷恭遺稿と追悼 2,900円

山ひとすじ

中村謙遺稿と追悼 3,400円



編集後記

* 「山岳・八十一年」をお届けいたします。

* 日本山岳会百年史編纂のための資料をいまから少しでも用意しておこうと昨年から始めた企画、今回は年間行事をとりあげてみました。おや、そうだったのか、という話が今度も盛りこまれているはずです。クラブ・ルームの変遷は来年以降、継続の予定です。

* 今回もまた、予定した原稿が数本、執筆承諾を得ていながら到着しませんでした。釣り落した魚は……という訳で、大変残念です。

* 図書紹介の一部で、新聞発表済みの記事を執筆者の諒承を得て再録しました。新聞二紙とも多くの会員の眼には触れにくいものうえ、記事内容が充実したものでしたので会員諸氏に読んでいただくことができるようにと再録したものです。

* 海外遠征記録は英文梗概の添付が原則ということでしたが、今回もまた三篇で、ハロルド・ソロモン氏のお世話になってしまいました。お忙しいなか、ご協力くださった同氏に謝意を表します。

* 高所登山委員会によるシンポジウムは、巻末の川久保芳彦氏の「8000m無酸素登山者のその後」とあわせてお読みください。

* 杉本誠氏による寄稿は、日本登山史初期の一面を明らかにする大変貴重な資料です。スイス・ガイド手帳に残された諸先輩のメモとともに興味深い読みものを収録することができました。

* 今号の編集では、児玉茂、磯野剛太、高遠宏、松家晋の諸氏の協力を得ました。御礼申しあげます。また会員諸氏の研究、紀行、記録、随想などの寄稿をお待ちしています。

(編集担当・大森)

山岳 第八十一年(通卷一三九号)

一九八六年十二月二十日発行

価三五〇〇円

発行所

社団法人

日本山岳会

東京都千代田区四番町五一四

サンビュウハイツ四番町

(〒一〇二)

電話 東京二六一局四四三三番

振替口座 東京三一四八二九番

発行人 今 西 寿 雄

編集人 大 森 久 雄

印刷所 株式会社 技 報 堂

発売所 株式会社 茗 溪 堂

東京都千代田区神田駿河台二一

電話 東京二九一局九四四二番

振替口座 東京八一二四七二三番

本誌掲載の記事、写真および地図の無断転載を禁じます。

カイルス山巡礼の途上にて(1986年6月)

世界の山旅

トレッキングからエクスペディションまで



アルパインツアーはヒマラヤからカラコルム、
ヨーロッパアルプス、アラスカ、カナダ、USA、
アンデス、パタゴニア、ニュージーランド、中国、
アフリカ、北極圏その他の山岳地帯・辺境地帯への
主催ツアーやインフォメーションを用意しております。

もちろん日本国内の山旅も企画しています。

トレッキングのパッケージはもとより登山隊の
ための航空便や地上手配などに関し、私達は豊富な知識と経験を
もとにご相談に応じることができます。ぜひ、お問合せ下さい。

運輸大臣登録一般旅行業第490号/日本旅行業協会正会員/ロイヤルネパール航空代理店



アルパインツアーサービス株式会社

東京/〒105 東京都港区新橋2-2-2(川志満ビル7階)

☎ 03(503)1911(代表)

大阪/〒541 大阪市東区備後町5-15(東洋ビル4階)

☎ 06(227)5194(代表)

名古屋/〒450 名古屋市中村区名駅3-23-6(第2千福ビル4階)

☎ 052(581)3211(代表)

福岡/〒810 福岡市中央区大名2-9-25(わこうビル3階)

☎ 092(715)1557(代表)

The Journal of
The Japanese Alpine Club

S A N G A K U

Vol. 81

1986